

福井工業高等専門学校

自己点検・評価報告書



平成26年3月



独立行政法人 国立高等専門学校機構
福井工業高等専門学校

まえがき

昨年12月に総務省の政策評価・独立行政法人評価委員会から文部科学大臣宛に「独立行政法人の主要な事務及び事業の改廃に関する勧告の方向性」について通知があった。当然のことながら、国立高等専門学校機構に関するものが含まれ、その中味は、第一に国立高等専門学校のミッションの再整理、第二に事務及び事業の見直し、第三に業務運営の合理化・効率化等、第四は業務全般に関する見直しで、いずれの文言にも「見直し」という言葉が踊っている。

このように、本来、評価は第三者に委ねられるのが常であるが、時として格物致知に達したとも思えない議論が展開されることもあり、折角の評価が組織や事業の意義さえ否定する危険性を孕んでいる。一方、自己評価は独善的に陥る面もないではないが、組織等の弱点を知る当事者にしか切り込めない部分を中心に改善することにより、真のPDCAサイクルが効果的に回ることが大いに期待できると言えよう。

さて、高専のミッションは中学卒業後の若者に早くから専門教育を行い、創造的かつ実践的技術者を育成することであり、高専制度発足以来50年にわたる実績が産業界から高い評価を受けている。また、高専教育は国外からも高く評価され、近年実践的技術者教育の重要性に気づいた東南アジア諸国から手本にしたいと求められ、本校にも昨年10月、タイ政府の視察団が来訪している。数年前の経済協力開発機構による評価やワシントンポスト誌の論評等も合わせて考えれば、高専は戦後の高等教育機関で唯一成功した例であるとの言明も過言ではないと思える。

このことは、現在まで様々変化してきた社会経済状況ならびに産業界からのニーズに対して、日頃から自己点検しながら教育内容・方法の改善と適切な対応を着実に進めてきたからこそと言える。

このように国内外から高い評価を得ている高専教育ではあるが、福井高専としてより高度な創造的・実践的技術者の育成を目指し、不断の自主的・自律的改革に取り組み、独自のプレゼンスをさらに高めていかねばならないところである。

本校は、自己点検評価報告書を毎年刊行しており、今年度は第二期中期目標・中期計画の最終年度であり、これまでの総括とともに次の第三期における重点事項や目標等を見据えることも必要となる。即ち、ミッション実現のための高度化と多様化の促進、グローバル人材育成のための英語力の強化等、高専教育の充実に向けた諸課題を解決していかなければならない。

本報告書は内省をも含めて公表するものであるが、毎年度末に開催される外部有識者会議での基礎資料でもある。学校運営全般に関する助言・指導を仰ぎながら、本校の教育研究諸活動がより一層、改善・充実に繋がるよう願っている。

平成26年3月

福井工業高等専門学校
校長 松田 理

自己点検・評価について

本自己点検・評価報告書中の「点検・評価」は、文部科学省独立行政法人評価委員会の項目別評価基準を準用し、本校の「達成度評価」として、以下のとおり用いました。

S：計画をはるかに上回る実績を残した

A：達成度100%以上

B：達成度70%以上～100%未満

C：達成度70%未満

目 次

まえがき

自己点検・評価について

I. 本校の沿革・現況及び特徴	1
II. 目的	4
III. 平成25年度年度計画	8
IV. 自己点検評価	
IV-1. 全学的に関する事項	
教務関係	19
学生指導関係	37
学寮関係	47
進路指導関係	50
研究活動関係	59
地域・社会貢献関係	61
国際交流関係	72
国際交流（留学生）関係	75
施設整備関係	77
管理運営関係	79
財務関係	85
IV-2. 各学科・教室等に関する事項	
（各学科・教室等における「1. 教育理念・教育目標、2. 将来計画、3. 重点課題、 4. 進学・就職指導状況、5. 特色ある教育・研究の取り組み・活動等、6. 点検・ 評価、7. 改善課題・方策」を記載しています。）	
機械工学科	91
電気電子工学科	97
電子情報工学科	103
物質工学科	107
環境都市工学科	111
一般科目教室	116
専攻科	122

IV-3. センター等に関する事項

(センター等における「1. 現状、2. 点検・評価、3. 改善課題・方策」を記載しています。)

学生相談室・保健室	127
図書館	132
創造教育開発センター	135
総合情報処理センター	140
地域連携テクノセンター	146
教育研究支援センター	155

IV-4. 委員会等に関する事項

(委員会等における「1. 現状、2. 点検・評価、3. 改善課題・方策」を記載しています。)

教育システム推進委員会	159
情報セキュリティ推進委員会	161
JABEE委員会	162
研究紀要委員会	163
遺伝子組換え委員会	164
知的財産教育委員会	166
ネットワーク委員会	168
安全衛生委員会	169

V. 総括

171

VI. 資料一覧

・科学研究費助成事業（科研費）申請・採択状況一覧	175
・科学研究費助成事業（科研費）採択内訳	
・外部資金受入一覧	180
・民間との共同研究受入内訳	181
・受託研究受入内訳	185
・寄付金受入内訳	186
・出前授業・公開講座実施一覧	190
・出前授業実施内訳	191
・公開授業実施内訳	199
・公開授業実施一覧	203
・教員の派遣一覧	212

I. 本校の沿革・現況及び特徴

1 沿革・現況

高等専門学校は、「深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成する」ことを目的として昭和37年の国立学校設置法の一部改正により発足した。福井工業高等専門学校は（以下「本校」という。）は、昭和40年4月24日に武生市緑町（現越前市）の仮校舎で第1回入学式が挙行し、昭和41年に現在地の鯖江市下司町に本校舎を移転し、現在に至っている。発足時の学科構成は、機械工学科、電気工学科、工業化学科であった。これは、工学の基礎となる機械・電気・化学となる学科が構成されたものであるが、工業化学については福井県が繊維及び染色関係の企業が多いことにより設置されたものである。

また、昭和45年度には「土木工学科」が増設されたが、これは、福井県が大手の土木業者を多く出している土木県であるとともに、当時の土木技術者不足に対応するためである。さらに、昭和63年度には情報社会の到来を受けて、「電子情報工学科」が増設された。その後、平成5年度に土木工学科を時代の要請に沿うべく「環境都市工学科」として改組した。また、平成7年度に工業化学科を「物質工学科」として改組し、材料工学コースと生物工学コースの二つのコース制とした。さらに、高専5年間の教育課程の上に、創造的な研究開発や先端技術に対応できる人材の育成するため平成10年には、専攻科（生産システム工学専攻、環境システム工学専攻）が設置された。平成16年度より独立行政法人国立高等専門学校機構として運営形態が変わった。平成17年度には、電気工学科を「電気電子工学科」とした。現在では、5学科・2専攻、学生1,028名規模の教育・研究機関に発展しており、本校の教育基本理念に基づき教育・研究の向上に積極的に取り組んでおり、現況は下記のとおりである。

(1) 所在地 福井県鯖江市下司町

(2) 学科等構成

①本科

機械工学科、電気電子工学科、電子情報工学科、物質工学科、環境都市工学科

②専攻科

生産システム工学専攻、環境システム工学専攻

(3) 学生数及び教職員数（平成26年1月現在）

①学生数

学科学生 983名（定員1,000名）

専攻科学生 45名（定員40名）

②教職員数（常勤）

教員数 75名 職員数 41名

2 特徴

教育の特徴としては、豊かな創造力とデザインマインドを持つ技術者を育成するため、「ものづくり教育」を進め、NHKアイデア対決ロボットコンテストでも毎年のように上位に入賞し、平成5年度と平成9年度の2度にわたって最高の賞であるロボコン大賞を獲得するとともに、平成12～22年度にかけては毎年連続して、全国大会出場を果たした。

本校を目指す中学生に対しては、アドミッションポリシーを示すとともに、平成17年度には、入学時に学科を決められない中学生のために、2年次より転科可能な「工学基礎コース」を全国で初めて設置した。

また、本校は地元で立脚した学校及び地元で開かれた学校を目指し、産官学共同研究を進めている。福井県における産官学共同研究ネットワークの中心の一つである「地域連携テクノセンター」では、地元で密着した共同研究を進めている。福井県の伝統産業である和紙の生産者組合、福井県和紙工業協同組合と地元町の依頼により「伝統産業支援室」を設置（平成16年10月）し、和紙に関する共同研究を行っている。

さらに、本校の立地する鯖江市は世界最大の眼鏡枠生産地でもあることから、福井県眼鏡工業組合とも新しい産官学共同研究事業を開始し、「地場産業支援室」を設置（平成17年4月）して眼鏡枠材料に関する共同研究を行っている。また、平成17年5月には、これら地域社会との連携をさらに深めるため、本校は近隣2市1町と包括的な連携である「地域連携協定」を結び、さらなる共同研究・出前授業・リカレント教育に取り組んでいる。

国際連携としては海外学生派遣制度の他、平成17年度からオーストラリアのバララット大学と提携し、学生の相互交換留学制度を開始した。平成18年、22年、25年と3回にわたり本校学生をバララット大学へ派遣し、英会話と現地の文化歴史に関する学習を行った。また、平成23年12月にはバララット大学の学生9名を受け入れ、本校学生との交流を図った。さらに、平成25年には、タイ国プリンスオブソンクラ大学工学部との国際交流に関する覚書を締結し、専攻科生2人を派遣してインターンシップを実施した。

本科の全学科の4、5年と専攻科の全専攻（生産システム工学専攻、環境システム工学専攻）の1、2年の教育課程を融合複合した「環境生産システム工学」教育プログラムは、平成16年度日本技術者教育認定機構（JABEE）から、社会の要求を満たしている技術者教育プログラムであると福井県内の高等教育機関では最初に認定を受けた。認定期間の満了に伴い平成21年10月に継続審査を受審し、平成22年5月には、平成21年度からの認定継続が認められた。平成24年11月には中間審査を受審し、引き続き認定継続となった。

平成17年11月には（独）大学評価・学位授与機構による「高等専門学校機関別認証評価」を受審し、平成18年3月に「改善事項なし」との評価結果であった。平成24

年11月には2回目の「高等専門学校機関別認証評価」を受審し、平成25年3月には「高等専門学校設置基準をはじめ関係法令に適合し、大学評価・学位授与機構が定める高等専門学校評価基準を満たしている」との評価結果が同機構から公表された。

本校では、毎年自己点検評価を行っている。その外部評価として、平成14年度に校外の有識者による外部評価委員会（平成16年度から「評議員会」、平成21年度から「外部有識者会議」）を毎年開催しその都度結果を開示しており、高等教育機関として自律的に教育・研究、組織運営等の質の改善のサイクルを機能させている。

Ⅱ. 目的

福井工業高等専門学校¹の使命

福井工業高等専門学校は、基本理念に基づいて、国際社会で活躍できる実践的技術者を育成するとともに、地域社会に貢献することを使命としている。

基本理念

- ・創造性豊かな人材を育成する。
- ・幅広い工学的素養、基礎能力及び応用能力の育成を目指す実践教育を行う。
- ・高度に情報化した国際社会に対応する教育を行う。
- ・環境を意識し、地域社会に根ざしたものづくり教育を行う。
- ・地域と連携した産官学共同研究の推進を図る。

教育方針

- ・技術者として必要かつ十分な基礎力と専門技術を習得させる。
- ・個性を伸ばし、独創的能力の開発に努力する。
- ・教養の向上に努め、良識ある国際人としての成長を期する。
- ・健康の増進に努め、身体的精神的に強じんな耐久力を育成する。
- ・規律ある日常生活に徹し、明朗、かつ達な資性のかん養を図る。

養成すべき人材像

本校の養成すべき人材像は以下のとおりである。

「優れた実践力と豊かな創造性を備え、国際社会で活躍できる技術者」

学習・教育目標

【本科(準学士課程)】

RA 多様な文化や価値観を認識できる能力を身に付ける。

- ① 人間社会の基本的な仕組みを理解し、様々な地域の言語や歴史・伝統などの文化を多面的に認識できる。
- ② 様々な地域における芸術とそれに根ざした価値観を、認識・理解する意識を持つ。

RB 数学とその他の自然科学、及び専門分野におけるものづくり、環境づくりに関する基礎能力を身に付ける。

- ① 数学とその他の自然科学に関する基礎知識を理解できる。

- ② 専門分野における基礎知識・技術に基づいて情報を処理し、工学的現象を正しく理解できる。
- RC 技術者に必要なデザインマインドを身に付ける。
 - ① 課題に対して自主的に問題を発見し、解決方法を探求して問題解決能力の重要性を認識できる。
- RD 国際社会で活躍するためのコミュニケーション基礎能力を身に付ける。
 - ① 英語による基礎的な対話や文章が理解でき、自分の意見を表現できる。
 - ② 日本語の文章や言語作品を的確に理解・鑑賞でき、自分の思いや主張を適切に日本語の談話や文章で表現できる。
 - ③ わかりやすい図表等を作成し、それを用いて日本語により効果的な説明ができる。
- RE 実践的能力と論理的思考能力を身に付ける。
 - ① 実験・調査などの経験を通してデータの解析法を学び、理論との比較や考察などができる。
 - ② 課題の背景を理解し、習得した知識を生かして適切な方法を選んで実験・調査などを遂行し、データを解析・考察することにより、結果を客観的に説明できる。
 - ③ 身体・健康・スポーツに関する知識と実践力を獲得するために各自の能力に応じて目標を設定し、個人あるいはグループで課題を達成できる。

【専攻科課程】

- JA 地球的視点から多様な文化や価値観を認識できる能力を身に付ける。
 - ① 異なる地域に属する人々がもつ文化や、それに根ざした価値観などを多面的に認識できる。
 - ② 持続可能な地球社会を構築するという目的意識のもと、種々の分野における人間の活動や文明が地球環境に与える影響について理解できる。
 - ③ 技術者が社会に対して負うべき責任を明確に自覚したうえで、工学に関する学術団体が規定している倫理綱領を理解し、説明できる。
- JB 数学とその他の自然科学、情報処理、及び異なる技術分野を含む問題にも対処できる、ものづくり・環境づくりに関する能力を身に付ける。
 - ① 工学的諸問題に対処する際に必要な、数学とその他の自然科学に関する知識を理解できる。
 - ② 工学的諸問題に対処する際に必要な、情報処理に関する基礎知識を理解できる。
 - ③ 得意とする専門技術分野を持つことに加え、他の技術分野を積極的に吸収して、持続可能な社会の構築を意識したものづくりのプロセスに対応できる。
- JC 技術者に求められる基礎的なデザイン能力を身に付ける。
 - ① 構造物または製品を設計する際に、複数の技術分野についても意識しながら、つくる目的を理解し、機能性・安全性及び経済性に加えて、環境負荷の低減・快適性などを考慮できる。

- ② 新しく出会った課題について、自ら問題点を発見しようとする意識を持ち、既知の事柄と未知の事柄とを識別したうえで、それらを蓄積・整理できる。
- ③ 既成概念にとらわれない創造性豊かな発想のもと、自分の専門分野以外の技術分野を含む課題について、多様な観点から検討・考察し、その結果を具体的に示せる。
- ④ 異なる分野の人を含んだグループでの協議及び共同作業を通して、解決方法について複数の候補を見だし、その中から最も適切なものを選択できる。

JD 国際社会で活躍する技術者に必要なコミュニケーション基礎能力を身に付ける。

- ① 英語による日常的な内容の文章や対話を理解でき、英語により自分の意見を適切に表現できる。
- ② 得意とする専門技術分野に関わる英語論文等の内容を日本語で説明できる。
- ③ 自分の意見・主張などを、相手を意識した規範的な表現を用いて日本語の談話や文章で表現できる。
- ④ 日本語による口頭発表や討議において、自らの報告・聴衆への対応・他者への質疑などを行える。
- ⑤ 正確で分かりやすいグラフや図表を、必要に応じて用意できる。

JE 実践的能力及び論理的思考能力を総合的に身に付ける。

- ① 得意とする専門技術分野を含む複数の工学分野において、与えられた実験・演習課題の工学的意義を理解し、提示された方法を計画・実行することにより、定められた期限までに妥当な結果を導ける。
- ② 数学や情報処理の知識・技術を用いて、実験または数値シミュレーションの結果を統計的に処理し、その結果を評価して、対象としている工学的現象の成り立ち・仕組み等を理解し、説明できる。
- ③ 技術者が経験する実務上の工学的な諸問題を認識し、それらを具体的に示せる。
- ④ 自ら明確に設定した目標を達成するため、詳細な計画を立て、それに沿って継続して努力できる。
- ⑤ 考察対象に関する見解を論理的に構築し、それに基づいた問題解決のための仮説を立て、適切な実験・解析方法を選択できる。

アドミッションポリシー

全学科共通

- 1. ものづくり、環境づくりに興味がある人
- 2. 基礎学力が備わっている人
- 3. 新しい目標にいつもチャレンジする人
- 4. 国際社会で活躍したいと思っている人
- 5. 自分で課題を考え、解決する能力を身に付けたい人

機械工学科

1. 自動車、飛行機、ロボットなどの機械システムや、環境、福祉、宇宙工学などの分野に興味がある人
2. サイエンスを学び、ものづくりに創造性を発揮して、人間社会に貢献したい人
3. 機械を創る材料、動かすエネルギー、制御する情報など幅広い技術を身に付けたい人

電気電子工学科

1. ロボット、システム、コンピュータなどを動かすための電子制御やプログラミング技術を学びたい人
2. 情報家電や光通信などに使用する電子回路や情報通信技術を学びたい人
3. 電気自動車や太陽光発電などに使われる環境にやさしいクリーンエネルギーや新素材技術を学びたい人

電子情報工学科

1. コンピュータの仕組みやプログラミングに興味がある人
2. ネットワークを活用したり、知能ロボットを動かすプログラムを作りたい人
3. 未来の IT 機器の開発をやってみたい人

物質工学科

1. 化学と生物の世界へ第一歩を踏み出したい人
2. 地球に優しいものづくりをしたい人
3. バイオの技術で社会に貢献したい人

環境都市工学科

1. 自然と共生したくらしを営む環境づくりに興味がある人
2. 快適なくらしを共有するための建物とまちづくりに興味がある人
3. 災害から人々のくらしを守るシステムづくりに興味がある人

専攻科

1. 得意とする工学分野の基礎能力（数学的素養を含む）を身に付けている人
2. 何事にも自主的・能動的に臨む姿勢を持つ人
3. ものづくり・環境づくりに意欲のある人
4. 多様なシステムを理解し、創造的にデザインする能力を身に付けたい人
5. 国際社会で活躍できる実践的技術者を目指す人
6. 学士（工学）の学位を取得したい人

Ⅲ. 平成25年度年度計画

Ⅲ-1 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置

1 教育に関する事項

(1) 入学者の確保

- 昨年度に引き続き中学校訪問を綿密に行い、中学校教員の高専に対する理解度とプレゼンスの向上に努める。
- 中部日本海5高専共同PRサイトを活用して更なる情報発信を行う。
- コミュニティFM や、広報誌を活用して中学生以外の層にもイメージの浸透を図る。
- 中学生に加えて小学生や一般人を対象とした公開講座・出前授業及び自治体主催の企画等により、広い世代と直接触れ合う機会を増やし、科学教育啓発の取り組みと高専のブランド力向上に努める。
- 昨年度設置した情報発信スタジオを利用し、学生主体での情報発信を行い、より近い世代から中学生にアピールを図る。
- 昨年度に引き続き、オープンキャンパスの内容充実を図り、中学校低学年にもアピールできるように内容を精査して、高専へ興味を向けさせるように工夫する。
- 中学校の求めに応じ学校単位での説明会を積極的に行う。さらに、女子学生を確保するために、女子中学生と保護者を対象にした体験学習会を開催する。
- 女子中学生向けに特化したパンフレットや広報誌などを刷新し、積極的にPRを行う。
- 文化的イベントを通して、本校の情操教育の一端を積極的にアピールする。
- HPの活用を進め、中学生に対する情報発信の強化を図る。
- 各種広報資料は、中学生や保護者が分かりやすく、利用価値の高いものに作り直すように努める。
- Webの充実にも引き続き取り組み、即時的・効果的な情報発信に努める。
- 地域広報誌に本校の紹介ページを常設で設け、本校の教育活動の広範囲への周知を図る。
- 専攻科志望者の確保のために、専攻科パンフレットの充実を図る。
- リーダーシップを発揮できる素養を持った学生など、幅広い人材を求めるために推薦要件を検討する。
- 専攻科志望者の確保のために、専攻科の入試について、その実施時期や要綱などを継続的に検討する。
- 効果的な広報活動を展開し、中学校と連携を取りながら高い志を持った入学志願者の確保に努めるとともに、入学合格者に対して事前課題を与え、緊張感がとぎれ

ることなく本校教育に導入できるような工夫を凝らす。

- 新入生アンケートや指導要録等の分析を通して、入学生の質の変化を把握できるように工夫する。
- 就職・進学など進路の多様化，体験に基づく早期専門教育，授業料等の経済性などのメリットを有する高専制度の特徴を様々な機会を通してアピールする。

(2) 教育課程の編成等

- 他の高等教育機関における教育内容や制度等に関する情報を参考に，本校の5つのキーワード(機能創成，情報，エネルギー，安全・アメニティー，環境)を基軸とする高度化に向けた教育体制の構築についての議論を引き続き行う。
- 教育活動の改善・充実に資するため，在学生による授業評価の調査を実施し，教員にフィードバックする。
- 「モデルコアカリキュラム(試案)」と現行カリキュラムとの整合性の確認作業を行い，可能なところから26年度導入に向けた準備を図る。例えば，

【機械工学科・電気電子工学科】

創造教育充実を目指して共同で開発した授業教材を導入し，合同でものづくり競技のコンテストを行う。

【電子情報工学科】

情報系企業での就職希望者増を踏まえ，ネットワーク系やソフトウェア開発に関する講義内容の検討を行う。また，3D成形システムを活用した実験テーマを導入し，問題点の検討を行う。

【物質工学科】

学科カリキュラムの一部再編成・改定も視野に入れて，本学科独自の「コース制(材料工学コース・生物工学コース)」教育カリキュラムにおける「モデルコアカリキュラム(試案)」適用に係る課題について更に詳細に検討する。

【環境都市工学科】

これまで実施してきた建設系及び建築系の実験・演習科目を，「モデルコアカリキュラム(試案)」と比較検討することによって充実を図る。

【一般科目教室】

技術教育や人間教育を効果的に進めるために，教科内及び教科間での授業展開に関する情報交換を継続し，具体的な教材研究に取り組む。

【専攻科】

エンジニアリング・デザイン能力のレベルアップのために，創造デザイン演習の授業で地元企業との連携により，「モデルコアカリキュラム(試案)」のモデルに相当する内容を試行的に導入する。

- 企業や卒業生へのアンケートを踏まえ，高度化のための議論を深める。また，学生や保護者の志向動向に合わせ，制度制定後8年を迎えた工学基礎コース(括り入試)のメリット・デメリットを洗い出し，今後の在り方を含めて検討する。

- 他の高等教育機関における教育内容や制度等に関する情報を参考に、本校の 5 つのキーワード(機能創成, 情報, エネルギー, 安全・アメニティー, 環境)を基軸とする高度化に向けた教育体制の構築についての議論を引き続き行う。
- 学生には到達度試験の受験に加え達成度評価シートを作成させ、学生自らが状況を把握するための定点観測としての結果を学生にフィードバックすることで指導に活用する。また、到達度試験などの優秀者に対してインセンティブを設ける。
- TOEIC受験を推奨するとともに、実用英語検定と工業英語検定の結果に加えてTOEICやTOEFLスコアも単位化する方向で検討する。
- 前期終了・通年の担当教員変更科目については前期最終週, 後期・通年科目については後期最終週に WEB による授業アンケートを実施する予定である。またアンケート結果は、前期終了・通年の担当教員変更科目については10月頃, 後期・通年科目については3月に教員へ返却し、アンケートに関するコメントを収集し、夏頃に学生・教職員へ公開する予定である。
- 各種コンテスト及び高専体育大会に積極的に参加するとともに、そのための環境整備に努める。
- 学生のボランティア活動などの社会奉仕体験活動への周知, 支援を行う。また、学生と学外の人たちとの積極的なコミュニケーションの場を設けるため、学生に出前授業や公開講座等へのスタッフとしての参加を促す。

(3) 優れた教員の確保

- 企業などでの豊富な実務経験や技術士の資格を有する者, 他の教育機関での経験を有する教員や女性教員の採用に向けて努力する。
- 高専は、後期中等教育と高等教育の二つの教育を行う機関であるという意識を有する者を、様々な手段で見極め採用する。
- 高専・両技科大間教員交流制度の活用により、教育研究活動の活性化と連携を深めるとともに、教育の改善と質の向上に努める。
- 国内外で活躍している技術士を招聘して教員を対象にした講演会を開催し、資格取得の意義や優位性等を意識付ける。
- 教員公募に際しては、専門科目及び一般科目において、それぞれの教員に必要とされる学位又は資格等を応募要件に明記し、優れた教育力を有する者を採用する。
また、高専機構が示す要件に合致する者の割合を下回らないように努める。
- 教員公募に際しては、『本公募では、教育・研究業績等の評価において同等と認められた場合には、女性を積極的に採用します。』と明記するなど、男女共同参画を推進し女性教員の採用に向けて、積極的に努力する。
- 女性教職員より、働きやすい環境整備の在り方についての意見・要望を聴取し、実現可能なものから実施する。
- 図書館の女子トイレを改修し、快適な環境を確保する。
- 大学間連携事業 (フレックス) のFD学習研修会を本校主催で開催し、参加者増

に努めるとともに、教員のスキルアップにつなげる。

- 昨年度の校長裁量経費の採択、校長表彰や課外活動などで顕著な成果をあげている教職員による講演会を開催する。
 - 数学科・英語科が中心となって運用しているムードルの活用方法についての講習会を実施する。
 - 教職員の勤務意欲の高揚及び本校の活性化を図ることを目的に、職務に精励し、その功績が顕著な者を対象に、理事長表彰対象者として推薦する。また、校長表彰を行う。
 - 教育研究の発展と活性化のために、国内外での研究員制度を周知するとともに奨励する。
 - 今年度は、在外研究員制度により教員1名をドイツの大学に派遣する。
- (4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム
- 「モデルコアカリキュラム（試案）」と現行カリキュラムとの整合性の確認作業を行い、可能なところから26年度導入に向けた準備を整える。

【機械工学科】

エンジニアリングデザインとしての基礎能力を養うために、「機械設計技術者3級試験」の資格取得を奨励し、受験対策のための補講を行う。さらに、昨年度他学科と合同で検討して開発した教材を用いた授業を実施する。

【電気電子工学科】

エンジニアリングデザイン教育を実施し、その情報発信を行う。

【電子情報工学科】

FPGAなどを用いたハードウェア設計開発のための実験設備導入を図るとともに、これらを利用した実験指導資料などの作成を進める。さらに、実験テキストや講義の予習資料などを、ICT技術を活用して資料の電子化を促進・充実する。

【物質工学科】

「モデルコアカリキュラム（試案）」適用に係る課題を検討するとともに、基礎科目（低学年）及び専門科目（高学年）におけるより効果的な授業内容とその方法について創意工夫を図り、独自のコース制カリキュラムの改善を目指す。

【環境都市工学科】

建設系及び建築系の教育カリキュラムにおいて「モデルコアカリキュラム（試案）」、「エンジニアリングデザイン教育等」に係る取組事例集及び全国高専教育フォーラムの講演内容を参考にして、実験・演習系科目の内容の見直しを図る。

【一般科目教室】

語学や数学教育などで運用中のe-learningについてコンテンツを充実させ、在宅学習支援の教材開発を進める。また、電子黒板とタブレット型端末を活用した効果的なグループ学習の在り方を検討する。

【専攻科】

創造デザイン演習の授業で地元企業との連携を図っていくことで、エンジニアリング・デザイン能力のレベルアップを図る。

- 高専機構、長岡技術科学大学のアドバンスコース及び福井県の大学連携事業での e-learning コンテンツを教材として積極的に活用する。
- 平成 27 年度の J A B E E 継続審査受審に向けて準備を始める。
- 学生会や寮生会活動を中心に、他高専との交流を図る。
- 高専教育フォーラムに参加を促し、他高専の優れた事例の収集と紹介を行い、教育活動の活性化につなげる。

【機械工学科】

「モデルコアカリキュラム（試案）」との整合性に留意し、学科カリキュラムの見直しを行う。

【電気電子工学科】

「モデルコアカリキュラム（試案）」の取組みについて様々な機会をとらえて情報発信する。

【電子情報工学科】

近隣大学との学習資源共有のための大学間連携事業（フレックス）などでの取組みや学科での新しい取組みの事例を、高専教育フォーラムでの発表や高専教育へ投稿することなどを目指す。

【物質工学科】

「PBL 教育」を実施し、様々な機会をとらえて情報発信する。さらに、女性技術者・研究者確保のために、女子学生を対象とした「キャリア教育」の充実を図り、促進する。

【環境都市工学科】

建設系及び建築系の教育カリキュラムにおいて「モデルコアカリキュラム（試案）」、「エンジニアリングデザイン教育等取組事例集」及び全国高専教育フォーラムの講演内容を参考にして、実験・演習系科目の内容の見直しを図る。また、その内容は平成 26 年度以降に全国高専教育フォーラム等で発表する。

【一般科目教室】

「モデルコアカリキュラム（試案）」を踏まえた教科ごとの授業展開についての情報交換を継続し、先行的な取組事例集を参考にしながら教育方法の改善に努める。

【専攻科】

「モデルコアカリキュラム（試案）」との適用状況の確認と、デザイン工学や創造デザイン演習で実施してきたエンジニアリング・デザイン教育の総括を行い、教育方法の改善を促進する。

- 教育研究活動の結果を年度末に自己点検評価報告書としてまとめるとともに、外部有識者会議による提言等を参考にして、次年度に向けて改善を図る。

【機械工学科】

創成科目や実技系科目を通して実践的なものづくりセンスと創造力を育成するとともに、「エンジニアリングデザイン教育取組事例集」など他高専の事例内容を調査し、教育方法の改善について検討する。

【電気電子工学科】

教研集会等での他高専の「モデルコアカリキュラム（試案）」取組み事例の発表や、「エンジニアリングデザイン教育取組事例集」を参考に、教育方法について検討する。

【電子情報工学科】

実践的な技術習得を目指し、企業技術者からの助言を参考に、実験・講義内容に関する改善点を検討する。また、KOALAに掲載されている事例で、適用可能なものについて検討する。

【物質工学科】

化学技術者に必要不可欠なコミュニケーション基礎能力の育成、実験・実習レポート作成能力及びプレゼンテーション能力の向上を目的とした授業内容・方法について検討する。

【環境都市工学科】

建設系及び建築系の教育カリキュラムにおいて「モデルコアカリキュラム（試案）」、「エンジニアリングデザイン教育取組事例集」及び全国高専教育フォーラムの講演内容を参考にして、実験・演習系科目の内容の見直しを図る。

【一般科目教室】

「モデルコアカリキュラム（試案）」を踏まえながら、クラスごとの授業実践に関して、教科間での定期的な情報交換を実施し、教育改善を図る。

【専攻科】

「モデルコアカリキュラム（試案）」との適用状況の確認と、デザイン工学や創造デザイン演習で実施してきたエンジニアリング・デザイン教育の総括を行い、教育方法の改善を促進する。さらに、平成24年度に受審した認証評価及びJABEE中間審査の指摘事項を吟味して、教育改善を図る。

- 本科4年生及び専攻科1年生の学生全員に対し、インターンシップの推進と充実を図る。
- 専攻科では創造デザイン演習の単位を1単位増やし、地元企業との連携を充実することで、エンジニアリング・デザイン能力のレベルアップを図る。
- 前年度に引き続き、企業技術者等活用プログラムに「地域の匠を活用した科学クラブの共同教育」のテーマで応募し、活動の継続を目指す。

- 長岡技術科学大学のアドバンストコースを積極的に活用し、広域視野を持った人材育成に取り組む。
 - 三機関連携事業に参加し、また ISTS2013 や ISATE2013 に対して複数の学生・教員を積極的に派遣することで、教育研究の広域相互交流を図る。
 - 語学や数学教育などで運用中の e-learning についてコンテンツを充実させ、在宅学習支援の教材開発を進める。また、電子黒板とタブレット型端末を活用した効果的なグループ学習の在り方を検討する。
 - 長岡技術科学大学のアドバンストコースを実施する上で導入したTV会議システムを利用する授業の充実と向上を図る。
- (5) 学生支援・生活支援等
- 学生に対してきめ細やかな対応をするため担任と副担任の連携をより強化して、メンタルヘルスを含めた学生支援・生活支援の充実を図る。
 - 学生相談室において学生のメンタルヘルスマネジメントを十分に行う。また、関係教職員のスキルアップのため校内外におけるメンタルヘルスマネジメント関係の研修会等へ積極的に参加する。
 - 特別支援室において、障害を有する学生に対する支援を継続して行う。
 - 精神科医などと連携し、学生相談体制の充実を図る。
 - 平成25年度専攻科1年生には3名の他高専からの入学生が含まれ、学生支援及び生活支援の観点から適切な指導を行う。
 - 図書館の老朽・狭隘に伴う改修工事を実施する。
 - 学寮生活アンケートも参考に現状点検を行い、優先順位を検討して整備を図る。
 - 寮生活の改善を寮生会と協力して行い、寮生会活動の活性化を図る。また、寮生の生活面での指導や精神面での相談を適宜行い、寮生活の支援を充実していく。
 - 寮生の健康管理の観点から、利用可能となった各居室のエアコンの運用利用についての課題を明確にする。
 - 女子学生の志願者確保に向けて、女子寄宿舎の拡充を検討する。
 - 独立行政法人日本学生支援機構などと緊密に連携し、各種奨学金制度などの学生支援に係る情報を学生に提供する。
 - パソコンや携帯電話から求人状況等を検索できる、求人票閲覧・管理システムの利用を促進する。
 - 「キャリア教育セミナー（合同企業説明会）」や「大学・大学院合同説明会」を開催することにより、企業情報、就職・進学情報などの学生への提供体制を充実する。
 - キャリア教育講演会、先輩講座、就職対策講座等の行事を企画し、全学年を通じたキャリア教育の充実を図る。
 - 専攻科における進路に関する情報提供の充実を図る。

- 自然災害により被災した学生に対して、授業料免除等の経済的支援情報の提供を行う。

(6) 教育環境の整備・活用

- 入館者増等による狭隘化解消のための図書館改修及び地域連携テクノセンターの耐震改修を行う。これらの改修に際しては、バリアフリー化対策としてエレベーターの設置と、人感センサーによる照明装置等の省エネ機器を導入する予定である。
- 総合情報処理センターと本館の連絡通路(渡り廊下)の耐震改築を行う。
- 障害を有する学生の在学に伴うバリアフリー化対策としての営繕事業の推進を図る。
- 入館者増等による狭隘化解消のための図書館改修及び地域連携テクノセンターの耐震改修を行う。これらの改修に際しては、バリアフリー化対策としてエレベーターの設置と、人感センサーによる照明装置等の省エネ機器を導入する予定である。
- 総合情報処理センターと本館の連絡通路(渡り廊下)の耐震改築を行う。
- 障害を有する学生の在学に伴うバリアフリー化対策としての営繕事業の推進を図る。
- 省エネ化対策方針に基づいて、夏季及び冬季時の空調機器の管理を徹底し、省エネを図る。
- メンタルヘルス、救急救命等に関する講演会を実施する。

2 研究に関する事項

- 「全国高専テクノフォーラム」等に参加・出展して、本校の研究成果の情報発信を行い、他高専との共同研究のための交流を行う。
- 産官学連携コーディネーターの任用について検討する。
- 外部研究資金の獲得のための申請件数の増加に向けた具体策を検討し、実施する。
- 地域で開催されるマッチングイベント等に参加・出展して、研究活動の成果を広く発信する。
- 「ジョイントフォーラム」や「アカデミア企業見学会」の開催を通して、知的資源の紹介と、地域のニーズの把握に努め、産業界との交流を図る。
- 産官学連携コーディネーターの任用について検討する。

3 社会との連携、国際交流等に関する事項

- 地域連携テクノセンター棟の改修にあわせ、施設や設備の活用方法を検討する。
- ニュースレターと活動紹介誌(JOINT)の発行、さらにホームページのコンテンツの充実を図り、地域社会に地域連携テクノセンターの活動と教職員の研究を紹介する。

- ニュースレターと活動紹介誌(JOINT)の発行，さらにホームページのコンテンツの充実を図り，地域社会に地域連携テクノセンターの活動と教職員の研究を紹介する。
- 地元自治体並びに小中学校や公民館等と連携し，ものづくりやデモ実験を中心にした出前授業に積極的に参画し，理科教育支援を行う。
- 公開講座・出前授業の数と内容の充実を図り，高い満足度が得られるように工夫する。
- 創立 50 周年に向けて，同窓会との連携を深める。
- 高専機構が包括学術交流協定を結んでいる海外の教育機関との交流を促進する。
- ISTS2013 や ISATE2013 に対して複数の学生・教員を積極的に派遣することで，教育研究の広域相互交流を図る。
- 本校が締結しているバララット大学（豪州）との間で，ビデオレターの交換などの交流活動を行う。
- 教育研究の発展と活性化のために，国外での研究員制度を周知するとともに奨励する。今年度は，在外研究員制度により教員 1 名をドイツの大学に派遣する。
- プリンソブソクラ大学工学部（タイ）と学術交流に関する覚書を締結し，交流を促進する。
- J I C A 北陸が開催を予定している事業への参加を，教員に奨励する。
- 中部日本海高専国際化推進委員会のメンバー校として，海外インターンシップ先の開拓に努める。
- 資質の高い留学生を積極的に受入れ，国際貢献と異文化交流に努める。
- これまでの短期留学生の受入れ実績に基づいて，受入れ態勢とシステムの整備を進める。
- 留学生と寮生との交流の実が上がるように，歓迎会・交流会の実施など学生寮としてのプログラムを整備する。
- 北陸 3 県の高専で協力しながら，各高専に在学する留学生相互の交流会を実施する。本年度は，本校が企画・主催する予定である。
- 留学生との交流の活性化を図るために，本校の独自の研修等を企画する。

4 管理運営に関する事項

- 校長のリーダーシップのもと，戦略的かつ計画的な資源配分を行う。
- 本部開催の研修会や国立大学等の研修会に参加する。
- 高専機構の高専間相互監査や学内定期監査等を実施する。
- 高専相互会計内部監査を実施し，他高専と情報を共有して可能なものから改善する。また，学内定期監査も実施し不正経理を防止する。
- 引き続き，高専機構本部から配布された緊急連絡用の P H S 電話機等を適正な場所に配置する。

- 各クラス担任と学生との緊急連絡体制を維持し、緊急時に備える。
- 管理職研修会等に教員を派遣する。
- 機構本部で作成したマニュアルや本校内部規則を熟知させ、事務停滞を起こさないようにする。
- 他機関で実施している研修会に積極的に参加させ、事務職員・技術職員の一層の能力向上を図る。
- 職務に関して、高く評価できる職員に対して毎年度実施している校長表彰を、継続して実施する。
- 近隣大学等との人事交流を引き続き積極的に行う。
- 前年度に導入した校内 LAN システムを、十分な情報セキュリティ対策を講じて運用する。
- 教職員等の情報セキュリティに対する意識向上を図るための講習会等を開催する。

Ⅲ－２ 業務運営の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

- 契約にあたっては、原則、仕様策定による一般競争契約とし、競争性や透明性を高める。
- 複数年契約を実施し業務の効率化を図る。
- 給与支給明細書の WEB 承諾率を高める。

Ⅲ－３ 予算（人件費の見積もりを含む、収支計画及び資金計画。）

- 外部研究資金の獲得のための申請件数の増加に向けた具体策を実施する。
- 校長のリーダーシップを発揮し、効果的・効率的な予算配分を行う。

Ⅲ－４ その他主務省令で定める業務運営に関する事項

1 施設・設備に関する計画

- 図書館の老朽・狭隘に伴う改修工事を実施する。
- 地域連携テクノセンターの老朽・狭隘・耐震化のための改修工事を実施する。
- 総合情報処理センター渡り廊下の老朽・狭隘・耐震化のための改築工事を実施する。
- 障害を有する学生の在学に伴うバリアフリー化対策としての営繕事業の推進を図る。
- 環境に配慮した機械・設備の導入を引き続き図り、光熱水料の節減に努める。
- 電力需給率低下に伴う対策として、夏季及び冬季時の空調機器の管理を徹底し、省エネを図る。

2 人事に関する計画

- 教職員の力量を高めるため、近隣大学や高専・両技科大学への人事交流制度・在外研修制度等を活用する。
- 男女共同参画を推進し、女性教職員の採用比率の向上を図る。
- 他機関で実施している研修会に積極的に参加させ、教職員の一層の能力向上を図る。
- 事務の合理化を進めるとともに、職員配置の見直しを検討する。

IV 自己点検評価

1. 全学的に関する事項

○ 教務関係

1. 基本方針

教務の所掌は、本校の基本理念や教育方針に沿った教育を行うための業務運営が主たるものである。このため、学習・教育目標を達成し、社会のニーズに即した優秀な人材を育成するための、最も効果的なカリキュラム編成、授業方法、評価方法の研究と実施が重要な職務と考える。また、これらの目標を達成するために入学生の質の向上と適正な志願倍率の確保に向けた取り組みも重要な業務にあげられる。ここでは現在の本校の教務活動に関し、教務関連の課題と今年度の対応を概説し、数年来続けている原子力人材育成教育、4年目を迎えた長岡技術科学大学との戦略的技術者育成協働教育や特に課題となっている入学志願者確保に関する対応も含め述べることとする。

2. 教務関連の課題と今年度の対応

本校の基本理念である、「*創造性豊かな人材の育成 *幅広い工学的素養、基礎能力及び応用能力の育成を目指す実践教育 *高度に情報化した国際社会に対応する教育 *環境を意識し、地域社会に根ざしたものづくり教育」を行うため、養成すべき人材像を規定し、それに沿う形で本科(準学士課程)と専攻科課程に学習・教育目標を設定してカリキュラム編成を行っている。昨年度受審した大学評価・学位授与機構による機関別認証評価においては、教務関連指摘事項はなく、また、評価されるべき事項として創造的カリキュラムの運用や入試対策の充実をあげていただいた。今後とも、このことに留意した教育の質の向上に努めて行きたいと考える。

平成18年度に高等専門学校設置基準が改訂され、高等専門学校にこれまでの履修単位ばかりでなく、自己学習をより重要視した学修単位を60単位まで導入することが認められたが、本校では各学科の高学年に講義演習タイプの学修単位として約20単位を導入したのみで、対面教育の重要性に鑑み実質的な講義の時間数は変えていない。一方、4・5年に専攻科と同様な単位換算の講義タイプの学修単位を導入する高専もあるが、本校では近々社会情勢の変化に呼応する『高専機能の高度化』を平成28年度に実施する予定であり、その中のテーマの一つとして取りあげて行きたいと考える。

本校では平成17年度より、中学生・保護者の要望と低学年の創造教育進展のために、低学年のクラス編成と入試制度、カリキュラムを改訂した。具体的には、学力入試で各科8名の工学基礎コースを設け、2年進級時に本人の志望と成績により転科が可能になる制度である。これは高専への入学の意思はあるものの、希望学科が絞り込めないという生徒・保護者や中学校教諭からの意見に基づいて、全国高専で初めて本

校が導入した制度であり、平成26年度の学力受検者の約8割が希望している。実際の転科の状況は、平成17年度には14名、平成18年度5名、平成19年度11名、平成20年度6名、平成21年度5名、平成22年度4名、平成23年度4名、平成24年度5名、平成25年度9名が転科している。また、この制度を設けるに当たり、1年の1クラスを工学基礎コース、他のクラスを混合学級とした。さらに、ものづくり科学という創成型の授業を開始するなどのカリキュラムの改訂を実施した。この制度による卒業生として3期送り出した昨年、工学基礎コースに関する学生アンケート等を実施し制度の総括を行っている。また昨年実施された機関別認証評価でもこれらの取り組みは評価できる項目として取り上げられており、本校では工学基礎コースの精神を生かしながら、早期キャリア教育など時代の要請に対応した高専教育を実現するために、今後とも適切な制度の改変に取り組んで行く。

法令遵守の観点から6年前より導入した1コマ100分授業の問題点を改善するため、できるだけ50分授業・7限で終了できるように時間割を編成してきたが、現状では解決できない課題も多く、授業時間に関する運用基準の弾力化を踏まえ、来年度より、旧来の90分半期1単位の体制に戻すこととし、1日4コマ実施でも午後4時頃に終了でき、かつその後50分の自学自習・補講補習に活用できる時間を設けるようにカリキュラムの改訂を行った。

平成20年度より8、9月を夏休みとする学事日程を採用した。そのため9月中の学生指導の一環として、9月末に学力強化週間を設け、成績不振の学生を対象に基礎学力の強化を図る試みを実施し3年目になる。今年度も低学年の参加者が多く、夏休み課題の確認・指導、授業の復習・補講、仮進級解除、再試験、一斉試験、校外研修、資格試験の指導など多岐にわたる内容で実施された。この学力強化週間は、夏休み終盤の9月末に実施することから、成績不振の学生を指導することで、該当学生が後期のスタートをしやすくなるなどの効果も期待できる。基礎学力向上は本校で最も重要な課題の一つであり、今後も来年度の90分授業の様子を踏まえ内容の改善を模索していきたい。

発達障害・学習障害の学生に対する支援については、本校でも人数的には少ないが対象となる学生が出てきている。このような学生の教務に関する支援を行うため、平成21年度に特別支援ワーキンググループをつくり、平成22年に特別支援室（構成メンバー：教務主事（室長）、学生相談室長（副室長）、看護師、カウンセラーなど）に格上げして、支援が必要な学生毎に個別の支援チームを設けて対応を開始しており、これまでに身障者を含め3名の学生が支援対象になっている。また、この身障者の受け入れに合わせバリアフリー化を一層進め、修学環境整備のためにスロープ、エレベーターや自動ドアの設置など鋭意努力を行っている。

本校の本科（準学士課程）と専攻科課程には前述の学習・教育目標が明確に設定されており、各学習・教育目標の達成度評価を学生自らができるように達成度評価シート

等を整備し、キャリア養育の一環として、自身の現状把握と将来像を考えるための重要な機会としている。

3. 原子力人材育成教育

ここ数年本校は、高専機構本部主導（文部科学省公募）と本校独自（経済産業省公募）の2つの原子力人材育成補助プログラムに採択されている。本校では、これまでに高等専門学校における教育制度の大きな特徴であるくさび形教育カリキュラムに原子力関連の教育を一部導入して実践してきた。本補助事業では、それをさらに充実・発展させ、低学年から高学年にわたる継続的な授業や実験・実習に加えて特別講演会・施設見学会の開催や卒業研究等による組合せを導入したプログラムによって、特に放射線に関する基礎的な知識と技術の習得並びに理解の更なる促進を図り、原子力施設の集中地域である福井県はもとより、国内の原子力産業界で求められている幅広いエンジニアリングスキルを身に付けた実践的な技術者の育成と、データを基に風評などに左右されず正しい評価ができる人材育成を目的とし、東日本大震災以降は特に後者に力を入れたプログラムを実践している。

4. 長岡技術科学大学との戦略的技術者育成協働教育および三機関連携教育改革

平成22年度より6年間の事業として、長岡技術科学大学が高専機構と協働し、戦略的技術者育成アドバンスコース事業を開始し、6高専がこの事業に参加することとなった。本校は同事業を推進するための協力校に選出され、同事業を本校の学生に対し推進している。実質3年度目を迎えた今年は、新たに4年生5人、5年生1人の学生が加わり、先導科目と位置付けられ工学的課題に対する解決方法を理解して問題解決に向けたアクションをとる能力等を育成することを目的として夏季休業期間に開講された“集中セミナー・集中ラボ演習”に5名の学生が参加し、また最先端工学の現状について学び、今後技術者が果たすべき役割について考え、成長するための基礎力を養う等の目的で開講された“先端技術演習”に10名の学生が参加した。また、本校5年生を対象にした“数学特講”と“英語特講”を開設し、長岡技術科学大学の担当教員と本校教員が連携して授業を行い、遠隔授業の技術も取り入れながら学生に分かりやすくかつ興味深く説明し、より高いレベルの興味を涵養するように学生に教授している。加えて、国際化の流れの中で日本を認識する目を養う観点から、学生3名（イギリス2名、ベトナム1名）を海外視察へ派遣することに決定した。なお、帰国後は体験を後輩に伝えるための報告会等を予定している。

これに加え、本年度より長岡と豊橋の両技術科学大学と高等専門学校機構の3つの機関が連携を取り、イノベーションの力を持ったグローバルな人材育成を目指した連携・協働教育改革プロジェクトが進められ、そのためのハードやソフトの準備や教員の研修（海外）も開始された。

5. 入学者確保とその状況

本校の基本理念に沿った教育を進め、また、本校の教育レベルの維持・向上を図るためには、入学生の質の向上と適正な志願倍率の確保は重要な課題の一つである。過去4年間の入試倍率の詳細な推移を以下の表に示すが、総合倍率で見ると平成18年度の1.7倍から1.5倍へと少しずつ低下する傾向にあった。そのため、志願者の確保が急務との認識に立ち、これまでの結果を検証し①入試に関する新入生へのアンケート調査、②推薦基準の改正、③入試会場の増設、④全中学生配布用入試リーフレットの作成、⑤入試関連行事の見直しと改善、⑥推薦募集枠の増加などの改善を行った結果、倍率は平成22年度には1.6倍に回復した。さらに、平成23年度にはキャンパスツアー（施設見学会）の企画を、5月という早い時期に導入するなど広報活動の強化を図ったところ、1.7倍にまで向上した。一昨年度からはさらに10月にも「キャンパスリサーチ」と名付けた体験型オープンキャンパスを開催し、本校の認知度向上に努めている。しかしながら、15歳人口の減少に歯止めが掛からない状況で、本校志願者と同水準の学生が希望する県内進学3高校の入学定員が据え置かれるなか、24年度は1.6倍、昨年度は15歳人口が一举に300人近く減少したが、丹南地区を中心に進路担当の教員に対しこれまでにまして丁寧な対応を行ったところ昨年並みの1.6倍を確保できた。本年度は、15歳人口が150人程度増える中でPR活動を丁寧に行い1.7倍の倍率を得ることができた。また、企画室が実施している女子学生増加へのアプローチ（リケジョの勧め）の効果も現れ、女子の志望者が順当に増加し、結果として入学者が定員の1/4に迫るまでになったことは成果の一つであると考えている。

<過去3年間の入試倍率の推移> ()内は女子で内数。

年 度	学 科 [募集人員]	機 械 [40]	電気電子 [40]	電子情報 [40]	物 質 [40]	環境都市 [40]	計 [200]
H25	志願者数	55(3)	68(3)	78(15)	61(34)	52(10)	314(65)
	合格者数	40(2)	40(2)	40(8)	40(26)	40(10)	200(48)
	倍 率	1.4	1.7	2.0	1.5	1.3	1.6
H24	志願者数	64(2)	57(2)	73(10)	64(22)	57(23)	315(59)
	合格者数	40(2)	40(2)	40(8)	41(17)	40(17)	201(46)
	倍 率	1.6	1.4	1.8	1.6	1.4	1.6
H23	志願者数	78(2)	76(8)	64(10)	54(26)	76(25)	348(71)
	合格者数	40(1)	40(5)	40(8)	41(20)	40(12)	201(46)
	倍 率	2.0	1.9	1.6	1.4	1.9	1.7

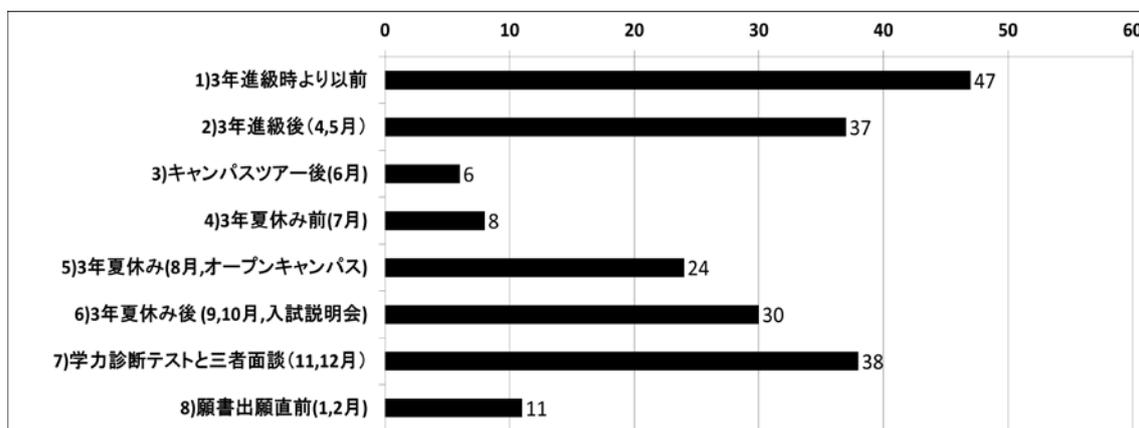
(注)平成25年度入学者選抜試験中学校別合格者数をこの項目最後に添付する。

(1) 入試に関する1年生へのアンケート調査

毎年4月に新入生に対し、入試に関するアンケート調査を実施し、今年度の入試に関する方針を決定するための基礎資料としている。以下に例として、高専受験の決定時期、本校を志望した理由とアドミッションポリシーに関するデータを示すが、ここ数年結果は似たような傾向を示している。

① 高専受験の決定時期

高専受験の決定時期としては、昨年度は「11、12月の3者面談の頃」が最も多く、「3年進級時より以前」、「3年夏休み後」の順で回答者数が多かった。今年度も次図に示すように、高専受験の決定時期の回答者数は昨年度とほぼ同様、「3年進級時より以前」が最も多く、続いて「11、12月の3者面談の頃」そして、「3年進級後」と「3年夏休み後」はほぼ同数となっている。これにより、学年を問わず参加できる5月開催のあじさいオープンキャンパス（現キャンパスウォーク）は、特に中学低学年時から本校への進学意識を啓発する格好の機会といえる。さらに、8月と10月に行ったオープンキャンパスも本校への進路選択を促す機会として大きな意義を持っていると判断できる。また、3年進級以前にも多くの生徒が意思決定を行っている事から、出前授業など普段のPR活動が重要であることが読み取れ、中学校のみならず小学校や子供会・自治会などの地域イベントなどへの参加などの地道な活動を今後とも積極的に続けて行く必要がある。

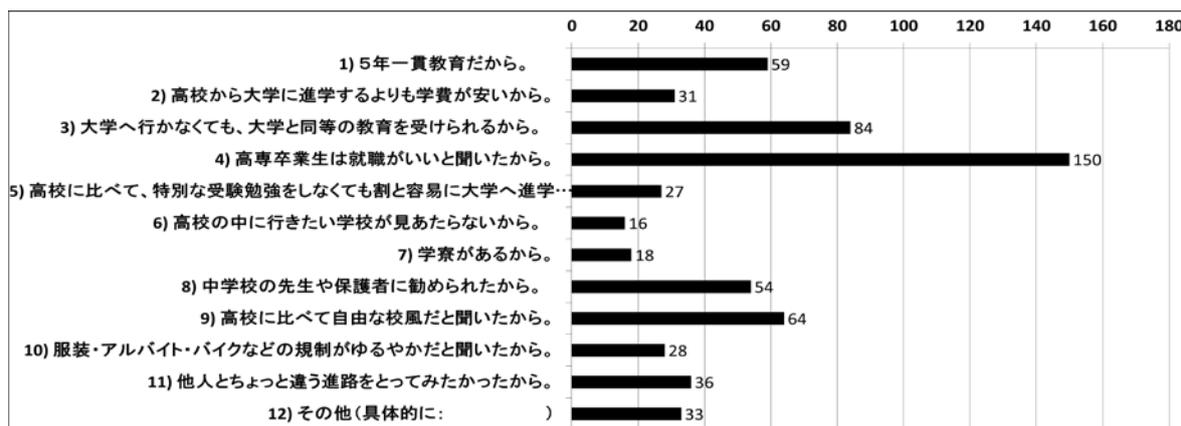


<高専受験の決定時期>

② 本校を志望した理由

本校を志望した理由を複数回答可で集計したところ、次図のように、「高専卒は就職がいいと聞いたから」が一番多くなり、2番目が「自由な校風に憧れたから」、3番目が「5年一貫教育だから」であり、「大学へ行かなくても、大学と同等の教育を受けられるから」もほぼ同数であり、このような傾向はここ数年同じである。これは、最近の社会経済状況を反映していると思われるが、

「高専卒は就職がいいと聞いたから」の回答者数が昨年度同様トップであり、就職という将来問題を中学生も強く意識しているといえる。また、「高校から大学に進学するよりも学費が安いから」と「大学への進学が高校よりも容易であると聞いたから」という経済面も考慮した将来の進学をあげた学生数も、昨年度とほぼ同数あり、保護者や中学教員へのアピールとしては重要な事項の一つと考えられる。

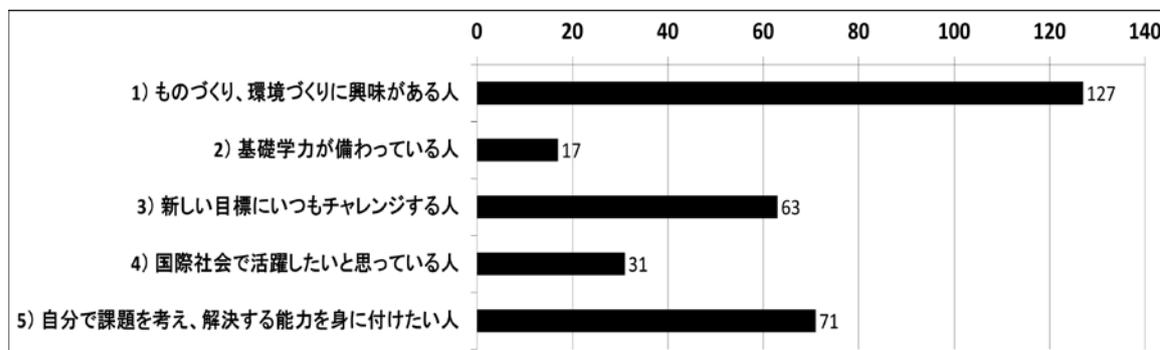


<福井高専を志望した理由（複数回答可）>

③ アドミッションポリシー

本校のアドミッションポリシーの中で、魅力を感じ、福井高専志望の理由となったものは何かを複数回答可で質問したところ、次図のように「ものづくり、環境づくりに興味がある人」の回答者数が昨年度と同様に一番多い。この項目は本校で一番重視している項目であり、現状、アドミッションポリシーに沿った学生が入学しており適切な状況と考えられる。なお、それ以外の傾向も昨年度とほぼ同様であり、3～5の項目への回答者数はほぼ同数であった。

このアンケートは、各学科のアドミッションポリシーに対しても同様に行っており、ここでの評価を受けて機械工学科は昨年アドミッションポリシーをより分かりやすいものへと変更している。



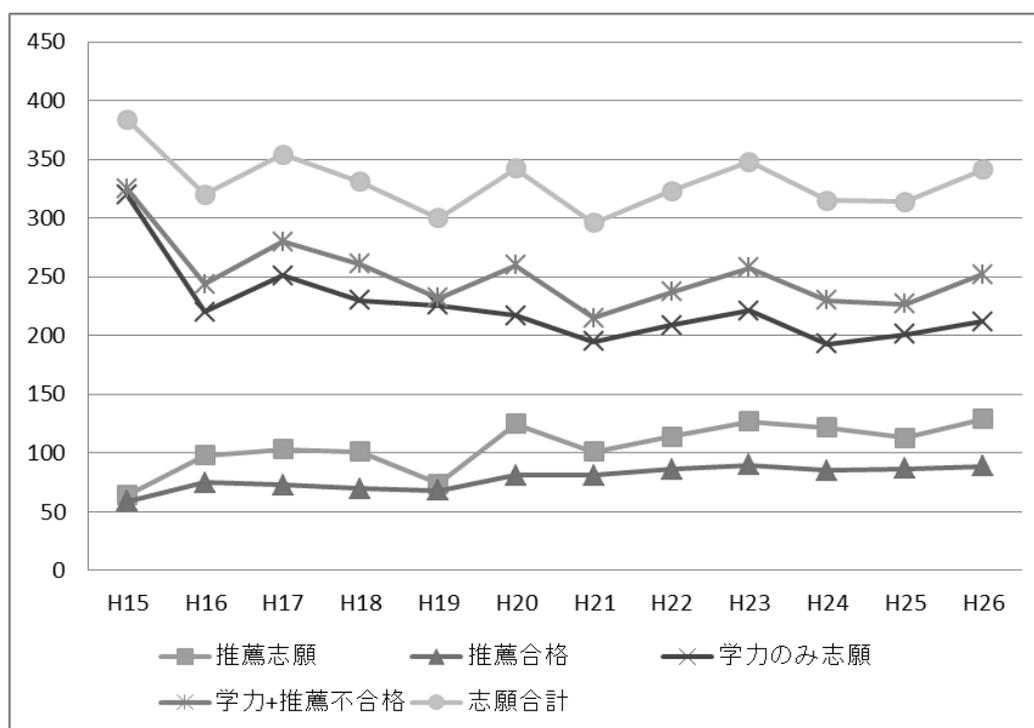
<アドミッションポリシーの中で福井高専志望の理由となったもの（複数回答可）>

(2) 推薦基準の検討

本校の教育レベルの維持とさらに教育内容を向上するために、入学生の質の向上と適正な志願倍率の確保は重要な問題である。15歳人口の減少とともに、本校の入試倍率は平成17年度1.8倍、平成18年度1.7倍、平成19年度1.5倍と低下傾向が続いていたが、平成20年度に推薦基準の改訂（緩和）を行い、1.7倍にまで回復した。平成21年度は入学者の質はますますであったが、倍率は1.5倍に減少した。平成22年度は推薦募集枠を1名増加し、入試会場の改善と広報活動の強化を行い1.6倍に回復した。また、推薦要件は情勢に即して適切に変更されるべきとの考え方から、平成26年度の入試から推薦要件のイに新たな項目を追加した。

下図に入試志願者数の推移を示す。

年度	推薦志願	推薦合格	学力のみ志願	学力+推薦不合格	志願合計
H15	64	59	320	325	384
H16	98	75	220	244	320
H17	103	73	251	280	354
H18	101	70	230	261	331
H19	74	68	226	232	300
H20	125	81	217	260	342
H21	101	81	195	215	296
H22	114	86	209	237	323
H23	127	90	221	258	348
H24	122	85	193	230	315
H25	113	87	201	227	314
H26	129	89	212	252	341



平成20年度に改訂した内容は以下のとおりである。

- (a) 推薦要件の緩和（対象学年を2、3年とし、基準点数を68点以上に低減）
- (b) 募集人員を30%程度から35%程度に5%（各科2名）増加

次に、平成22年度に改訂した内容は以下のとおりである。

- (a) 募集人員を35%程度から15名程度に増加（2.5%（各科1名）増加）
- (b) イ要件の「科学の分野」を「科学や技術の分野」に改正

この改定案は、過去の入試データ及び入学後の成績との相関を詳細に検討して割り出しており、入学後の1年生の成績を調べてみると、この基準で推薦入学した学生の成績は問題がなく適性であることを確認している。

今年度は推薦要件について、いくつかの項目を提案する中で、推薦要件イの項目を変更し、課外活動や社会貢献で成果を上げたものを追加するとともに、評定点に下限を設けることとした。この結果、推薦要件イでの応募者はこれまでの2倍以上となった。

(3) 入試会場の4会場体制への移行

本校会場と滋賀県彦根市会場以外に、平成19年度に嶺北北部のあわら市、平成20年度に嶺南の敦賀市、そして21年度は人口の多い福井市に学力検査会場を新設し、学力検査は5会場体制になった。中でも福井市会場は、JR福井駅に隣接し、交通の便が良いアオッサ7階の放送大学福井学習センターを利用することで、利便性の向上を図ってきたが、22年度から福井市会場の収容人員を増加し、受験生の地域制限を撤廃してより利用しやすくするため、同じアオッサの6階フロアを全て占有して入試を行えるようにした。これに伴い、1年間の意見聴取と周知期間を経て、昨年度より会場環境が厳しいあわら会場を福井会場に統合し4会場体制としたが、受験者からの大きな不満は生じていない。

(4) 入試配付資料の改善、カレッジガイドのデジタルパンフ化、キャンパスグッズの製作

入試関連の中学生に対する本校紹介用資料としては、冊子体のカレッジガイドを用いており、中学校訪問時や郵送で県内全中学校及び滋賀県・石川県の中学校に指定部数を配布し、オープンキャンパスや入試説明会等の参加者に渡している。なお、本校ホームページにカレッジガイドのデジタルパンフレットを掲載し、いつでもカレッジガイドがパソコン画面で本をめくるように見られるよう改善した。

また、各県立高校の紹介資料が中学生全員に配布されているのに対応するため、小型のリーフレットを作成し福井県内の中学生全員に配り、また、6～7月の福井県及び滋賀県の中学訪問時に持参し3年生全員への配布を依頼した。また、2年時の進路指導の授業での使用を目的に、県内の中学校2年生全員に配布していただくよう依頼し、滋賀、石川県内中学校には指定部数を9月に郵送している。

なお、引き続き本校のロゴマークの入ったキャンパスグッズ（クリアファイル、

シャープペンシル、蛍光ペンやうちわ等)を製作し、オープンキャンパス等で配布しPRを行っている。

(5) 入試関連行事の見直しと改善

① 校長・副校長による県内の中学訪問と挨拶(4、5月)

年度の当初に校長・副校長が丹南及び福井・敦賀地区の主要中学校を訪問し、各中学校校長に対して前年度の志願者派遣に対する謝意を伝えるとともに本校に対する要望事項などをお聞きしている。また、副校長が残りの県内の主要な中学校を訪問し、前年度の御礼と今年度の入試関連行事の予定やオープンキャンパスへの参加を依頼した。1年生のアンケート結果で「就職が良いこと」が志望動機で最も多いことから、就職(不況時の高い求人倍率(昨年度1.7倍、本年度2.5倍))と進学状況に加え、力を入れている海外の視察事情などを中心に分かりやすく説明した印刷物を作成し、訪問時に配布した。

② KOSEN キャンパスウォーク 2013(5月)

KOSEN キャンパスウォーク 2013を連休後半の平成25年5月11日(土)に開催した。1～3年までの中学校生徒、教員及び保護者対象に、校舎、各実験室や女子寮等の施設・設備見学をスタンプラリー形式で行い、併せて相談コーナーで本校の教育・学生生活・入試等の質問に答えることで、本校を身近に感じてもらうことを目的としたものである。当日は生徒数が388名、全体で597名の参加があり、昨年より117名の増加となった女子中学生の参加者数も順調な伸びを示した。

参加者へのアンケート調査では、満足度に関しては「大変良かった」と「良かった」への回答者の割合は中学生で98%、全体では97%と非常に高かった。また、自由記述欄への記述は168件あり、その主な内容として、“各学科の特徴が分かった”、“行きたい学科の内容が理解できた”や“学生が伸び伸びと勉強していることが分かった”等の良い感触の感想が161件と全体の96%を占めている。

③ 中学校訪問(6月中旬～7月上旬)

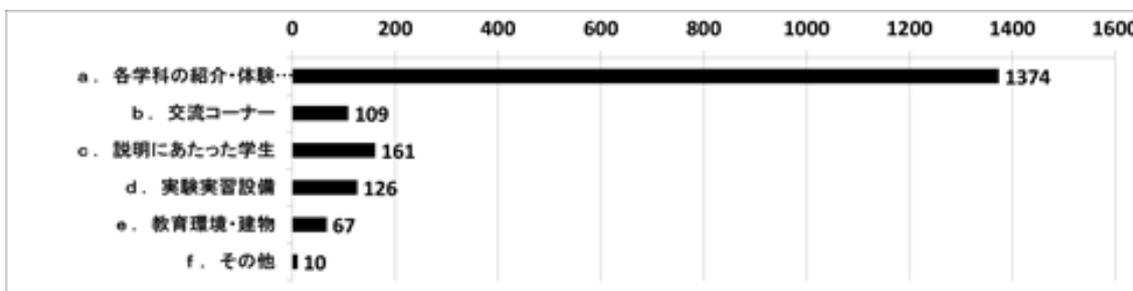
6月中旬から7月上旬にかけて、県内全ての中学校と滋賀県の中学校を副校長、学科長・一般科目主任、教務主事補が分担して訪問した。一昨年度からは、教員ができるだけ2人体制で訪問することとし、詳細な訪問マニュアルも作成している。さらに近年の入試や進路情報などの分かりやすい印刷物を作成し配布した。応募者が減少傾向の滋賀県は教務主事団が2人体制で訪問した。また、3年前に入試会場として敦賀会場を新設したため、若狭地区に対しても利便性の向上をアピールした。また、石川県の中学校の中で、昨年応募者のあった福井県側の加賀市、小松市の中学校を重点的に訪問し、本校への受験を促している。

④ キャンパスツアー2013（8月）

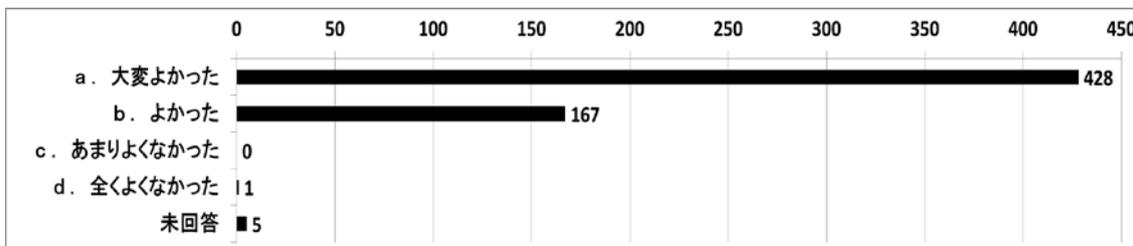
毎年夏に、本校の各学科の内容を中学3年生・保護者・中学校関係者に紹介するために開催しており、旧来同時期に開催していたオープンキャンパスを、キャンパスツアーと改称し、保護者も参加しやすいように今年度も土曜日に開催した。このイベントは、各学科の5年生がプレゼンターとなり、実際にデモ実験等を体験できるために中学生に人気がある。今年度の最終的な参加者は、生徒444名、保護者211名、教員25名（総数680名）となり、昨年度よりも総数で46名減少したが、これは中体連などの行事と重なったことが理由と考えられる。

キャンパスツアー実施後のアンケート結果は、以下のとおりである。昨年度と同様であるが、各学科が工夫を凝らし体験コーナーが充実していたため、学科のデモ実験等のコーナーの評価が高かった。また、全体の満足度も非常に高く、回答者のほぼ全員が「大変良かった」または「良かった」と回答した。開催日に関してもアンケートを採ったが、「どの時期でも良い」が最も多く、続いて現在の日程（8月第一土曜日）、7月下旬の順であった。本校の学事日程も特段の予定も無いため、来年度も今年度のような日程で良いと判断される。なお、オープンキャンパスの見学方式として、固定した学科でなく現在のような5学科全部を見学する方式の方が良いと回答した生徒が大多数を占めた。

(a) 印象に残ったこと



(b) 満足度



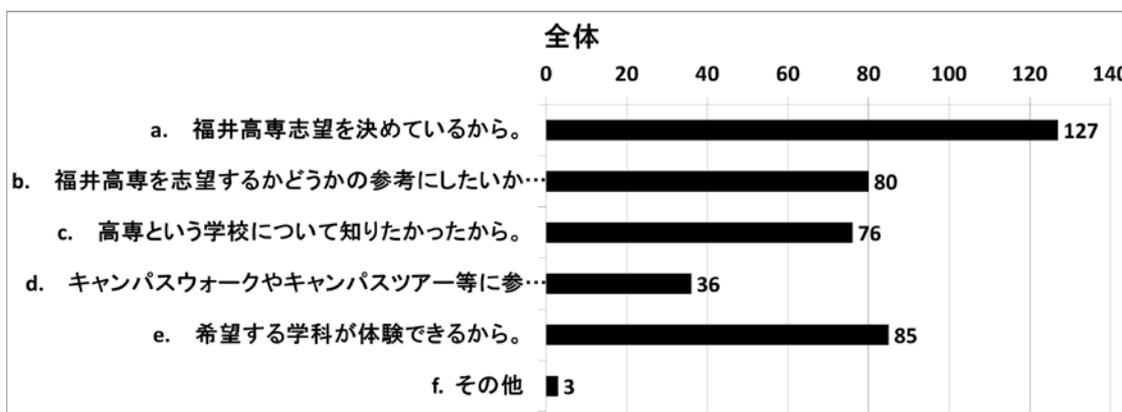
⑤ キャンパスリサーチ（10月中旬）

オープンキャンパス第3弾にあたるキャンパスリサーチを、今年は、諸事情

で10月5日（土）に中学3年生のみを対象に開催した。当日、222名の参加者（昨年度比61名増）は希望する2学科での授業を体験してもらい、これを通して学科の内容や特徴についての理解を深める機会を提供した。

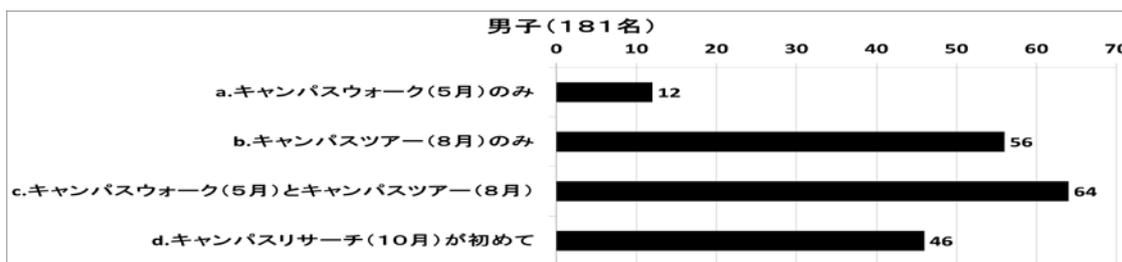
キャンパスリサーチ終了後、参加者に対してアンケート調査を行った。キャンパスリサーチへの参加動機の調査結果（複数回答可）を次図に示した。同図によると「a. 福井高専志望を決めているから」と「e. 希望する学科が体験できるから」の回答者数の総数割合は、全体の約58%に達している。e. の事項の回答者数には a. での回答者も含まれており、本校第一志望学科と第二志望学科を明確に決定し、学科選択のミスマッチを避けようとする意図で、キャンパスリサーチに参加した中学生も多いと思われる。

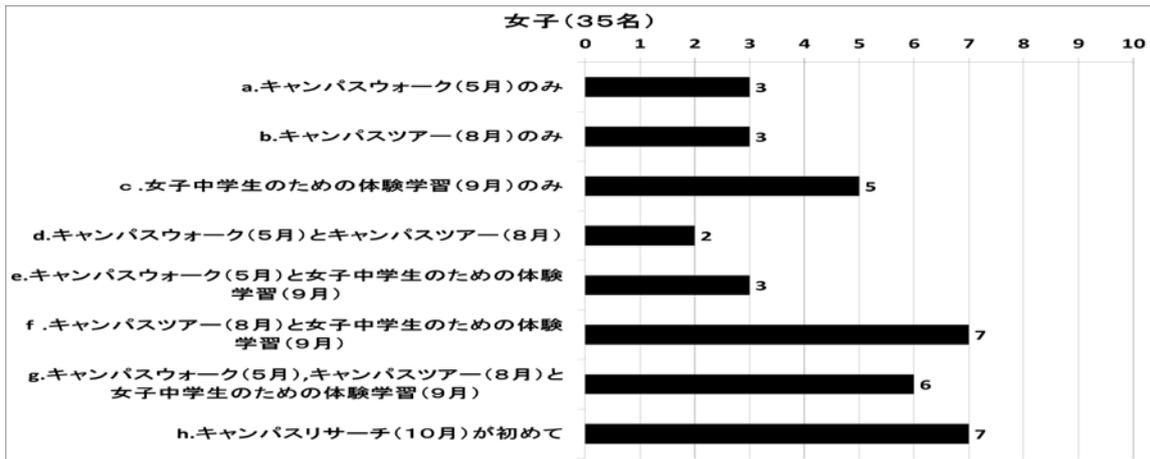
(a) 参加動機（複数回答可）



また、今年度行われたオープンキャンパスにどの程度参加したかについての調査結果を男子中学生と女子中学生に分けて、次図に示した。ほとんどの参加者はこれまでに開催したオープンキャンパス等に1回、ないし2回参加していることが分かる。その一方、今回が初めてという参加者も参加者全体の約22%を占めており、11～12月に予定されている3者（中学生、保護者、担任）面談に向けての準備のためにこの機会を利用したものと考えられる。

(b) オープンキャンパスへの参加状況





最後にオープンキャンパスの参加者を過去8年間で比較した(下表)。この表からも分かるように、今年度の参加者は5月、8月、10月の合計で1499名あり、昨年より132名増加したが、参加中学校は逆に昨年度より68校減り延べ202校となり、地域のよる偏りが見られたので、PR活動を強化しこの傾向の解消に努めてゆきたい。

<過去7年間のオープンキャンパス参加者・参加校数の推移>

区分	参加校	参加者				
		生徒	保護者	教諭	計	
25年度	5月	56	388	193	16	597
	8月	86	444	211	25	680
	10月	60	222			222
	計	202	1,054	404	41	1,499
24年度	5月	48	296	177	7	480
	8月	87	467	233	26	726
	10月	135	161			161
	計	270	924	410	33	1,367
23年度	5月	62	401	221	7	629
	8月	91	449	217	28	694
	10月	53	232			232
	計	206	1,082	438	35	1,555
22年度	5月	53	340	168	6	514
	6月	65	307	166	18	491
	8月	89	440	213	31	684
	計	207	1,087	547	55	1,689

21年度	6月	59	341	216	24	558
	8月	82	413	183	25	621
	計	141	754	399	49	1202
20年度	6月	56	263	153	30	446
	8月	80	395	139	35	569
	計	136	658	292	65	1,015
19年度	6月	49	301	170	26	497
	8月	78	435	116	30	581
	計	127	736	286	56	1,078

⑥ 入試相談・学校紹介コーナー（8月、11月）

10月27日（日）に開催された「ちちんぷいぷい」in 今立芸術館の高専コーナー及び11月18日（金）～20日（日）開催の「さばえものづくり博覧会」において、入試相談や学校紹介のブースを設け、高専の紹介と入試の案内を行った。その結果、会場を訪れた保護者や小・中学生が相談に訪れていただき、長い目で見た入試対策として今後も継続すべきと考えている。

⑦ 中学校訪問等（9月）

丹南地区及び福井・嶺北北部地区の中学校を9月末に訪問し、募集要項等を持参した。今年度の入試情報や入試説明会の参加依頼、中学校主催の高校説明会への積極的参加などを説明した。

⑧ 入試説明会（10～11月）

福井県、滋賀県内を幾つかのブロックに分けて、校長・副校長・学科長・一般科目主任・教務主事補によって本校の紹介と入試の実際についての説明会を行っている（福井県10会場（11回）、滋賀県5会場）。昨年とほぼ同じ形式で実施しており、福井県内の説明会は、福井会場（2回）と高専会場（2回）以外は副校長と教務主事補がチームを組んで説明会を行った。なお、募集要項の内容や入試問題等の内容を昨年より多く分かりやすくしたスライドを作成し、入試説明会のマニュアルを改訂した。学科紹介用のスライドは、統一したデザインで各学科に作成を依頼した。過去5年間の入試説明会の参加者数の推移を下表に示すが、昨年度に比べ生徒数同じであったが保護者数が21名増加し、合計で631名の参加を得た。

また、各中学校が主催する高校説明会にも積極的に参加するようにしている。今年度は16校から参加依頼があり、副校長が6回、教務主事補が10回出席し入試に関する説明を行った。

<過去6年間の入試説明会参加者数、県教委発表の高専希望者数（9月集計）の推移>

	生徒	保護者	教諭	計	県教委
25年度	269	298	64	631	
24年度	269	277	70	616	
23年度	258	272	61	591	291
22年度	351	337	61	749	312
21年度	285	256	80	621	283
20年度	268	223	65	556	254

5. 留学生受け入れ状況

本校では、諸外国との相互理解と友好の増進に寄与するため、平成3年度から外国人留学生を受け入れ、今年度までに延べ64名に達している。今後も国際協力のため積極的に受け入れを続けたい。また、他の学生にとっても学校・クラス内に留学生と日常的に接することは、国際社会の一員であることの理解や、国際感覚を身に付けたグローバル人材育成の観点からも有益と考えられる。

平成25年度の留学生の在籍状況は下表のとおりである。

学年・学科等		国名			合計
		マレーシア	モンゴル	インドネシア	
3年	機械工学科	1			1
	物質工学科			1	1
	小計	1		1	2
4年	機械工学科	1			1
	環境都市工学科		1		1
	小計	1	1		2
5年	機械工学科	1			1
	物質工学科		1		1
	小計	1	1		2
合計		3	2	1	6

6. 在校生の状況

平成25年度の在籍状況は以下のとおりである。(平成26年2月1日現在)

<本科>

学 科	定 員		現 員					
	学級	学科	1年	2年	3年	4年	5年	合 計
機械工学科	40	200	41 (2)	39 (2)	43 (1)	39 (1)	35 (0)	197 (6)
電気電子工学科	40	200	40 (2)	38 (3)	43 (5)	40 (2)	41 (3)	202 (15)
電子情報工学科	40	200	40 (8)	39 (7)	41 (5)	41 (5)	30 (4)	191 (29)
物質工学科	40	200	40 (26)	44 (17)	40 (20)	39 (11)	35 (12)	198 (86)
環境都市工学科	40	200	41 (11)	39 (15)	46 (13)	32 (8)	37 (9)	195 (56)
合 計	200	1,000	202 (49)	199 (44)	213 (44)	191 (27)	178 (28)	983 (192)

() 内は女子で内数

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	合計
1年クラス別	40 (11)	40 (10)	40 (10)	40 (11)	42 (7)	202 (49)

<専攻科>

専 攻	1 年	2 年	合 計
生産システム工学専攻	13 (1)	14 (0)	27 (1)
環境システム工学専攻	7 (1)	11 (5)	18 (6)
合 計	20 (2)	25 (5)	45 (7)

() 内は女子で内数

平成25年度入学者選抜試験中学校別合格者数及び志願者数等一覧

中学校名	推薦選抜合格者						学力選抜合格者						合格者計						志願者合計					
	M	E	EI	C	B	計	M	E	EI	C	B	計	M	E	EI	C	B	計	M	E	EI	C	B	計
福井市明倫中学校			1		1	2			3		2	5			4		3	7		1	4		5	10
福井市光陽中学校									2			2				2		2				2		2
福井市明道中学校								1	1		1	3		1	1		1	3		2	1		2	5
福井市進明中学校	1					1	1	1	1	1		4	2	1	1	1		5	3	3	1	2		9
福井市成和中学校					1	1				1	1	2				1	2	3				1	3	4
福井市安居中学校				1		1										1		1				1		1
福井市至民中学校					1	1											1	1					1	1
福井市灯明寺中学校			1	1		2			1		1				1	2		3			1	3		4
福井市藤島中学校																					1			1
福井市大東中学校			1			1		1		1	2		1	1		1	3		1	2	1	1	5	
福井市足羽中学校			1			1		1		2	1	4		1	1	2	1	5		2	2	3		7
福井市川西中学校																					1			1
福井市森田中学校																							1	1
福井市社中学校	1					1					1	1	1			1	2	4				1	1	6
福井市足羽第一中学校			1		1	2	1	1			1	3	1	1	1		2	5	1	1	1		2	5
福井市越廼中学校							1					1	1					1			1			1
福井市清水中学校										1		1				1		1	1		1	1	1	4
永平寺町松岡中学校	1					1		1				1	1	1			2	1	3					4
永平寺町永平寺中学校			1			1			1		1	2			2		1	3			3			3
大野市開成中学校			1	1	1	3			1		1			1	2	1	4			1	2	1	4	
大野市陽明中学校	1	1			1	3				1	1	1	1	1		2	4	2	3		1	3	9	
大野市上庄中学校		2				2			1		1		2	1			3		2	1			3	
大野市和泉中学校									1		1			1			1			1			1	
勝山市勝山南部中学校	1					1							1				1	1						1
勝山市勝山中部中学校			1	1		2		2	1		1	4		2	2	1	1	6		2	2	1	1	6
勝山市勝山北部中学校		1				1								1				1		1			1	2
あわら市芦原中学校								1				1		1			1		1					1
あわら市金津中学校			1			1		1				1		1	1		2		1	3				4
坂井市三国中学校	1	1				2				2	2	4	1	1		2	2	6	1	2	1	3		7
坂井市丸岡中学校			1	1	1	3	1	1			2	4	1	1	1	1	3	7	2	1	3	3	2	11
坂井市丸岡南中学校	1			1		2							1				2	1				1		2

坂井市春江中学校		1		1		2	1		1	1		3	1	1	1	2		5	1	1	2	2		6
坂井市坂井中学校				1		1	1			1		2	1			1	1	3			1	1	1	3
鯖江市鯖江中学校				2		2	6		1	1		8	6		1	3		10	6	1	5	5	3	20
鯖江市中央中学校	1	1	1			3	1		1	1		3	2	1	2	1		6	4	2	4	2		12
鯖江市東陽中学校			2		1	3	2	1				3	2	1	2		1	6	2	1	3		1	7
越前市武生第一中学校			2		2		2	1		2		5		2	1	2	2	7	2	7	3	5	4	21
越前市武生第二中学校		3	1	1	2	7	1		1			2	1	3	2	1	2	9		4	3	1	2	10
越前市武生第三中学校		1	1			2			1	1	2	4		1	2	1	2	6	1	1	6	1	1	10
越前市万葉中学校	2	1		1	1	5	1	2	2		1	6	3	3	2	1	2	11	4	3	2	1	3	13
越前市武生第五中学校																				1				1
越前市南越中学校		1		2		3				1	1	2		1		3	1	5	2	1		3	2	8
南越前町立今庄中学校								2	1	1		4		2	1	1		4		2	2	1	1	6
南越前町立河野中学校	1					1							1					1	2	1				3
越前町立朝日中学校									1		1	2				1		1	2		3	3		6
越前町立宮崎中学校	1					1							1					1	2				2	4
越前町立越前中学校	1					1							1					1	1					1
越前町立織田中学校		1				1				1	1	2		1		1	1	3		1	1	2		4
敦賀市立気比中学校	1		1		1	3	1					1	2		1		1	4	2		1		1	4
敦賀市立松陵中学校	2					2	2	1	1			4	4	1	1			6	3	2	2			7
敦賀市立角鹿中学校																					1			1
敦賀市立栗野中学校		3		1	2	6	1	1		1	1	4	1	4		2	3	10	1	5	1	3	2	12
福井工業大学附属 福井中学校									1			1			1			1			1			1
大津市仰木中学校																							1	1
彦根市立東中学校										1		1				1		1				1		1
彦根市立南中学校			1			1									1			1	1		1			2
彦根市立稲枝中学校								1				1		1				1		1				1
長浜市立西中学校									1			1			1			1			1			1
長浜市立北中学校																							1	1
長浜市立虎姫中学校																							1	1
長浜市立西浅井中学校	1					1						1						1	1					1
近江八幡市立 八幡東中学校																						1		1
東近江市立船岡中学校																							1	1
東近江市立湖東中学校					1	1											1	1					1	1
守山市立守山北中学校																			1		1	1		3
栗東市立栗東西中学校										1		1				1		1				1		1

○ 学生指導関係

1. 基本方針

本校の教育の目的は、個性を尊重しつつ社会にも通用する知育・徳育・体育のバランスのとれた人間になることを学生に教授することにある。この目的を達成するための本校の学生指導に関する基本方針は

- ① 毎日、規則正しい生活を送ること
- ② よき学生としてのマナー（社会規範）を身に付けること
- ③ 自ら考え、自ら進んで学ぶ姿勢を示し、真摯な態度で学業に取り組むこと
- ④ 文化・芸術・スポーツに親しみ教養を高めること
- ⑤ 自身の将来像を描き、その実現のために計画的に実行すること

の5つである。これは本校開学以来の学生への指導方針を明文化したものであり、平成23年5月に全教職員、学生に周知した。この基本方針に沿って本校の学生指導は行われている。

2. 学生支援

本校の教育の目的を達成するため、本科5年間において担任制度を設けている。担任制度は本校の教育システム・学生指導の根幹である。本科の5年間は15歳から20歳までの幅広い年齢の若者が対象となるが、本校では入学時から学生と呼び、例え1年生の学生であっても自立した責任ある行動をとるよう指導している。入学時から卒業に至るまで担任によるきめ細やかな5年間の一貫した教育・指導を行い、学生に社会的責任を自覚させ、社会に通用する人間を育てる努力をしている。この担任による指導体制が、本校卒業生が社会から評価を受け、高い求人倍率を誇っている大きな理由の一つであり、今後も継続し充実させていくことが大切であると考えます。

担任の業務は多岐にわたり、例えば、学生生活全般の指導（友人関係、生活・行動の把握（欠課、欠席の点検）、各種届け出の指導等）、学業成績・悩み・進路等についての個別相談、さらに学年に応じた学校行事の指導・企画・引率等がある。また、全学年で保護者懇談会を実施しており、家庭との連携を密に図ることも担任の重要な業務の一つである。クラス担任は、1、2年を一般科目教室教員、3～5年を各専門学科の教員が担当し、担任補佐（3年は一般科目教室教員）がそれを支援する。担任は進路指導室と連携しながらキャリア教育を行っており、各学年の横の連携を強くするために学年主任を進路指導室の中に置いている。

担任のスキルアップを図るため、平成25年度教員研修（クラス経営・生活指導研修会）に2名の教員が参加、平成25年度東海・北陸地区高等専門学校学生指導力向上研修会（クラス経営・担任指導関係、メンタルヘルス関係、キャリア教育関係）には研修教員として5名、アドバイザーとして2名の教員が参加した。また、学生たちの

学生生活を充実させるために表1に示すような多様な講演会を各学年で行った。

学年	講演の内容など	日 程
1年生	新入生オリエンテーション(高専の学生としての心構え、学校生活の過ごし方、勉強の仕方、服育の講演)	4月16日, 17日
	性教育に関する講演会	12月18日
2年生	煙草の害について	7月3日
	「服育」講演会	10月9日
3年生	交通講話	7月10日
	「服育」講演会	11月27日
4年生	薬物乱用防止に関する講演会	5月20日
5年生	税と社会保障	11月29日

表1 学生を対象とした講演会

次に、多感な青年期にあたる学生の人格形成に大きな影響を与えるものが課外活動である。本校の教育方針の中では「健康の増進に努め、身体的・精神的に強じんな耐久力を育成する」とうたっており、将来技術者として健康的に活動し、また協調性やコミュニケーション能力を習得するためにも課外活動は重要な位置を占めるものと考えられる。元来、高専制度には、5年間じっくりと課外活動に打ち込めるという利点があり、これを生かして本校では体育系・文化系(ものづくり系も含む)の多数のクラブが活動している。また、課外活動の安全管理の一環として、クラブ活動の安全管理を主とした指導マニュアルを作成し、さらに今年度も学生と教職員を対象に救命救急法講習会を実施した。

次に、本校には学生全員によって構成される学生会があり、学生会役員が中心となり、体育祭、高専祭、弁論大会、球技大会、壮行会、クラブ紹介等の学校行事やクリーン大作戦、献血等のボランティア活動などを自主的に企画・運営している。ここでは学生会役員会及びクラブ予算の決定を行う学生総会等が運営機関として設けられ、広報活動として今年度より昼休み時における月2回の学生会からの放送、また学生会誌「青塔」の発行を行っている。学生会の活動に参加することにより、協調性、自主性、リーダーシップや企画力などが育成されることから、クラブ活動と同様に学生会活動も継続して支援していく必要がある。

さらに、本校では、実際に体を動かして経験の中から生きた知識を習得する「体験型ものづくり教育」を推進し、これらに関連するコンテストへの参加を積極的に奨励している。全高専が参加し、全国大会が催されるロボットコンテスト(ロボコン)、プログラミングコンテスト(プロコン)、デザインコンペティション(デザコン)の他多くのコンテストに今年度も参加した。例をあげると、第6回東海北陸地区高等専門

学校英語スピーチコンテスト（沼津高専主管）、第7回八光熱の実験コンテスト（株式会社八光電機主催）、パソコン甲子園（会津大学主管）、本田宗一郎杯Hondaエコマイレージチャレンジ2013全国大会、第9回全日本学生室内飛行ロボットコンテスト、第3回小水力発電アイデアコンテスト（株式会社デンソー主催）、ロボカップジュニア石川ブロック大会2014などに参加をした。

さらに、今年度より福井高専キャンパスプロジェクトを実施した。これは、学生のものでづくりの意識を高めるとともに学生自らが作り、それを自ら利用することで生活しやすい福井高専キャンパスにしていこうと始められたものである。今年度は6件のプロジェクトの応募があった。

ボランティア活動に関しても、学生会が主体となったクリーン大作戦、その他保育ボランティアを実施した。さらに高専祭の企画の一つとして地域住民も参加した水防訓練（土嚢積みコンテスト）を行い、防災のあり方を通して学生と地域住民との交流が図られた。さらに、鯖江市からの要請で屋根雪下ろしボランティアの募集を案内し、3名の学生が登録した。また、出前授業や公開講座などでも講師補助として学生たちが積極的に参加している。本年度は、12回の出前授業に述べ31名の学生がスタッフとして支援し、述べ839名の小中学生とその保護者との交流をした。また、公開講座も20講座に述べ60名の学生がスタッフとして支援し、306名の小中学生とその保護者と交流した。

本年度、学外の方たちと学生との交流について、上述の事項に加え、「地域の匠を活用した科学クラブの共同教育」により、7つの部活動の学生が、10名の地域企業の方の指導を受け、それぞれの活動（ロボットコンテスト、プログラミングコンテスト、デザインコンペティション、出前授業など）に生かす試みがなされた。また、中部日本海5高専共同PRサイトの学生編集委員会が石川で開催され、舞鶴、石川、富山、長岡の各高専の学生および教職員（本校学生1名、教職員1名）が参加した。

平成25年度アクションプランに則り、メンタルヘルス関連への対応強化として、全教職員対象のメンタルヘルス・関連FDを実施した。特に今年度は、全クラスにQ-Uテストを行い、そのためにQ-Uテスト研修会を全教職員向けに開催した。さらに、精神科医との業務委託契約を行い、奇数月の第1水曜日に専門の医師が来校する体制を整えた。また、いじめ、体罰防止への取組みについて、実態把握のための調査を定期的実施し、防止のために検討を開始している。

学生たちの健康を守り、学習機会を保障するために、平成20年度より麻疹の対策及び調査を実施している。その結果、現在組織としての麻疹耐性率(十分量の抗体を持つか、あるいはワクチンを接種したもの)が学生・教職員を含めた学校組織として95%を超え、疫学的に麻疹の連鎖感染リスクを払拭できたことは大きいと考えられる。また、教職員に対してはインフルエンザの予防接種を推奨し、感染リスクの低減の努力を行っている。

以上のように、本校では、担任制度の充実を図り、クラブ活動・学生会活動・ものづくり関連コンテスト等の課外活動を奨励し、健康管理・安全管理及びメンタルヘルス関連の対応強化やボランティア活動への取り組みなどを通して、5年一貫教育の利点を生かした人格形成の人間教育を実践していると自負する。

3. 学生の主な活動状況

- (1) 新入生歓迎会・クラブ紹介 平成25年4月15日(月)
- (2) 新入生オリエンテーション合宿
平成25年4月16日(火)・17日(水) 奥越高原青少年自然の家で実施
メンタルヘルスの話、インターネットの講演、教務関係の話、服育の講演
クラスミーティング、学校生活の話
- (3) 学生総会 平成25年4月18日(木)、5月22日(水)
- (4) 第49回体育祭 平成25年5月2日(木)
- (5) 舞鶴高専交歓試合
平成25年5月19日(日) 福井高専・舞鶴高専で開催
- (6) 校長講話 平成25年5月22日(水)
- (7) 平成25年度福井県高等学校春季総合体育大会
平成25年5月31日(金)～6月2日(日) 県内各地で開催
陸上、男子バスケットボール、男女バレーボール、男女卓球、サッカー
水泳、男女剣道、男子テニス、軟式野球、男子ソフトテニス、ハンドボール
ソフトボールが参加
成績 団体 女子卓球4位
個人 水泳(女子200m自由形2位、女子200m個人メドレー3位)
- (8) 平成25年度北信越高等学校体育大会兼第53回北信越高等学校対抗卓球選手権大会
平成25年6月14日(金)～6月16日(日) 新潟県新潟市で開催
個人シングルスで2名出場、成績 1名がベスト8
- (9) 第48回北陸地区高等専門学校体育大会壮行会 平成25年6月26日(水)
- (10) 第48回北陸地区高等専門学校体育大会 富山高専射水キャンパスが担当で開催
平成25年6月30日(土) ラグビー、野球
平成25年7月6日(土)・7月7日(日) 本大会
成績 総合第2位(男子総合第3位、女子総合第2位)
団体 女子卓球が優勝
個人 陸上(男子5000m)、水泳(男子50m自由形、女子100m自由形)、
卓球(女子シングルス、女子ダブルス)、女子剣道(個人)が優勝

- (11)第46回全国高等専門学校サッカー選手権北信越大会
平成25年7月6日(土)・7日(日) 福井高専が担当で開催
成績 準優勝
- (12)第65回中部日本卓球選手権大会
平成25年7月13日(金)～7月15日(日) 富山県富山市で開催
個人シングルスで2名出場
- (13)第46回北信越高等学校選手権水泳競技大会兼第81回日本高等学校選手権水泳競技大会予選会
平成25年7月19日(金)～21日(日) 石川県小松市で開催
- (14)第37回文部科学大臣杯 全国高校囲碁選手権大会 全国大会
平成25年7月23日(火)～25日(木) 東京都で開催
- (15)救急救命法の講習会
平成25年8月1日(木) 鯖江・丹生消防組合署員2名による講演及び実習
体育系クラブ学生29名、教職員8名参加
- (16)第37回全国高等学校総合文化祭(囲碁部門)(吟詠剣詩舞部門)
平成25年8月3日(土)・4日(日)
第37回全国高等学校総合文化祭長崎県実行委員会が主催
- (17)第58回全国高等学校軟式野球選手権北信越大会
平成25年8月3日(土)～5日(月) 新潟県新潟市で開催
- (18)第48回全国高等専門学校体育大会
卓球 平成25年8月16日(金)・17日(土) 一関高専が担当で開催
成績 女子シングルス 優勝、女子ダブルス 準優勝
陸上競技 平成25年8月18日(土) 福島高専が担当で開催
サッカー 平成25年8月17日(土)～20日(火) 仙台高専が担当で開催
剣道 平成25年8月18日(日) 鶴岡高専が担当で開催
水泳 平成25年9月1日(日) 秋田高専が担当で開催
- (19)第20回全国高等専門学校将棋大会
平成25年8月21日(水)～23日(金) 米子高専が担当で開催
- (20)保育ボランティア
平成25年9月9日(月) 鯖江市神明保育所 学生11名が参加
- (21)本田宗一郎杯Hondaエコマイレッジチャレンジ2013全国大会
平成25年10月5日(土)～6日(日) 栃木県で開催
- (22)第9回全日本学生室内飛行ロボットコンテスト
平成25年10月12日(土)～13日(日) 東京都で開催
- (23)全国高等専門学校第24回プログラミングコンテスト全国大会
平成25年10月13日(日)・14日(月) 旭川高専が担当で開催

- (24) アイデア対決・全国高等専門学校ロボットコンテスト2013 東海・北陸地区大会
 平成25年10月20日(日) 鈴鹿高専が担当で開催
 競技課題は「Shall We Jump?」
 本校Aチーム「メルポスちゃん」
 本校Bチーム「チャンピオンシープ」
- (25) 第9回クリーン大作戦
 平成25年10月23日(水)
 高専～JR鯖江駅までの3コースと校内の清掃奉仕活動
- (26) 平成25年度弁論大会
 平成25年10月24日(木)
 6テーマ(内1テーマはエキシビジョンマッチ)で実施
- (27) 第49回高専祭
 平成25年10月25日(金)～27日(日)
 テーマ「創一ひとつ上への挑戦」
 ライブコンサート、球技大会、吹奏楽コンサート、水防訓練、合気道演武会
 少林寺拳法演武会、アマバンライブ、ビンゴ大会、献血、露店 他
 水防訓練(平成25年10月26日(土)) 本校
 地域住民40名、本校学生26名、本校教職員4名が参加。
- (28) 平成25年度球技大会
 平成25年10月24日(木)、25日(金)
- (29) 中部日本海5高専共同PRサイトの学生編集委員会 石川高専が担当で開催
 平成25年10月26日(土)・27日(日)
 舞鶴、石川、富山、長岡の各高専の学生、教職員、本校学生1名、教職員1名
 が参加
- (30) 全国高等専門学校デザインコンペティション2013 in 米子
 平成25年11月9日(土)・10日(日) 米子高専が担当で開催
- (31) 第7回東海北陸地区高等専門学校英語スピーチコンテスト
 平成25年11月9日(土) 沼津高専が担当で開催
- (32) パソコン甲子園2013
 平成25年11月9日(土)・10日(日)
- (33) 第33回近畿高等学校総合文化祭三重大会(囲碁部門)
 平成25年11月9日(土)・10日(日)
 第33回近畿高等学校総合文化祭実行委員会が主催
- (34) 第33回近畿高等学校総合文化祭三重大会(吟詠剣詩舞部門)
 平成25年11月17日(日)
 第33回近畿高等学校総合文化祭実行委員会が主催

- (35) 第33回近畿高等学校総合文化祭三重大会（将棋部門）
 平成25年11月16日（土）・17日（日）
 第33回近畿高等学校総合文化祭実行委員会が主催
 成績 B級準優勝
- (36) 平成25年度福井高専キャンパスプロジェクト報告会
 平成25年12月13日（金）
 6つのプロジェクトについてポスター形式で報告
- (37) 第29回北信越高等学校囲碁選手権大会兼第8回全国高校囲碁選抜大会北信越地区予選
 北信越高等学校文化連盟囲碁専門部が主催
 平成25年12月14日（土）・15日（日）
- (38) 大感謝祭 平成25年12月18日（水）
- (39) ロボカップジュニア石川ブロック大会2014
 平成26年1月13日（月） 石川県金沢市で開催
 成績 優勝
- (40) 校長表彰、校長講話、学生総会 平成26年1月23日（木）開催
- (41) ロボカップジュニア日本大会2014
 平成26年3月21日（金）～23日（日） 埼玉大学で開催
- (42) 第3回小水力発電アイデアコンテスト
 平成26年3月22日（土）・23日（日） 福井県鯖江市で開催
- (43) 第17回全国高等学校少林寺拳法選抜大会
 平成26年3月22日（土）・23日（日） 香川県丸亀市で開催
- (44) 学生会誌「青塔」発行 平成26年3月
- (45) 外部資格取得状況（平成24年度の主なもの）について
- ・英語検定準2級：1名、
 - ・工業英語検定3級：3名、
 - ・CAD利用技術者試験2級：20名、
 - ・機械設計技術者試験3級：14名、
 - ・基本情報技術者試験：3名、
 - ・J A V Aプログラミング能力認定試験：1名、
 - ・第三種電気主任技術者：2名、
 - ・X線作業主任者：6名、
 - ・危険物取扱者乙種全類：9名、
 - ・技術士第1次試験（建設部門）：2名、
 - ・測量士補：7名、
 - ・コンクリート検定（中級）：6名、
 - ・コンクリート検定（初級）：16名

4. 奨学金受給状況・授業料免除実施状況一覧（平成25年度）

日本学生支援機構奨学生

（平成25年5月1日現在）

日本学生支援機構	本 科(人)					専攻科(人)		合 計(人)
	1年	2年	3年	4年	5年	1年	2年	
対 象 者	4	10	14	9	20	3	3	63

その他奨学生

（平成25年5月1日現在）

種 類	貸与月額	本 科(人)					専攻科(人)		合 計(人)	
		1年	2年	3年	4年	5年	1年	2年		
福井県	自宅通学	18,000円			1	1	2			4
	自宅外通学	23,000円	1	1						2
越前市	1～3年生	9,000円	1	1						2
	4～5年生	20,000円								0
あしなが育英会		25,000円	1		2					3
樫の芽会		40,000円					1			1
古岡奨学会		14,000円	1	1						2
合 計			4	3	3	1	3	0	0	14

入学科免除実施状況

区 分	免除対象額	申請(人)	許可(人)
免除対象者	84,600円	1	1

入学科徴収猶予実施状況

区 分	猶予対象額	申請(人)	許可(人)
徴収猶予対象者	84,600円	3	2

授業料免除実施状況

区 分	免除対象額	前期分(人)	後期分(人)
全額免除対象者	117,300円	24	18
半額免除対象者	58,650円	5	5
不許可者	—	8	8
卓越学生対象者	117,300円		2

奨学金、授業料免除関係の学生への情報提供は、主として学内の「掲示板」に掲示することで行っている。

5. 点検・評価

- (1) 今年度は10種類のコンテストに出場し、そのうちロボカップジュニアの大会では日本大会に駒を進めることができた。北陸地区高専体育大会では21種目の団体競技に出場し、1種目で優勝し、総合成績2位の成績であった。全国高専体育大会では卓球の女子シングルスが優勝、女子ダブルスが準優勝であった。さらに、学生の表彰について見直し、規程を整備し、在校生の前で、学生表彰を行った。体育会系の部活動を支援するための救急救命法の講習会への参加者数を表2に示す。以上のことより、達成度評価はAと判断する。

年 度	H 2 1	H 2 2	H 2 3	H 2 4	H 2 5
人 数	2 6	1 8	3 7	3 9	2 9

表2 救急救命法の講習会参加学生数（5年間）

- (2) ボランティア活動として、クリーン大作戦、保育ボランティアを実施した。クリーン大作戦に関しては参加した89%の学生が満足をしている。また、鯖江市からの要請で屋根雪下ろしボランティアの募集を案内した。さらに、出前授業、公開講座の講師補助としても学生は学外の人たちと積極的に関わった。さらに、今年度は、水防訓練（土嚢積みコンテスト）を行い、地域の方と防災を通して積極的な交流を行った。この企画は本校独自のものである。また、他高専の学生、企業の方たちとの交流も行っている。学外の人たちとの交流が大変盛んに行われており、達成度評価はSと判断する。
- (3) 担任のスキルアップのための研修会に教員を派遣した。また、表1に示したとおり、学生の学生生活をサポートするために各学年に対して講演会を開催した。特に、「服育」の講演会に関しては、1年生から3年生まで学年に応じた内容を目指しており、本校独自の取り組みである。Q-Uテスト研修会を開き、教職員のスキルアップを試みた。以上のように教員の学生指導力を向上させ、学生生活をサポートする企画を実行できたため、達成度評価はAと判断する。
- なお、「学生相談室」の部分の評価は、「学生相談室・保健室関係」の章を参照されたい。
- (4) 日本学生支援機構奨学生は63名、その他奨学生は14名である。また、入学料免除許可者は1名、入学料徴収猶予許可者は2名、授業料免除対象者は、全額免除のべ42名、半額免除のべ10名、卓越した学生全額免除は2名であった。当初の計画どおり実施することができたため、達成度評価はAと判断する。
- (5) 東日本大震災において被災した学生が在学した場合、授業料免除等の経済的支援の情報及び民間団体による各種奨学金の情報を提供する計画であったが、平成24年4月現在、本校には東日本大震災において被災した学生が在学していない。したがって、制度設計は行われているため、達成度評価はAと判断する。

6. 改善課題・方策

- (1) 各種コンテストや体育大会に関して積極的な参加を促すことができたため、達成度評価をAとした。しかし、その成績を見ると（「3. 学生の主な活動状況」参考）各部活動が全て活発に活動しているわけではないことが読み取れる。来年度より、学生表彰の規定が本格運用されるので、これによる部活動の活性化を促したい。また、部活動活性化のワーキンググループの活動により具体的にどのような環境を整えていくかを議論する。
- (2) 福井高専キャンパスプロジェクトを継続実施することで、学生のものづくりへの興味を引き出し、学生全体の活動の活性化につなげたい。
- (3) 学生のボランティア活動などの社会奉仕体験活動については、来年度もこれらの地道な活動を継続する。
- (4) 学生のメンタルヘルス等にかかわる教職員のスキルアップのため、来年度以降も継続的にメンタルヘルス関係の研修会などに、積極的に参加することを進めていくことが大切であると考える。
- (5) 東日本大震災において被災した学生が在学することとなった場合には、授業料免除や奨学金などの情報をしっかりと伝達したいと考える。

○ 学寮関係

1. 基本方針

学寮は遠隔地からの入学生に修学の便を与えると同時に、共同生活を通してお互いに敬愛啓発し、人間形成を図るという目的で設置されている。そのために、施設、設備の充実と安全・安心な寮生活の維持には特に力を入れており、生活指導の面では原則全教員が交替で寮監として当直し、寮生と直に触れ合うことにより教育目標を果たすよう努めている。

2. 寮生の受け入れ状況

学寮は「青武寮」と称し、収容定員は245名である。東寮・西寮・南寮・北寮の4棟に分かれており、北寮は女子留学生の受け入れも可能な設備を整え女子寮として改修されている。平成25年度の在籍は以下のとおりである。

平成25年度在籍寮生数

平成25年12月1日現在

学年 学科	1年	2年	3年	4年	5年	合計
機械工学科	9	14 (1)	12	8 (1)	9	52 (2)
電気電子工学科	11 (1)	11	9 (2)	6 (1)	10 (2)	47 (6)
電子情報工学科	11 (1)	11 (2)	8 (2)	4	5 (1)	39 (6)
物質工学科	12 (6)	6 (2)	13 (7)	5 (2)	8 (3)	44 (20)
環境都市工学科	12 (4)	9 (4)	11 (2)	5 (1)	7	44 (11)
合計	55 (12)	51 (9)	53 (13)	28 (5)	39 (6)	226 (45)

()は女子で内数

留学生は、3年生2名、4年生2名、5年生2名

3. 活動状況

学生寮の管理運営は、寮生の安心・安全の確保を的確に図るべく寮関係教職員(寮務主事団、学寮事務室)と日々の寮監とが緊密に連携を取りながら行なっている。学寮全体の施設・設備面での改善については、毎年優先順位を検討し実施している。

寮生活の充実、寮生間の交流と親睦の促進のため、寮生会を組織しその自主的な運営と活動の支援を積極的行なっている。寮生会活動としては寮祭や新入寮生歓迎会、5年生を送る会など多くの寮内行事を企画し活発に実行している。

国際化を視野に3年次からの外国人留学生の受け入れを毎年行なっている。また、平成23年度からは短期の外国人留学生の受け入れも実施している。受け入れた際に

は、歓迎会なども開催し短期留学生と他の寮生との交流の促進を図っている。

中学生やその保護者に対するオープンキャンパスなどの学寮案内を通して積極的に施設等の公開をしている。

4. 点検・評価

- (1) 寮監と関係教職員との連携は、寮監日誌での情報交換と寮生の点呼簿の引き継ぎを通して平成25年度も適切に行われている。平日の寮監開始時には口頭での必要事項の連絡を行っており、達成度評価はAと判断する。
- (2) 寮生の安全確保のため、平成25年度は防災訓練の際、寮生防災組織の確認と屋内消火栓による放水訓練を5年生中心に行った。今年度も、防災食(保存食と水)の配布などの取り組みも行なっており、達成度評価はAと判断する。
- (3) 東寮に設置しているAEDの使用法の研修をかねて救急救命講習会を12月に開催した。教職員10名、学生31名の参加があった。昨年に引き続き計画的に実施することができたのが、2年目であることを踏まえて、達成度評価はAと判断する。
- (4) 施設の改修等では、当初の限られた予算の範囲内で工夫し、以下のとおり改善を図った。今年度はエアコン設置関係の後処理として各居室の熱交換器(コンベクター)の撤去に予算の大半を使用した。また、カードキーシステムはまだ導入に至っていないため、達成度評価はBと判断する。

(平成25度の改善箇所等)

学寮居室暖房機器撤去等工事

寮生用パソコン・プリンター更新

学寮食堂厨房機器(パンラック)更新(学寮食堂厨房設備)

学寮ゴミステーション(可燃物ゴミは除く)新設

学寮焼きいも器(寮祭等で使用)導入

南寮外壁雨漏り補修工事

防災食(保存食・保存水)補充整備

音響設備(寮生会行事、寮祭で使用)整備

北(女子)寮居室(214~219号室)床カーペット敷工事

- (5) 寮生会指導に関しては、役員会を中心に、新入生歓迎会、寮祭、5年生を送る会、寮生会誌の発行等を実行することができた。また、役員会との懇談会も4月と9月に開催した。よって、達成度評価はAと判断する。
- (6) 寮生指導に関しては、生活面・行動面で日常的な個別指導と寮生全体への指導と支援を主事団で分担して今年度も実施してきた。寮生全体への生活指導のための寮生総会を前期・後期に各1回開催した。区長への指導については適宜行なってきた。また、6

月にメンタルヘルスへの理解を目的とした講習会を高学年と低学年にそれぞれ1回ずつ実施した。

寮生アンケートを実施して、寮生活の満足度と実態調査を昨年度に引き続き行った。結果はおおむね満足していることが読み取れた。学寮生の実態調査を毎年行なうようになって4年目であり、今後の継続した実態の把握と調査が必要である。今年度は5年生が主体となった就職・進学セミナーを開催し、低学年にアドバイスをを行う機会を持った。また、新設されたキャンパスプロジェクトに寮生活の改善を目指す企画を提案し積極的に参加した。よって、達成度評価はAと判断する。

- (7) 平成25年度からエアコンの実際の利用が始まった。健康面と節電等に関し寮生への利用についての指針(利用時間制限と温度設定)を寮生総会で示した。また、エアコンの管理運営を目的とする寮生保護者会との連携をとりその総会を7月に開催した。よって、達成度評価はAと判断する。

5. 改善課題・方策

- (1) 寮生アンケートの結果から、おおむね寮生活には満足しているが、ア) 男子浴室が狭い点、イ) 西寮の1年生の学習時間の確保等に課題があることが読み取れる。男子浴室に関しては、予算措置が必要なためすぐに改善することは難しい。1年生の学習時間に関しては、生活指導の中でも強調し学習習慣の定着のための努力を行なう。また、上級生の支援等を得ての学習指導を平成24年度試行し今年度も後期に1週間実施したが、この継続と実施時期や方法などの検討を図る。
- (2) 安全な寮生活のための確保のための課題として、ア) 男子寮へのカードキーシステムの導入、イ) 寮生の自主防災組織の毎年の確認、ウ) 定期的な防災訓練とAED等の講習会の実施があげられる。アについては、男子寮全体の管理システムの再検討が同時に必要となる。
- (3) 寮生会への指導と寮生指導の課題として、平成24年度から寮生会役員を5年生から4年生へと変更し、寮生会の中心を4年生が担う形になって2年目である。この方式での寮生会活動の活発化のために、寮生会役員への支援と寮生の指導を今年度に引き続き、ア) 寮生会役員会と寮務主事団との懇談会の開催、イ) 寮生総会を前・後期1回以上開催し必要な生活指導を行う、ウ) 区長への支援を行う。

○ 進路指導関係

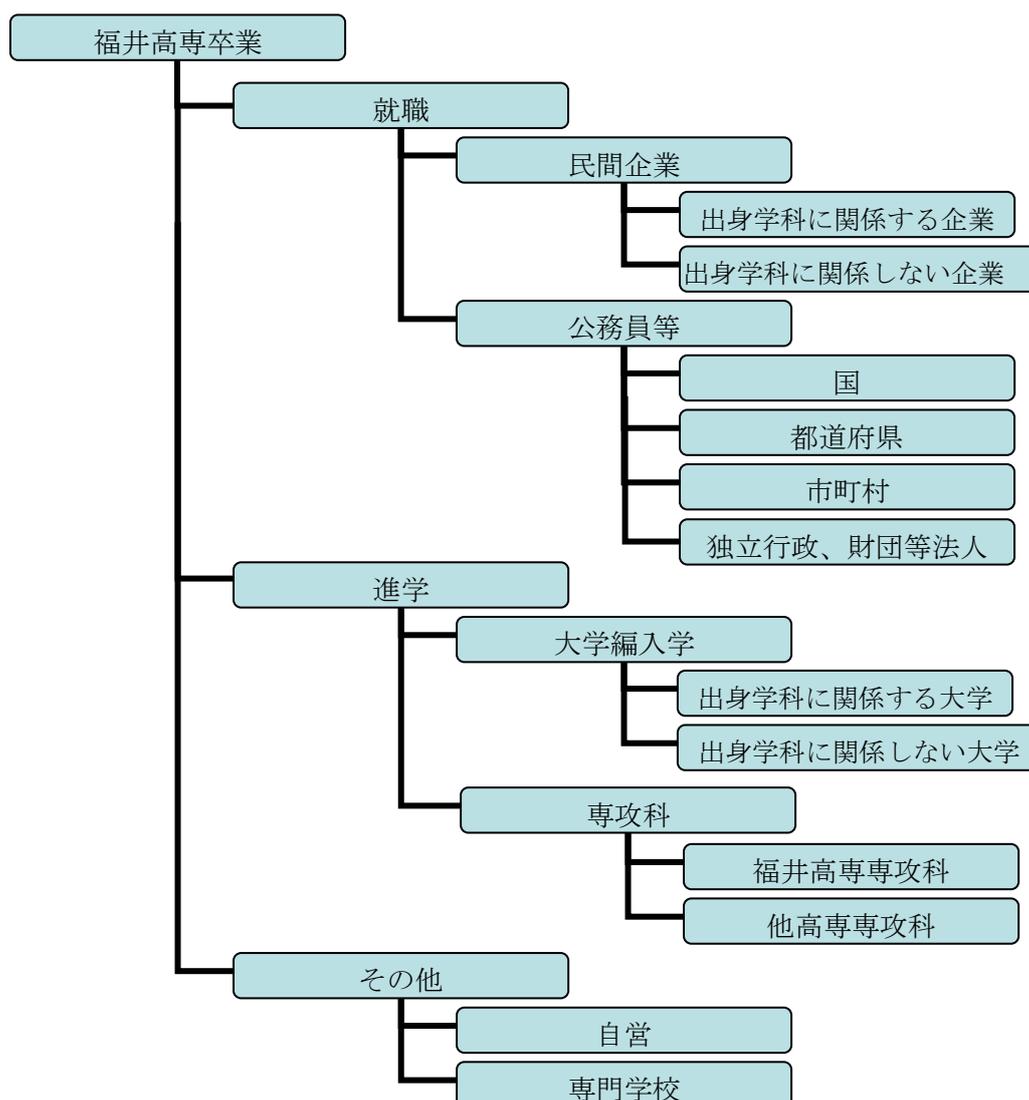
1. 基本方針

高等専門学校は設置以来、卒業生の産業界での活躍もあり、求人倍率が高倍率を続けてきた。また、高学歴社会を望む社会の風潮から大学編入を求める時期もあったが、近年は価値観の多様化によって学生は就職、専攻科進学、大学編入学、専門学校などへと幅広い選択をするようになってきた。本校では、将来技術者として活躍を期待される学生の重要な決定事項である進路について、進路指導委員会と各学科が綿密な連絡をとりながら学生の指導に当たっている。また、キャリア教育にも力を入れ、低学年から「社会において自立できる力の養成」を目標とした方針を立てている。

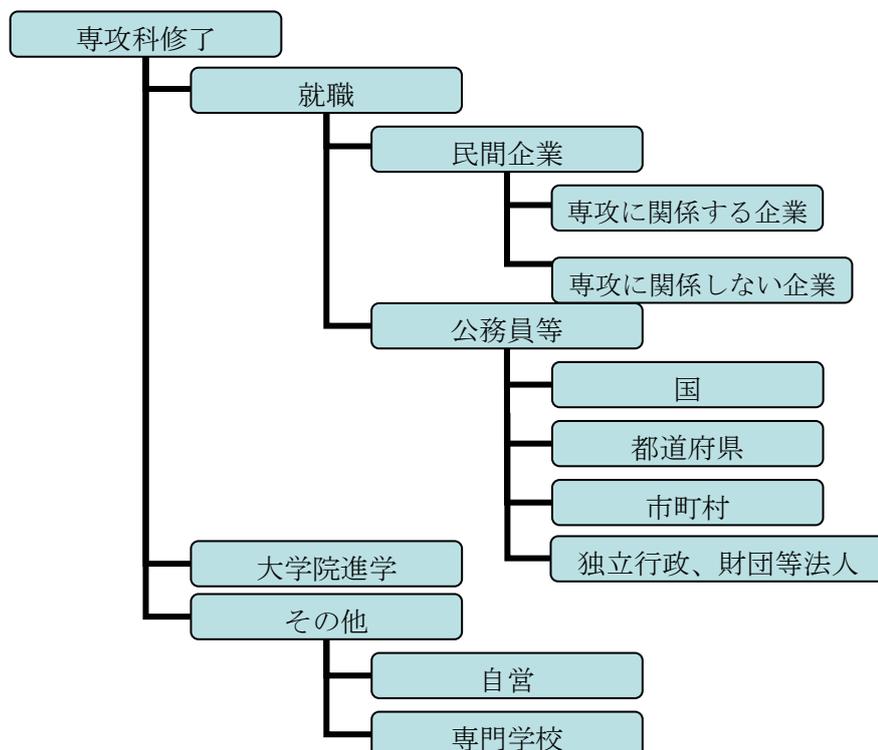
2. 本校卒業後・修了後の進路

本科生及び専攻科生の進路を下図に示す。

(本科生の場合)



(専攻科生の場合)



本科生の場合、平成21年度までは、専攻科の設置や大学の編入生受け入れ数の増加などによって、進学を希望する学生数が増え、ほぼ半数が大学編入学又は専攻科進学という傾向にあった。しかし、他の高等教育機関に比べ、高専卒業生の就職内定率がこの不況にもかかわらず好調な理由（平成25年度、就職を希望する学生に対する求人倍率は、本科については約2.5倍、専攻科については約4.3倍）により、徐々に就職希望者が増え、平成24年度には就職する学生の割合が6.2%に増加した。一方、進学者が相対的に減少し、特に専攻科希望者の減少が大きかったため、定員確保のため2次募集をする事態になった。平成25年度卒業予定者の場合は、就職希望者が5.7%と数年前よりは多いが昨年度よりは少し減少し、専攻科進学者も説明会などを開催することにより、以前のように一次の段階で定員を超えるようになった。ただし学生への進路希望先の調査では、低学年を含めた全学年で就職希望者の割合が多く、今後もこの傾向は継続すると考えられる。したがって、進学者、特に専攻科希望者を一定割合確保する対策も継続して実施する必要がある。

なお、平成26年1月末現在、本科生に対しての就職希望者の内定率は約9.9%となっており、専攻科に対しては、平成25年9月の時点で就職希望者は既に100%に達している。

3. 進路決定の流れ

就職に関しては、本科4年生、専攻科1年生の3月には全国規模の大手企業の就職活動が始まる。環境系では、公務員試験を受ける学生も多いが、専攻科2年生で受験できる公務員試験は、国家総合職、国家一般職、国家専門職、福井県I種、市町村などである。本科5年生で受験できるものは、国家一般職、国家専門職、福井県II種、市町村などである。また消防官、警察官などの職員採用試験がある他、独立行政法人や財団法人と呼ばれる公務員に準じた進路もある。

進学に関しては、本科では5月頃から推薦選抜による編入学試験が、また6月から学力選抜による編入学試験が始まる。専攻科生に対する大学院の入試は、6月頃から始まる。

以上のような就職・進学について、学生に対してタイムテーブルで示したものが下表である。

	3年												4年												5年											
	3年												専攻科1年												専攻科2年											
	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
卒業までの流れ	工場見学旅行												インターンシップ 実習先決定 校外実習 校外実習報告会												エントリー開始 大手企業試験 就職 中堅企業試験 大学編入学推薦 進学 大学編入学学力 専攻科前期試験 専攻科後期試験 公務員試験 公務員採用試験											
	個人面談 保護者面談 保護者面談												進路の決定時期 個人面談 進路希望調査 保護者面談												公務員試験 公務員採用試験											
修了までの流れ													インターンシップ インターンシップ報告会												大学院入学試験 大学院進学 書類準備 筆記試験 学位授与機構関連											

4. 進学・就職先一覧

(平成24年度)

進学・就職先一覧 (平成25年3月卒業・修了予定者)						平成25年3月31日現在	
機械工学科	電気電子工学科	電子情報工学科	物質工学科	環境都市工学科	専攻科	進学(17名)	進学(16名)
福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	北陸先端科学技術大学院大学	2	2
長岡技術科学大学	長岡技術科学大学	長岡技術科学大学	長岡技術科学大学	長岡技術科学大学	金沢大学大学院	1	1
金沢大学	金沢大学	金沢大学	金沢大学	金沢大学	金沢大学大学院	1	2
福井大学	福井大学	福井大学	福井大学	福井大学	福井大学大学院	1	1
岐阜大学	岐阜大学	岐阜大学	岐阜大学	岐阜大学	名古屋大学大学院	1	1
豊橋技術科学大学	豊橋技術科学大学	豊橋技術科学大学	豊橋技術科学大学	豊橋技術科学大学	豊橋技術科学大学大学院	1	1
三重大学	大阪大学	大阪大学	岡山大学	滋賀県立大学			
	広島大学			天理大学			
就職(22名)	就職(23名)	就職(26名)	就職(26名)	就職(20名)	就職(15名)	(10)	(5)
●県内<4名>	●県内<4名>	●県内<10名>	●県内<10名>	●県内<10名>	●県内<8名>	(6)	(2)
旭アタゴ	熊崎江村田製作所	熊アイジューバ	熊アタゴ	熊大西商事	アポット ジャパン	1	1
熊ゼロ設備事務所	ES	熊ゼロ設備事務所	清川メッキ工業	オカモト精工	アポット ジャパン	2	2
熊エイチアンドエフ	熊ゼロ設備事務所	熊ALL CONNECT	熊サイオーベックス	旭陽産業	福井工業高等専門学校	1	1
信越化学工業熊武生工場	熊サイカイエルコム	熊サイカイエルコム	熊サイカイエルコム	熊グリーンシェルダー	熊松浦機械製作所	1	1
東工シャッター	熊ナチュラスタイル	熊ナチュラスタイル	熊超化学工業	熊江市役所	熊江市役所	1	1
熊福井村田製作所	熊SHINDO	熊SHINDO	熊SHINDO	熊キサンピーシー	熊ALL CONNECT	1	1
	熊本テクニカル	熊本テクニカル	武生特殊鋼材	丹南消防組合	丸一調査設計	1	1
	熊井市役所	熊井市役所	日信化学工業	熊江組			
	(有)やなせ和紙	(有)やなせ和紙	熊西村組	熊西村組			
			熊井組	熊井組			
			熊井組	熊井組			
●県外<16名>	●県外<19名>	●県外<16名>	●県外<16名>	●県外<10名>	●県外<7名>	(4)	(3)
アポットジャパン	アポットジャパン	旭化成	旭化成	NTTインフラネット	井関農機	1	1
京都機械工具	大阪ガス	出光興産神愛知製油所	大阪シーリング印刷	大阪ガス	KBセーレン	1	1
G.T.M Tech	関西電力	関西電力	小野田ケミコ	小野田ケミコ	小島プレス工業	1	1
JXエン지니어リング	キリンビール熊滋工場	キリンビール熊滋工場	KBセーレン	関西食品工業	日本原子力発電	1	1
島津レシジョンテクノロジ	向洋電機	向洋電機	スガイ化学工業	清水建設	熊清池組	1	1
信越化学工業熊江津工場	熊高木製作所	(独法)国立印刷局	第一工業製薬	東芝エレベーター	堀野フイネス	1	1
熊高木製作所	武田薬品工業	熊ZYX	第一三共プロファーマ	西日本旅客鉄道	ヤマナミ	1	1
TOWA	中部電力	セイコーエプソン	ダイキン工業	日本ビクター			
熊西島製作所	東海旅客鉄道	熊SERBAS	大同工業	熊レールテック			
日本車輻製作所	熊日本船機	熊日本船機	大日本インキ化学工業	若築建設			
日本バイリン熊滋工場	財団法人北陸電気保安協会	日新電機	熊東京ゼロレベル				
パナソニック熊アグライانس社	北陸電力	日本たばこ産業(中日本エリア)	日東電機熊豊事業所				
マルホ	三菱電機ビルテクノサービス	パイオニア	日本ユニカ				
熊森精機製作所	熊明電舎	兵衛製作所	メタウォーターサービス				
熊レールテック	熊吉野工業	三菱電機熊神戸製作所	ユニカ				
YKK	熊吉野工業						
その他(2名)			その他(1名)	その他(1名)	その他(2名)	(1)	(1)
熊福井工業高等専門学校			その他	就職未定者	進学未定者	1	1
					その他	1	1

(平成25年度)

進学・就職先一覧 (平成26年3月卒業・修了予定者)						平成26年3月31日現在	
機械工学科	電気電子工学科	電子情報工学科	物質工学科	環境都市工学科	専攻科	進学(15名)	進学(14名)
福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	福井工業高等専門学校専攻科	金沢大学大学院	1	1
長岡技術科学大学	長岡技術科学大学	長岡技術科学大学	長岡技術科学大学	長岡技術科学大学	福井大学大学院	1	1
東京農工大学	金沢大学	東京農工大学	室蘭工業大学	岐阜大学	北陸先端科学技術大学院大学	1	1
福井大学	福井大学	福井大学	長岡技術科学大学	豊橋技術科学大学			
豊橋技術科学大学	京都工芸繊維大学	福井大学	金沢大学	仁愛大学			
高山自動車短期大学	1	名古屋大学	1	4			
		名古屋大学	1	1			
		京都工芸繊維大学	1	1			
		九州大学	1	1			
就職(19名)	就職(26名)	就職(15名)	就職(16名)	就職(21名)	就職(19名)	(4)	(2)
●県内<4名>	●県内<10名>	●県内<4名>	●県内<9名>	●県内<11名>	●県内<8名>	(4)	(2)
アポットジャパン	旭電設	熊アイジューバ	熊アタゴ	坂川建設	熊アートテクノロジー	1	1
信越化学工業熊武生工場	アポットジャパン	熊サイカイエルコム	熊崎江村田製作所	熊三輝設計事務所	熊前市役所	1	1
東工シャッター	小野谷機工	1	CFCデザイン	熊ジー・アイ・システム	熊江市役所	1	1
熊福井村田製作所	熊熊本商会	熊SHINDO	熊SHINDO	熊キサンピーシー	熊江市役所	1	1
	熊井化学工業	スガイ化学工業	スガイ化学工業	大和建設			
	熊崎江村田製作所	熊山田化学工業	熊山田化学工業	熊田建設	熊福井村田製作所	1	1
		北陸精染	北陸精染	熊田建設	熊田建設	1	1
	熊藤堂	熊藤堂	熊藤堂	熊田建設	熊田建設	1	1
	熊松浦機械製作所	熊松浦機械製作所	熊松浦機械製作所	熊田建設	熊田建設	1	1
	熊吉野工業	熊吉野工業	熊吉野工業	熊田建設	熊田建設	1	1
	熊吉野工業	熊吉野工業	熊吉野工業	熊田建設	熊田建設	1	1
●県外<15名>	●県外<16名>	●県外<11名>	●県外<7名>	●県外<10名>	●県外<11名>	(8)	(3)
出光興産	大阪ガス	熊アイジューバ	旭化成	大阪ガス	大阪シーリング印刷	1	1
エプソン	関西電力	熊アタゴ	花王	熊熊本商会	KBセーレン	1	1
関西電力	京セラ	大阪ガス	木谷電機	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
京セラ	熊きんでん	関西電力	第一三共プロファーマ	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
コマツ 栗津工場	島津メカテマ	熊ジークス	日本ユニカ	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
ダイキン工業	住友電設	熊中央エンジニアリング	ユニカ	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
高木製作所	熊グアイン	日本電産テクノモータ	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
トーシテック	熊芝エレベーター	熊芝エレベーター	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
日本車輻製作所	日本電気熊子	北陸電力	北陸電力	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
日本電気熊子	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
パナソニック熊アグライانس社	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
ビユーテック	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
フジテック	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	1	1
その他(1名)	その他(3名)	その他(1名)	その他(1名)	その他(3名)	その他(1名)	(0)	(1)
松下幸之助商学院	熊熊本商会	熊熊本商会	就職未定者	就職未定者	その他	1	1
	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	その他	2	2
	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	熊熊本商会	その他	1	1

5. 現状

本校の本科では、伝統的キャリア教育として、2年生で校外研修（県内企業等見学、1日）、3年生で工場見学旅行（国内（一部学科で海外）企業等見学、4日）、4年生で夏期休業中のインターンシップ（国内企業等、1～2週間）を経て進路の選択を行ってきた。5年生進級後、就職や進学の実験に臨んでいるが、就職、進学ともに適切な結果になっている。

しかしながら、最近、大学の就職活動が非常に厳しくなっている中、高専の就職が比較的好調なことから就職希望者が増加しており、就職に関するキャリア教育の重要性が増してきた。また、産業や職業の状況が変化、多様化している中で、学生が適切な職業選択を行えるよう、早い段階から職業意識の形成を行い、自らが主体的に企業研究を行う環境を整える必要が生じてきた。そのため新キャリア教育として、1～3年生には、本校教員、地域企業の経営者によるキャリアガイダンスや職業研究セミナー、本科5年生と専攻科生が講師となる先輩フォーラムを企画した。4年生や専攻科1年生には、就職対策講座を系統的に実施した。特に、3、4年生や専攻科生には、主体的に企業を研究させるため、キャリア教育セミナー（合同企業説明会）を開催した。なお、自分の進路を考えるための資料として、キャリアポートフォリオの作成を各学年で取り組んだ。

その他に、就職活動の利便性向上と企業研究のツールとしての活用を目的に、本校独自の求人サイト「求人票・掲示板閲覧システム」をWeb上に構築し、パソコンや携帯から就職情報を入手できるようにした。また、進路指導室が規則化されておらず、学生や外部から分かりにくくなっていることから、規則化し、併せてキャリア教育を強化した活動内容にふさわしい名称への変更や組織の見直しを開始した。さらに、平成27年度卒業・修了予定者から就職・採用活動時期が大幅に後ろ倒しされることへの対策の検討を開始した。

以下に主なキャリア教育活動や取り組みの概要を項目毎に記す。

(1) キャリアガイダンス、職業研究セミナー、先輩フォーラム

1～3年生には、本校教員によるキャリアガイダンスを前期に開催した。後期には、1年生と3年生に地域企業の経営者による職業研究セミナー、2年生には5年生や専攻科生が講師となり進路決定までの体験を話す先輩フォーラムを学科ごとに開催した。4年生や専攻科生には、就職活動の専門家を講師に招き、インターンシップや合同企業説明会の心構え、求人サイトの利用法、面接・エントリーシート等の就職直前対策講座を系統的に3回開催した。

<キャリアガイダンス「キャリア形成について」、講師：進路指導委員会委員長>

- ① 1年生対象：6月26日（水）、② 2年生対象：6月19日（水）、③ 3年生対象：5月22日（水）

<職業研究セミナー「①社会で働くということ、②社会において求められる人材」>

- ① 1年生対象、10月30日(水)、講師：(株)ネスティ代表取締役社長 進藤哲次氏
- ② 3年生対象、1月15日(水)、講師：(株)田中化学研究所代表取締役社長 田中保氏

<先輩フォーラム、2年生対象>

- ① 11月6日(水)、講師：5年生、専攻科1年生、会場：2年生5教室
内容：就職、進学を決めるまでの体験談、専攻科の説明

<就職対策講座(4年生・専攻科1年生対象、講師：(株)アイバック)>

- ① 7月4日(木)、「インターンシップ対策、コミュニケーション力向上策」
- ② 10月3日(木)、「合同企業説明会対策、本校求人サイトの利用法」
- ③ 2月21日(金)、「面接・エントリーシート等の就職直前対策」

(2) キャリア教育セミナー(合同企業説明会)

12月5日(木)に、本校と関連の深い企業等104社(半数強の56社が県内企業)が参加し、本科3、4年生と専攻科1年生の約420名を対象に、高専では実施例の少ない合同企業説明会を開催した。第2回までは本校第一体育館で10～11月に実施したが、3回目となる昨年度から学外(鯖江市嚮陽会館)で開催するようになった。参加企業数が昨年度90社から14社増加したため、第3会場を設けて対応した。合同企業説明会の実施風景を以下に示す。



合同企業説明会風景(嚮陽会館第1会場)



合同企業説明会風景(嚮陽会館第2会場)

(3) 大学・大学院合同説明会、専攻科説明会

10月5日(土)、本科3、4、5年生及び専攻科1、2年生の進学希望者を対象に、大学・大学院進学のための合同説明会を開催した。8大学と11の大学院から講師を招き、各大学・大学院の特色の説明が行われた。なお、参加学生数が111名となり、昨年度より倍増した。また、専攻科の希望者減への対策として、昨年度から始めた専攻科説明会を2～4年生の全学生対象に今年度も実施した。

(4) 本校独自の求人サイト「求人票・掲示板閲覧システム」、ポートフォリオ

本校では、高専の就職制度に対応した本校独自の求人サイト「求人票・掲示板閲覧システム」を2年前から開発し、昨年度から本格的に運用を開始している。このサイトにより、パソコンや携帯電話から今年度や過去の求人情報を各種条件で検索することができ、就職活動の利便性が向上するとともに、主体的な企業研究に活用できる。このサイトで合同企業説明会の登録もできるようにしているが、今年度は昨年度の会場風景の写真や注意事項一覧等の情報を掲載した。

また、他高専では実施例の少ないポートフォリオを、昨年度から本科で導入を開始しており、今年度も継続して取り組んだ。なお、低学年ではクラス替えがあることから、1年生に、1～2年生用の薄手の資料保管ファイルを配布した。また、3年生には、3～5年生用の進路決定に向けた資料保管ファイルを配布した。また、ポートフォリオのサンプル例を進路指導室の電子書庫にアップロードし、各担任が利用しやすいようにした。

(5) 進路指導室の見える化及び組織の見直しと名称変更

本校の進路指導室は規則化されておらず、学校要覧や学生便覧等に掲載されていないなど分かりにくい組織になっていた。そのため規則化し、学生や外部から見える存在にすること、さらにキャリア教育への熱心な取り組みを外部にも発信できるよう名称変更（キャリア支援室等）の検討を開始した。また、委員数が多く形式化した進路指導委員会も見直し、実際に進路指導に関する行事の企画・運営を行っている同委員会の下部組織である幹事会を主体とする体制への改善を目指している。

(6) 就職・採用活動時期の後ろ倒しへの対応

平成27年度卒業・修了予定者から、就職の広報活動開始時期が12月から3月に、採用選考活動が4月から8月に後ろ倒しされるが、教職員や学生への周知を徹底するために本校ホームページに掲載するなどの対応を行った。また、来年度の関係する行事日程を後ろ倒しし、進路のしおりの見直しを行うなど本年度に必要な対策を行った。

6. 点検・評価

就職活動への対策強化を主目的に、進路指導委員会では3年前から、新しいキャリア教育活動の企画を導入し、昨年度はさらに内容を改善し強化した。今年度は昨年度の企画で指摘された反省点や課題を検証し、改善した内容で実施した。

まず、1～3年生対象のキャリアガイダンスでは、講演内容を検証し、各学年でのキャリア教育に関する目的に沿った内容にスライド画面を精選し修正した。また、進学に関する内容を追加した。経営者による職業研究セミナーに関しては、昨年同様に福井労働局の紹介で1、3年生に対し企業経営者の方の講演会を開催したが、3年生に関しては学生に講師の方に話してもらいたい内容のアンケート調査を事前に行い、

その結果を講師の講演に反映した。

2年生では昨年度、「研究室訪問」の企画を、学科毎に5年生や専攻科生が進路決定までの体験談を話す「先輩講座」という企画に変更した。今年度は通常の特活などで先輩に話をしてもらおう先輩講座と区別するために「先輩フォーラム」という名称に変更し同じ形式で開催した。2年生のアンケート結果からは、大いに参考になったが70%（参考になったでは98%）と好評であり、来年度も継続実施することになった。

高学年では、4回目となるキャリア教育セミナー（合同企業説明会）を、昨年度と同様に12月初旬に鯖江市嚮陽会館で開催した。参加企業数が104社と以前より約20社、昨年度より14社増加し、1階の2会場だけでは不足するため、2階に第3会場を設けた。第3会場は学生の出入りが心配されたが、優良企業が含まれていたこともあり、かなりの学生が訪問した。なお、県内企業が56社参加しており、学生が地域企業を学ぶ良い機会になり、人材面で地域産業に貢献する行事と位置付けることができる。

就職対策講座については、昨年度から大学等で就職活動指導をしている専門家を講師に招いて3回開催している。なお、今年度は講演内容を昨年度と比べてさらに分かりやすくなるように改善したところ、4年生では68%（女子だけでは85%）が非常に役立つと回答し、少し役立つを加えると98%になり、かなり好評であったことが判明した。

進学に関しては、大学・大学院説明会を8大学と11の大学院から講師を招いて開催した。昨年度の学生アンケートで開催時期の早期化の希望があったこともあり、今年度は昨年度より約1か月早い後期第1週目の土曜日に開催した。5年生を含め参加募集を強化したところ、就職希望者が増加しているにも関わらず、参加学生数が昨年度の54名から111名の約2倍となり、大幅に増加した。

本校独自に構築した求人サイト「求人票・掲示板閲覧システム」については、昨年度から本格的に運用を開始している。学生はパソコンや携帯から本校用の就職情報を入手できるようになり利便性が向上した。このサイトではキャリア教育セミナー（合同企業説明会）の登録もできるようにしているが、今年度は昨年度の会場風景の写真や注意事項一覧等の情報を掲載するなどの改善を行った。ポートフォリオに関しては、昨年度からの取組を継続し、1年生と3年生には専用の資料保管ファイルを配布した。また、ポートフォリオのサンプル例を進路指導室の電子書庫にアップロードし、各担任が利用しやすいようにした。

さらに、本校のキャリア教育への取り組みを検証するために、全国高専教育フォーラムで活動内容を発表した。他高専からは貴重な意見が寄せられ、キャリア教育関係者と意見交換ができた。また、他高専との企画面での協力関係が芽生えるなど、外部発表の有効性を認識することができた。

また、次年度からの改善に向けて進路指導室の名称変更や組織の見直しを行うとともに、来年度から影響が出る就職・採用活動時期の後ろ倒しへの対策を開始した。

以上のように、低学年から複数のキャリア教育行事を実施することができ、外部発表ができる成果が得られていることから、達成度評価はAと判断する。

7. 改善課題・方策

最近の新生アンケート結果では、本校への入学志望動機として就職が良いからと答える学生が多くなっていること、また今年度実施した進路希望調査で1～4年生までの全学年で就職希望者が増加していることから、就職に力点を置いた活動を今後とも継続する必要がある。また、就職活動が厳しくなっていることから、低学年から進路を考えるキャリア教育を導入し、早めに対策をしていくことが重要になっている。ただし、相対的に専攻科への希望者が減少し、優秀な学生の確保が困難になる可能性があることから、進学に対するサポートも充実していく必要がある。本校は他高専と比べ、キャリア教育がかなり充実していると判断されるが、今後とも問題点を検証し、学生へのアンケート結果等を参考にしながら、継続して改善活動を実施していくことが重要である。

また、今年度の全国高専教育フォーラムで本校のキャリア教育に対する取り組みを発表したが、他高専との情報交換や企画面での協力関係を築いていくことが必要になってくると考えられる。

なお、本校の組織として、進路を担当している進路指導室や進路指導委員会及び同幹事会の位置づけが分かりにくい状況になっている。次年度からキャリア教育の重要性を学生が認識し、中学生など学外へキャリア教育の活動状況をアピールしていくために、キャリア支援室等に名称を変更し、学生に見える組織としてさらに活動内容を充実していように体制の見直しを図っている。

最後に、平成27年度卒業・修了予定者から影響が出る就職・採用活動開始時期の大幅な後ろ倒しであるが、公務員試験や編入学試験の後ろ倒しも予想され、本校の学事日程や進路指導のタイムスケジュール等の見直しや対策が必要になっている。今後情報収集を行い、学生に動揺を与えないように、教務委員会等と連携を深めながら的確に対策を進めていく必要がある。

○ 研究活動関係

1. 現状

研究改善委員会では、教員の研究に関する自己点検として毎年研究活動評価のための調査を実施している。評価項目として研究成果の発表、学協会の委員等の支援、研究資金の獲得などである。表1に平成25年度の研究活動評価調査結果を示す。ただし、表中の（ ）内数字は昨年度の結果を表す。今回も、評価期間を3年間（平成22～24年度）で、評価の上限を24点とし、24点を4段階のランク（A、B、C、D）に分類して評価した。24点は、毎年1篇の査読有論文の成果が出ていることに相当する。表1より十分な研究活動をしているとみなされるランクAの教員は、昨年と同数の57名（78%）となり、JABEE、認証評価、東海・北陸地区ロボコン大会主催など多忙を極めた中においてもレベルを維持できたことは評価に値する。なおランクBは7名、Cは6名、Dは3名であった。

科学研究費補助金の獲得に向けて、新採用の教員を日本学術振興会主催の科学研究費助成事業に関する研修会へ派遣し、科学研究費補助金申請へのモチベーションを高めている。そして、申請書の書き方の参考資料として採択された申請書のコピーを全教員に配布している。また、平成25年9月27日には、長岡技術科学大学副学長である斎藤秀俊先生による科研費取得のための講演会（講演題目：高専の持ち味を生かして手中に収める科研費）を実施するとともに、学内外部資金獲得経験者による申請書へのアドバイス・面談制度も設けている。さらに、学内向けウェブサイトにて外部資金公募一覧を掲載し、月初めに該当月の締め切り公募情報を全教員にメールで配信している。

平成25年度の科学研究費補助金の採択件数は11件（新規：6件、継続：5件、総額：1,330万円）となった。前年度と比較して採択件数増加しているが総額は減少している。なお、平成26年度の申請件数は38件であった。

共同研究は10件、総額は3,712,000円、寄付金受入件数は26件で、総額は8,240,000円である。

表1 平成25年度研究活動評価調査結果

ランク	人数	割合 %
A：24点以上	57 (57)	78 (77)
B：16点～23点	7 (8)	10 (11)
C：8点～15点	6 (8)	8 (11)
D：0点～7点	3 (1)	4 (1)

高等専門学校の人事交流の一環として、今年度は教員1名を派遣している。また、高等専門学校機構の在外研究員として1名がドイツへ渡航しており、平成26年度は海外研修として継続する予定となっている。さらに、平成26年度は高等専門学校間の人事交流として2名が他高等専門学校への派遣が予定されている。

教育・研究関連プロジェクトとして、本年度から三機関（長岡技術科学大学、豊橋技術科学大学、国立高等専門学校機構）が連携して行う世界で活躍しイノベーションを起こす実践的技術者育成を目的とする事業が始まった。本校からは5名（6件）の教員が申請・採択され、本年又は次年度からの本格的運用に関与する予定である。

2. 点検・評価

研究活動評価調査結果によれば、ランクがA以上である教員が8割近くおり、十分な研究活動等を行っていると思われる。

本校の科学研究費補助金採択率及び総額は改善傾向にあるが決して多くない。この要因として、これまで本校の全教員数に対する科学研究費補助金申請率が低いことによると説明されてきたが、60歳未満の教員を対象に考えるならば、ほぼ1教員あたり1件の申請が行われているので、単に申請率の低迷が採択率の低迷の要因とはいえずなくなっている。特に科学研究費は、他の競争的研究資金と異なり研究内容の新規性、独創性が求められることから、各教員が申請する分野での新規性、独創性の有無に対する自己吟味が必要であると考えられる。

総じて約8割の教員が十分な研究活動を行っており、科学研究費補助金の採択件数及び総額も改善傾向にあることから、今年度達成度評価はBと判断する。

3. 改善課題・方策

研究環境であるが、今年度の大型補正予算配分により、各学科において老朽化していた実験装置の更新が行われ、新規研究機器の導入も行われた。さらに地域連携テクノセンターの改修工事も進んでおり、今後の教員研究活動の活発化が期待される。

これに伴い、研究資金面で教員の研究意欲増進（外部資金獲得につなげるための研究スタート資金）につながるような学内研究支援資金制度が必要といえる。そのため、次年度から校長裁量経費の一部を、各教員の専門分野に関する優れた研究課題に重点配分する制度の導入を計画している。申請応募条件としては、申請者が科学研究費補助金又は外部資金等に応募していることとし、審査は申請書類による1次審査を経て、書類審査採択者に対してプレゼンテーション審査を実施し、配分額を決定する方式で計画を策定中である。

○ 地域・社会貢献活動関係

1. 現状

本校では、教育研究資源と知的資源を地域社会に還元することを通して地域社会における本校の認識度の向上に努めている。さらに、国立高専機構の第2期中期計画の「小・中学校に対する理科教育支援の機会を増大するとともに、取組事例を総合データベースに蓄積・共有し活用する。」と「満足度調査において公開講座の参加者の7割以上から評価されるように、地域の生涯学習機関として各学校における公開講座の充実を図る。」に基づき、公開講座、出前授業、福井県大学連携リーグ連携企画講座(主催：大学連携リーグ)及び福井県生涯学習大学開放講座(主催：福井県生涯学習センター)への講師派遣を行っている。さらに、文化的事業の一環として開催している「福井高専クラシックコンサート」の一般開放も行っている。

本年度は、小中学生や一般を対象にした公開講座については表1に示すように24件(受講者総数288名)を、また小中学校等での出前授業については表2に示す18件(受講者総数1636名)を実施した。表1に示す以外の公開講座としては、女子中学生の理工系分野への進路選択支援として本校5学科とサンエンスクラブが用意したものづくり・デモ実験体験後、2名の本校OG(京セラ(株)、越前市役所勤務)による理工系分野への女性進出の意義についての基調講演と懇談会を開催した「女子中学生と保護者のための公開講座・懇談会」(中学生66名、保護者35名参加、図1)がある。出前授業についても表2以外のものとして、本校の課外活動クラブであるサイエンスクラブ、THE研究会及び放送・メディア同好会が、サンドーム福井を会場に開催された「丹南産業フェア2013」(受講者数約350名、図2)と、また越前市いまだて芸術館にて開催された「子どもフェスティバル ーちちん♡ぷいぷい ひらけ〜ゴマ part 3」(主催：越前市いまだて芸術館)(受講者数約200名、図3)がある。このような公開講座や出前授業の開催に際しては、学生の帯同・協力を求めることが多く、学生にとっても地域社会と接触する機会ともなり、加えてエンジニアリング・コミュニケーション能力育成等の教育効果も期待できる。

さらに、福井県大学連携リーグ連携企画講座、及び福井県生涯学習大学開放講座には一般科目教室(英語、物理)に所属する教員3名(延べ7講座を担当)、物質工学科教員1名(延べ3講座を担当)と環境都市工学科教員1名(1講座を担当)を派遣し、技術英語、イギリス文化、暮らしの科学や自然災害等をテーマに講演し、教員の研究活動の成果を地域に還元した。この内、福井県大学連携リーグ連携企画講座で開講した2講座においては、英語科教員がコーディネータとして企画統括責任者を務めた。

また、本校学生の情操教育と地域社会への文化的な貢献活動と位置付けて平成21年度から実施している福井高専クラシックコンサートは、本年度で5回目を迎えた。本年度は、ピアノとバイオリンの奏者を招聘し、聴衆750名(本校学生605名、一

般145名)を対象に12月、鯖江市文化センターにて開催した(図4)。

表1 H25年度公開講座実施一覧

講座名	日時	対象者	募集数	受講者数	受講料
自律ロボット製作入門	6/15(土) 9:30~16:00	1日, 6h 中学生	10人	10人	無料
やってみよう ソーラーカー手作り教室	7/21(日) 10:00~16:00	1日, 5h 小学生 (保護者要同伴)	20組	19組	無料
多面体を作ろう	7/27(土) 9:00~12:00	1日, 3h 小学生, 中学生	20人	4人	無料
小さな大工さん講座「建築デザイナーになろう！」	7/27(土) 10:00~16:00	1日, 5h 小学5~6年生, 中学生 (保護者同伴可)	16人	14人	無料
親子科学教室(科学は身近にあふれてる。さあ科学のと びらを開けましょう！)	7/28(日) 9:00~14:00	1日, 4h 小学3~6年生 (保護者要同伴)	20組	19組	無料
夏休みの自由研究講座「ちからとかたち」	7/28(日) 13:00~17:00	1日, 4h 小学4~6年生 (保護者同伴可)	10人	10人	無料
中学生のための作文講座	8/4(日) 10:00~14:00	1日, 3h 中学3年生	15人	13人	無料
洋画と洋楽で楽しく英語を学ぼう	8/10(土) 10:00~14:00	1日, 4h 中学生, 高校生	20人	6人	無料
光ったり動いたりする「スライム」やカラフルな「人工い くら」・「スライム時計」を作しましょう	8/10(土) 13:00~17:00	1日, 4h 小学生 (低学年は保護者要同伴)	20人	18人	無料
中学生のための社会科講座 —高専の入試問題で学ぼう	8/10(土)10:00~15:00 8/11(日)10:00~12:00	2日, 6h 中学3年生	30人	28人	無料
はじめてのコンピュータ制御 —プログラムで物を動かそう—	8/10(土), 11(日) 各13:00~16:00	2日, 6h 小学5~6年生, 中学生 (小学生は保護者要同伴)	10人	10人	無料
磁石の磁力線観察キット(3種類)を作製しよう!	8/11(日) 13:00~17:00	1日, 4h 中学生	15人	11人	無料
紙コプターを作ってみよう	8/11(日) 13:30~16:30	1日, 3h 中学生	20人	10人	無料
全日本小中学生ロボット選手権 講習会・ふくい予選	8/11(日)13:00~16:00 8/17(土)14:00~16:00	2日, 5h 小学生 (保護者同伴可)	18人	13人	無料
オリジナル葉をつくろう2013	8/24(土) 13:00~15:00	1日, 2h 中学生	10人	2人	無料
覗いてみよう微生物の世界!	8/31(土) 13:00~17:00	1日, 4h 中学生	10人	10人	無料
オリジナル携帯ストラップ(キーホルダー)を作ろう	8/31(土) 13:30~16:30	1日, 3h 中学生	5人	5人	無料
中学生のための理科受験講座 —高専の入試問題で学ぼう	8/31(土), 9/1(日) 各10:00~15:00	2日, 8h 中学3年生	20人	19人	無料
はじめてのかんたんプログラミング	8/31(土), 9/1(日) 各13:00~16:00	2日, 6h 小学4~6年生 (保護者同伴可)	12人	12人	無料
英検3級合格をめざして —受験対策講座—	9/28(土), 10/5(土), 11/2(土) 各10:00~12:00	3日, 6h 中学生以上	15人	9人	6,400円 (中学生は無料)
英検準2級合格をめざして	9/28(土), 29(日) 各13:00~16:00	2日, 6h 中学生以上 (英検3級取得者が望ましい)	20人	4人	6,400円 (中学生は無料)
親子で作るはじめてのオリジナル写真年賀状	11/10(日) 13:00~17:00	1日, 4h 小学生, 中学生 (保護者要同伴)	15組	9組	無料
英文法基礎講座	12/14(土), 15(日) 各9:30~14:00	2日, 8h 中学3年生	20人	20人	無料
中学生のための国語講座—古典の心を読む	12/15(日) 14:00~16:00	1日, 2h 中学3年生	15人	13人	無料

表2 H25年度出前授業実施一覧

学科	実施日時	時間	出前授業先	標 題	スタッフ数			受講者数
					合計	教職員	学生数	
機械	6月15日	10:00～13:00	大虫小学校	おもちゃづくりから学ぶサイエンス	12	4	8	120
機械	6月15日	9:00～12:00	和田小学校	親子でおもちゃづくり	9	3	6	100
物質	6月29日	9:00～13:00	酒生公民館	超低温の世界・科学の面白さを体験	5	5	0	48
物質	7月6日	9:00～13:00	和田小学校	超低温の世界・科学の面白さを体験	9	7	2	260
物質	7月24日	9:00～12:00	越前町立図書館 織田分館ホール	化学の面白さを体験しよう	4	4	0	54
電子情報	7月28日	13:00～16:30	武生第二中学校	第4回越前市中学生ロボット製作教室	2	2	0	35
電気電子	8月28日	13:30～16:00	越前市かこさとし ふるさと絵本館	はしれ！ソーラーカー ～ソーラーカーで自然エネルギー体験～	4	1	3	30
電気電子	9月7日	9:00～12:00	武生西小学校	おもしろ科学実験とものづくり	4	1	3	123
物質	9月14日	9:00～13:00	有終西小学校	超低温の世界・科学の面白さを体験	5	5	0	80
物質	9月27日	14:00～16:10	清水中学校	磁石の磁界とイオンの存在を体感しよう	3	3	0	63
機械	9月29日	9:30～12:30	鶉小学校	親子で作る工作 (わりばし飛行機を親子で作って遊ぶ)	10	3	7	160
電気電子	9月29日	10:00～12:00	鶉小学校	光と色のファンタジー	1	1	0	168
機械	10月19日	13:30～16:00	王子保小学校	親子でおもちゃづくり体験	8	2	6	70
電気電子	10月19日	13:05～14:45	吉野小学校	おもしろ科学実験	1	1	0	144
物質	10月20日	10:00～12:00	宮崎コミュニティセンター	化学の面白さの体験	3	3	0	45
物質	10月20日	14:00～16:00	宮崎コミュニティセンター	極低温実験に興味を持とう	4	4	0	50
物質	11月17日	8:30～12:30	木田小学校	化学の面白さの体験	6	6	0	36
機械	11月17日	9:30～12:00	東郷小学校	親子でおもちゃづくり体験	4	1	3	50



(a) 機械工学科



(b) 電気電子工学科



(c) 電子情報工学科



(d) 物質工学科



(e) 環境都市工学科



(f) サイエンスクラブ



(g) OG による講演 1 (京セラ(株))



(h) OG による講演 2 (越前市役所)

図1 「女子中学生と保護者のための公開講座・懇談会」の様子
(平成 25 年 9 月 21 日、本校にて)



(a) THE研究会：
製作した水車と発電装置の展示等



(b) サイエンスクラブ：
霧箱を使った放射線観察等



(c) 放送・メディア同好会：
ショートムービー作成教室等

図2 「丹南産業フェア 2013」での出展の様子
(平成 25 年 9 月 21～23 日、サンドーム福井にて)



(a) ホバークラフトの製作



(b) イライラ棒の製作



(c) 木登りサルの製作



(d) パスタタワーの製作



(e) 放射線の観察



(f) 蒸気船の製作

図3 「子どもフェスティバル」での出展の様子
(平成25年10月27日、越前市いまだて芸術館にて)



図4 福井高専クラシックコンサート(平成25年12月4日、鯖江市文化センターにて)

2. 点検・評価

本年度の公開講座も、主にもものづくり、科学系のデモ実験に加えて数学・国語・社会や英語系の内容で実施され、開講した24講座には主に小中学生が受講し、その受講生数も昨年度よりも約50名増加した。図5は本年度開講した公開講座(開講時間、内容及び満足度)に対するアンケート集計結果をまとめたものである(回答率97.6%)。開講したほとんどの公開講座の時間は半日程度であったが、その時間については約80%弱の受講生からは“ちょうどよい”との回答が、講座内容については“とても面白い”又は“面白い”との回答率は約87%であり、その総合的な結果として“だいたい満足”又は“十分満足”の合計回答率は昨年度と同様約96%であった。この数値は、前述した国立高専機構が掲げている「公開講座の参加者の7割以上から評価される」という目標数値を大きく上回っている。実際、アンケートの自由記述欄(感想等)によると、「中学校にはない機械・装置に触ることができて楽しかった」、「ものづくりや科学は面白いということが分かった」や、「理科が好きになった」等の好意的な感想が目立ち、理工系の教育支援のみならず、本校の社会的なプレゼンスをアピールすることができたと考える。一方で、“テーマに沿ったものづくりの時間が少し足りなかった”や“数学に関する講座を望みたい”という意見・要望も寄せられた。

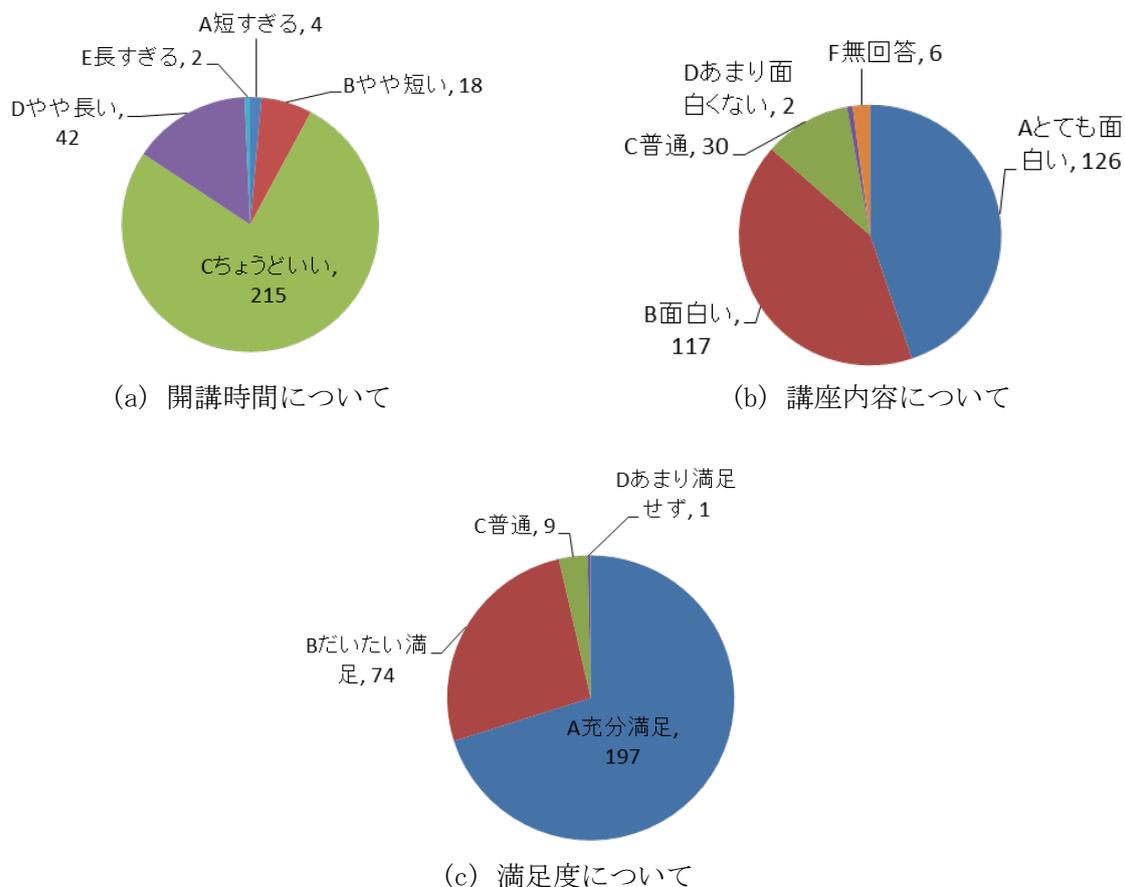


図5 公開講座のアンケート集計結果

また、出前授業の会場は例年と同様、小中学校のみならず自治体公民館が主であり、小中学生に加えて保護者もものづくりや科学デモ実験を受講した。本年度から公開講座と同じように出前授業についても受講生の満足度を含め、要望や意見を把握するために事後にアンケート調査を行った。アンケートの回収率(約25%)は前述した公開講座ほどは高くはないが、その集計結果をまとめると図6のようになる。

出前授業時間については“ちょうどよい”との回答率は約75%であり、講座内容については“面白い”又は“やや面白い”との回答率は約90%であり、その総合的な結果として“だいたい満足”又は“満足”の合計回答率は約90%であった。特に自治体等が出前授業の実施を求める際の受講対象者は、幼稚園児から中高生までの幅広い年齢層となりがちであるが、このような年齢層を対象に行う場合においては、受講生の知識・技能レベルに合わせた実施指導に留意しなければならないことが、図6の結果から伺える。

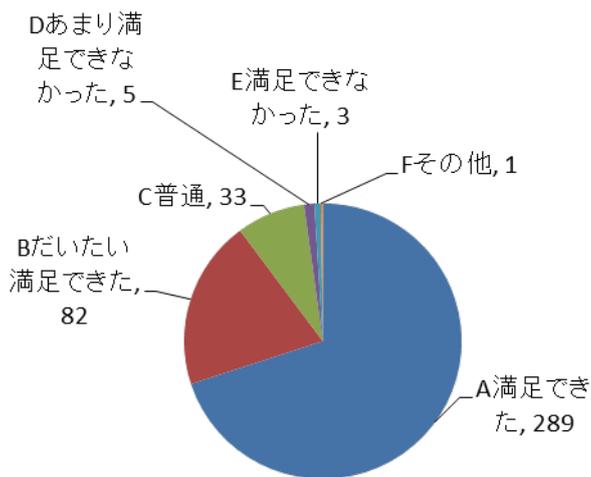
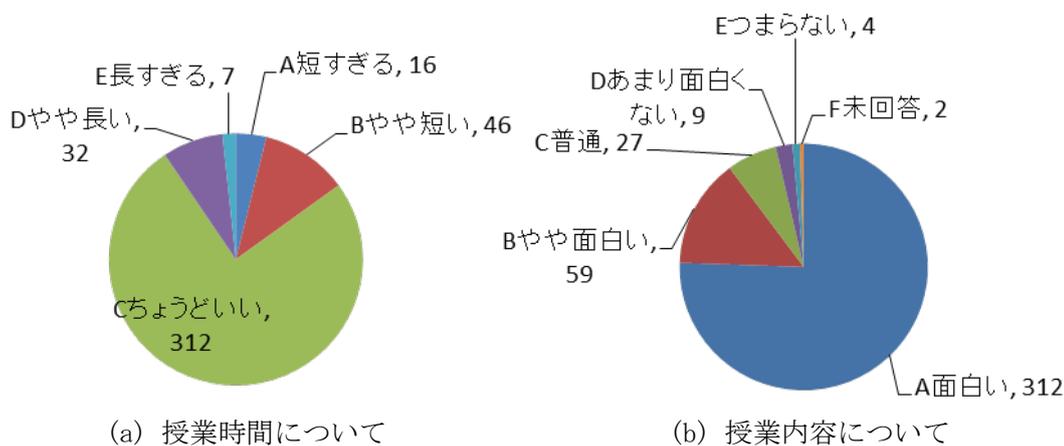


図6 出前授業のアンケート集計結果

“女子中学生と保護者のための公開講座・懇談会”には、県内外の女子中学生66名(2年生1名、3年生65名)とその保護者35名が参加した。図7と8は公開講座と懇談会終了後に調査した満足度の結果(アンケート回収率は、中学生98%、保護者94%)であり、公開講座の内容については図7にあるように、「満足した」又は「とても満足した」との回答率は約98%で、そして基調講演と懇談会については図8のように約96%の参加者が「良かった」又は「とても良かった」と回答していた。昨年度に引続いて実施した本校OG2名による理系分野で活躍する意義ややりがいについての基調講演と懇談会での紹介と説明は、本校在学中からの体験に基づいた内容が主であったため具体性に富み、非常に理解しやすいところが参加者に受け入れられたものと思われる。実際、多くの参加者から「高専での勉強が就職してからどのように役立っているかがわかった」、「女性でも技術者として活躍できることが再認識できた」や「卒業後の進路や就職先を女性目線で説明して下さったことが、とても良かった。」等の好意的な意見があり、同企画の目的に沿った女子中学生の理工分野への進路選択支援を、十分に行うことができたと考える。

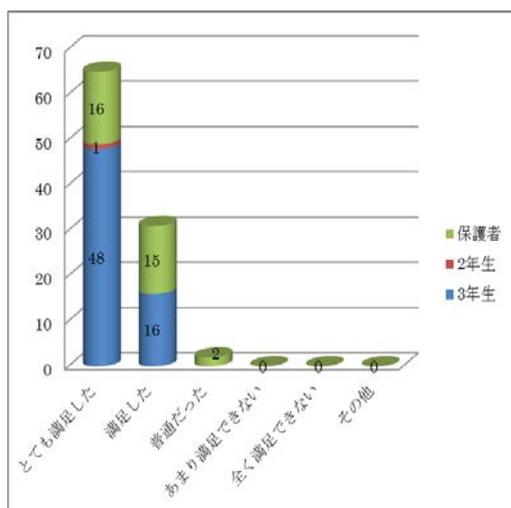


図7 公開講座内容の満足度

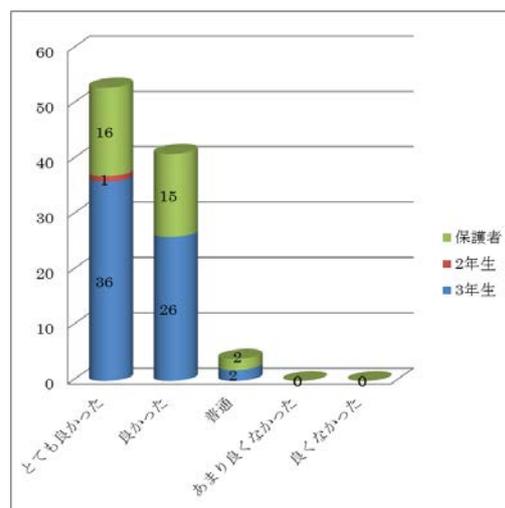


図8 基調講演・懇談会の満足度

「子どもフェスティバル —ちちん♡ふいふい ひらけ〜ゴマ part 3」では前掲図3に示したように、蒸気船、木登りサル、イライラ棒、ホバークラフトやパスタタワーの製作のほかに、放射線観察や空気砲の体験のためのブースを出展して、理科教育支援を行った。図9は、その体験内容と満足に関するアンケートの集計結果である(回収率約35%)。

体験内容について“やや面白い”又は“面白い”との回答率は非常に高く、約99%であり、さらに満足度については“だいたい満足できた”又は“満足できた”の回答率は約90%であった。アンケートの自由記述欄には「今年初めてでとても楽しかったので来年もやりたいです。」や「作ってあそぶのが楽しかった。」等の子供たちから

の率直な感想に加えて保護者からは「大人が夢中になってしまうくらい楽しかったです。」や「1年生ですので実験の意味はわからず、つくる楽しみが良かったです。」という感想が寄せられた。

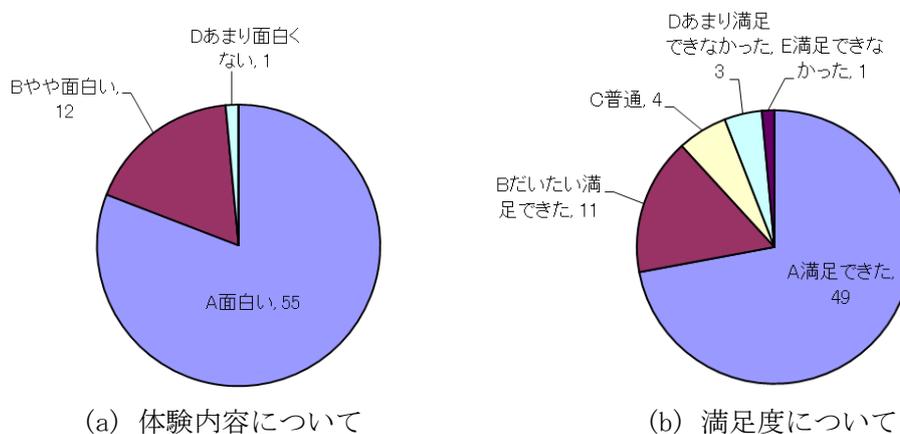


図9 「子どもフェスティバル」のアンケート集計結果

福井県大学連携リーグ連携企画講座では「英語」と「化学とテクノロジー」をテーマにした講座を開講し、各講座30名程度の大学生を含む一般社会人が受講し、いずれの講座も受講生から非常に高い評価を得ている。この内、「英語」に関する企画講座については、本校英語科教員が本年度に引続き来年度もコーディネータとして企画統括責任者を務めて開催すべく、現在その準備が進行している。また、福井県生涯学習大学開放講座では嶺南美浜町と南越前町においてそれぞれ「人づくり・まちづくり」と「地震」をテーマとし、地元住民を主な対象とした講座に教員2名を派遣した。これらの講座に対する満足度も約90%に達している。

本校の文化的事業としてのクラシックコンサートも前述したような公開講座や出前授業等と同様、地域社会では定着しつつあり、本年度も150名の地域住民の参加があった。アンケートによると約91%の方々が“満足”又は“大変満足”と回答しており、「同様な企画があったら参加するか」との問いに対して約88%が“参加したい”との回答であった。さらに、意見・感想として“音楽（特にクラシック）に親しみがあまりないと思っていた高専での企画にとってもびっくりしました”、“一般の人に対して、開放的な部分を感じてとてもうれしい”や“この様な情操教育は、社会に出ても、とても役に立つ事だと思う”等が寄せられ、本校の人間教育の一端を地域社会に示す格好の機会にもなった。

以上のことから、達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・方策

本年度も、本校の有する教育研究資源や知的資源を公開講座、出前授業等を通して地域社会に還元した。いずれの事業においても参加者から極めて高い満足度を得ている。これらの事業では、教職員のみならず学生も地域住民との交流が図れ、学生の立場からすると人間力のみならず、エンジニアリング・コミュニケーション能力の育成の機会ともなるため、総合的な教育効果も期待できる。ただし、出前授業におけるアンケート回収状況が他の事業に比べると低調であり、より満足度の高い出前授業の実施を目指す際には幅広い意見や要望の収集が不可欠であると考えられ、参加者へのアンケート協力の呼びかけの強化と回収率の向上を図る必要があると考えられる。

今後も、理科教育支援等を含む各事業に継続して積極的に取り組み、地域社会の活性化等に貢献したい。

○ 国際交流関係

1. 現状

(1) 平成25年度計画に基づき実施した事項

- ① 9月に奈良で開催された「工学教育の進歩に関する国際シンポジウム (ISATE2013)」に教員2名及び学生1名が参加し、電気電子工学科の5年生が 学生セッションでポスター発表(英語)を行った。

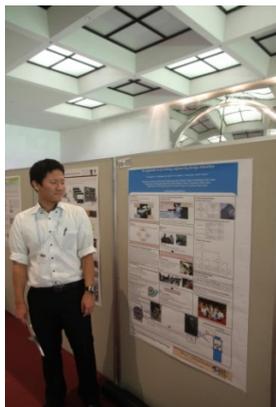


図1 学生の発表(ISATE2013)

- ② 11月に香港VTCで開催された「持続可能性技術に関する国際シンポジウム (ISTS2013)」に、専攻科学生2名が教員2名と共に参加し、それぞれの特別研究の内容について英語で論文発表を行った。



図2 論文発表した学生 (ISTS2013)

- ③ 高専機構が主催する海外インターンシップ事業の第1次日程(2013年夏実施)に専攻科生(男子1名)が参加し、ベトナムにある日系企業で研修した。また第2次日程(2014年3月実施)にも専攻科生が応募した。
- ④ 姉妹協定校であるオーストラリアのバララット大学との交流事業では、隔年で相手校を訪問し交流を深めている。今年度はバララット大学の学生達が本校へ訪問する年となっていたが、大学側の事情で来訪できなくなった。しかし Skype などの通信手段を使ってコミュニケーションを図っている。

- ⑤ タイのプリンスオブソンクラ大学（P S U）工学部との間で1年余りにわたって進めてきた交渉がまとまり、6月中旬に校長以下4名が現地（ハジャイ）を公式訪問した。そして「国際交流に関する覚書（MOU）」を締結した。その後、このMOUに則って8月に本校の専攻科生2名をP S U工学部に派遣し、同所内で1か月間にわたる研修を行った。

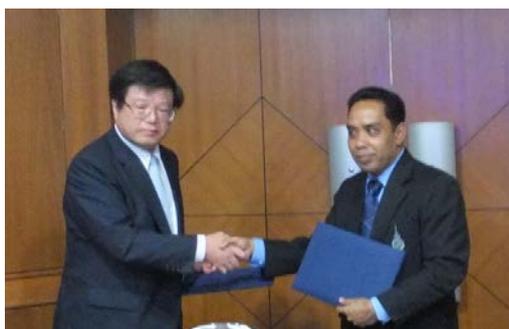


図3 MOU調印の様子



図4 PSUでの学生研修の状況

- ⑥ 8月に、国際協力機構（J I C A）北陸支部主催の研修事業「技術系グローバル人材育成」（於ベトナム）に、本校から2名の若手教員が参加し、北陸地区の他高専の教員と共に現地視察や討論を行い、問題意識の共有を図った。また、その後実施した校内報告会では若手を中心に多くの教員が集まり、活発なディスカッションが交わされた。



図5 校内報告会

(2) その他の事項

- ① 富山高専が中心となって昨年度まで2か年にわたって進めてきた「ロードマッププロジェクト」(特別教育研究経費)には本校も連携協力してきた。このプロジェクトの成果報告書等が4月に送付され、学生達に広く配布し、キャリア形成の一助として活用している。



図6 学生に配布したパンフレット

2. 点検・評価

今年度は本校独自の交流協定を締結することができ、加えて本校学生をタイの大学で研修させることもできた。このように交流活動を積極的に実施し、本校学生の海外派遣、さらに本校教員の海外派遣・研修などについて当初の目標をおおむね達成できた。しかし同時に、香港VTCからの短期留学受入れプログラムは一旦合意したものの、諸事情により実施に至らなかった。また、教職員対象の国際交流に関する講演会もスケジュールの調整ができずに今年度は実施することができなかった。

以上のことから、達成度評価はBと判断する。

3. 改善課題・方策

高専機構に申請した2つの短期留学受入れプログラムのうち、「香港VTCからの学生の受入れ」についてはプログラム作成が認められたものの、実現には至らなかった。次年度は双方の予定を慎重に擦り合わせることで解決可能である。

また国際交流に関する教職員対象の講演会についても、次年度に開催することによって教職員の意識を維持し、さらに向上させるという効果が期待される。

○ 国際交流（留学生）関係

1. 現状

本校は、国際貢献の一環として、マレーシアなど3か国から留学生を3年次に受け入れ(下記参照)、本校の学生と同様な教育や寮生活をしてもらいながら、単に学習の場としてだけではなく、国際交流の一つとして異文化交流の大きな柱と位置づけ、力を注いでいる。

本年度在学留学生一覧

学科・学年	氏名	区分	留学期間	国籍
機械工学科 5年	ザイナル フィルダウス (ザイナル) ZAINAL FIRDAUS B ZAINAL `AMINI	マレーシア政府 派遣留学生	H23. 4～ 26. 3	マレーシア
物質工学科 5年	スギル ダンザンヴァンシル (ダンザン) SUGIR DANZANVAANJIL	国費留学生	H23. 4～ 26. 3	モンゴル
機械工学科 4年	ノアマラル ビン ノラフマン (アマラル) NOR AMARUL BIN NOR RAHMAN	マレーシア政府 派遣留学生	H24. 4～ 27. 3	マレーシア
環境都市工学科 4年	ナムサライ ドウグルスレン (ドウグル) ZAINAL FIRDAUS B ZAINAL `AMINI	国費留学生	H24. 4～ 27. 3	モンゴル
機械工学科 3年	モハド アイザット シャフィク ビン スディン (シャフィック) MOHD AIZAT SHAFIQ BIN SUDIN	マレーシア政府 派遣留学生	H25. 4～ 28. 3	マレーシア
物質工学科 3年	リズキ ダルマワン (キダル) RIZKI DARMAWAN	国費留学生	H25. 4～ 28. 3	インドネシア

留学生への対応は、教育面では外国人留学生委員会（担任や学科の代表）が、生活面では寮務委員会が受け持ち、留学生からの様々な相談に応じている。また、より身近な学習・生活支援として、チューター(3・4年次の寮生活学生のクラスメート)を一人ずつ配置し、学習・生活の両面で支援を実施しており、留学生からの評価は高い。また、下記の行事に記載したように多彩な行事を設け、本校学生だけでなく、地元住民や他高専の学生との交流を幅広く図っている。

・ 本年度留学生関連行事

- 4月 3日 平成25年度外国人留学生チューター委嘱式・オリエンテーション
- 4月 5日 平成25年度入学外国人留学生鯖江市長表敬訪問
- 4月19日 平成25年度入学外国人留学生越前市長表敬訪問
- 6月17日 入国管理行政・申請取次制度講習会（金沢大学）

- 7月 9日 平成25年度第1回外国人留学生委員会
- 7月18日 福井県留学生交流推進協議会第1回運営委員会（福井大学）
- 9月28・29日 北陸地区高専外国人留学生交流会（福井高専担当）
- 11月21日 福井県留学生交流推進協議会定例総会・第2回運営委員会（福井大学）
- 12月11日 平成25年度外国人留学生との懇談会
- 1月25日 平成25年度外国人留学生スケート体験研修会（ニューサンピア敦賀）
- 1月31日 平成26年度入学予定国費留学生（スグチャルン グリットウィット（オパール））との面会（東京日本語教育センター）
- 3月中旬日 平成25年度卒業留学生鯖江・越前市長表敬訪問国際交流関係

ここ数年の本科留学生の進路については下記に示すとおりであるが、その全てが大学進学であり、本校への留学として十分な成果を残すことができている。

また、専攻科修了留学生（私費）は学位を取得し、就職活動継続後、内定を得た。

・ 留学生進路一覧

平成21年度から平成25年度卒業生（15名）

秋田大学、福井大学（4）、筑波大学、長岡技術科学大学（2）、静岡大学、豊橋技術科学大学（2）、東京工業大学、神戸大学、電気通信大学、信州大学

平成24年度修了生（1名）

就職（株式会社リアルテック）

2. 点検・評価

上記のような支援体制を実施し、また進路についても納得できる結果を残していることから、達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・方策

留学生は、現在日本国費とマレーシア政府派遣の2つを受け入れているが、今後、私費での留学が増えてくると予想され、その対応を鋭意検討していきたい。

○ 施設整備関係

1. 現状

高専機構の第1期及び第2期中期計画における「教育環境の整備・活用」の指針である「産業構造の変化や技術の進展に対応できる実験・実習や教育用の設備の更新、実習工場などの施設の改修をはじめ、耐震性の確保、校内の環境保全、ユニバーサルデザインの導入、寄宿舍の整備、環境に配慮した施設の整備など安全で快適な教育環境の充実を計画的に推進することとし、特に、施設の耐震化率の向上に積極的に取り組む。」に基づいて、本校では平成20年度には本館と機械工学科棟を、平成21年度には電気電子工学科棟、物質工学科棟及び管理棟の改修を実施した。昭和45年度に竣工した土木工学科棟(現在の環境都市工学科棟)についても、ユニバーサルデザインを採用して狭隘化解消、共有スペースの確保と耐震を目的とした改修を平成24年度に実施し、同年度末に竣工した(図1)。

本年度は、平成24年度国立大学法人等施設整備実施予定事業(大臣官房文教施設企画部計画課 平成25年1月15日付、平成24年度補正予算)に、本校の5か年(平成25～30年)整備計画に基づいて要求していた図書館(渡り廊下を含む)と地域連携テクノセンター(2階建て部分)の改修が盛り込まれ、8月から改修工事に着手し、年度末に竣工予定である。改修後の地域連携テクノセンターの屋上には、太陽光パネルを設置し、自然再生エネルギーに関する教育研究を推進するとともに、本年度末には、ものづくり教育の充実を図るために同センターの3階建ての1階の一部を改修する予定である。さらに、耐震補強の観点から I_s 値(=0.51)が低い総合情報処理センターへの渡り廊下の改修も行っており、これについても本年度末に竣工予定である。また、昭和42年度に竣工した機械実習工場の床面もひび割れや段差の発生等の老朽化が進んでおり、同施設の安全対策、機能強化と環境整備の一環として床改修を夏季休業期間中に実施した(図2)。さらに、夏季休業期間を利用して、バリアフリー化工事年次計画に基づき、機械工学科棟1階各実験室前の廊下の一部にスロープを新設した。



図1 改修後の環境都市工学科棟内
(コモンスペース)

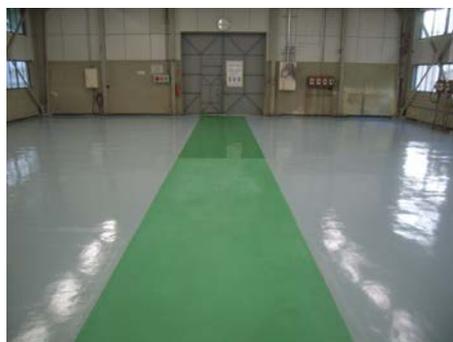


図2 改修後の機械実習工場床面

この他、本校の高度化に対応可能な中・長期施設整備計画(キャンパスマスタープラン)を作成するための専門部会を発足させ、今後の教育研究環境の活性化と充実・向上を図るために施設整備の観点からの素案の作成を行うこととした。

また現在は、国立高専機構の平成26年度営繕事業に係る施設整備方針に基づき、電子情報工学科棟の空調設備の改修と、第二体育館の改修を要求している。さらに、平成27年度概算要求事業として、教育の高度化と地域貢献活動の拡充を図るために、地域連携テクノセンター(3階建て)と、給水・排水管の老朽化対策として基幹環境整備、の2事業を要求することを予定している。

2. 点検・評価

「1.現状」に記したとおり、本年度も老朽化・狭隘化解消・耐震や教育の高度化対応等を目的にした改修及び、バリアフリー化等の工事が年間を通して実施した。これらの改修に当っては、関係学科等の協力を得ながら、授業や研究等に極力支障を及ぼさないように、特に振動・騒音を伴う工事についてはその実施時期に留意して行い、おおむね予定通りに実施された。

以上のことを鑑み、総合的な達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・方策

平成20年度から本年度にかけて本館、管理棟や機械工学科棟をはじめとする本校の主要な建物の狭隘化解消や耐震等を目的とする改修が行われてきたが、一般教育棟や体育館においても老朽化が著しい。さらに、少子化が進む中で入学生の質を維持する上でも志願者確保が重要であり、このためには学寮の増築を含めた拡充が求められる。一方では、グローバル人材育成の観点から教育の高度化も求められており、これらに立脚した施設整備における将来構想、すなわちキャンパスマスタープランを早期に作成し、教育研究環境の充実を図りたい。

○ 管理運営関係

1. 現状

(1) 学校運営に関する組織

学校運営に関する組織は、学則、内部組織規則及び事務組織規則において定めており、運営連絡会、学校運営会議、教員会議及び各種委員会がある。管理運営に関する重要事項については、学校運営会議で審議されるが、その決定方針等について、教員会議や各種委員会等へ反映すべく、校内意見の調整を行い、校長が効率的に意思決定を行えるよう運営されている。

運営連絡会は、校長、副校長、校長補佐、事務部長及び課長を構成員とし、学校運営会議に諮る事項及び管理運営の重要事項について機動的な協議をする場として

いる。

学校運営会議は、校長が議長を務め、副校長（3主事及び企画室長）、校長補佐（専攻科長）、各学科長・教室主任及び事務部長で構成されている。

教員会議は、校長及び専任の教員で構成されているため、関係者の意見を十分くみ取り、各事項についての効率的な意思決定とその周知徹底が図られ、効果的な運営ができる態勢となっている。これらの会議は原則として毎月定例的に開催している。また、各種委員会等については、各委員会規則に基づき、専門的分野での見知から効果的な運営が図られている。さらに、教員は各学科及び一般科目教室に所属し、それぞれの校務を「校務分掌表」のとおり行っている。

事務組織は、事務部長の下に、総務課及び学生課の2課を配置し、各所掌業務を行う体制となっている。また、部課長、課長補佐、係長、技術長、技術班長で構成する事務連絡会を月1回開催し、管理運営事項の連絡調整と意思疎通を効率的に行える態勢となっている。さらに、各委員会規則には担当課を明記するとともに、事務職員も委員として参画する等、必要に応じて直接校務を分担し、機能的に活動している。

(2) 中期計画・年度計画並びに自己点検・評価

本校では、国立高等専門学校機構本部が作成した中期計画及び年度計画に対応した、本校独自の中期計画・年度計画を立案し目標を定め、その目標の下、健全な学校運営が図られている。本校で定めた中期計画・年度計画は、教育、研究、社会との連携・国際交流、管理運営等の区分により、具体的な目標を定め、この目標に対する達成状況を把握することで学校全体の総合的な自己点検・評価を行っている。自己点検・評価にあたっては、中期計画・年度計画を踏まえ、学校の活動の総合的な状況に対して行われている。その結果は、「自己点検・評価報告書」に取りまとめ、本校ホームページで公表している。

(3) 外部評価の受審

平成16年度に本校本科4、5年と専攻科の教育プログラム（環境生産システム工学）が日本技術者教育認定機構（JABEE）により認定された。認定の有効期間が原則6年であることから、平成21年度に継続審査を受審し、平成24年度にその結果を踏まえた中間審査を受審した。中間審査の結果は、平成24年4月1日から3年間の認定が可となっている。また、大学評価・学位授与機構による高等専門学校機関別認証評価は、7年以内ごとに受審することが義務づけられており、平成24年度に機関別認証評価を受審した。評価結果は、高等専門学校評価基準を満たしているとの評価を受けているが、主な改善を要する点として、産業廃棄物等の安全管理に関し、安全管理体制及び安全管理の具体的な実施に不十分な点があることがあげられた。このことを受けて、平成25年3月に教職員を対象にした特別管理産業廃棄物管理等講習会を開催し、さらに、平成25年8月にPCB含有の可能性のある廃電気機器の紛失事案を受けての再発防止策を策定し、安全管理体制を構築した。

また、本校では、外部有識者による「外部有識者会議」を開催し、毎年、外部評価を行っており、本校の教育研究目標・計画、自己評価、その他本校の運営に関する重要事項について、審議・評価を行っている。具体的には、福井県内、技術科学大学の大学関係者、地元の中学校関係者、福井県、地元の産業界、報道関係、商工会議所関係者に委員を委嘱し、事前に配付した自己点検・評価報告書を基に外部有識者会議で検証が行われ、自己評価を含む学校運営に関する重要事項についての提言・助言を受けている。この内容については、「外部有識者会議報告書」に掲載し、本校ホームページで公表している。提言・助言については、事項ごとに担当する委員会等へ提起し、具体的な改善方策等の検討からその実施と学校運営会議への報告まで一貫した教育改善システム（PDCA サイクル）が構築され、有効に運用されている。

(4) 危機管理

危機管理体制については、危機管理を総合的かつ計画的に推進するためのリスク管理室の設置を危機管理規則で明確に定め、危機管理に係る事態に組織的に迅速かつ的確に対応をするための体制整備を図っている。

リスク管理室では、台風等の自然災害やインフルエンザ等各種感染症の対応、PCB含有の可能性のある廃電気機器の紛失事案を受けての再発防止計画の策定及び教職員のコンプライアンスに関するセルフチェックを実施した。その他の取組としては、非常災害に対応するための備蓄品の充実を図っており、高専機構から配付された非常用毛布及び簡易トイレとともに寮生の3日分に相当する非常食、飲料水を常備するように努めている。この非常食は、学寮の防災訓練における非常食の試食にも提供した。

緊急連絡体制は、学生・教職員への緊急メールの一斉配信システムを平成24年度から運用している。また、高専機構本部から配付された緊急連絡用PHS電話機の携帯式をリスク管理室長及び総務課長が所持し、固定式は総務課長及び学生課長の席に設置することで緊急時に備えるようにしている。

(5) 広報活動

一般社会人や中学生保護者などに本校の現状を紹介するために、広報委員会を設置し、さまざまな広報活動を行っている。その広報活動の一環として、平成19年度より本校の紹介を地元コミュニティFM放送である「たんなん夢レディオ」、平成22年度からは地元コミュニティ誌である季刊誌「夢レディオ編集室」で開始した。さらに、今年度は、JR福井駅コンコースの公告スペースを使用した学生募集案内の掲示も行った。

また、本校の教育研究活動等の状況は、本校ホームページへ掲載することにより公表しており、分かりやすく公表するという観点から、本校ホームページのトップページの「学校案内」に「教育情報公開」を設定し、教育研究上の目的、教育研究上の基本組織等の基本事項及び教育組織、教員集、各教員の有する学位・業績、入学者受入方針、授業科目、授業方法・内容、年間授業計画並びに施設等の情報を掲載し、広く一般社会に発信している。

(6) 男女共同参画推進

平成23年度に国立高専機構において「男女共同参画行動計画」が策定されたことを受けて、その取組を推進するための組織として平成25年4月に企画室の下に男女共同参画推進専門部会を設置した。今年度の主な取組は次のとおりである。

- ・ 平成25年9月に高専機構本部男女共同参画推進室長を講師に迎え、男女共同参画講演会を開催し、教職員への意識啓発を図った。
- ・ 教員公募では、高専機構が制定した女性教員比率向上のためのポジティブ・アクションに則り、平成25年度は次年度採用予定者の女性限定公募（1件）を実施した。女性限定公募を行わない場合にあっても女性教員の積極的な採用に向けて「本公募では、教育・研究業績等の評価において同等と認められた場合には、女性を積極的に採用します。」と公募案内に明記した。また、高専機構からの案内を受けて、本校の教員を希望する女子学生を対象にしたインターンシップの公募に参画した。
- ・ 平成25年8月に全国高専教育フォーラムにおいて開催された高専女性教員のキャリア形成支援ワークショップに専門部会会員を派遣し、他高専の男女共同参画推進の現状や女性教員への研究支援等に関する情報を収集するとともに、今後の本校としての活動の参考に資している。また、平成25年12月開催された国立高専機構主催「女性研究者研究交流会」に女性教員2名が参加し、女性研究者の研究活動の活性化、多様なロールモデルの提示及び女性研究者のネ

ットワーク化の促進を図った。

- ・ 本校の女子力を広く社会に発信するために、広報誌「高専女子百科 Jr.」の作成を企画し、発行した。また、高専機構において高専女子カブランドの発信を目指し、平成26年8月に開催される「高専女子フォーラム in 東海北陸（代表幹事校：富山高専）」にも幹事校として参画している。
- ・ 校内施設・設備等の現状を把握するために女子更衣室等の巡視を行った。今後、女性教職員からの意見・要望等を踏まえた女性視点の環境整備を具体化するように継続的な議論をしていくこととしている。

（7）業務運営

① 人事交流

今年度は、高専・両技科大間教員交流制度で明石高専へ教員1名を1年間派遣した。なお、来年度は、同制度で富山高専及び石川高専へそれぞれ教員1名を1年間派遣することが決定している。

また、国立高等専門学校機構在外研究員制度でドイツの大学へ教員1名を1年間派遣した。

事務職員については、近隣の大学と12名の人事交流を行った。

② 事務職員等の研修

事務職員・技術職員の一層の能力向上を図るため、各種研修・講習会等に積極的に参加させた。また、海外機関との交流促進、留学生の更なる受入れ等国際化に対応するため、事務系職員の外国語能力の向上が必要であることから、平成24年度から本校独自の語学研修を企画し、今年度は11名が受講した。

③ 教職員表彰

職務に関して、高く評価できる教職員に対して毎年実施している校長表彰を3月に実施する予定である。

④ 教職員の業務負担軽減

学寮業務を円滑に行うために本校教員OB1名を雇用し、休日業務に充てることで教職員の業務負担軽減と学生支援の充実を図った。

⑤ 再雇用教員の職務内容

再雇用教員の職務内容等について遂行可能なものを整理し、本校における取扱いを校長裁定により定め、平成25年度から適用することとした。

⑥ 職場環境等

毎月定期的に安全衛生委員会を開催し、教職員の安全衛生に関することを審議するとともに、併せて実施する職場巡視点検で当該施設管理者に必要な指導等を行っている。

また、教職員及び学生がその能力を十分に発揮できるような就労環境及び修学環境を維持するため並びに関係者の利益を保護するため、ハラスメント防止

等に関する規則制定しており、今年度は管理職相当の教職員を対象としたハラスメント防止研修を開催した。さらに、国立高等専門学校機構一般事業主行動計画（平成24年4月18日理事長通知）を受けて本校の行動計画を策定し、ノー残業デーの設定や会議等の開催は原則として17時以降に行わないなど次世代育成支援への取組を行っている。

⑦ 情報関係

情報基盤である校内LANシステム機器を前年度に導入し、平成25年度当初から運用を開始している。

また、教職員の情報セキュリティに対する意識向上を目的とした情報セキュリティ教育講習会が総合情報処理センター主催で平成25年10月に開催されている。

⑧ 監事監査

平成25年10月に高専機構による業務の適正かつ効率的な推進と業務運営の改善に資することを目的とする監事監査及び内部監査並びに本校の情報セキュリティ水準の向上と問題点の改善に資することを目的とする情報セキュリティ監査を受検した。

(8) 改善課題・方策への取組状況

平成24年度自己点検・評価報告書で改善課題・方策としてあげた事項については、次のとおり対応している。

① 議事録フォーマットの統一化

大学評価・学位授与機構による機関別認証評価受審の際における「自己評価書」の取りまとめ作業において、各種委員会の審議内容等のエビデンス収集に労力を費やした経験から改善課題としていた議事録フォーマットの統一化を平成25年度当初から実施した。

② 産業廃棄物等の安全管理の体制等の構築

前記(3)及び(4)で記述したとおり講習会の開催及び再発防止策の策定を行い、安全管理体制を構築した。

③ 男女共同参画を推進する組織の設置

前記(6)で記述したとおり専門部会を平成25年4月に設置した。

2. 点検・評価

(1) 学校運営組織は、適切に役割を分担し効果的に活動している。

(2) 中期計画及び年度計画の項目を踏まえて本校の総合的な状況に関して自己点検・評価が行われており、その結果は自己点検・評価報告書を作成し、本校ホームページで公表している。

また、自己点検・評価の評価結果については、毎年、外部有識者会議において検証

が行われ、その内容については、外部有識者会議報告書に掲載し、公表している。また、改善を必要とする評価結果については、事項ごとに担当する委員会等へ提起し、具体的な改善方策等の検討からその実施と学校運営会議への報告まで一貫した教育改善システム（PDCA サイクル）が構築され、有効に運用されている。

- (3) 外部評価については、J A B E E の中間審査及び大学評価・学位授与機構の機関別認証評価の認定を受け、改善を要する点については対応している。また、毎年、外部有識者会議を開催し、その提言・助言は、学校運営会議及び関係委員会等で対応を検討し、年度計画等に取り入れるなど、外部の意見を反映させている。
- (4) 危機管理体制については、迅速かつ的確に対応するために危機管理規則を定めるとともに、リスク管理室を設置し、危機管理に係る事態に迅速な対応ができる体制を整えている。
- (5) 広報活動は、本校の教育研究活動の状況について本校ホームページに掲載し、広く一般社会に情報発信している。また、積極的な情報発信手段として、イベントへの参加や地元メディアを利用するなどホームページだけではなく、さまざまな手段を用いて情報を広く分かりやすく社会に発信している。
- (6) 男女共同参画推進は、今年度から専門部会を設置し、教職員への情報提供や高専機構の男女共同参画行動計画及び女性教員比率向上のためのポジティブ・アクション等を踏まえた取組を行っている。また、高専女子ブランドを広く社会へ発信する取組も行っている。
- (7) 業務運営では、教職員の資質向上のための人事交流・研修と業務に不可欠な情報インフラの整備を計画的に行っている。また、教職員の業務負担軽減に繋がる取組を検討・実施するなど働きやすい職場環境の整備に努めている。
- (8) 前年度からの改善課題・方策にあげた事項については、計画的に対応している。

以上のことから、管理運営関係は、全般的に組織は効果的な活動を行っており、当初の計画以上に優れた取り組みが行われたと判断するが、一方で会計経理及び物品管理の業務体制並びにコンプライアンスの徹底に不十分な点があった。

よって、達成度評価はBと判断する。

3. 改善課題・方策

平成24年2月に受検した会計検査院実地検査の結果、不適正な会計処理及び不適切な物品管理との指摘を受けた。これらの改善策として再発防止に向けた業務体制の整備及びコンプライアンスの徹底に取り組んでいかなければならない。

○ 財務関係

1. 現状

(1) 資産及び債務

本校の資産は、平成16年度の法人化に伴い、国から土地及び建物・立木竹、工作物の資産を継承し、教育活動等を将来にわたって適切かつ安定して遂行するため高等専門学校設置基準に基づいた必要な資産を有している。

(2) 経常収入

経常的収入源である運営費交付金は、効率化係数の運用等により引き続き減ではあるが、今後も継続的に交付されるため、安定的に確保されている。また、その他の経常的収入源として授業料・入学料及び検定料の他、その他の自己収入として財産貸付料等が継続的に確保されている。

さらに、これらに加え産学連携等研究収入（共同研究・受託研究）、寄付金収入、科学研究費等補助金などの外部資金獲得に向け積極的に取り組み、経常的収入として継続的に確保されている。

(3) 外部資金

科研費は、採択件数が低落傾向にあったが、講演会開催や外部資金申請者に校長裁量経費への申請資格を与えるインセンティブを設けるなどの取組により平成24年度から増加に転じている。平成25年度は外部講師による講演会を開催した。受託研究は平成23年度から受入がなく、受託試験の受入も減少しているが、一方で共同研究及び寄附金の受入は前年度と比較して増加している。外部資金獲得の申請意欲向上のための取組として、外部資金の公募情報一覧をグループウェアラクターダSTに掲載している。その他、企業からの受託研究、共同研究、寄附金等の受け入れにも努力しており、平成23年度から福井高専地域連携アカデミアが技術マッチングコーディネータとして委嘱した福井県発明協会の知財専門家を活用し、会員企業と本校との技術マッチングを推進している。同知財専門家を技術マッチングコーディネータとして委嘱したことは、全ての教員に周知されている。

(4) 収支計画及び状況

本校の目的を達成するための活動の財務上の基礎として予算配分計画を策定し、学校運営会議において審議を行い、予算配分方針に基づき教育研究及び管理運営に必要な経費を配分している。その審議内容、決定事項については、教員会議、事務連絡会議を通じ、教職員に明示され周知するとともに、財務に関しては、収支予算決算額を学校要覧に掲載している。

支出については、財務会計システムで一元管理しており、過大な支出超過はない。

(5) 予算配分等

教育研究活動に必要な予算については、予算配分方針に基づき、予算配分案を

策定し、学校運営会議で審議の上、決定している。

また、校長のリーダーシップの下、教育研究活動の活性化を図るため、校長裁量経費として留保し、プロジェクト等の募集を行い、申請されたすべての事業について校長ヒアリングを実施し、必要性、有効性、継続性を審査し採否を決定し重点配分を行っている。さらに、今年度から学生のものづくりの意欲を引き出し、新しいものづくりに挑戦する機会をもってもらうため「福井高専キャンパスプロジェクト」を新たに創設した。これは、学生が自らづくり、自らそれを利用するというこで、生活しやすい福井高専キャンパスにしていくことを目的にするもので、公募及び審査のうえプロジェクトを選定している。

施設・設備については、長期的視野に立った計画的な予算配分を行うため、設備整備マスタープランを更新するための希望調査を校内で行うとともに、大型の施設・整備については、高専機構本部に設備マスタープランで予算要求を行っている。

(6) 会計監査等

本校の会計監査等については、独立行政法人国立高等専門学校機構会計規則第45条の規定及び福井工業高等専門学校会計内部監査要項に基づき、高専相互会計内部監査、会計内部監査、科学研究費補助金に係る通常監査、定時物品検査を実施し、会計経理についてその事態を把握し、これが常に適正かつ効率的に執行されるよう指導、監督並びに改善を図ってきた。しかし、平成25年2月に受検した会計検査院実地検査（検査対象期間：平成19年度～平成23年度）の結果、平成24年度会計検査院決算検査報告において、物品購入契約の不適正な会計経理が不当事項、また、不適切な物品管理が是正改善の処置を求める事項となる指摘があった。これを受けて、本校に設置した調査委員会で発生原因の調査及び分析・検証を行い、今後の改善策を策定し、再発防止に取り組んでいる。

なお、平成25年度は、10月に高専機構本部による監事監査及び内部監査並びに情報セキュリティ監査、12月に学内監査及び高専相互会計内部監査を受検し、業務の適正かつ効率的な推進と業務運営の改善の指導を受けている。

(7) 業務の効率化

国立高等専門学校機構の第2期中期計画における業務運営の効率化に関する目標を達成すべき措置を受けて、本校の年度計画では経費の削減、契約方式の見直し等の目標を設定している。平成25年度の計画は次のとおりである。

- ・ 契約にあたっては、原則、仕様策定による一般競争契約とし、競争性や透明性を高める。
- ・ 複数年契約を実施し業務の効率化を図る。
- ・ 給与支給明細書のWEB配信の承諾率を高める。

2. 点検・評価

(1) 資産及び債務

教育活動等を将来にわたって適切かつ安定して遂行するために必要な資産を有している。また、高専機構本部からの運営費交付金等の範囲内で運営しており、実質的に未払いとなっている債務もなく、健全な運営を行っている。

以上のことから、本校の目的に沿った教育活動等を、将来にわたって適切かつ安定して遂行するために必要な資産を有するとともに、債務においても適正である。

(2) 経常収入

本校の主な経常的収入源である運営費交付金等については高専機構から継続的に交付されており、安定的に確保されている。さらに、文部科学省、高専機構等が公募する各種競争的資金及び寄付金等の外部資金獲得にも積極的に取り組み、安定した教育研究活動等が展開できるような体制を整備している。

以上のことから、学校の目的に沿った教育研究活動を安定して遂行するための、経常的収入が継続的に確保されている。

(3) 外部資金

科研費について、申請件数の拡大及び採択率の向上を目指した講演会開催等の取組の結果、平成25年度の採択件数は前年度と比較して増加した。その他外部資金についても公募情報の提供を行い、申請意欲の向上を図っている。また、福井高専地域連携アカデミアが委嘱している技術マッチングコーディネータを活用することで、共同研究、受託研究の新規開拓について学校全体で推進している。

以上のことから、学校の目的を達成するために、外部資金獲得の方策を策定し、実行しているが一層の取組が必要である。

(4) 収支計画及び状況

財務に係る計画等については、本校の目的を達成するため、独立行政法人国立高等専門学校機構が掲げている中期目標、中期計画及び本校の予算配分方針に基づき、教育研究及び管理運営に必要な経費を学校運営会議において審議し策定している。

また、学科（教室）等配分額表においても学校運営会議で審議されたものを教員会議において教職員に明示し周知されるとともに、その具体的施策についても学校運営会議及び教員会議で周知を図り実施されている。

収支決算については、財務会計システムで一元管理されており毎月締め作業を行い確認しているため過大な支出超過になっていない。

以上のことから、収支は適正に管理されており、過大な支出超過はない。

(5) 予算配分等

学内の予算配分では、事業の継続性及び円滑な実施に配慮した予算配分となっており、その内容は学校運営会議で審議し、その結果を教員会議で明示している。

また、校長のリーダーシップの下、教育研究活動の活性化を図るために校長裁量経費を留保し、申請されたすべての事業について校長ヒアリングを実施し、必要性、有効性、継続性を審査し採否を決定し重点配分を行っている。

さらに、施設5か年計画及び設備整備マスタープランを更新し、長期的な視野に立って計画的な施設・設備整備を実施するための予算配分を行っている。なお、平成24年度補正予算において、国立高等専門学校教育研究基盤強化経費が措置されたことに伴い、本校の高度化に必要な教育研究設備等が整備された。上記のほか、今年度は、図書館及び地域連携テクノセンター改修に伴う移転費及び建物新営設備費に要する予算を確保のうえ配分した。

以上のことから、適切な予算配分等がなされている。

(6) 会計監査等

本校の内部監査は、会計処理に熟知した事務職員により監査を実施している。

また、監事監査等及び高専相互会計内部監査によりが本校教職員以外の者による監査が実施されている。

ただし、会計検査院の指摘を受けて、平成24年3月の高専機構理事長通知「公的研究費等に関する不正使用に関する再発防止策の徹底について」の実施状況の確認や物品検査等の実施方法に改善を要する点がある。

(7) 業務の効率化

経費の削減につながる主な取組としては、電力需給の逼迫に伴う対策として、夏季及び冬季に教職員による節電パトロールを実施し、空調機器の管理を徹底し、省エネに努めた。

契約にあたっては、会計規則に定める一般競争契約適用基準額を超える案件は、原則、一般競争契約の実施を徹底し、基準額に満たない一定額以上の案件にあつては複数者による見積合せを実施し、競争性・透明性を図っている。また、複数年契約の導入は実施可能なものから実施することとし、外部接続回線サービス契約で適用した。

常勤教職員の給与支給明細書のWEB配信の承諾率は、新任教職員オリエンテーション等での周知や個別説明の実施により平成24年度末で83%であったが平成25年1月現在で約88%となっており、約5ポイント向上している。

以上のことから、業務の効率化については前向きに進められている。

(8) 改善課題・方策の取組状況

- ① 平成25年度は、平成24年度補正予算による大型設備整備に伴う機械実習工場の整備並びに図書館及び地域連携テクノセンター改修に伴うに新営設備の整備など校長のリーダーシップの下、効果的な執行に配慮した予算配分を行っている。
- ② 科学研究費補助金の申請・採択の向上のための教職員への啓発活動として科研費講習会の開催や新任教員を科研費説明会に参加させるなど外部資金獲得に向け

た取組を継続的に実施している。

- ③ 業務の効率化の推進においては、引き続き、経費削減につながる取組として環境・省エネの観点から光熱水量の削減を実施している。契約業務では複数年契約を導入できる契約事案から実施している。また、給与支給明細書のWEB配信の承諾率を高める取組にあつては、新任教職員オリエンテーション等での周知や個別説明の実施など推進が必要である。

財務関係は、全般的に適正な業務が行われている。平成24年度補正予算が措置されたことに伴い教育研究の基盤となる施設・設備等の充実が図られ、計画どおりの成果を上げている。外部資金獲得や業務の効率化にあつては一層の取組・推進が必要な点がある。また、会計検査院実地検査の結果、会計監査の体制に不十分な点がある。よって、達成度評価はCと判断する。

3. 改善課題・方策

- ① 科学研究費補助金の申請・採択の向上のための教職員への啓発活動や受託研究・共同研究等の実施に必要な施設・設備の充実を図るなど、引き続き外部資金獲得に向けた取組が必要である。
- ② 平成24年度会計検査院決算検査報告での指摘を受けて、会計経理の監査体制の見直しを図るとともに、引き続き「公的研究費等に関する不正使用に関する再発防止策の徹底について（平成24年3月高専機構理事長通知）」の実施を徹底し、再発防止に取り組まなければならない。

IV-2. 各学科・教室等に関する事項

○ 機械工学科

1. 教育理念・教育目標

機械工学は、「ものづくり」のための産業基盤として不可欠な学問分野であり、今後とも豊かな社会を作り出すために中心的役割を担うと考えられる。機械工学科では「ものづくり」のための基礎的知識や技術を習得させると同時に、機械技術の高度化、多様化にも十分対応できる広い視野と実践的で総合的な設計・開発能力を持った技術者の養成を教育理念とし、次の3つの教育目標を掲げている。

- ・ 機械技術者として必要な基礎学力の育成
- ・ 技術革新、高度情報化社会に対応できる能力の育成
- ・ 創造性・実践的能力の育成及び人間力の育成

また、学科の教育内容の特徴として、次の3つがあげられる。

① 創成科目や実験実習等の体験型科目が充実したカリキュラム

アイデアを出して一つのものを作りあげその性能をコンテスト形式により評価する創成型授業や、実際に手を動かして頭で考える実験実習などの体験型授業が充実している。

② 機械工学の基礎学力を身に付けるカリキュラム

機械工学の根幹となる材料力学、熱力学、流れ学、振動工学などの科目においては、課題や演習を多く取り入れ、機械工作法、材料学、機械設計法、機構学などの科目においては、機械製図や機械工作実習などで学んだ例を用いるなどして、学生の理解を深めながら機械工学の基礎知識を習得させている。

③ コンピュータや情報制御技術を用いて創造力・総合力を養うカリキュラム

先端ロボットに代表されるように、最近の機械は知能化・自動化の技術が目覚しく進歩しており、コンピュータやIT技術を多く取り入れた授業カリキュラムとなっている。

2. 将来計画

(1) 学科カリキュラムの見直し

前述したように機械工学科では、体験型・創成型授業を多く導入しているが、これらの科目間の連携や統合により、学科カリキュラムのさらなる充実を図ることが重要である。また、高専機構のモデルコアカリキュラムとの整合性や、本校における平成26年度からの90分授業の導入に伴う単位数や授業内容の検討も必要である。そこで、このような背景から、ワーキンググループを立ちあげて機械工学科の教育課程の見直しを行い、来年度から新しいカリキュラムを実施予定である。主な

変更内容は、次のとおりである。

3年「創造工学演習」は、「機械工作実習Ⅱ」に変更して、実習系授業を充実させる。また、知能機械演習で実施しているラインレースロボットでは、メカトロニクスの基礎的知識が必須であるため、3年で「メカトロニクス実習」を新設し、4年の「知能機械演習」に繋げる。さらに、「アイデア設計工学」で実施していた内容を「知能機械演習」に移行・統合し、この科目を廃止する。「知能機械演習」は2単位から3単位へ増やし、2台のロボットを製作することで内容を充実させる。なお、5年の「メカトロニクス」「電子応用」は、授業内容をメカトロニクス実習、ロボット工学、センサ工学に統合し、廃止する。一方、「機械設計製図Ⅲ」を「CAD・CAE」に変更し、実社会の企業で必要となる基本的な機械設計のスキルを習得体験させる。「工業力学」は、5年の振動工学に繋がる力学系の根幹となる科目で、1単位から2単位に増やす。「生産技術演習」は、企業の方によるオムニバスの授業であったが、教育効果が薄れてきたため、廃止する。「伝熱工学」は、モデルコアの内容を多く含み、機械技術者が修得すべき内容であるため、選択科目から必修科目に変更する。5年通年2単位で実施していた必修科目「自動制御」、「振動工学」は、前期の必須科目「自動制御Ⅰ」「振動工学Ⅰ」（それぞれ1単位）と、後期の選択科目「自動制御Ⅱ」「振動工学Ⅱ」（それぞれ1単位）に変更する。

今回の改正では、機械工学の基盤となる授業はモデルコアカリキュラムを考慮しつつ科目間の連携や統合、単位数の見直しを行うとともに、体験型科目・実習系科目の充実を図ることで、当学科のカリキュラムの特色を出した。なお、将来的には、機械設計製図や工作実習を創成型授業とリンクさせた総合的ものづくり教育の実践を検討したい。

(2) 設備の更新による実験実習や研究の充実

今年度、平成24年度の補正予算事業により機械工学科の実験機器と実習工場の工作機械が大幅に更新された。具体的には、最近の機械の精密化に対応した測定装置として、超精密表面形状粗さ試験機、高精度CNC三次元測定機、歯車試験機、超微小押し込み硬さ試験機が導入された。いずれも、ナノ・マイクロメートルオーダーで様々な表面性状や三次元形状の高精度測定が可能な装置で、これらは温度を管理した機械工学科の実験室に設置した。また、従来と比べ精密な位置決めと速度制御が可能な精密万能試験機や、超微細加工が可能なレーザ加工機も導入された。一方、実習工場では、汎用精密旋盤、立てフライス盤、ホブ盤、汎用精密コンターマシン、鍛造加熱炉、精密平面研削盤といった工作機械の更新に加えて、リニアモータを搭載し複雑形状の精密加工が可能なワイヤ放電加工機や、従来の工作物回転主軸に加え工具回転主軸も備え旋削と溝加工等の複合加工がプログラミングにより可能なCNC旋盤が導入された。また、実習工場では、工作機械のレイアウトを変更し安全性を確保するとともに、床面も改修整備され明るく綺麗になった。

今後は、これらの新しい設備を用いることで、実験実習の内容やテーマを見直してより高度で充実した内容の実験実習や卒業・特別研究を実施していきたいと考えている。



超微小押し込み硬さ試験機



実習工場のレイアウト変更と床面改修整備

3. 重点課題

(1) 入学志願者の確保

平成25年度入試における機械工学科の志願者倍率は、推薦・学力合せて1.38倍と、前年度(1.60倍)と比べて減少した。特に、推薦の志願者が少なく、学力試験でも成績優秀な中学生の志願者を確保できなかった。15歳人口は減少傾向にあり、入学志願者の確保は学科の最重要課題と認識している。今年度は、中学生に配布する冊子(高専の歩き方)の内容を刷新した。また、オープンキャンパスでは、デモ実験を通して機械工学の魅力を中学生に分かりやすくアピールした。さらに、女子中学生向けの体験学習、中学生を対象にした公開講座、出前授業での学科PRなどを通して、志願者確保に向けた活動を行った。

(2) 身体に障害を有する学生への対応

本年度、身体に障害を有する学生が、機械工作実習や機械製図等の専門科目が開講される2学年へ進級したことに伴い、学習に支障を来さないように実験室等におけるバリアフリー化、安全対策や教員配置も含め、最大限の配慮を行い適切に対応した。

(3) 基礎学力の向上

基礎学力の養成はいつの時代も重要課題の一つである。本学科ではこのことを大きな問題点であると認識しており、学生に基礎学力を養成させることに授業の重点を置いている。

4. 進学・就職指導状況

平成25年度卒業予定者35名のうち、就職希望者は19名（卒業予定者の54.3%）、進学希望者は15名（卒業予定者の42.9%）、その他（自営）は1名で、就職・進学の割合は昨年度とほぼ同じだった。就職希望者の内訳は、県内4名（就職希望者の26.7%）、県外11名（就職希望者の73.3%）で、全員内定を取得し進路が決定している。しかしながら、中には第一志望の就職先に不本意ながら不合格となる者も見受けられた。平成26年3月当学科卒業予定者に対する企業求人数は572名（県内53名、県外519名）、求人倍率は30.1倍で、前年度の求人数と比べて100名程度増加した。機械工学科の就職先の特徴は、機械関連分野はもちろん、電気電子・情報・化学・材料など極めて幅広い産業分野に及んでいることである。一方、進学希望者15名の内訳は、大学6名（推薦3名・学力3名）、短大1名、専攻科8名（推薦8名）で、全員合格し進学先を確保している。特に、専攻科の推薦入学希望者を学科として8名確保できたことは、専攻科の定員確保と今後の充実という意味で意義深い。進路指導においては、基礎学力向上に加えて、先輩講座などの早い段階でのキャリア教育の充実を図っていきたい。

5. 特色ある教育・研究の取り組み・活動等

(1) 他学科と共同で開発したものづくり教育

「C言語応用」では、これまで利用していたLEGO Mindstormに代わって、プログラミングを重視したArduinoマイコンを用いたサッカーロボットを導入し、制御プログラミングと回路設計・製作を融合した組み込み系技術者の育成のための新しい授業を電気電子工学科と共同で開発し今年度から導入した。さらに、学科間でコンテストを行い、学生のモチベーション向上、異分野技術の理解を図った。



学科混合サッカーロボット大会の風景



開発コンセプトのプレゼンテーション

(2) ものづくり創成科目による創造力・プレゼン能力・チームワーク力の育成

3年「創造工学演習」では、与えられた課題（テーマ）に対してチームでアイデアを出してグループ討論を行い、1台の操縦型ロボットを製作して、そのロボットの開発コンセプトをプレゼンテーションした後コンテストを行う授業を実施している。今年度も、レスキューロボットの開発を視野に入れて、実際の建物の階段を掃除するロボットのコンテストを実施した。4年「知能機械演習」では、4人一組のグループで1台の知能ロボット（空き缶回収ライントレースロボット）を製作しコースのタイムを競うデモを行っている。車体及び自作回路の設計製作や制御プログラムを開発することで、機械・電気電子・情報の融合複合教育も実践している。



階段掃除ロボットコンテストの風景



空き缶回収ライントレースロボットの競技

(3) 資格取得の奨励と試験対策の補講

機械工学の専門基礎学力の向上及びキャリアアップに繋がる資格取得を目指して、日本機械設計工業会機械設計技術者3級資格の取得を奨励している。その資格試験対策の補講を、機械工学科教員で分担して10月から11月にかけて土曜日（3h×9回）に実施した。今年度は、夏休み前の早い時期から学生を勧誘したが、参加者は14名と昨年度より少なかった。

6. 点検・評価

平成25年度アクションプランの計画では、(1) オープンキャンパス・公開講座などで機械工学の魅力を広くアピールするとともに、入試説明会などで中学生に配布するパンフレットの内容の見直しを検討してより効果的な広報活動を行う。(2) 昨年度他学科と共同で開発した授業・教材を導入し、創成科目の一つであるC言語応用において他学科混合でコンテストを行う。(3) 機械工学におけるエンジニアリングデザインとしての基礎能力を養うために、「機械設計技術者3級試験」の資格取得を奨励し、受験対策のための補講を行う。(4) ワーキンググループを立ちあげて、学科カリキュラムの見直しの検討を行う。また、その際にモデルコアカリキュラムとの整合性も考慮する。(5) 創成科目や実技系科目を通して実践的なものづくりセンスと創造力を育成するとともに、「エンジニアリングデザイン教育取組事例集」など他高

専の事例内容を調査し教育方法の改善に参考にできないか検討する、という目標を掲げた。(1)～(4)に関してはほぼ達成できており、(5)の他高専の事例内容を参考にする点では、総合実習の導入などで現在検討中である。総合的にはおおむね達成できたと判断し、達成度評価はAと判断する。

7. 改善課題・方策

改善すべき課題として、専門科目も含めた基礎学力の向上があげられる。来年度の学科カリキュラムの変更に伴い、4年の「工学演習」の実施内容を見直す予定である。学生の確実な学力の定着につながるように取り組みたい。

○ 電気電子工学科

1. 教育理念・教育目標

電気・電子、情報・通信は、社会の基盤技術であり、今後も拡大、発展が予想される。電気電子工学科は、情報・通信から制御、エレクトロニクス、光・電子デバイス、材料、エネルギーまで幅広い知識を学び、独創力を身に付け、社会に対する責任を自覚し、「地球にやさしく、人にやさしい21世紀」をつくる技術者の育成を目指す。

(1) 電気電子技術者に必要な専門的かつ総合的な基礎力の育成

電気電子技術者のベースとなる電気回路、電磁気学、電子回路、コンピュータ技術の基礎を学んだ後、光・電子デバイス、エレクトロニクス、コンピュータ、コミュニケーション、新エネルギーといった電気電子、情報通信に関連する幅広い分野の専門科目を習得し、新たな夢の実現に向けた新しい技術を開発する際に必要とされる基礎力を育成する。

(2) 幅広い専門分野に適応できる応用力の育成

情報家電や光通信用電子機器を作り出すエレクトロニクス技術、電気自動車やロボット、システムをコントロールする電子制御及びプログラミング技術、インターネットやモバイル通信を実現して情報技術革命を先導する情報通信・情報処理技術、環境に優しいクリーンエネルギー技術などを幅広く学ぶことで、新しい技術開発に適応でき、国際的に通用する電気電子技術者を育成する。

(3) 独創力及びコミュニケーション能力の育成

情報技術革命・ナノテクノロジー、新エネルギー技術に象徴される地球規模での科学技術の急速な発展に対応するため、論理的思考能力、表現力、グローバルな視野、さらに諸現象に対する洞察力や知的探求心を培うものづくり教育、実験・実習を中心とした自己獲得型技術教育を通して独創力の育成を図る。さらに、様々な社会体験教育を推進することでコミュニケーション能力を育成する。

(4) 下記に示すアドミッションポリシーを提示し、これに対応する電気電子技術者に必要な基礎力を育成する。

- ・ ロボット、システム、コンピュータなどを動かすための電子制御やプログラミング技術を学びたい人
- ・ 情報家電や光通信などに使用する電子回路や情報通信技術を学びたい人
- ・ 電気自動車や太陽光発電などに使われる環境にやさしいクリーンエネルギーや新素材技術を学びたい人

2. 将来計画

電気電子工学科は、社会の中長期的な要請に基づき、教育内容の充実を図っていく。
具体的には、

- ・ 授業内容の充実
- ・ 電気電子工学実験の充実
- ・ 卒業研究、特別研究の充実
- ・ ものづくり・創造性育成教育のさらなる充実
- ・ 工業英語力の向上
- ・ 国家資格の取得をサポートする体制の確立
- ・ 技術者倫理教育並びに知的財産教育の充実
- ・ 放射線教育の充実

3. 重点課題

(1) 入学志願者の確保

小中学校での出前授業・公開講座・地域連携事業参画・地域企業との共同研究などの活動を通じて地道に小中学生と保護者への電気電子工学科に対する認識を深め、入学志願者の確保へ繋げる。また、現在の電気電子工学科において女子学生が少ないことを考え、女子学生を増やす施策を進める。

(2) 専門科目の充実

- ① 基礎学力の向上と定着
- ② 社会的要求に対応した技術者倫理教育並びに創造性の育成を目指した知的財産教育の充実
- ③ 情報機器の発達に伴う情報教育の高度化

以上の目的を実現するため、平成24年度にカリキュラムの改訂を行なった。これらに関連する科目の授業内容を重点的に充実し、さらに学生実験、卒業研究・特別研究の充実を図る予定である。

(3) 地域連携、地域貢献の充実

電気電子工学科では、従前より地域との共同研究、地域イベントへの参画、出前授業、公開講座などを実施してきている。それらの実績を踏まえ、これまでの実施内容について精査し改善を図るとともに、電気電子工学分野における学科としての地域連携、地域貢献のあり方についても継続的に検討し、より効果的な施策を推進していく。

(4) 放射線教育の充実

福井県には多数の原発が立地しており、電力会社等の原子力関連企業に就職する学生は多い。また、非破壊検査や食品への放射性物質の混入検査など多くの産業分野に、放射線機器の利用が広がっている。従って、放射線教育は今後も必須である

と考えている。放射線教育の更なる充実が必要である。X線作業主任者や第1種放射線取扱主任者に合格者した学生はこの20年間で80名になる。

4. 進学・就職指導状況

平成25年度卒業予定者41名のうち、就職希望者は27名、進学希望者は14名となった。就職希望者は全員就職先が内定しており、県内10名、県外17名となった。

当学科卒業予定者に対する求人企業数は507件にのぼった。電気電子工学科の就職先の特徴は高い求人数に加えて、電気・情報・化学・材料、機械、エネルギーなど幅広い産業分野に及んでいることである。進学希望者14名の進学先の内訳は、大学9名（金沢大学、福井大学、長岡技術科学大学）、本校専攻科5名となった。

5. 特色ある教育・研究の取り組み・活動等

- (1) 3年生の情報処理Ⅱでは、機械工学科と同じ教材・内容でサッカーロボットの組み込み系プログラミング演習を行い、学科混在のサッカー大会を競わせることで創造性を育む教育を実施している。
- (2) 本科4年実験において、指導者側で具体的な課題設定をしない「課題発見型」の方法を試みている。指導者は考察の対象となる「素材」のみを与え、自らでその動作原理を調べ、考える。次に、それを実験で実証するためには、どのような実験を行えばよいかを自らで考え、実際に実験を行い、結果について考察する。
- (3) 2年生の情報処理Ⅰでは、最終課題として各自が作成したプログラムをクラス全員で評価するコンテスト形式のプログラミング演習を行うことにより、創意工夫の発展と1年間の学習成果を実感する教育を実施している。
- (4) 3年生の電子創造工学では、グループによるライントレースマシンの製作を行い、コンテスト形式の競技会で競わせることにより創意工夫の発展とプレゼンテーションを通じた創造性を育む教育を実施している。
- (5) 3年生の工学実験と特別活動の時間を活用して、北陸電力の三国太陽光発電所と福井工業技術センターを見学し、太陽光発電所の実態を把握し、福井県工業技術センターの最先端設備の実演を通してセンターの役割の重要性を認識した。
- (6) 専攻科の少人数教育の特徴を生かして、演習課題の解法に関するプレゼンテーション機会を毎回参加学生全員に与えるような教材を作成し、自学自習の動機付けをして教育効果を高める配慮を行うとともに、ディスカッション能力の向上を図っている。
- (7) 電気電子工学科出身の専攻科生が、タイ国にあるプリンス・オブ・ソクラ大学に夏の1か月間滞在し、工学部の制御系研究室においてインターンシップを行った。研修はすべて学生本人が英語でコミュニケーションを取りながら進め、国際間感覚を養うと同時に自身のキャリアアップに資することができた。

- (8) 平成25年度知的財産に関する創造力・実践力・活用力開発事業の一環として、ものづくりに必要な知識と技術を実践的に身に付けさせるとともに知的財産マインドを育てるためにアイデアものづくりコンテストを各学年で実施している。
- (9) 中学生を対象とし、自律ロボットの製作を通じ、ハードウェアからマイコンプログラミングまで、組み込みシステムの基本を習得することを目的として公開講座「自律ロボット製作入門」を実施した。市販のリモコン玩具にマイコン、センサなどを組み込み、参加した中学生は自律ロボットの製作を行った。講座終了後のアンケート結果では、参加中学生の全てが「十分満足」「だいたい満足」と回答し、「普通」以下の回答はなかった。また、講座内容について全員が「とても面白い」「面白い」と回答し、「普通」以下の回答はなく、好評であった。
- (10) 卒業研究において、ステレオカメラを搭載した電気自動車 RoboCar® MV2 及び 1/10 サイズの RoboCar® 1/10 を導入した。通信技術を用いた遠隔操作、画像処理及び車体制御を合わせた運転支援技術や予防安全技術の開発を行っている。
- (11) 電気電子工学科卒業生で現専攻科学生2名が、香港で開催された国際会議 (ISTS 2013) で11月に発表した。それぞれの研究発表題目は、「Brain Wave Electrode using Multi-wall Carbon Nanotube-dispersed PMMA Thin Film」と「Hydrogen Gas Sensor Using Multi-wall Carbon Nanotubes」である。

6. 点検・評価

(1) 入学志願者の確保

東日本大震災における福島原子力発電所事故以来、原子力発電所の再稼働問題や送配電分離など電力会社を取り巻く社会環境が厳しくなっており、情報家電メーカーの赤字、リストラなどが、連日報道され、入試倍率が大幅に低下する社会情勢にある。こうした状況の中で、オープンキャンパスと公開講座の内容について見直し、中学生の満足度を向上させるための工夫をした。さらに、出前授業などの広報活動をした。一方、入試説明会において電気電子学科に入ると何が学べるのかに力点を置いた説明をした。しかし、平成26年度の推薦選抜の志願者は昨年度の26人に比べ13人減少した。学力選抜の志願者数が42人であったので達成度評価はBと判断する。

(2) 専門科目の充実

平成24年度に技術者倫理教育や知的財産教育に対する社会的要求の増大、情報化社会の高度化への対応、学生の基礎学力の向上を目指して大幅なカリキュラム改定を行った。本年度は2年目になるので、これら新規導入科目の内容について点検・評価を行った。新規導入科目の電気電子工学演習Ⅰ、電気電子工学演習Ⅱは数学、物理、電磁気、回路の復習を演習形式で行ない、基礎力の強化に努めてきた。情報処理Ⅱの授業では、サッカーロボットを製作し、競技会方式で機械工学科3年生と

対戦し、学生の興味を引き出した。また、工業英語ではネイティブスピーカー（外国人）を非常勤講師に採用し、生きた英語を提供し学生には好評であった。

エンジニアリングデザイン教育の目的は、問題発見・解決能力の高い技術者を育成することである。この目的を達成するためには、学生が自ら持っている知識・情報・技術を用いて社会的・技術的な問題を自ら発見し、自ら解決することを体験させる必要がある。電気電子工学科では、学年毎にレベルアップするコンテスト形式のものづくりを通して、エンジニアリングデザイン教育を実践している。学生は講義で習得した知識に基づいて考え、計画を立ててものを製作・プレゼンし、評価される。2～4年生対象に「ものづくりアイデアコンテスト」を実施しているが知的財産の専門家に審査・講評をお願いしている。3学年の電子創造工学では、グループによるライントレースマシンの製作を行い、コンテスト形式の競技会で競わせることにより創意工夫の発展とプレゼンテーションを通じた創造性を育む教育を実施している。3学年の電気磁気学Ⅱでは、“in situ”型演習・実験を実践し、学生にオリジナルのスピーカを制作させた。

知的財産を創造し、これを保護・活用することによって、我が国を持続的に発展させる知的創造サイクルを確立するために、高専においても知的財産に明るい人材を育成することが求められている。平成22年から工業所有権情報・研修館（INPIT）の知的財産教育推進協力校事業に参加してきた。平成25年度もこの事業に参加している。

これらの活動が評価されて、本校として日本電気協会主催の教育エネルギー賞の高校・高専の部において最優秀賞を受賞したので、達成度評価はAと判断する。

（3）地域連携、地域貢献の充実

電気電子工学では、地域連携、地域貢献のあり方について検討し、より効果的な施策を推進していくという目標を立て、公開講座については充実を図った。共同研究については、株式会社エムディエス、株式会社埴エンジニアリング、福井大学、長岡技術科学大学に加え、若狭湾エネルギー研究センターと行っている。参加した地域のイベントとして、鯖江環境フェア、青少年のための科学の祭典、こどもエコクラブ活動交流会などに積極的に参加したので、達成度評価はAと判断する。

（4）放射線教育の充実

本校は原子力立地県に位置する技術者育成の高等教育機関として、放射線に対する正しい知識と理解を基礎的素養として身に付けさせることを主眼とした原子力人材育成教育を目指しており、今年度は3つの原子力人材育成プログラムに携わっている。特に電気電子工学科では、電力会社等の原子力関連企業に就職する学生も多く、複数の科目で原子力・放射線の内容を教授すると共に、日本原電研修センターでの放射線スクリーニング研修を行うなど積極的に原子力・放射線教育に取り組んでいる。今後とも原子力・放射線教育を系統的かつ継続的に実施できるよう充実を

図る予定であるので、達成度評価はBと判断する。

7. 改善課題・方策

- (1) 電気電子工学科の志願者を増やすため、学科パンフレットの一新、学科ホームページの充実、オープンキャンパスの内容変更を行う。また、公開講座や出前授業等で電気電子工学科の魅力を積極的に発信する。
- (2) 昨年度の補正予算で、最先端で高機能を有する実験設備や機器が導入されたので、学生実験・実習のテーマを見直して専門教育の充実を図るとともに、研究レベルを向上させて地域貢献する。
- (3) モデルコアカリキュラムに基づいて、平成26年度から教授内容を変更する予定である。学科内のワーキンググループにおいて、実施にかかる問題点の洗い出し及び改善策を検討する。

○ 電子情報工学科

1. 教育理念・教育目標

「情報」とは人間の知的活動を支える根源であり、あらゆる問題解決に必須のものである。

電子情報工学科は、インターネットやIT機器の基盤技術であるコンピュータ技術、情報通信技術、及びロボットに代表される制御技術の各分野で、コンピュータと情報を駆使して種々の問題を解決するエンジニアの養成を教育目標にしている。

電子情報工学科のアドミッションポリシーは、以下のとおりである。

- ・ コンピュータの仕組みやプログラミングに興味がある人
- ・ ネットワークを活用したり、知能ロボットを動かすプログラムを作りたい人
- ・ 未来のIT機器の開発をやってみたい人

2. 将来計画

電子情報工学科では、情報を活用したものづくりのための開発研究型技術者を輩出するための教育及び実験実習の環境整備に向けて、補正予算や校長裁量経費を活用し、創造系演習や卒業研究にも活用できる実験設備の充実に取り組んでいる。平成25年度は3次元設計製作環境、VHDLによるハードウェア実験設備、汎用の教育用ロボット、ハードウェア制御と連動したタブレット実験設備などを導入した。今後は、これらの機材を活用した実験カリキュラムの見直しや、実験指導書の改訂などに取り組む計画である。

近年の理系女子技術者への要望が高まる中、電子情報工学科では創設時より定員の20%～35%の女子中学生を受け入れ社会に送り出している。しかし、平成17年以降は女子学生数の比率低下が続いたが、本校全体での女子中学生へのPRで平成23年度より増加に転じ、平成25年度入学生は約20%を維持することができた。情報分野では、女子技術者の活躍のための地盤もあることから、学科PRとともに女子中学生に対しても魅力あるカリキュラムを展開し、志願者数増加を目指していく。

平成28年度からの高度化を踏まえたカリキュラムの検討では、昨年度までの取り組みでコアカリキュラムに対する充足が確認できた中、他学科との差別化を図るべく情報通信系の科目の強化を目指している。この中で平成25年度より4年の創造工学演習に本学科出身の企業技術者を非常勤講師に招き、学科教員と協力し情報通信系のプログラム開発の指導を受けている。5年の情報ネットワークの授業でも、担当教員の交代に合わせプログラミング演習を中心にしたカリキュラムに変更している。一方、ハードウェアの仕組みの理解を高めるために、VHDLなども含めたハードウェア設

計のカリキュラムを増やすべく、5年の半導体工学に代わり高度化の実施に合わせて集積回路工学（案）を開講すべく準備を進めている。

学科スタッフについては、平成23年度に1名、平成24年度に2名の助教の新任教員を迎える一方で、平成27年に1名の教員が定年を迎える。このことから科目の引き継ぎし新任教員に担当を変更すべく検討を行う一方、定年による欠員を埋めるべく情報通信やネットワーク技術などの指導のできる教員の採用に向け検討を行っている。

3. 重点課題

平成25年度は、4年生のPBL型授業である創造工学演習の学習成果の中から「全国高専プログラミングコンテスト（以下、高専プロコンと略）」に、課題部門1件、自由部門2件、競技部門1件を応募した。創造工学演習では企業技術者を非常勤講師に招き、直接的にシステム開発指導を受けた成果もあり、自由部門1件、競技部門1件が本戦に臨んだ。「ふくいソフトウェアコンペティション2013」では1名が奨励賞を受賞し、この他にも「福井発！ビジネスプランコンテスト2013」に1名、福井県歯科医師会主催の「歯みがきロボットコンテスト」に2チームが参加した。さらに卒業研究・特別研究の内容を踏まえ、組み込み型ソフトウェアデザイン能力を競う「ETロボコン」に1チームが参加している。このように多くの学生がPBL型授業の成果を踏まえ、意欲的に各種コンテストに継続的に参加できている。将来起業を見据えた準備の支援を行うアントレプレナーサポートセンターを、電子情報工学科の学生2名が利用するなど、学生の積極的な創成意欲が根付いている。

毎週日曜日11時から1時間、地域FM局「たんなん夢レディオ」で放送中の本校のPR番組は開始から平成25年度で7年目に入っており、番組制作では「福井高専放送メディア研究会」の学生と電子情報工学科教員の協力の下、多様な組織との協働に継続して取り組んでいる。さらに、地域貢献では「越前市中学生ロボコン」の準備のための出前授業を実施した。また、プログラミングに興味をもつ小学生を対象の出前授業「子供向けプログラミング教室」を実施している。開催運営協力している歯みがきロボットコンテストに先がけて、「歯みがきロボット工作教室」を開催している。夏休み期間中には、小中学生を対象とした「はじめてのコンピュータ制御」、「はじめてのかんたんプログラミング」と2回の公開講座を開催した。

4. 進学・就職指導状況

平成25年度の卒業予定者29名のうち、進学希望者は14名、就職希望者は15名であった。進学希望者のうち本校専攻科に1名、国立大学に13名が内定している。内訳は、東京農工大学2名、名古屋大学1名、名古屋工業大学2名、京都工芸繊維大学1名、九州大学1名、金沢大学3名、福井大学2名、長岡技科大1名であり、進学

希望者全員の合格が決まった。電子情報工学科の平成25年度求人数は、県内49人、県外457人であり、昨年度比で全体では23%増となった。

県内企業に就職内定した学生は4名、県外企業に就職内定した学生は、東京都5名、神奈川県1名、大阪府2名、京都府1名、富山県2名の合計11名であり、就職希望者15名全員の就職内定が決まった。一時期の就職難の状況は少しずつ改善しているが、各企業は厳しい選考の中から優秀な学生を見つけるべく、推薦応募から自由応募に切り替える企業が目立っており、特に情報系企業ではそのほとんどが自由応募となっている。今年度はインフラ系企業に内定した推薦応募の3名を除き、情報系企業への就職内定を得た学生は全員が自由応募であった。

5. 特色ある教育・研究の取り組み・活動等

PBL型授業の「創造工学演習」では様々なコンテストへの参加を目標に掲げ、実践的なシステムづくりを実施している。特に組込系ハードウェアやネットワーク技術に取り組んでおり、電子系・情報系と幅広い取組みができるような指導を行なっている。平成25年度からは企業の実践的技術も取り入れるべく、OB技術者を非常勤講師に招き4年創造工学演習の指導や4年ソフトウェア工学で協力を得た。この指導を受けた学生が高専プロコン本戦に参加したことから、平成26年度も継続して非常勤講師を依頼している。

一方、電子情報工学科では地域貢献の一環として、福井県歯科医師会の要請を受け、歯みがきの啓蒙及び子どもの理科離れ対策として、平成19年より歯みがきロボットコンテストの運営協力を行なっている。また、重点課題でも述べたように地域FM局「たんなん夢レディオ」での活動も継続し7年目を迎え、地域に本校をPRする一端を担っている。

電子情報工学科では、以前からものづくり教育に力を入れ基板作成や機械加工の設備の環境を整えていたが、平成25年度の補正予算にて3次元設計製作環境を整備した。このシステムでは、3次元スキャナや3次元プリンタにより、同好会活動・各種コンテスト・卒業研究で必要となる治具や筐体を、3次元形状に合わせて設計・製作することが可能となった。これらの環境は数学教材の製作や地場産業での活用など、異分野・異業種と連携も期待できる。

6. 点検・評価

重点課題に掲げている、様々なコンテスト参加を目標とした「創造工学演習」では、新たに企業技術者による非常勤講師の協力体制を築くことができ結果として高専プロコンの本戦に出場している。学生は昨年度に引き続き多様なコンテストに数多く参加しており、学生の創成意欲の成果があることから、達成度評価はAと判断する。入学試験受検者の確保に向けて、将来計画で述べたように女子中学生の受検者増を目指し

てオープンキャンパスを開催し、電子情報工学科の女子学生数の増加にもつながっている。さらに小中学生対象の公開講座など高専への志願者の増加につながる取組みも実施されていることから、達成度評価はAと判断する。

将来計画を見据えたカリキュラム改善では、重複のあるカリキュラムを見直し、コアカリキュラムで充実が求められているハードウェア記述言語などを扱う集積回路工学（案）の開講に向け準備を進め、高度化を踏まえて情報ネットワーク系科目の見直しができたことから、達成度評価はAと判断する。

進路指導では、就職進学希望者数は例年より少ない29名ではあった。就職希望者については情報系企業の選考が自由応募だけとなり従来にはない指導を求められたが、就職希望者全員の内定が決まり、進学についても同様に全員の進学が決まった。このことから進路指導に関する達成度評価はAと判断する。

7. 改善課題・方策

PBL型の情報系のコンテストでは、プレゼンテーション能力を問われることが増えてきた。さらに就職後の進路でもプレゼンテーション能力は重要であることから、PBL系演習科目や卒業研究ではプレゼンテーションの手法についても細かな指導を行うように改善していきたい。

本校では、モデルコアカリキュラムや高度化についての取組みが行われており、コース制の考えを取り入れたカリキュラムの検討が求められている。電子情報工学科では、これらに対応するとともに、情報をネットワークなどと結びつけたシステム構築のできるエンジニアを養成できる体制を築いていきたい。

○ 物質工学科

1. 教育理念・教育目標

物質工学科は、材料工学あるいは生物工学の分野において、基礎的知識と技術を身に付け、論理的思考能力を備えた実践的で創造性豊かな技術者の育成を目指し、その教育理念は以下の3項目である。

- ① 産業基盤である素材（物質）を化学の視点で学ぶ技術者を養成する。
- ② 科学技術の発展（社会のニーズ）に適応したバイオ・材料技術に関する基礎能力（工学的素養）と問題点を提起し解決できる能力（創造的デザイン力・総合力）を有する技術者を養成する。
- ③ 持続可能な永続型社会を築くために、材料及び生物資源を有効にかつ環境と調和を図りながら活用することができる技術者を育成する。

すなわち、物質工学科では、材料工学と生物工学の基礎を相互に関連付けながら教育し、新しい技術に対応できる柔軟な思考と応用力を持つ「材料工学、生物工学両面に通じた化学技術者」の育成を目指している。そのため、低学年では、化学と生物に関する専門基礎科目を履修し、高学年からは、材料工学コースと生物工学コースのいずれかを選択し、それぞれの専門科目を中心に両コースに関連した共通科目を融合複合領域として履修する。さらに、実験・実習や卒業研究によって実践的能力や開発・創造能力を養う。その具体的な教育目標としては、以下の3項目である。

① 物質工学に必要な基礎科学及び幅広い専門基礎能力の育成

応用数学・工学基礎物理・情報処理・基礎工学概論などの基礎科学を学び、さらに、物質工学の基礎となる無機化学・有機化学・分析化学・生物化学・物理化学・化学工学などを体系的に習得することで、物質の本質を理解し、応用化学及び生物化学的手法により新物質を開発する際に必要とされる幅広い基礎能力を育成する。

② 材料工学あるいは生物工学を得意とする専門能力の育成

材料工学コースでは、無機・有機材料の合成法や物性を習得することで、生物工学コースでは、化学を基礎とした微生物学や遺伝子工学を習得することで、化学品・医薬品・食品等の得意とする専門分野で活躍できる技術者を育成する。

③ 実践的能力及びプレゼンテーション能力の育成

校外研修、工場見学旅行、夏季校外実習などの体験型学習により、実社会における実践力や問題解決能力、プレゼンテーション能力の必要性を認識させながら学んだ知識を真に身に付けさせるために、5年間を通した工学実験により実践力、理論的思考能力を育成し、卒業研究により問題解決能力、プレゼンテーション能力を育成する。

さらに、情報化社会に対応できるように、情報処理・環境関連分野に関する

カリキュラムを整備している。

2. 将来計画

上記のような物質工学科の教育理念・教育目標を本校第2期中期計画の中で立てて実現すべく実行している。特に、本学科の特徴である、本校で唯一独自の「コース制（材料工学コース・生物工学コース）」教育カリキュラムは今後も堅持し、両分野において基礎となる教科及びそれぞれの専門科目を基軸に両コースに関連した共通科目（融合・複合領域）の更なる充実を図る。

また、化学技術者といえどもコンピュータに精通していることが要求されており、各学年に情報処理関連科目を配置して情報教育を実施している。従来、本学科では、公害防止管理者、危険物取扱者、毒劇物取扱責任者、放射線取扱主任者などの化学系の国家資格を取得するように推進してきたが、さらに、情報処理技術関連の免許・資格の取得のための教育指導も行う。

3. 重点課題

物質工学科における入学志願者の確保及びその学力水準の維持のための取組としては、「材料工学、生物工学両面に通じた化学技術者」の育成を目指す本学科独自の特徴やその魅力をより明確にアピールするために、本年度は、特に、学科のアドミッションポリシー（1. 化学と生物の世界へ第一歩を踏み出したい人、2. 地球に優しいものづくりをしたい人、3. バイオの技術で社会に貢献したい人）の一部変更も視野に入れて、より効果的な広報活動のための学科紹介パンフレットの大幅改訂や学科ホームページの充実について検討する。さらに、小中学生・保護者を対象にした公開講座や出前授業についても引き続き積極的に開催・実施し、その授業内容と方法について更なる創意工夫を図る。

また、本学科における専門教育の充実及び学力水準の維持のための具体的な取組としては、前年度までの実験・実習報告書作成技術能力の育成と向上のための実施計画内容の一環として、本年度は、特に、高学年における実験結果・解析データに対する理論的評価と客観的考察を最重視したレポート作成能力の更なる向上を図る。さらに、化学技術者に必要不可欠なコミュニケーション基礎能力の育成とプレゼンテーション能力の向上を目的として、学生実験・実習報告会・校外実習報告会・卒業研究発表会等における効果的なプレゼンテーションのための教育指導方針についても引き続き検討し、基礎科目及び専門科目の授業内容とその方法について創意工夫を図る。

さらに、本学科における平成23年度策定「モデルコアカリキュラム（試案）」及び「本校高度化の基本方針と教育体制（案）」適用に係る取組としては、学科ワーキンググループにおいて、参考と成り得る他高専・学科の取組事例を精査するとともに、本年度は、特に、現行の学科カリキュラムの一部再編成・改訂も視野に入れて、本学科

独自の「コース制（材料工学コース・生物工学コース）」教育カリキュラムとの整合性・関連性の観点から、その適用に係る具体的な課題を検討し、更なる教育の質の向上及び改善を目指して、基礎科目（低学年）及びコース別専門科目・専門共通科目（高学年）におけるより効果的な授業内容と方法についてそれぞれ詳細に検討する。

4. 進学・就職指導状況

物質工学科では、毎年、卒業生の3～5割が女子学生であるが、学生指導・進路指導は充実しており、特に、女性教員2名を擁し、女子学生に対する豊富な指導実績とその多種多様な進路に特徴がある。現在、多くの卒業生が社会の中核として活躍している。福井県内・県外企業からの評価も高く、100%の就職内定率を誇っており、化学分野はもとより、繊維、医薬、食品、エレクトロニクス、エネルギー、環境など幅広い分野に就職している。また、卒業生の4～5割は本校専攻科進学あるいは国公立大学・大学院に編入学・進学し、工学系のみならず、理学系・農学系・生命環境学系などその進学先の多様性にも特徴がある。本年度においても、現在、平成25年度物質工学科卒業予定者35名（内女子12名）の進路内定状況は、

- ・ 就職内定者 17（6）名
（県内10（2）名、県外7（4）名）
- ・ 進学内定者 18（6）名
（専攻科6（3）名（推薦）、大学12（3）名（推薦5（2）名・学力7（1）名）

であり、昨年度は、卒業予定者に占める就職希望者の割合が高く7割を超えたが、本年度については、例年同様5割程度であり、昨今の長引く景気低迷にもかかわらず、卒業予定者全員が希望の就職・進学先に内定している。

また、物質工学科における学生指導・進路指導、特に、本年度は、大幅に増加した女子学生（4～7割）に対する進路（進学・就職）指導の更なる充実を目的として、女性技術者・研究者確保のための方策の一環とした「キャリア教育」について検討し、女子学生を対象にした「先輩（5年生・専攻科生・卒業生）講座」を更に充実させて積極的に実施する予定である。

5. 特色ある教育・研究の取り組み・その他活動等

現在、本校物質工学科の学生が参加対象となるコンテストやイベントは極めて少ないのが実情である。本学科における「PBL教育」の導入・展開とその充実のための具体的な取組の一環として、本年度は、特に、学生実験・実習や卒業研究において、出前講座や各種コンテスト・イベント等の実験実施計画・立案及びそのプロジェクト実実践・参加について積極的に検討している。例えば、「物質工学実験Ⅰ（物質工学科2学年）」においては、「公開講座やオープンキャンパスにて実施可能な無機化学実

験を企画せよ（課題）」に対して、グループ学習及び教員によるアドバイスを基に、各自提出の企画を発表し（全員参加）、問題点の抽出とその解決策について討論した。また、「志賀原子力発電所・福浦風力発電所・志賀太陽光発電所見学会」の実施、「理科技術教材開発コンテスト（鈴鹿高専主催）」や「八光熱の実験コンテスト（株）八光電機主催）」などへの作品の出展、さらに、「日本化学会近畿支部化学研究発表会」や「日本セラミックス協会北陸支部研究発表会」などに参加し、学生自身がこれまで化学と生物に関する基礎科目及び専門科目を履修して習得した知識や技術を生かして作品や研究成果を発表するという貴重な体験をした。

6. 点検・評価

物質工学科における入学志願者の確保及びその学力水準維持のための取組としては、効果的な広報活動のために、学科パンフレットの刷新、学科ホームページの充実、公開講座（5講座）及び出前授業（9件）を実施した。また、本学科における専門教育の充実のための具体的な取組としては、特に、実験・実習レポート作成能力及びプレゼンテーション能力の向上のための授業内容・方法について創意工夫を図った。さらに、本学科における「モデルコアカリキュラム（試案）」及び「本校高度化の基本方針と教育体制（案）」適用に係る取組としては、学科ワーキンググループにおいて、その内容・方法や取組事例などについて精査分析するとともに、現行学科カリキュラムとの整合性を確認し、その適用に係る具体的な課題について詳細かつ慎重に検討した。またさらには、女性技術者・研究者確保のための方策の一環として、女子学生対象の「キャリア教育」の充実とその促進を図った。

以上、本年度の実施・活動状況については計画を上回る実績と成果が見込まれ、総合的には、達成度評価はAと判断する。

7. 改善課題・方策

- ① 物質工学科における入学志願者の確保及び学力水準維持のためのより効果的な広報活動の検討（学科アドミッションポリシーの一部変更）。
- ② 物質工学科における専門教育の充実のための授業内容と方法（基礎科目・専門科目）の更なる検討。
- ③ 物質工学科「コース制（材料工学コース・生物工学コース）」教育カリキュラム（基軸）における「モデルコアカリキュラム（試案）」及び「本校高度化の基本方針と教育体制（案）」適用に係る具体的課題の更なる詳細な検討（現行学科カリキュラムの一部再編成・改訂の必要性）。
- ④ 物質工学科における学生指導・進路指導、特に女子学生に対する進路（進学・就職）指導及び「キャリア教育」の更なる充実。

○ 環境都市工学科

1. 教育理念・教育目標

環境都市工学科が目指す技術者像は、「住みよいまちを作り出す建設技術者」であり、その使命は「社会資本を持続可能にする土木・建築の分野において、基礎的知識と技術を身に付け、論理的思考能力を備えた実践的で創造性豊かな技術者を育成すること」である。そのための基本方針として次の3つを掲げている。

① 建設技術者に必要な基礎的な学力と能力の育成

社会資本を持続可能にする土木・建築の分野において、基礎的知識と技術を身に付け、論理的思考力を備えた実践的で創造性豊かな建設技術者を育成する。そのため、環境都市工学科では構造力学・水理学・地盤工学などの力学系基礎科目を体系的に教育することに加え、建築計画・環境衛生工学・施工管理学などの基礎科目を重視して、理論に関する学習と演習を通して理解を深め、応用力を養うことに努めている。さらに、情報化社会に積極的に対応するための情報処理能力の習得にも力を入れている。

② 幅広い専門分野の理論に関する応用力の育成

専門基礎科目を応用し、さらに一步深く踏み込んで、土木・建築の分野に必要な幅広い専門分野についても学習し、社会資本の新設・更新・維持管理・災害復旧に関するいかなる分野に進んでも、十分に活躍できる技術者の養成を目指している。さらに第5学年では選択科目（専門科目）を幅広く開講し、学生が将来の進路に応じて選択・習得でき、学習意欲が高まるように配慮している。

③ 実験実習や卒業研究を通じた実践力と創造力の育成

各専門科目の学習速度に合わせ実験実習と設計製図を実施して、身をもって体験しながら理論を理解させ、併せて実践能力・洞察力の育成にも努めている。さらに、第5学年の卒業研究では学生自身にテーマを選択させ、自発的な調査・研究を促し援助することにより、研究に対する工学的なアプローチ手法を習得させるとともに、成果発表の機会を設けることにより、構成・編集・発表（プレゼンテーション）などの能力の養成に努めている。

本学科は、昭和45年に土木工学科として本校に開設され、平成5年に環境問題にも対応できる技術者育成を目指して環境都市工学科に改組した。開設以来、福井県内をはじめとした日本全国の建設系の企業や、国土交通省・福井県・福井市・越前市・鯖江市などの官公庁に多くの卒業生を輩出している。従来から土木系技術者の育成に重点をおいているが、近年、入学生の要望や建設業界の動向を踏まえて建築系科目も充実した科目構成としている。平成21年度入学生（平成25年度卒業生）からは、建築系選択科目の単位をすべて修得した場合に、4年の実務の後に一級建築士の受験資格が与えられるカリキュラムを実施している。土木系学科でコース制を取らずに、

このようなカリキュラムを実施している高専は全国で数校しかない。

2. 将来計画

前述のように、平成25年度卒業生からは、改正建築士法に対応した科目を含むカリキュラムを履修して卒業する。コース制を取らずに学科の基軸である土木工学系科目に加えて一級建築士受験資格を得るための建築学系の科目を融合したカリキュラムを実施している。そのため、土木工学系の進路に加えて、建築学系の進路に対応した進路指導をここ数年実施してきた。今後は、それを継続しながら検証をする必要がある。また、高専機構から提示されているコアカリキュラムは建設系（高専機構は土木系学科を建設系と称している）と建築系に分かれており、本学科のような例は提示されていない。建設系コアカリキュラムに軸足を置きつつ建築系科目のコアカリキュラムの内容を取り込んだ本学科独自のカリキュラムを整えていかなければならない。したがって、次のことが将来計画としてあげられる。

(1) キャリアパスの提示とそれに見合った教育内容の精査

本学科卒業生の進路は今後、土木系と建築系に分かれる。したがって、在学中に卒業後のキャリアパスを示す必要がある。さらにはキャリアパスを提示することによって、学生の学習意欲の向上を図らなければならない。それと同時に、そのキャリアパスに見合った教育内容を提示し、実践していかなければならない。本学科の土木系技術者教育にはこれまでに培ってきた教育内容や教授方法があるが、建築系技術者教育は発展段階である。建築系カリキュラムを既に実践している大学、高専との連携を密にしていく必要がある。また、卒業生との連携も密にして職に就いてからの経験を披露してもらい先輩講座を継続して実施していく。本学科には同窓会組織として「翔土会」がある。翔土会との連携を深めて、卒業生の意見の集約に努めていく。

(2) エンジニアリング・デザイン教育の充実と高専機構コアカリキュラムとの整合性

土木系に進むにしろ、建築系に進むにしろ、エンジニアリング・デザイン教育の充実が技術者教育として必要である。エンジニアリング・デザイン能力とは「正解がない、あるいは複数の解がある課題に対して、問題点を発見し、制約条件を踏まえて、実現可能な具体的な解を導き出す」能力である。そのためには、構想力、創造力、倫理観、チームワーク力、文化の理解などの能力を身に付け、学術的知見を基にして問題に取り組む能力が必要であるとされている。簡単に言えば、社会に出てエンジニアとして仕事ができる能力である。土木・建築系の技術人として社会に貢献できる人材になるためのカリキュラムを構築していく必要がある。本学科でも、個々の科目でこのような能力が身に付く内容を取り入れてきた。しかし、これらの個々の能力を統合して発揮させる科目があまりなかった。高専機構コアカリキュラムでもモデル例が提示されていることから、それらを積極的に取り入れていくこと

を検討し、適宜実施していく。

3. 重点課題

(1) 環境都市工学科からの情報発信

環境都市工学科で行っていることを広く社会に発信していく。具体的には、①HPの充実、②出前授業の充実、③オープンキャンパスの充実、④フクイ建設技術フェアへの出展など産業界へのアピールがあげられる。社会への情報発信をすることによって環境都市工学科への入学志願者の増加も見込まれる。また、学科に在籍する学生への情報発信も重要である。具体的には、①キャリアパス、②科目の流れ及び科目内容、③取得資格の案内などである。学生への情報発信を充実させることにより、学生の学習への目的意識が高まり、学習意欲の向上に結びつけられる。基礎学力、専門学力の必要性を説明し、それら学力の向上を目指す。

(2) 高度化再編への学科としての対応

現在、本校では平成28年度入学生から実施する高度化再編計画の内容を検討中である。学校としての将来計画の重要課題である高度化再編に対して、本学科も協力するとともに、その中で本学科の存在意義を確認しながら、学科として将来計画の見直しを検討する。

(3) 実験演習系科目の内容充実

土木・建築系技術人として社会に貢献できる人材を養成するカリキュラム改善への第一歩として実験演習系科目の内容にエンジニアリング・デザイン能力を総合して身に付ける内容を盛り込むことを検討する。科目間の学年別配当や必修選択科目の変更などのカリキュラム改善へ向けて、時間数も多く内容の変更が容易な実験演習系科目の内容変更を早急に検討する。また、教員の研究・地域活動の内容を学科としてどのように教育に取り込んでいくことを検討する。

4. 進学・就職指導状況

進路指導は、今年度の5学年が建築系科目を取り入れた新カリキュラムによる最初の学年であり、3年次より個人面談や進路に関するアンケート調査及びセミナーを開催し建設分野での仕事について意識させるようにしてきた。特に3年次の後半より、建設業界の業態や県内外の企業情報について情報提供するとともに、建築関連の資格についての意識付けも行った。また、ポートフォリオの作成を定期的に行い、4年次（12月～1月）の三者面談において進路の方向性を決定させ、進学・就職に対する準備を始めるように指導した。さらに、進路指導委員会が主催した進路指導セミナーなどを通じて就業への意識啓発を図り、学科として、先輩講座、インターンシップ（報告会を含む）などを実施して指導を行った。

このような進路指導の結果、今年度卒業予定の環境都市工学科17期生36名の進

路の内訳は、進学が12名で、進学先としては本校専攻科8名、豊橋技術科学大学（建築系）編入1名、長岡技術科学大学編入1名（スーパーVOS 特待生）、岐阜大学編入1名、仁愛大学編入1名であった。就職は21名で、就職先としては、公務員では国土交通省1名、福井県1名の計2名、民間企業では東海旅客鉄道、大阪ガス、北陸電力、中部電力、レールテック、NIPPONなどの県外企業へ10名、坂川建設、セキサンピーシー、ミルコン、辻広組などの県内企業へ9名である。研究生希望者が1名おり、他2名が1月段階で就職活動中である。今年度の特徴として、進学・就職ともに建築系への進路決定が増えたこと、北陸電力をはじめ多数の県外企業への就職開拓ができたことがあげられる。

5. 特色ある教育・研究の取り組み・活動等

環境都市工学科の特色ある取り組みを以下に示す。これらの取り組みは、毎年9月に開催されているフクイ建設技術フェアでポスターとして展示して、福井県内建設系企業に紹介している。建設技術フェアには本学科の卒業生も数多く見学に来ることから、卒業生からの情報収集も行っている。

(1) 全国高専デザインコンペティションへの積極的参加

全国高専デザインコンペティション、通称「デザコン」とは、全国高専の主に土木・建築系の学生を対象とした構造物や都市環境のデザインを競い合う大会であり、構造、環境、空間、ものづくりの4部門でその年のテーマに沿って、高専生がアイデアを競い合う大会である。本学科は平成16年度の第1回大会から構造部門（各校2チーム）に連続して出場している。平成20年度のデザコンにおいて構造部門の静的耐力部門で全国1位となっている。その他の部門についても毎年応募しており、本選への出場も数多くある。演習・実験系の授業内容にデザコンのテーマを積極的に取り入れている。その中で、実社会における積極性、協調性、チームワーク力などの人間力と、構想力や制約条件を考慮することなどのエンジニアリング・デザイン能力の重要性を学生に認識させている。

(2) 防災教育及びそれに関連する活動

東日本大震災が日本全体に与えた影響を受けて、安全で安心な都市構造物を設計・施工できる技術者となる人材を輩出することはもちろん、安全で安心な街づくりができる人材を育成すべく防災教育にも重点を置いている。また、本学科で防災士の資格を持つ教員が、福井県防災士会と連携をして福井県内の小中学校及び高校の防災訓練の指導等の活動も行っている。

(3) 環境教育及びそれに関連する活動

環境都市工学科への改組時点から環境問題に取り組む教育を継続して行っている。現地調査を基本として、実際の環境を肌で感じてその状況を数値化することに取り組んでいる。地域のNPO法人や行政と連携して行う活動にも積極的に参加してい

る。また、学生による環境活動グループとして自然環境学生塾（エコラボ）の活動も卒業生の協力の下に継続されて実施されている。

6. 点検・評価

推薦選抜による平成26年度の環境都市工学科志望者は30名を超えた。今年度からオープンキャンパスの内容を変更したことやこれまでの情報発信の成果による効果などが推薦選抜志望者増につながったものと考えられる。

建築系カリキュラムを取り入れた初めての卒業生を平成26年3月に送り出すが、進路として建築系に進む学生もこれまでよりも多く、学生へのキャリアパスの提示もある程度の成果があったと判断できる。また、卒業生を講師として実施した先輩講座なども継続して実施している。

高専機構コアカリキュラムにおける建設系・建築系分野の内容と本学科のカリキュラムとの対応を行い、建設系コアカリキュラムのほとんどを満足することを確認した。実験科目の内容変更に関する討議も活発に行い、学校の高度化再編に合わせて実施できるようにこれからも検討することになっている。

以上のことから、いずれの項目に関しても達成度評価はAと判断する。

7. 改善課題・方策

環境都市工学科の使命は「社会資本を持続可能にする土木技術者と建築技術者を育成すること」である。そのためには、まず次に示す本学科のアドミッションポリシーに合う人に本学科を志願してもらう必要がある。

本校環境都市工学科のアドミッションポリシー

- ① 自然と共生したくらしを営む環境づくりに興味がある人
- ② 快適なくらしを共有するための建物とまちづくりに興味がある人
- ③ 災害から人々のくらしを守るシステムづくりに興味がある人

そのために、本学科で行っている教育内容と卒業後の進路を今まで以上に広く社会に発信していくこと、及び土木・建築分野は地域の環境保全やまちづくりと密接に関わりがあるので、教員の研究内容が地域貢献に役立っていることを社会へ情報発信をすることによって、環境都市工学科への入学志願者の増加を図る。

さらには、平成25年3月に、環境都市工学科棟の改修が竣工し、また、補正予算によって実験実習設備の多くが高度な機能を備えた機器に更新された。これを機に、学生の教育内容の改善を進め、これと連携して、土木・建築の各専門分野における研究水準を大きく向上させていきたい。

○ 一般科目教室

1. 教育理念・教育目標

現在、教育方針として公表しているもの及び中期計画に関する目標は以下のとおりである。

(1) 要覧その他での紹介

本校の教育は一般科目教育と専門科目教育とから成り立っているが、技術者が一市民としてよりよく生きるためには、専門的な知識や技能だけでなく広く豊かな教養も必要であり、一般科目教室では、教養を身に付けさせることを通じて、立派な技術者の育成を目指している。一般科目教育においては、高等学校の教育課程を踏まえ、大学の教養課程に匹敵するレベルの教育内容となるようなカリキュラムが組まれている。国語・歴史・地理・倫理社会・物理・化学・生物・数学・保健体育・英語などの基礎的な科目や情操を育むための美術・音楽、さらに哲学・政治経済学・法学などの多彩な科目を開講している。また、国際化時代に即応するため、外国語教育に特に重点を置き、英語のほか、ドイツ語・中国語といった科目も開講しており、設備の整った語学教室で、外国人講師を含めたスタッフが指導している。なお、専門科目の応用数学・工学基礎物理も一般科目教室で担当している。

(2) 中期計画目標

人文・社会系科目（国語・社会・外国語）では、実践的な技術者に必要な言語感覚や総合的な表現力を身に付けさせるとともに、社会的な知識の習得を始めとする自立した洞察力・判断力の養成を目指している。また、国際文化の理解を深めながら、外国語によるコミュニケーション能力を高め、各種検定試験の受験を視野に入れた教育をも目指す。

理数系科目（理科・数学）では、各教科の特性を踏まえ、自然現象の基本的法則や概念を理解させ、思考力・表現力・創造力の育成を図るとともに、問題解決能力の向上を目指し、専門教育への展開を考慮した自然科学系の基礎学力の習得を志向する。体育では、調和のとれた全人的発達を遂げた社会人として豊かで活力あふれる生活が営めるよう、身体・健康に関する知識の習得や身体運動実践能力の獲得を目指した教育をする。

2. 将来計画

一般科目教室としては、新入生の受け入れから専門学科への移行がスムーズに行われるように、低学年教育における学習面や学校生活上の問題点などを明らかにしつつ、学生と共に解決策を探っていくことを目指しており、現在に至るまで、各教科担当者、担任、クラブ活動顧問など様々な立場から、教員研究室・セミナー室等を利用して、学習や学校生活の支援及び相談を行ってきている（これらの活動はオフィスアワーでの

活動として報告)。こうした点を視野に入れて、3年前、「オフィスアワーを中心とした学生支援体制の構築(仮称)」として、

- ① 現状の把握(実態調査:支援時間・支援環境・内容)
- ② 現状の改善策の検討(学生の問題→関係教員[担任・教科担当・部活顧問等]への連絡体制などの組織作り=学内組織での位置付け)、支援環境整備などを将来計画として設定したが、現在の状況は以下のとおりである。

(1) 現状の把握

成績不振者に対しては各教科で必要な対策(小テスト・追試・補習・課題学習等)を実施し、学習意欲の高い学生へは学外コンテスト(英語スピーチコンテスト、数学選手権)への参加やコミュニケーション能力向上のための各種の語学検定試験受験を呼びかけている。

(2) 現状改善策の検討

学生の問題点についての情報交換会「スタッフミーティング(仮称)」の開催を適宜実施する。その目的としては、学習到達度の低い学生の把握と教科指導の方向付けや、授業への取り組み状況(生活面も含む)の把握と改善策の検討により、学習意欲の低下・留年・進路変更等の問題に対処するとともに、担任や担当教員が指導上の問題を一人で抱え込むことを防止することにある。また、学生のコミュニケーション能力向上策の一環として語学検定試験の受験奨励と併せて海外留学等も積極的に勧める。

3. 重点課題

中期計画との関連で当面の課題としてあげているものは以下の諸点である。

- (1) 新入生に対して数学・英語の一斉学力試験を実施し、その動向を把握するとともに、この結果を以後の教育指導や教育課程の改善に役立てる。また、英語のコミュニケーション能力向上を図る方策として、本科の4年・5年次においてTOEIC模擬試験を実施するとともに、TOEIC試験を校内で行う。
- (2) 中学・高校よりの教育支援要請(SPP、SSH講師依頼等)や各教育機関、教育委員会からの教員研修事業での協力要請に応じる。

4. 特色ある教育・研究の取り組み・活動等

(1) 物理・工学基礎物理での取り組み

中期計画との関連で、物理・工学基礎物理では、以下のような取り組みを行ってきた。

- ① 平成22年度には、一般教科と専門教科の連携に関連して「物理WG意見交換会」を開いた。これは、物理教員と、教務主事、各学科代表1名が参加して、「物理・工学基礎物理と専門教科について意見交換することにより、授業内容や授業

方法を改善するための方策を見出す。また、修正可能なものから直してフィードバックする。」ことを目的として実施したものである。

交換会では、初めに物理教員から本校の物理教育の現状等を説明した後、専門学科教員と授業内容の希望、低学年物理実験、数学・専門教科との連携などに関して意見交換を行った。その後物理教員が、得られた意見を、すぐに対応可能な項目・将来的な検討項目に分類して教育改善に生かした。

- ② 低学年の物理教員と高学年の物理教員が継続的に打ち合わせを行い、物理から工学基礎物理(応用物理)へのスムーズな移行が可能となるように、授業内容・物理実験内容などを検討している。また、非常勤講師の方々とも適宜情報交換を行い、コンセンサスの維持を図っている。
- ③ 物理の基礎学力定着のため、平成22年度から毎年、3年生に対して夏期休暇中に、1年から3年前期までに学習した全範囲に対する基礎学力試験を実施し、この結果を以後の教育指導や教育課程の改善に役立てている。また、成績上位10名の学生を掲示することにより、学生の競争意識を高めている。

(2) 数学科・応用数学科での取り組み

数学科・応用数学科としては、数学検定(団体受検)を学生に推奨している。平成25年には、本校を会場として、7月13日と12月7日の2回実施した。受検者数は1回目が12名(準1級1名、2級5名、準2級4名、3級1名)、2回目が10名(2級4名、準2級6名)であった。2級2名、準2級6名、3級1名の合格者があり、準1級では、2次のみ合格であった。25年度には、専門学科と協力し、3Dプリンタ等を用いて、立体模型を作製し、3年生の授業で活用し始めた。

(3) 保健体育科での取り組み

保健体育科では本校創立以来ずっと保健体育実技の授業で毎年1学年から4学年までの全員に体力診断テストを実施している。そして、そのテスト結果については全国統計や校内データの集計結果を基に自己の体力の特徴等を把握させ、各自の課題発見に努めるための考察レポートを毎年提出させ4年間ファイリングさせている。その課題が部活動や、生活習慣の改善につながるよう促す取り組みを行っている。

(4) 国語科での取り組み

国語科では、社会で通用する実践的な国語力の育成のために、国語の授業を通じて社会と関わりを持てるような教育をめざしている。

具体的には、作文指導としては、一年次に出身中学への近況報告や暑中見舞いの手紙を書かせたり、四年次に履歴書を作成させている。今後は、校外研修や工場見学の機会も利用して、他学年生にも手紙や書類作成の実作指導を増やしていきたいと考えている。

他にも、全学年を通した作文指導を行っているが、これも教室内の学習に留まらないように配慮し、校友会誌（『青樹』）に掲載させることを通して、全学生・教職員のみならず学外に向けても自分の作品を発信できるようにしている。

口頭発表や論理的思考の能力向上のためには、主に2・3年生を対象に、校内弁論大会に連動させて「紙上ディベート」の授業を行い、各自が論理的に自分の意見をまとめて発表し、討論できる力を身に付けられるような指導をしている。

（5）社会科での取り組み

歴史においては、学生が将来、社会人として活躍する上での基礎となる教養を習得及び更新していける素養を形成すべく、座学での講義の合間に、以下のような取り組みを行っている。

- ① 歴史のドキュメンタリーDVDを教材として鑑賞してもらい、レポートを提出させている。
- ② 歴史のグループディスカッションとプレゼンテーションを行わせている。
- ③ 英語史料講読を実施している。

政治経済においては、授業内容と現実の社会との関わりを意識させることを目的に以下のような取り組みを行っている。

- ① 授業内容と関連する時事的問題を扱った新聞記事等の資料を適宜配布している。
- ② 重要な社会問題をテーマとするDVDを、前期末及び学年末に鑑賞させている。

（6）英語科での取り組み

英語のコミュニケーション能力向上を図るため26年度より第1学年のコミュニケーションの授業では学生20名につきネイティブスピーカー講師1名の少人数授業を開始する。これにより、学生の発話の機会やネイティブスピーカーとコミュニケーション密度が増加し、よりコミュニケーションクラスの成果を引き出せることが期待される。また、外部評価試験に関しては従来のTOEICIPテストや実用英語検定、工業英語検定の校内実施に加えて、本年度は校長裁量経費によりTOEFLジュニア、工業英検4級、実用英語検定2級への受験料補助を行うことにより受験の奨励やサポートを行った。さらに26年度実施を念頭に、外部評価試験の合格による単位認定・振替について英語の資格試験取得が学生にとってさらに効果的なインセンティブになるように見直しを行っている。また、昨年より引き続き、長岡科学技術大学との協働事業による国際性育成を重視した英語教育の実践、専攻科英語教育改革プロジェクトの実施など継続して行っている。

5. 点検・評価

（1）重点課題における点検・評価

新入生に対する一斉学力試験は、数学・英語ともに、入学直後の授業開始前に実施し、春休みの課題実施状況なども含めて、新入生の学力把握に努めている。一斉

学力試験の結果は、1年生の担当教員（非常勤も含む）が共有し、授業改善や教育指導に役立っていると判断できる。上記のように着実に成果は上がっているが、一斉試験の結果などについてはなお利用の余地があると考えため、達成度評価はBと判断する。

また、TOEICに関しては本年度の校内実施7回を予定し、既に6回まで実施を終了しており、実施回数を増やしたことにより昨年を上回る総受験者数となり、また、スコアについても上昇が見込まれる。以上を受けて達成度はAと判断する。

(2) その他、現状改善への取り組み等における点検・評価

- ① スタッフミーティングに関しては、平成25年度は5回実施し、クラス担任及び教科担当者から学生の状況報告を受けて十分な情報の共有ができたため、達成度評価はAと判断する。
- ② 国語科の取り組みにおいては、例年通り、「紙上ディベート」等の授業を通して弁論大会への学生の活発な取り組みという成果に結び付けることができたし、一年間の学生の作文から優秀作を選抜して『青樹』刊行も達成できる予定である。さらに、1年生の出身中学への近況報告の手紙執筆においても、すべての学生の積極的な取り組みを引き出した。予想以上の十分な実績を上げたと判断するが、手紙文の実作に関して、今後他学年への執筆機会を検討する余地もある点を考慮してBと評価する。
- ③ 社会科の歴史における取り組みについては、能動的に取り組む学生が多く、レポートやプレゼンテーションでも教員が想定していた以上の成果が得られていた。しかし、それらの取り組みに充てた時間数が少なく、学生の中には消化不良になっているとみられる者もいたと思われるため、到達度はBと判断する。
- ④ 英語科目については、昨年に引き続き各種語学検定試験の受験への推奨と支援により実用英検・工業英検ともに多数の受検者及び合格者を維持することができた。また、バララット大学への短期交換留学、高学年による海外インターンシップ、専攻科生らの海外シンポジウム等での発表など学生の英語を使ったコミュニケーションへの意欲・関心及び実践が顕著に見られた一年と考えられる。これは計画を上回る実績を残したため、達成度評価はAと判断する。

6. 改善課題・方策

(1) 英語及び数学の新入生一斉学力試験について

試験結果からは、いわゆる「ゆとり世代」で低下した学力が少しずつ戻っていることが確認できる。まだ、教育課程の改善の必要性はさしあたりないと判断しているが、今後、試験結果の経年変化などを検討することで、新入生の学力動向を把握し、授業改善や学生指導に生かしていきたい。

(2) 英語のコミュニケーション能力の向上について

英語のコミュニケーション能力を含む「技術者として使える英語力」の習得のためには低学年においては基礎力の構築、また、高学年ではそれを礎とした応用力を鍛えることが必要である。1～5年を通じて共通の語彙及び文法の副教材を使用し、複数回同じテキストを巡回して履修することにより確実な知識の定着を図っている。また、低学年ではネイティブスピーカーによる少人数のコミュニケーションクラスを実施し、また、高学年や専攻科生についてはスピーチやプレゼンテーションの機会を授業内で設けることにより、さらに実践的な英語でのコミュニケーション能力を向上させることを目指す。

○ 専攻科

1. 教育理念・教育目標

(1) 概要

専攻科は、高等専門学校5年間の上に、より高度な専門的知識と技術を教授し、創造的な研究開発や先端技術に対応でき、かつ国際的にも通用する人材を育成するために設けられた2年制の教育課程である。修了生は大学評価・学位授与機構（以下「学位授与機構」という。）に申請し、審査の後に学士の学位を授与される。本校の専攻科は、生産システム工学専攻（1学年定員：12人）及び環境システム工学専攻（1学年定員：8人）の2専攻で構成されている。また、本科4、5年次の全学科と専攻科2専攻のすべての教育課程で構成した「環境生産システム工学」教育プログラムを実施しており、このプログラムは日本技術者教育認定機構（略称：JABEE）から社会の要求を満たしている工学（融合複合・新領域）関連分野の技術者教育プログラムであるとして、平成16年度から認定されている。

(2) 目指すエンジニア像と学習・教育目標

専攻科が目指すエンジニア像は『得意とする専門分野を持つことに加え、他の技術分野の知識と能力を積極的に吸収し、自然環境との調和を図りながら持続可能な社会を有機的にデザインすることのできる知識と能力を身に付けた、国際社会で活躍できる実践的技術者』としている。目指す技術者像に照らした専攻科修了時点で修了生が確実に身に付けておくべき知識及び能力として、本自己点検・報告書4ページに示した5つの大項目とそれらを細分化した20の小項目からなる専攻科学習・教育目標を設けている。なお、この学習・教育目標は平成23年度に改定を行ったものである。

内容は、専攻科設置時から目指している得意とする技術分野（本科5年間の学習で身に付けてきた専門分野）の深化に加えて、現在の多様化・国際化した社会状況に対応できるエンジニアリング・デザイン能力を身に付けた技術者となることを念頭に、異なる技術分野の知識と能力を積極的に吸収することを具体的に表現し、学生の到達すべき目標として掲げている。また、企業のグローバル化に伴って必要とされる国際社会で活動ができる人材輩出のための学習・教育目標も掲げている。

ものをつくり出すことあるいはつくり出す過程が自然や社会などの地球環境に与える影響を常に考えられる能力（環境を意識したものづくり）だけにとどまらず、「人間が住みよい環境とは何か」、「人間だけが住みよくてよいのか」をも考慮できる能力（環境づくりができる）の育成を目指して、学習・教育目標JBに「ものづくり・環境づくりに関する能力を身に付ける」としていることが、専攻科学習・教育目標の大きな特徴である。

2. 将来計画

目指すエンジニア像や学習・教育目標に照らして専攻科生の知識・能力のレベルアップを図っていくために必要な項目は、研究能力の向上、エンジニアリング・デザイン能力の向上、社会のグローバル化に対応した人材の育成及び専攻科入学者の質の向上に向けた本科との連携の4点であると考えている。以下に具体的な内容を示す。

(1) 研究能力の向上

専攻科設置当初からの目的は研究開発型の技術者の養成にある。本科5年の卒業研究と専攻科1、2年の特別研究の計3年間の研究従事期間は大学院卒に匹敵する。研究環境の充実及び専攻科生の研究成果発表数を多くしていく施策を検討する。

(2) エンジニアリング・デザイン能力の向上

多様化した社会から技術者に寄せられるニーズも変化してきている。このことを踏まえて、エンジニアリング・デザイン能力を向上させる技術者教育の必要性が叫ばれており、JABEE認定の重要な審査項目にもなっている。エンジニアリング・デザイン能力とは、必ずしも正解のない問題、トレードオフな問題に対して、実現可能な具体策を見つける能力であるとされている。本校専攻科では、「創造デザイン演習」や「デザイン工学」を通して、この能力の向上を図っている。企業との連携による共同教育を行うことを検討し、専攻科生が社会の要望に応えられる知識と能力をさらに身に付けて修了できるようにする。

(3) グローバル化に対応した人材の育成

これからの企業は規模の大小を問わず世界を見据えていなければならない。そのような国際社会で活躍するための技術者には語学能力と異文化理解能力の向上が必要である。これらの能力が身に付くようなカリキュラムや授業内容の変更を検討するとともに国際交流委員会と連携をして本校独自の専攻科生の海外派遣活動を検討する。

(4) 本科との連携

専攻科をより充実させるためには、本科から優秀な学生を迎えることが第一である。早期技術者教育と5年一貫教育による実践的な技術者の養成が高専の特徴である。さらに2年間の専攻科課程を加えた継続した7年一貫の技術者教育は高専本科卒業生にとって最も意義のある進学先であると言える。そしてJABEE認定された技術者教育プログラムを実施していること、学位授与機構への申請と小論文試験合格が必要であるが学士の学位取得ができることなど、実践的な技術者にも研究開発型の技術者にもさらには大学院進学から研究者への道も開かれる。このような専攻科のアピールポイントを積極的に本科生に説明していく必要がある。

3. 重点課題

(1) 目指すエンジニア像と学習・教育目標の周知

専攻科生が目指すエンジニア像及びそれに照らした学習・教育目標を理解し、その到達へ向けて行動できるためには、目指すエンジニア像及び学習・教育目標を学生及び教職員への周知を徹底する必要がある。本科生への周知は専攻科志望者の増加及び質の向上にもつながる。

(2) 他の研究機関との連携

平成25年4月に福井大学大学院工学研究科との間に教育研究に関する協定を締結した。この協定を有効に活用して専攻科生の学習及び研究に対する意欲の向上を図る。

(3) カリキュラムや授業内容の改善

エンジニアリング・デザイン能力及び語学力の向上を目的として平成25年度専攻科入学生から「創造デザイン演習」1単位増、「技術者英語コミュニケーション演習」1単位の新設を行っている。「創造デザイン演習」ではこれまで経営工学で行っていた内容を取り込み、さらに技術士や知財に関する内容を取り入れて、これまで行っている問題発見・問題解決演習につなげている。また、「技術者英語コミュニケーション演習」ではネイティブスピーカーによるテクニカルイングリッシュスピーキングやテクニカルイングリッシュライティングをその内容に盛り込むことになっている。これらの授業内容が学生のレベルアップにつながるよう検討を重ねていく。

(4) 海外派遣活動への積極的参加

今年度の専攻科生の海外派遣は、国立高専機構主催関連では、平成25年度海外インターンシップ（ベトナム）に専攻科1年生を1名派遣、平成25年度テマセク・ポリテクニク技術英語研修（シンガポール）に専攻科2年生を1名派遣、ISTS2013（ISTS: International Symposium on Technology for Sustainability）（香港）に専攻科2年生を2名派遣した。彼らは、それぞれの企画に応募して採択されての海外派遣である。

本校独自の海外派遣として、平成25年6月に学術協定を結んだプリンスオブソクラ大学工学部（タイ）に専攻科1年生2名を夏季休業中に4週間派遣し、海外でのインターンシップとして単位認定を行った。また、本校の海外派遣研修制度によって、昨年度本校に学生が訪れたキングモンクット工科大学（タイ）及びカンボジア工科大学の両校に、本校校長の親書を携えて訪問することを日程に組み入れて専攻科2年生が東南アジア諸国の研修旅行を行った。

今後も継続的に専攻科生の海外派遣活動への積極的な参加を促していきたい。来年度は国際交流委員会が開拓している東南アジアにある日系企業への海外インターンシップも勧めていきたい。

(5) 学士の学位授与の新たな審査方式への対応

大学評価・学位授与機構は平成26年度専攻科入学生から新たな審査方式による学士の学位授与を行う。これまで学士取得に必要であった小論文試験をなくし、専攻科

修了者にはそのまま学士が授与されるシステムが構築される。また、高専機構も速やかな移行を望んでいる。しかしながら、専攻科における修得単位数の制限が厳しくなり、専攻科における単位修得に専攻科修了要件以外の指導が必要となる。学生が不利益を被らないように指導していく必要がある。

4. 進学・就職指導状況

平成25年3月修了生の進路状況は、生産システム工学専攻では、修了生16名中、大学院進学者5名、県内就職者6名、県外就職者4名、その他1名（留学生）であり、環境システム工学専攻では修了生9（内女子2名）中、大学院進学者3名（内女子1名）、県内就職者2名、県外就職者3名（内女子1名）、その他1名であった。

また、平成26年3月修了予定者の進路予定状況は1月25日現在で、生産システム工学専攻修了予定者14名中、大学院進学予定者2名、県内就職予定者4名、県外就職予定者8名、であり、環境システム工学専攻修了予定者10名（内女子4名）中、大学院進学予定者2名、県内就職予定者4名（内女子3名）、県外就職予定者3名（内女子1名）、未定1名（修了後留学予定）である。

5. 特色ある教育・研究の取り組み・活動等

本科5学科各々の専門知識の基礎を習得した後、専攻科では得意とする専門知識を深化させる専門展開科目と、今日の多様化した社会に対応できるように、幅広く他の技術分野の知識と能力を身に付けるための専門共通科目を開講している。この専門共通科目の内6科目（技術者倫理、創造デザイン演習、先端材料工学、デザイン工学、環境工学及び地球環境）は必修とし、融合・複合分野の教育プログラムであることを特徴付けている。また、夏季休業期間を利用しコーオプ教育の一環としての約一か月間のインターンシップや、北陸技術交流テクノフェアにおいて特別研究の内容を学外の技術者や研究者に説明させるなど、学内にとどまらない技術者教育に力を傾注している。

エンジニアリング・デザイン教育として専攻科ではこれを「デザイン工学」と「創造デザイン演習」の授業で統括的に実施している。ともに出身学科の異なる学生による協働作業を通して「デザイン工学」では地域特産品によるものづくりを、「創造デザイン演習」では福井県内の諸問題を発見し制約条件を考慮した解決案の提示を求める課題を実施している。今年度は、地域企業からの課題に取り組んだ。また、北陸技術交流テクノフェアでの企業ブース訪問や専門家とのインタビューを取り入れて解決案を提示することを求めている。

現代英語の授業では、TOEICスコア向上の内容に加えて、英語による特別研究内容の発表を前提とした外国人非常勤講師による指導を取り入れている。また、昨年度からは英語による質疑を取り入れている。

6. 点検・評価

平成26年度専攻科入学予定者は28名であり、平成25年度入学者の20名を上回った。昨年度の志望者減を受けて学生への説明会を実施したこと、また、今年度5年担任の方々の進路指導によるところも大きい。次年度の入試からは、学業及び人物ともに優れ、学習意欲旺盛な本科生が専攻科に入学できるように、制度を変更した。以上のことから、目指すエンジニア像の周知及び本科との連携ということについての達成度評価はAと判断する。

福井大学大学院工学研究科との教育研究に関する協定を結び、協定校推薦による大学院進学者もいることから、他の研究機関との連携についての達成度評価はAと判断する。

カリキュラムや授業内容の改善に関しては、今年度入学生からエンジニアリング・デザイン教育及び語学力の向上のための改正を行ったカリキュラムを実施している。創造デザイン演習では、地域企業と連携を行った課題に取り組むことができたことから、その達成度評価はAと判断する。

昨年度の海外派遣学生数は6名であった。今年度は上述のとおり合計7名である。積極的に海外研修を希望する学生が増えてきている。また、派遣学生の本科生及び専攻科生への報告会も専攻科説明会と同時に行った。したがって、専攻科生の海外研修についての達成度評価はAと判断する。

7. 改善課題・方策

今年度の専攻科入学者の減少を受けて、本年度専攻科入試に向けて昨年度から本科生への専攻科説明会を実施してきた。今後も継続して行うとともに本科の進路指導を担うクラス担任にも積極的に専攻科説明を実施する。

福井大学大学院工学研究科研究室訪問や福井大学教員による講演会を企画し交流を深めることなどを通して、専攻科生の研究へのモチベーションを高める方策を検討する。

エンジニアリング・デザイン能力及び語学力向上のために単位増及び新設した科目（創造デザイン演習、技術者英語コミュニケーション演習）の内容充実を図る。また、そのためにこれらの科目に関連する教員に、エンジニアリング・デザイン及び語学に関する研修会への参加を専攻科として支援する。

国立高専機構主催の海外インターンシップ及び技術英語研修や、その他の海外研修制度にも積極的に参加するように専攻科生に促す。海外インターンシップなどの派遣学生に選ばれるにはTOEICスコアが1つの基準となっているため、今後もTOEIC I P試験の校内実施と受験料補助を継続する。

IV-3. センター等に関する事項

○ 学生相談室・保健室

1. 学生相談室

(1) 基本方針

本校では、学生生活が円滑に送れるように学生の種々の悩み事や問題の相談に応じるため、福利施設の2階に学生相談室を設置している。

(2) 学生相談室利用状況と相談分野

学生相談室は、教員3名、看護師2名及び非常勤の専門カウンセラー1名の6人体制で運営されている。平成24年度より、専門カウンセラーの来校を週2日から3日に増やし、学生支援の充実を図っている。今年度の各相談員の担当を表1に示す。

相談室員のスキルアップとして、各種の研修会（障害学生修学支援事例研修会、メンタルヘルス研究集会、全国学生相談研修会など）へ参加した。校内の教職員向けには、7月にメンタルヘルス講演会、平成26年2月に精神疾患に関する講演会を開催し、意識の高揚に努めた。学生に対しては、相談室カードやリーフレットなどを配布している。また学生の状況を把握するために、前期にQUテストを、後期には「高専生活に関するアンケート」を、全学生を対象に実施した。

新入生対象には、年度当初の新入生オリエンテーションでの説明会、各クラスにてカウンセラーによるメンタルヘルス説明会及び性格診断テストなどを行っている。

また、今年度から精神科医と提携を結び、定期的に来校してもらい、学生のメンタルヘルス面の対応について、充実を図っている。

表1 平成25年度相談員の担当日時

曜日	月	火	水	木	金
放課後 16:15~17:00	14:00-18:00 清水 照代 カウンセラー	中谷 実伸 荒川 正和	14:00-18:00 清水 照代 カウンセラー	15:00-18:00 清水 照代 カウンセラー	中谷 実伸 青山 義弘

表2、表3に平成24年度の月別及び学年別相談室利用者の利用者数と相談分野別の件数を示す。

表2 平成24年度学生相談室、学年別と月別利用者数

	4・5月	6・7月	8・9月	10・11月	12・1月	2・3月	24年度
1学年	6	5	1	1	0	0	13
2学年	8	3	2	3	0	1	17
3学年	0	1	0	0	3	0	4
4学年	1	1	2	7	1	8	20
5学年 (専攻科)	3	4	0	2	0	0	9
保護者	7	5	1	5	4	3	25
職員他	14	24	11	20	11	4	84
計	39	43	17	38	19	16	172

表3 平成24年度学生相談室、月別相談内容と相談件数

	4・5月	6・7月	8・9月	10・11月	12・1月	2・3月	24年度
メンタル	2	8	2	11	0	0	23
学習	6	4	1	2	0	4	17
不登校	25	16	3	10	11	5	70
進路	2	2	0	1	0	3	8
家族	0	0	0	0	0	0	0
人間関係	1	3	0	1	0	0	5
健康 その他	3	10	11	16	8	4	49
計	39	43	17	38	19	16	172

2. 保健室

(1) 基本方針

学内の保健衛生・学生の健康維持を中心に、あらゆる面で学生をサポートしている。通常の保健業務の他に、学生の精神面における相談業務も行っている。

(2) 保健室の利用状況

保健室の平成24年度利用状況について表4、5に示す。看護師（2名）にはフィジカルな対応以外にメンタル面における対応もお願いしている（インテーカーとしての対応も含む）。表4は保健室の学年別、表5は相談分野別の利用者数である。

表4 保健室の学年別利用者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	24年度	23年度
1年	10	30	18	25	9	10	17	18	8	14	4	3	166	160
2年	10	24	12	15	14	4	17	18	37	11	12	1	175	117
3年	19	15	9	17	5	7	25	14	11	8	11	1	142	154
4年	18	19	14	24	7	5	49	55	38	60	30	7	326	220
5年	23	23	26	23	16	6	28	23	9	24	9	5	215	227
専攻科 1年	0	4	0	1	0	0	3	2	0	1	1	0	12	28
専攻科 2年	1	2	1	1	2	0	3	0	1	0	1	0	12	38
保護者	0	3	0	2	1	0	1	0	0	1	0	1	9	8
その他	60	72	61	51	37	49	73	61	52	62	43	38	659	517
合計	141	192	141	159	91	81	216	191	159	181	111	56	1,716	1,477

※その他・・・オープンカレッジ・職員・卒業生の利用等

表5 相談分野別利用者数

学年/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	24年度	23年度
いじめ													0	0
不登校													0	0
人間関係	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	22
学 習	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	2	0	5	9
進 路	5	10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	16	32
暴 力													0	0
その他	81	106	91	111	55	40	106	100	79	67	48	24	908	737
メンタル	55	74	50	47	36	41	110	90	75	114	61	32	785	677
合 計	141	192	141	159	91	81	216	191	156	181	111	56	1,716	1,477

3. 点検・評価

平成24年度年度計画に基づき、「学生相談室のさらなる充実」を図るために、前述のとおり、専門カウンセラーの来校回数を増やした。また、学生相談室・保健室関係教職員のスキルアップのために校外におけるメンタルヘルス関係の研修会等へ積極的に参加している。以下はその例である。

表6 メンタルヘルス研修会参加事例と本校からの参加人数

	研 修 会 名	参加人数
1	平成25年度丹南地区高等学校・高等専門学校・特別支援学校教育相談担当者会議	1
2	福井県精神保健福祉協会特別講演会	1
3	平成25年度第51回全国大学保健管理協会東海北陸地方部会研究集会及び第40回保健管理担当職研究集会	1
4	学生相談・メンタルヘルス研修会	1
5	障害学生修学支援事例研究会	2
6	第37回北陸地区保健管理担当職研究会	1
7	第51回全国学生相談研修会	1
8	東海北陸地区国立高等専門学校学生支援連絡協議会	2
9	第10回全国国立高等専門学校メンタルヘルス研究集会	2
10	青年期における精神保健講座	1

学内教職員のスキルアップの一環として、毎年メンタルヘルス研修会を実施している。今年度は7月31日にNPO法人DDAC発達障害をもつ大人の会代表の広野ゆい氏を招き「発達障害と生きていくことー支援のあり方についてー」と題した講演を行った。

以下に、最近5年間の学内メンタルヘルス研修会参加人数をあげる。

表7 メンタルヘルス研修会教職員参加人数

年度	参加人数
平成25年度	78
平成24年度	62
平成23年度	54
平成22年度	38
平成21年度	50

今年度からQUテストと、明石高専のご協力を得て作成した「高専生活に関するアンケート」を、全学生を対象に実施することにより、学生の現状把握に努めている。

また、学外の精神科医と提携し、定期的に来校してもらうことで、メンタルヘルス面の対応に充実を図っている。

以上から計画に対して一定の成果を上げていると考え、達成度評価をAと判断する。

4. 改善課題・方策

関係教職員が学内外のメンタルヘルス関連の研修会で習得した知識や技術などを、学内教職員向けの講演会やFD活動に関する企画立案などに役立てることで、より効果的に学内に還元することが課題にあげられる。

今年度から始めたQUテストと「高専生活に関するアンケート」の全学生実施については、対応面などをより効果的・効率的にしていくことで、学生に対するケアに心がけたい。

最後に、今後も学内教職員向けのメンタルヘルス研修会を継続することにより、多くの教職員に学生のメンタルヘルスに関する正しい知識を持ってもらうことで、結果として、学生が円滑な学生生活を送ることができる環境を整備したいと考えている。

○ 図書館

1. 現状

- ① 本校の図書館は、学生の教育を始めとして、高学年の学生、専攻科生及び教職員の研究補助、更には、地域住民への貢献等を目的として運営されている。
- ② 図書館は現在改修中であり、平成26年4月には、新図書館をオープンする予定である。
- ③ 新図書館は、1階に閲覧室と事務室を設置し、約510㎡の閲覧室には、100席の閲覧机、パソコンコーナー、AVコーナー及び今回新設となるグループ学習室2部屋が設置される。
- ④ 閲覧室には、専門書、一般図書、雑誌等の資料が約3万冊、1、2階の書庫には約8万冊の資料を収容し、閲覧室及び今まで一部しか開放していなかった書庫についてもすべて開架として、利用者がすべての資料を自由に閲覧できる。そのためのブックプロテクション（無断持出防止装置）は閲覧室用、書庫用で2台設置する。
- ⑤ インターネットを利用した学外からの蔵書検索も可能で、学外者に対しても資料貸出しを行っている。
- ⑥ 図書館システムは、平成24年度より長岡技術科学大学にサーバーを持つ全国高専統合システムに切り替えて図書館運用を行っており、図書館業務及び利用者サービスに幅広い機能を効果的に使用している。

(1) 学生支援

- ① 学生の教育面では、専門分野の蔵書の充実を図るとともに、一般的な教養書の購入にも努めている。また、「資格試験コーナー」やもの作りと実験のノウハウを簡単に解説した「もの作りコーナー」、「定期試験の過去問題コーナー」、「教科書コーナー」等を設けて、学生の学習の便宜に資している。
- ② 購入する学生用図書は、各学科の教員の推薦によって決めるとともに、学生図書委員によるブックハンティングによって約500冊の図書を購入する等、学生の意見や嗜好を取り込む工夫をしている。
- ③ 英語多読図書は、毎年継続して購入しており、蔵書は約1500冊となっている。学生の英語に対する関心を高めるとともに、英語力の向上を図れるよう支援している。
- ④ 他高専では例のない取組として、学生と教職員からなる「校友会誌編集部会」による校友会誌「青樹」（特集、随想、読書感想文、創作、詩、短歌等約100作品）を国語科教員の協力を得て毎年作成し発行している。
- ⑤ 学生の総合情報処理センター（以下、センター）時間外利用について、図書館システム上にセンターの時間外入室用ICカードの貸出機能を組み込み、時間外

でも図書館でのICカード貸出を可能として学生のセンター時間外利用に応じている。

- ⑥ 図書館設置のパソコンにおいて、本校の就職・編入学状況についての情報をサーバー経由で閲覧することができるようになっており、学生の就職・進学活動の支援に活用されている。

(2) 研究支援

- ① 研究面では、長岡技術科学大学と高専によるコンソーシアムに参加することで、Science Direct(エルゼビア社)、AIP(アメリカ物理学協会)、APS(アメリカ物理学会)、ACS(アメリカ化学会)の約2,000タイトルの電子ジャーナル及びMathSciNet(アメリカ数学会)、JDreamIII(ジー・サーチ)の文献データベースを利用できるようにしている。
- ② 本校で購読していない電子ジャーナル及び雑誌・図書等の文献については、図書館間相互貸借サービス(NACSIS-ILL)を利用して、文献複写・図書を学外から取り寄せるなどして、研究者への研究支援体制を整えている。
- ③ 本校は福井県地域共同リポジトリに参加して、本校の教職員が執筆した学術成果(紀要論文及び雑誌論文等(約310点))を一般公開して、研究者にとっては必須のツールである国立情報学研究所の学術情報データベースサービス「CiNii」から検索・閲覧が可能となっており、外部に向けた積極的な情報発信を行っている。

(3) 地域貢献

- ① 平日は午前8時30分から午後8時まで、土曜日は午前9時から午後4時30分まで開館して(改修工事期間中の仮設図書館の運用では土曜日は休館とした。)、地域住民の利用に資するとともに、資料の貸出しにも応じている。
- ② 福井県内図書館横断検索システムに参加して、本校と県内の大学図書館及び市町立図書館の蔵書(約550万冊)の一括検索を行うことができる。また、福井県内図書館間相互貸借システムの活用による図書の貸借が可能となっている。

以下、平成24年度末の蔵書構成を表1に、利用状況を表2に示す。

表1 平成24年度末の蔵書構成

分類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	技術	産業	芸術	言語	文学	
和書	7,168	2,900	5,183	5,517	16,807	19,446	952	3,383	3,879	10,713	75,948
洋書	469	360	203	248	3,965	1,558	11	57	2,614	922	10,407
合計	7,637	3,260	5,386	5,765	20,772	21,004	963	3,440	6,493	11,635	86,355
比率 (%)	8.8	3.8	6.2	6.7	24.1	24.3	1.1	4.0	7.5	13.5	100.0

この他に、教育後援会文庫が12,187冊あるので、蔵書の総計は98,542冊になる。

表2 平成24年度の月別利用状況

月	開館日数	入館者数	貸出冊数	貸出者数	入館者数/日	貸出冊数/日	貸出者数/日
4	24	4,654	955	494	193.9	39.8	20.6
5	24	6,531	971	449	272.1	40.5	18.7
6	26	5,792	733	344	222.8	28.2	13.2
7	26	6,835	837	385	262.9	32.2	14.8
8	16	2,525	512	216	157.8	32.0	13.5
9	18	2,098	433	192	116.6	24.1	10.7
10	24	4,647	855	401	193.6	35.6	16.7
11	24	6,265	711	310	261.0	29.6	12.9
12	20	3,681	644	290	184.1	32.2	14.5
1	21	4,627	658	321	220.3	31.3	15.3
2	22	5,173	527	231	235.1	24.0	10.5
3	19	1,941	190	87	102.2	10.0	4.6
計	264	54,769	8,026	3,720	207.5	30.4	14.1

2. 点検・評価

- ① 長年の課題であった図書館の改修が実現される。改修された新図書館では、学生がグループでディスカッションしながら勉学できる「グループ学習室」が新たに設置され、書庫は、以前よりも拡張して収容能力を2万冊増やすことができるため、今後の蔵書の増加に対応ができることとなる。
 - ② 電子ジャーナルは、平成26年から新たにACS(アメリカ化学会)の購読契約を行い本校教職員の研究支援の充実を図った。
- 以上の実績から、達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・方策

新図書館の閲覧机等は予算の関係で更新することができなかつたため、今後、更新するための予算確保を行っていく。また、新図書館では、更なる利用者のニーズに応えた運用を考え改善を図っていく。

○ 創造教育開発センター

1. 現状

(1) 創造教育開発センター設立の経緯と業務

本センターは、FD委員会、教育改善委員会等の役割を統合し新たな位置付けを持って2007年度（平成19年度）に発足したセンターである。本センターの業務内容として、

- ① 教育改善、FDに関すること。
- ② 教育課程の調査・検討に関すること。
- ③ メディア教育に関すること。
- ④ 教員間の教育的連携に関すること。
- ⑤ その他センターの目的達成に必要な業務に関すること。

をあげている。なお年度毎にセンター報告書を刊行している。

(2) 平成25年度の活動

平成20年度に高専設置基準が改正され組織的なFD活動の義務化がなされ、それにともない、本センターも発足6年目として年間計画をたて活動をしてきた。主な取り組みとしては、公開授業や授業アンケートの実施、FD研修会の開催、福井県大学間関係事業への参加などがあげられる。以下、センターの主要な取り組みについて概観しておく。

① 授業アンケート

授業アンケートに関しては、原則全科目終了時にクラス毎にWeb入力により実施し、結果を各教員に返却しコメントを集め、次年度に学生と教職員に公開している。アンケートの学生評価に関しては、平均点は上下するものの、全体的にはほぼ高水準で推移している。平成25年度は前期終了科目については平成25年7月下旬の前期の特別指導期間に実施し、通年・後期科目については平成26年2月の後期の特別指導期間等で実施予定である。アンケート結果はクラスのWeb入力が終了した当日に担当教員に返却しており次のシラバス作成などに反映させている。

学生への公開方法は、印刷製本の形をとらずに、各クラスに関連するものを簡易ファイルとしてクラスに1冊ずつ配布している。一方、アンケートの全体は資料用として1部のみ作成している。また、学内教職員向けにはグループウェア上に公開している。今後もこの形態での資料の配布とネット上での学内向けの公開という形が適当と思われる。

② 公開授業

前期と後期の中間試験終了後に公開授業週間(5日間)を設定している。参観者率は、初年度の平成19年度は79%、平成20年度は58%、平成21年

度は43%と低下傾向にあったが、平成22年度は50%、平成23年度は54%、平成24年度は75%、平成25年度前期は76%、後期は64%（平成25年度平均70%）となり低下に歯止めがかかった。実施方法としては、事前に授業担当者に参観の連絡をし、参観後に感想等をセンターに送る形式である。参観者の感想はどれも良好である。常勤教員による非常勤講師の授業参観も見られた。公開授業週間の実施により、多くの教員が参観したり参観されたりする形が普通になってきた。

③ 大学間連携事業

平成20年度に採択された文部科学省戦略的大学連携事業「個性的な地域創生のための学習コミュニティを基礎とした仮想的総合大学環境の創造」に関して福井高専では本センターが中心となって様々な取り組みを行ってきた。この連携事業（通称「フレックス」）には、福井県立大学、福井工業大学、仁愛大学、仁愛女子短期大学、福井高専の5大学・短大・高専が参加をしている。この連携事業ではFD活動の協同推進が事業の4つの柱（連携基盤、学生の学習コミュニティ形成、地域と連携した学習コミュニティの形成、相互研修型FD活動の推進）の1つとなっている。センター活動のかなりの部分がこの連携事業の推進にあてられており、各部門で本センターの委員が積極的に参加し事業推進に貢献している。特にフレックス関係では合宿研修が大きな取り組みとなっている。

平成25年度は、創造教育開発センターの事業の一環として、福井高専主管で第4回フレックスFD合宿研修会（9月9日～10日、宿泊はラポーゼかわだ）を開催し、内外の教職員や企業技術者など延べ100名を超える参加者があった。

今年度は、一日目に熊本大学の鈴木克明先生を招き「授業デザイン」についての講習とWS（ワークショップ）を行い、二日目には鯖江の地元企業で活躍している石本浩氏（石本石材株式会社）及び、鈴木浩氏（浜本テクニカル株式会社）に「若手のやる気を引き出す教育」と題して講演とトークを行った。いずれも活発な意見交換が行われ、福井の高等教育に関する問題について教員同士が大学の垣根を越えて議論を行うことで大変有意義なものとなった。

この合宿研修は、各校単独によるFD活動では深めることが難しい部分を、専門領域と学校の垣根を越えて議論することができる貴重な企画となっている。

④ e-Learning の推進

新たなmoodleサーバーを稼働させて利用する環境が整っている。このサーバーでは事前に全学生・専攻科生を各学科・クラス毎にユーザーとして登録し、クラス単位の授業を簡単に利用できるようにしている。なお、創造教育開発センター副センター長の青山准教授（電子情報工学科）を講師として7月30日

(火)に教職員対象の moodle 講習会を開催した。

⑤ FD研修会

創造教育開発センター主催で「平成25年度FD講演会」を6月10日(月)に開催した。この講演会は、「校長表彰や外部表彰などを受けた教職員から、評価された活動や参考となる活動を、他の教職員にも広めることで教職員一人ひとりの今後の業務の励みとする。」ことを目的に実施するもので、今回は教職員約70名が参加した。講演会では、平成24年度に校長表彰を受けた中谷実伸准教授、加藤清考准教授及び学生指導において参考になる活動を行った丸山晃生准教授・竹本泰敏助教から、それぞれ「数学検定への取り組み」、「サイエンスクラブによる地域貢献を中心とした総合的・継続的教育」及び「小水力発電アイデアコンテストの取り組み」と題して、表彰対象となった取り組みや学生指導上の工夫等の紹介があった。最後に松田校長から講評・感想があり、参加者からは各自の今後の取り組み方への指針が得られたと、大変有意義な講演会となった。

また、教職員を対象に「技術士及び技術士制度説明会」を JABEE 委員会と共催で12月2日(月)に開催した。本校の専攻科は JABEE から認定されており、JABEE の修了要件を満たして専攻科を修了すると技術士一次試験が免除される。この説明会は、技術士となる人材を輩出する教育機関の教職員として必要な技術士制度の概要や技術士の役割を理解するため開催するもので、約70名が参加した。講師に、公益社団法人日本技術士会の桶谷治寛技術士とアマノメンテナンスエンジニアリング(株)副社長の福田遵氏をお招きし、技術者のキャリア形成や今後技術士に求められる資質などについて、自身の体験などを交えて分かりやすく説明があった。説明会後の質疑応答もあり、本校学生や教職員の技術士資格取得に向けて思考するいい刺激となった。

また、今年度はセンター員1名が外部のティーチングポートフォリオとアカデミックポートフォリオ作成ワークショップ(2泊3日)に参加しメンター(作成時の助言者)となった。

⑥ 教員間ネットワーク会議

教育改善の一環として、相互に関連する一般科目及び専門科目、あるいは学科をまたぐ学習・教育目標に関連する科目を担当する教員間の連携が、機能的に行われなければならない。このような連携を行うためのシステムとして教員間ネットワーク会議があり、平成23年度までは6分野だった教員間ネットワーク会議を平成24年度から8分野に拡大し、創造教育開発センター員が会議進行役(座長・議事録担当者)として、今年度はここ数年間の総括も含めて平成26年2月末をめどに開催する予定である。

2. 点検・評価

- ① 授業アンケートについては、5年生の一部の学科と専攻科生については授業時間以外で、他学科の5年生と4年生以下は授業時間内での Web 入力であったが、入力自体にはほとんど問題はなかった。アンケート結果を教員に返却しているが、数年間にわたりアンケートの評価数値が低い教員については学生からのコメント（センターの担当者と授業担当教員以外は閲覧できない）を学科長等に口頭で連絡しているが、創造教育開発センターとしては担当教員へ直接には改善を促してはいない。よって、達成度評価はBと判断する。
- ② 公開授業週間の参観者率が初年度と同じ程度に回復した。今後も継続的に達成できるかが問題であるが、達成度評価はAと判断する。
- ③ 大学間連携事業については、特に大きな取り組みである合宿研修への参加を創造教育開発センター予算で行っているが、今年度は福井高专主催であったにもかかわらず合宿研修会へのセンター員以外の教員の参加がやや少なかった。よって、達成度評価はBと判断する。
- ④ e-Learning の推進については、主に数学や英語などの科目で実施されている。また、e-Learning 室はCALL教育システムによる英語を主としたコミュニケーション能力の育成の場としても活用されている（週当たり35コマの授業中、14コマが英語関連授業等で使用）。よって、達成度評価はBと判断する。
- ⑤ FD研修会については、例年の学内の校長表彰関連教員等による講演会と、技術士制度に関する講演会を実施した。数学検定に長年関わってきた教員、複数学科の学生を指導した教員の話は、今後の参考になったと感じられた。よって、達成度評価はAと判断する。
- ⑥ 教員間ネットワーク会議については、創造教育開発センター員が進行役としては平成23年度から開催している。その議事録は学内からグループウェア上で閲覧可能としており、会議参加教員以外にも議論について知ることができるようになっている。平成25年度はここ数年間の総括を含めて平成26年2月一杯をめどに開催予定である。よって、達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・方策

- ① 授業アンケートについては、アンケート結果の数値が数年にわたって低い教員への指導方法(学科長・教室主任等による指導など)について明文化していく。
- ② 公開授業(教務に関する申合せ事項31)の実施件数が少ないことから、公開授業については、今年度から前期だけの公開授業週間を後期にも開催し、参観率に関する成果は得られた。公開授業(教務に関する申合せ事項31)の廃止を提案する。

- ③ 大学間連携事業については、平成25年度の合宿研修が福井高専主催であったにもかかわらず、創造教育開発センター員以外の参加がやや少なかった。センター員以外の教職員の参加を促進し、その後の連携事業への参加の足掛かりとしたい。
- ④ e-Learning の推進については、さらに研修会などを行い、今以上に多くの教員・学生に利用してもらえるようにする。
- ⑤ FD研修会については、例年の学内の校長表彰関連教員等による講演会は継続し、来年度はティーチングポートフォリオやアカデミックポートフォリオ作成に関する講演会を学外講師により開催する。
- ⑥ 教員間ネットワーク会議については、会議で話合われた内容についてどのように実行されたかの検証をする時期にきており、平成25年度はそれまでの議論についての総括・検証も行う。また、平成26年度から創造教育開発センターは現在の教育体制検討専門部会の業務である「独立行政法人国立高等専門学校機構における第3期中期計画期間中に実施予定の福井工業高等専門学校の高度化に対応した教育内容のシステム設計の検討に関すること」を引き継ぐことから、センター業務の中の(2)教育課程の調査・検討に関すること。と(4)教員間の教育的連携に関すること。について特に重点化する必要がある。

○ 総合情報処理センター

1. 現状

平成22年度に教育用電子計算機システム（以下、「教育用システム」）を更新し、ネットワークブートシステムを導入した。本システムは、クライアント端末（パソコン）のディスクイメージをサーバ側に格納し、一括管理をするシステムである。クライアント端末は起動時にこのイメージをサーバより読み込みOSを起動し、アプリケーションソフトウェアは端末のローカルハードウェア上で実行するものである。従来の教育用システムと比較して、利用者はネットワークブートシステムを意識することなくパソコン単体の利用と同様の操作手順にて利用できること、CADのような高速処理が必要であるソフトウェアでも快適に動作するという利点がある。また、OSの管理や更新作業を短時間でできるなど、従来以上に演習室端末の運用・保守・管理を柔軟かつ容易にできるようになった。教育用システムでは、現在平成24年度より導入したWindows 7が利用できる。

総合情報処理センター（以下、「センター」）の4つの演習室（第1演習室パソコン48台、第2演習室パソコン7台、第3演習室パソコン50台、第4演習室パソコン46台）の平成25年度前期・後期の授業での利用を表1（前期）、表2（後期）に示す。また、平成25年1月から3月、同年4月から12月までの平日17時以降（休日を含む）の時間外利用の状況を表3に、それ以外での利用状況を表4に示す。

教育用システムを利用した個人学習の支援として、センターでは時間外利用（平日17時から20時まで）の間は、利用希望者に対し入室用ICカードを貸し出す方式をとっている。

平成25年度の補正予算により、本館とセンターを結ぶ渡り廊下が改修となり、現在工事が行われている。この工事によりセンターの学生用出入口が通行できなくなり、11月より時間外利用の運用のために学生アルバイト（専攻科生1名）を雇用し運用を行っている。この改修は、平成26年3月に終え4月からは入室用ICカードを用いた時間外利用の運用に戻す予定である。

平成25年4月より、機構からの校内LAN更新予算により導入された基幹系サーバの運用を開始している。このシステムでは、可用性を実現するための物理サーバ3台の上でサーバ仮想化を実現し、仮想OS上で電子メールやWebサーバなどの複数のサーバを運用している。これにより物理サーバの故障の対応やバックアップなどの運用が容易となった。さらに、用途に合わせてネットワークを構成し仮想OSを運用することができることから、不正侵入や情報漏えいといったセキュリティ面での堅牢なシステムを実現できた。

基幹系サーバでは前述のサービス以外にも、教職員用のグループウェア、学科・一般科目のWebサーバ、教務の成績エビデンスサーバと多方面に活用されている。

教育用システム及び校内LANの運用についてセンタースタッフミーティングを定例月1回開催している。教育用システム及び校内LANの納入業者との間では、随時システムの運用に関する打合せを行っている。

2. 点検・評価

教育用システムでは、ネットワークブート機能により、学生の利用できるソフトウェアの変更などで柔軟な対応が可能となっている。このことからどの演習室でも同じ機能を提供できており、平成25年度の前期・後期の授業でも十分に活用され、リテラシー教育・情報教育・プログラミング教育に貢献できている。一方で、教育用システムは平成22年度のシステム更新から5年を経過し、平成27年度には次の更新が計画されている。現在、平成26年度内の仕様策定に向けて、新規教育用システムの情報収集や学科・一般科目での教育用システムのための要望調査などを行なっている。

センターの渡り廊下の改修では、通常の学生用出入口が使用できないため職員用の出入口を利用しており、授業前後では下足箱付近で学生が渋滞するなどの問題が一時的に発生している。また、職員用出入口には障害者用スロープなどが設置されていないことから、車いすを必要とする学生が在籍するクラスの講義では、別棟（環境都市工学科棟）の第4演習室を割り当て、時間外にプログラミング演習を希望することを考慮し図書館の端末にプログラミングに必要なソフトを整備するなどの対応を行った。

新しく導入された基幹系サーバは、平成25年4月より運用を開始し障害の発生もなく現在に至っている。特に故障時の対応やセキュリティ面の強化ができたことから、管理運用作業の軽減が実現できた。さらに、仮想OSを利用することで様々なサーバ運用をこのシステム上に実装し、活用範囲を広げることができた。

センター運営委員会を平成25年5月17日及び6月28日に開催した。委員会では平成25年度収支予算（案）や、基幹系サーバの運用、補正予算による渡り廊下の改修について審議し、いずれも承認された。また、平成24年度に導入された認証システムを利用しマイクロソフトが提供するプログラミング環境（DreamSpark）が利用できるようになったことや、情報セキュリティに関する学生への注意喚起徹底のために機構が作成した「情報システムユーザガイドライン」を全学生向けに印刷・配布することが報告された。

現在、情報処理センターは、各学科・一般科目より各1名の教員スタッフ、教育支援センターの技術職員1名、事務系職員1名の合計9名により運営している。この中で教育用システムや基幹系サーバの管理運用業務については、教育支援センターからのスタッフ1名が主に担当している。平成25年10月30日～11月1日には機構による情報セキュリティ監査を受け、教育支援センターのスタッフ1名に業務が集中していることなどが指摘されたので、平成26年度からは電子情報工学科よりサーバ運用に長けた教員1名をスタッフに加えることにした。

また、センタースタッフと教育用システム・校内LANシステム・基幹系サーバなどの納入業者とは、運用上の問題点・不具合の確認などを随時行っており、トラブルなく運用が行えている。

以上述べたように、教育用システムについて授業での利用や放課後の利用を含め適切かつ十分な役割を果たせており、さらに校内LANシステム・基幹系サーバについてもトラブルなく運用できていることから、達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・方策

特に改善すべき課題はない。

一方、平成27年度の教育用システムの更新では、今までの運用で見つかった改善課題や方策さらに利用実績を踏まえ、柔軟かつ利便性の高いシステムを構築できるよう仕様策定を目指す。

表1 総合情報処理センター時間割（平成25年度前期）

曜日	第1演習室	第2演習室	第3演習室	第4演習室 ものづくりアトリエ	
月	1	4M 知能機械演習	3C 情報処理演習	5EI 電子情報工学実験Ⅳ	
	2		1F4 コンピュータ科学入門		
	3				
	4				
	5			4B 環境都市工学設計製図Ⅳ	
	6	1F5 コンピュータ科学入門		1F1 コンピュータ科学入門	
	7				
	8				
火	1	3EI プログラミング基礎	4EI 電子情報工学実験Ⅲ	5B 数値解析	
	2				
	3				
	4	2M C言語基礎			
	5		3EI 数値計算	4B 環境都市工学設計製図Ⅳ	
	6		3M 創造工学演習	1F2 コンピュータ科学入門	4M 機械計算力学
	7	1F3 コンピュータ科学入門			
	8				
水	1	3E 情報処理Ⅱ	2M 機械工作実習	2C プログラミング基礎	
	2				
	3	2E 情報処理Ⅰ		5E 制御工学Ⅱ	4C 情報化学
	4			4EI 情報構造論	5M アイデア設計工学
	5	1ALL ものづくり科学			
	6				
	7				
	8				
木	1	3EI 電子情報工学実験Ⅱ	2EI 電子情報工学実験Ⅰ	3B 環境都市工学実験実習Ⅱ	
	2				
	3				
	4				
	5				
	6				
	7				
	8				
金	1	5E 現代制御工学	4EI 創造工学演習	3B 環境都市工学設計製図Ⅱ	
	2				
	3	1ALL ものづくり科学	2PS/ES 画像情報処理	1ALL ものづくり科学	
	4			4B 環境都市工学設計製図Ⅲ	
	5	3M C言語応用	5M 機械工学実験Ⅱ		
	6			2EI プログラミング基礎	
	7				
	8				

表2 総合情報処理センター時間割（平成25年度後期）

曜日		第1演習室	第2演習室	第3演習室	第4演習室 ものづくりアトリエ
月	1	2C		5C	5B
	2	プログラミング基礎		設計製図	流域水文学
	3	4EI		5EI	5B
	4	電子回路Ⅱ		計算機シミュレーション	構造デザイン
	5	1F4			4B
	6	コンピュータ科学入門		4C	環境都市工学実験実習Ⅲ
	7			物質工学実験Ⅲ	
	8				
火	1			4E	
	2	3EI	3E	制御工学Ⅰ	3B
	3	電子情報工学実験Ⅱ	電子創造工学	5B	環境都市工学実験実習Ⅱ
	4			空間情報工学	
	5	1F4		2EI	5EI
	6	コンピュータ科学入門	1PS	情報基礎演習	情報ネットワーク
	7	5C	生産システム工学 実験Ⅱ	4C	
	8	情報ネットワーク		物質工学実験Ⅲ	
水	1	1F2			4EI
	2	コンピュータ科学入門		2EI	ソフトウェア工学
	3	2E		電子情報工学実験Ⅰ	4B
	4	情報処理Ⅰ			環境都市工学設計製図Ⅳ
	5	1ALL	1ALL	1ALL	1ALL
	6	ものづくり科学	ものづくり科学	ものづくり科学	ものづくり科学
	7	2PS/ES			
	8	経営工学			
木	1	1F5		5C	5B
	2	コンピュータ科学入門	2M	品質管理	数値解析
	3	4EI	機械工作実習		1PS
	4	情報構造論			計測・制御工学
	5	3M	5M	2EI	
	6	機械設計製図Ⅰ	機械工学実験Ⅱ	プログラミング基礎	4C
	7				情報化学
	8				
金	1	3EI			3B
	2	プログラミング応用	2M	4EI	環境都市工学設計製図Ⅱ
	3	5E	機械工作実習	電子情報工学実験Ⅲ	4B
	4	電気電子設計			環境都市工学設計製図Ⅳ
	5	1F3	1PS		
	6	コンピュータ科学入門	生産システム工学実験Ⅱ		
	7				2M C言語基礎
	8				

表3 時間外利用状況（平成25年1月～12月）

月	人数	利用日数
1	273人	17日
2	41人	13日
3	2人	1日
合計	316人	31日
月平均	105人	10日

月	人数	利用日数
4	35人	11日
5	252人	19日
6	273人	16日
7	234人	16日
8	85人	6日
9	9人	1日
10	198人	20日
11	184人	16日
12	345人	13日
合計	1615人	118日
月平均	179人	13日

※ 12月から、工事により
ICカードシステム停止

表4 その他の利用状況

利用日	利用内容	利用者
5/11	キャンパスウォーク	電子情報工学科
7/27	「夏休み科学体験 コンピュータでアニメをつくろう！」	教育研究支援センター
8/19	公開講座	機械工学科
9/27	CAD利用技術者試験	環境都市工学科
10/12	キャンパスリサーチ	機械工学科
11/3	公開講座	教育研究支援センター

○ 地域連携テクノセンター

1. 現状

(1) 概要と沿革

本校の位置する丹南地域は、眼鏡枠製造をはじめ繊維・染色産業や電子・機械・化学工業が盛んであり、加えて、越前和紙、越前打刃物、越前漆器や越前焼の伝統産業を有することから、福井県の経済を支えるものづくり産業の拠点となっており、工業生産量は県内でもトップクラスである。本校は福井県の中央に位置する丹南地域で唯一の工業系高等教育機関であり、地域連携テクノセンター（以後、テクノセンターと称す。）は、本校の使命である「人材育成、学術研究、社会貢献」の対外的な窓口として、丹南地域のみならず県内全域にわたってより良いサービスを提供するために、様々な事業を展開している。以下にテクノセンターの沿革を示す。

年 度	内 容
平成 3 年	先進技術教育研究センターの設立
平成 6 年	教育研究振興会の結成
平成 8 年	活動紹介誌 J O I N T の発行開始
平成 1 2 年	J O I N T フォーラムの開催開始
平成 1 6 年	伝統産業支援室の設置
平成 1 7 年	地域連携テクノセンターに名称変更
	地場産業支援室の設置
	教育研究振興会を地域連携アカデミアに改組
平成 1 9 年	アントレプレナーサポートセンターの設置
平成 2 4 年	ニュースレターの発行開始
平成 2 5 年	テクノセンター棟の改修

(2) 共同研究、受託試験、技術相談

テクノセンターは「地域・文化」、「環境・生態」、「エネルギー」、「安全・防災」、「情報・通信」、「素材・加工」及び「計測・制御」の 7 つの研究部門から構成されている。共同研究は、平成 2 6 年 1 月末時点で 1 6 件（受入金額 3, 7 1 2 千円）の申込みがあり、各部門の教職員が基礎的な調査・試験から製品開発にいたる広い分野の共同研究に取り組んでいる。また、テクノセンター内には地域性に特化した技術支援を目的として伝統産業支援室と地場産業支援室を設置しており、平成 1 7 年から福井県和紙工業協同組合より受託した水質検査の試験を行っている。また、各研究部門では共同研究、受託研究の前段階に当たる技術相談を随時受け付けており、平成 2 4 年度には 9 7 件の相談に応じたが、そのうち 1 件が平成 2 5 年度の共同研究につながった。

テクノセンター内の8つの実験室には誘導結合形高周波プラズマ発光分光分析装置（ICP）、X線光電子分光装置（ESCA）、超高分解能電子顕微鏡システム（TEM）、走査型プローブ顕微鏡（SPM）、超高分解能電界放出形走査電子顕微鏡（SEM）、試料水平型多目的X線回折装置（XRD）、超伝導核磁気共鳴装置（NMR）などが設置されており、教員の学術研究や企業との共同研究に活用されている。なお、これらのうち誘導結合形高周波プラズマ発光分光分析装置（ICP）とX線光電子分光装置（ESCA）は平成25年度に設備更新がなされる。

（3）教員の研究分野と成果ならびにテクノセンター活動の広報と交流

① 活動紹介誌JOINT

教員や技術職員の研究シーズを掲載し、広く外部に配本して本校の有する人的、知的、物的資源の情報を発信している。これらのシーズは毎年更新して、地域社会のニーズとの整合性を図る工夫を行っている。平成25年度より1人当たりの紙面をA5版からA4版に拡大し、所属学協会や保有設備等の記入欄を追加して情報量を増やした。

② ニュースレター

平成24年度よりセンター活動の「見える化」を目的として、年3回のニュースレターの発行を始めた。発行先は地域の産業界や地域連携アカデミアの会員企業である。平成25年度は6月に第4号、11月に第5号を発行し、新任教職員の研究シーズ紹介、活動の告知と報告、保有設備の紹介などをタイムリーに情報提供している。

③ キャンパスウォーク

オープンキャンパスの一行事として、学内施設等を中学生や保護者に紹介するキャンパスウォークが5月11日に福井高専で開催された。テクノセンター棟の紹介ではマイクロビーム分析実験室を見学先とした。テーマは超高分解能電界放出形走査電子顕微鏡（SEM）の体験であり、生徒139名と保護者60名が訪問し、植物や昆虫の拡大画像を興味深く観察した。

④ 第11回全国高専テクノフォーラム

高専を核とした産学官連携・地域連携の一層の推進を図ることを目的として全国高専の技術交流を行うテクノフォーラムが、8月20日に愛知県名古屋市ウインクあいちで開催された。「高専制度創設50年、さまざまな絆で新たな発展」のテーマで各校の産学官連携事業の展示があり、本校からは3件の共同研究事例（株式会社シャルマンと村中貴幸准教授、東工シャッター株式会社と金田直人講師、丸高コンクリート工業株式会社と米田知晃准教授・田安正茂助教）のポスター展示を行い、来場者と意見交換を行った。

- ⑤ イノベーションジャパン2013大学見本市
我が国の産学連携を強力に推進するための、国内最大規模の産学マッチングの場であるイノベーションジャパンが、8月29日～30日に東京ビッグサイトで開催された。平成24年度に職務発明としての出願が認められた、電気電子工学科の石栗慎一助教が研究成果「新型高温超伝導集合体の創成」をポスター発表し、来場者と意見交換を行った。
- ⑥ 第61回工学教育研究講演会
平成24年度にテクノセンターの支援を受けて参加した、第2回小水力発電アイデアコンテストでの活動を「福井工業高等専門学校におけるもの創り教育活動—小水力発電アイデアコンテストへの参加報告—」として論文にまとめ、8月29日～31日に新潟大学で開催された工学教育研究講演会において電気電子工学科5年の宮川敬君と竹本泰敏助教が発表した。
- ⑦ 丹南産業フェア2013
越前市の地域産業の振興発展を目的とした丹南産業フェアが、9月21日～23日にサンドーム福井で開催された。1日目はTHE研究会による小水力発電アイデアコンテストの取組紹介、2日目はサイエンスクラブによる科学実験、3日目は放送メディア研究会による動画づくりを行い、各クラブの学生が数多くの親子連れの出場者に科学技術の魅力を伝えた。いずれも、企業技術者等活用プログラムの支援を受けているクラブであり、身に付けた技術や話す力を実践で確認した。
- ⑧ TECH Biz EXPO 2013
次世代のものづくり基盤技術の産業展示会であるTECH Biz EXPOが、10月9日～11日にポートメッセなごやで開催された。東海北陸地区高専合同ブースにおいて、機械工学科の金田直人講師が「仮撚加工系における糸形状撮影装置の開発および糸形状評価」のテーマで研究成果を発表し、来場者と意見交換を行った。
- ⑨ 北陸技術交流テクノフェア2013
全国からものづくり企業が集う北陸最大規模の展示商談会である北陸技術交流テクノフェアが、10月16日～18日に福井県産業会館で開催された。福井高専のブースでは、専攻科2年生が取り組んでいる特別研究の成果をポスター展示して研究シーズの発表を行い、来場者と意見交換を行った。
- ⑩ さばえものづくり博覧会2013
鯖江市の地域産業の振興発展を目的としたさばえものづくり博覧会が、10月18日～20日に鯖江市嚮陽会館で開催された。福井高専のブースでは、ソーラーカー同好会とTHE研究会の学生が作製したソーラーカーと小水力発電装置を展示し、来場者に紹介した。

⑪ 第9回F I Tネット商談会

福井銀行、北國銀行、富山第一銀行が主催する産業展示会であるF I Tネット商談会が、11月6日に富山産業展示館で開催された。福井高専のブースでは、教育研究支援センターの堀井直宏技術職員が職務発明である「高温かつ汚染環境において失透劣化抑制効果を有するシリカガラス材料」のポスター展示を行い、来場者と意見交換を行った。

⑫ J O I N Tフォーラム2013

本校と地域企業及び産官学連携関係者との結びつきを深めることを目的としたJ O I N Tフォーラムが、11月28日にサンドーム福井で開催された。まず、福井大学産学官連携本部長の米沢晋教授による特別講演「産学官連携の源泉」の後、企業ニーズ・シーズ発表では地域連携アカデミアの会員である坂川建設株式会社常務取締役の山本健一氏より「創業100周年を平成21年に迎えてさらなる前進を！」、株式会社ホクシン代表取締役社長の前野光正氏より「教育機関・研究開発機関あらゆる産業界のテクニカルパートナーを目指して」の発表が行われた。また、本校からは6名の新任教職員を含む8名の教職員が研究シーズの発表やポスター展示を行い、来場者との交流を深めた。

⑬ エコプロダクツ2013

環境問題解決を目指したビジネス創出や技術開発、また、持続可能な社会や地域づくり等を目的とした産業展示会であるエコプロダクツが、12月12日～14日に東京ビッグサイトで開催された。東海北陸地区高専合同ブースにおいて、物質工学科の後反克典助教が「マイクロバブルによる染色廃液の浄化法の開発」のテーマで発表し、来場者と意見交換を行った。

⑭ 武生商工会議所異業種交流会

武生商工会議所所属の企業に対し本校の研究シーズと人材育成の現状を紹介し、産学連携を深めることを目的とした情報交換会が、2月6日に武生商工会議所で開催された。本校の学科長、教室主任、進路指導委員長等より各科等の取り組みを紹介し、企業関係者と交流した。

⑮ 地域連携アカデミア会員企業見学会

会員企業の業務内容を理解し共同研究や連携事業の可能性を探り、また、会員企業同士及び本校教職員との交流を深めるため、アカデミア会員企業見学会を3月19日に開催する。テーマは「めがね産業」であり、株式会社シャルマンの会社見学、めがね会館の見学と講演会、情報交換会を予定している。

(4) コンテストを通じた地域貢献

① 第19回マグネットコンテスト

レア・アースマグネットの世界的生産拠点となっている越前市の信越化学工

業株式会社武生工場の支援を受けてマグネットコンテストを主催している。毎回多数の作品が寄せられ、児童、生徒や学生の理科離れ対策の一つとして、独創的な思考力の涵養の一環として役立っている。第19回となる今年度は、「遊びごろのやわらか頭」のテーマに1、844件の応募が寄せられ、厳正な書類審査の結果27件が入賞し、2月10日に武生商工会議所で表彰式が行われた。

② 第8回越前市中学生ロボットコンテスト

越前市では、中学校技術・家庭科技術分野において生徒たちの創造性を伸ばし、知識・技能を高めることという趣旨の下、全日本中学校技術・家庭科研究会が主催する創造アイデアロボットコンテスト全国中学生大会のスタートアップ大会という位置付けで、毎年、越前市中学生ロボットコンテストを開催している。テクノセンターは平成22年度より会場の提供と大会運営のサポートという内容で協力してきた。その一方で、中学校では教育カリキュラムの変更により、ロボット製作の指導時間が十分に取れない問題が生じており、その対応策として、事前にロボット製作教室を開催するなど、より積極的な形での協力を行っており、平成25年度は製作教室を本校で2回実施した。その指導を終えた9月28日に本校体育館にて大会を開催した。参加した中学校は6校で、授業内部門に26チーム、応用部門に16チームが参加した。この大会で経験を積んだチームが11月24日に行われた福井県大会で優勝した。また、12月7日に愛知県で行われた東海北陸ブロック大会では第3位、そして1月25日に東京都で行われた第14回創造ものづくり教育フェア創造アイデアロボットコンテスト全国大会においてベスト8に進出し、本校と連携して行った製作教室と地区大会の取り組みが結果に結びつく成功事例が生まれた。

③ 第7回きのくにロボットコンテスト

全日本小中学生ロボット選手権は、和歌山県で行われているきのくにロボットフェスティバルの中のコンテストであり、テクノセンターでは平成22年度より小学生部門について支援を行っている。8月11日に13人の参加者全員を対象とした講習会を本校で行い、8月17日に予選会を実施した。上位2チームが12月15日に和歌山県御坊市で開催された全日本大会に出場したが、惜しくも入賞はならなかった。

④ 第7回歯みがきロボットコンテスト

福井県歯科医師会では、子供を対象とした歯みがきの啓蒙活動と科学技術への興味喚起を目的として、平成19年度より勝山市の越前大仏を会場に歯磨きロボットコンテストを開催している。同コンテストは、主な対象を小学生としたリモコン部門と、一般を対象とした自律部門からなり、巨大な歯ぐき模型に付けた虫歯に見たてたマグネットを除去するロボットの速度や正確さを競うも

のである。平成25年度は9月22日に開催され、リモコン部門に21組、自律部門に12組が参加した。テクノセンターは初年度よりルール作成や当日の審判など大会運営に協力しており、本校電子情報工学科の授業の中で開発を進めた機体も大会に参加できる仕組みを設けている。

⑤ 第3回小水力発電アイデアコンテスト

地球温暖化をはじめとする環境問題が注目される中、低炭素社会への実現に向け、自然エネルギー活用の要求が高まっている。小水力発電は中小河川や用水路など現存する様々な水流を利用して行う発電であるため、環境負荷の少ない純国産の再生可能なクリーンエネルギーとして期待されている。小水力発電アイデアコンテストは、地域資源を活かした自然エネルギーによる地域貢献と、ものづくりの実践体験を通じた技術者育成を目的としたものであり、株式会社デンソーとNPO法人地域再生機構の支援のもと平成23年度より開催されている。第2回大会は平成24年度に三重県いなべ市の協力により開催され、東海北陸地区9高専のチームが現地調査や現地での合宿を経て発電システムを作製し、現地での設置までを行った。本校ではテクノセンターが窓口となり、機械工学科、電気電子工学科、環境都市工学科の学生が集まり、多学科融合型のチームを結成してコンテストに臨み、農業用水路で発電した電気を水路の水門を水位センサーで自動開閉する装置に活用するアイデアを現実化し、見事、最高位である金賞と地域貢献賞をダブル受賞した。

平成25年度の第3回大会は鯖江市が開催地に名乗りをあげ、本校との連携事業として運営を行っている。8月30日～9月1日に鯖江市河田地区のうるしの里会館とラポーゼ河和田を会場に7高専が地域住民と交流しながら発電機の設置場所を決定する合宿を行った。また、3月22日と23日には同地区において7高専による発電機の設置と成果発表会が行われる。審査委員には牧野百男鯖江市長を初め、地域の区長や住民の方が務める予定であり、高専の学生と地域住民との深い交流が期待される。

(5) 科学技術系クラブの活動への支援

独立行政法人国立高等専門学校機構特別教育研究経費（企業技術者等活用経費）「企業技術者等活用プログラム」の支援を受けて、平成24年度から2年間のテクノセンターの事業として「地域の匠を活用した科学クラブの共同教育」を実施している。本事業は、科学技術系クラブに所属する学生の技術力を高度化し、課外活動を活性化させて、地域産業の継承とイノベーション創出に貢献できる学生を育成することを目的として、丹南地域に根付く伝統産業の匠の技や、地場産業のエンジニアの技術を活用するものである。

現在、本校ではロボット部、THE研究会、エレクトロメーキング部、IT研究

会プロフォ、放送・メディア研究会、デザイン研究会、サイエンスクラブなど計13の科学技術系クラブが活動しており、また、その中の学生が主体となり、ロボットコンテスト、プログラミングコンテスト、デザインコンペティションに出場するチームが構成されている。本事業では、これらのクラブ活動を技術的にサポートするスタッフとして、機械、電気、情報、材料、デザインの各分野において地域の産業界で活躍する方々5名を講師として招聘し、放課後や長期休業中を利用して学生指導を担当していただいている。また、マスメディアで活躍する方々2名を招聘し、身に付けた技術を人々に分かりやすく伝えるための話す力や、放送番組をプロデュースする技術を指導している。

12月16日には武生特殊鋼材株式会社の坪川翼氏（専攻科環境システム工学専攻修了生）とナノ・ビジュアロジカル社の中川眞男氏を講師に迎え、「福井の匠技を世界へ（役立つものを生産し、世界へ羽ばたこう）」の演題で学生対象の講演会を行った。そこでは、世界の料理界から評判の越前打刃物のナイフの切れ味紹介と材料開発、世界に販路を向ける秘話等を伺った。また、1月26日には元三菱自動車エンジニアリング株式会社エンジン設計部長の横山泰弘氏に「日本の設計能力は大丈夫？」の演題で、また、元東芝株式会社液晶開発技師長の鷲田浩志氏に「ディスプレイ開発の歴史と教訓」の演題で教員対象の講演会を行った。そこでは、日本の技術現場力の衰退の現状について伺い、今後の技術者教育の課題について意見交換を行った。

（6） 起業家の育成と事業創出の支援

福井県内において起業家を育成し、伝統産業や地場産業の活性化に寄与することを目的として、地域連携テクノセンターの3階に「アントレプレナーサポートセンター」を設置している。対象者は数年後に起業を志す、もしくは、自らのアイデアを事業に結び付けたいと考える地域の社会人や本校の学生であり、オフィススペース（定員6名）を半年契約で提供している。平成25年度には新規2名（学生1名、社会人1名）が入居し計5名となった。また、1名（電子情報工学科卒業生）が平成26年より福井県内でIT関係の会社を起業する成功事例が生まれた。

また、武生信用金庫の協力により、アントレプレナーサポートセンターに在籍する者や、卒業生、在校生を対象とした起業支援資金制度を設けており、希望者に情報提供を行っている。

（7） 地域連携アカデミアとの連携

本校の教育研究活動の振興を目的として組織された地域連携アカデミアは、平成25年度に新規に1社の入会があり計37社となった。平成26年度より入会予定の企業が1社あり4月には38社となる予定である。企業技術者等活用プログラム

で任用した共同教育コーディネーターが会員企業を訪問しており、今後の人材育成や連携事業の要望について意見を集約している。

2. 点検・評価

地域等における各種イベントへの出展、主催・共催事業については、例年どおりの活動ができ、新規事業も実施することができた。また、共同研究の受け入れについては、件数、金額ともに昨年度を上回った。よって、達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・方策

共同研究や受託研究の件数や金額を増加させるために、テクノセンターの活動の見える化、地域連携アカデミアとの連携事業の活性化、研究シーズ集の充実など、産官学共同研究の促進につながる活動をさらに充実させる。そのためには、産官学の連携をサポートするコーディネーターの存在が必要不可欠であり、今後はその任用方法と研究支援体制について、研究改善委員会と連携して検討する。

平成25年度事業一覧

月	日	内容	場所	備考
4	22	第11回全国高専テクノフォーラム実行委員会に参加	ABC貸会議室(名古屋市)	
5		活動紹介誌『JOINT 2013』の発行		
	11	キャンパスウォークでマイクロビーム分析実験室の紹介	福井高専	
6	3	越前伝統工芸連携協議会に出席	越前市商工会館	
	24	地域連携アカデミア総会の開催	福井商工会議所	主催
	28	第1回東海北陸地区テクノセンター長会議に参加	ウインクあいち(名古屋市)	
		ニュースレター『Newsletter Vol.4』の発行		
7	企業技術者等活用プログラム「地域の匠を活用した科学クラブの共同教育」の活動開始			
8	10	第3回防災グッズ工作教室の開催	福井高専	共催
	11	第7回きのくに学生ロボットコンテスト講習会の開催	福井高専	共催
	17	第7回きのくに学生ロボットコンテスト予選会の開催	福井高専	共催
	20	第11回全国高専テクノフォーラムに参加、出展	ウインクあいち(名古屋市)	
	25	第8回越前市ロボットコンテスト講習会の開催	福井高専	共催
	26	第9回世界ファブラボ会議国際シンポジウムに出席	神奈川芸術劇場(横浜市)	
	29-30	イノベーションジャパン2013大学見本市に参加、出展	東京ビッグサイト(江東区)	
	29-31	第61回工学教育研究講演会に参加、発表	新潟大学(新潟市)	
	30-9/1	第3回小水力発電アイデアコンテスト合宿に参加	ラポーゼかわだ	
9	1	第19回マグネットコンテストの作品募集開始		主催
	2-3	平成25年度知的財産に関する想像力・実践力・活用力開発事業中間報告会に出席	工業所有権情報・研修館(千代田区)	
	13	日本電産テクノモーター課との情報交換会に参加	福井技術開発センター(小浜市)	
	22	第7回歯みがきロボットコンテストに参加	越前大仏(勝山市)	共催
	21-23	丹南産業フェア2013に参加、出展	サンドーム福井	後援
	28	第8回越前市中学生ロボットコンテストの開催	福井高専	共催
10	9-11	TECH Biz EXPO 2013に参加、出展	ポートメッセなごや(名古屋市)	
	11	第2回東海北陸地区テクノセンター長会議に参加	ウインクあいち(名古屋市)	
	16-18	北陸技術交流テクノフェア2013に参加、出展	福井県産業会館	
	18-20	さばえものづくり博覧会2013に参加、出展	鯖江市霽陽会館	
	30	北信越工学教育協会福井県支部研究集会に参加、発表	福井大学	
11	1-2	ものづくり岐阜テクノフェア2013に出展	セラミックパークMINO(美濃市)	
	6	第9回FITネット商談会に参加、出展	富山産業展示館(富山市)	
	6	北陸ライフサイエンスクラスターキックオフフォーラム	ホテル日航金沢(金沢市)	
	28	JOINTフォーラム2013の開催	サンドーム福井	主催
	ニュースレター『Newsletter Vol.5』の発行			
12	10	第19回マグネットコンテスト最終審査会の開催	福井高専	主催
	12-14	エコプロダクツ2013に参加、出展	東京ビッグサイト(江東区)	
	15	きのくにロボットフェスティバル全日本小中学生ロボット選手権に出席	御坊市立体育館(御坊市)	共催
	16	企業技術者等活用プログラム学生対象講演会の開催	福井高専	
	16	工業技術を活用した次世代農業研究会設立会に出席	福井県職員会館	
	25	東京電力福島第一原子力発電所の廃炉に向けた研究開発計画と基盤研究に関する第7回ワークショップに出席	福井大学	
1	24-25	災害対応ロボット技術交流会に参加、出展	敦賀きらめきみなと館(敦賀市)	
	27	国際知的財産活用フォーラム2014に出席	セルリアンタワー東急ホテル(渋谷区)	
	28	企業技術者等活用プログラム学生対象講演会の開催	福井高専	
2	6	武生商工会議所異業種交流会「福井高専との情報交換会」に参加、発表	武生商工会議所	
	10	第18回マグネットコンテスト表彰式の開催	武生商工会議所	主催
	13	第10回グリーンイノベーション研究会に出席	富山国際会議場(富山市)	
	21	地域イノベーション戦略支援プログラム会議に参加	福井パレスホテル	
3	6	第3回東海北陸地区テクノセンター長会議に参加	貸会議室(名古屋市)	
	7	ふくい知財フォーラムに参加	ホテルフジタ福井	
	19	アカデミア会員企業見学会の開催	株式会社シャルマン他	主催
	22-23	小水力発電アイデアコンテスト発表会に参加	鯖江市河和田地区	
		ニュースレター『Newsletter Vol.6』の発行		

○ 教育研究支援センター

1. 現状

(1) 基本方針

平成16年4月に開設した教育研究支援センターは、技術職員の教育支援業務や技術支援業務を組織立って、かつ、効率よく行うことを使命とし、それらを円滑に全うするために「業務推進委員会」を設置している。さらに、技術職員の素養や意欲を高めるとともに地域社会に貢献する趣旨のもとに、3つの「ワーキンググループ」を置いて活動している。また、技術職員の行動目標に“職務期間を通して学習・自己研鑽を継続すること”、“論理的コミュニケーション能力の習得と向上に努めること”、“技術者倫理を重んじて社会や技術の発展に寄与すること”を掲げている。

(2) 活動状況（平成25年度）

① 教育支援

本科ではものづくり科学、コンピュータ科学入門、化学実験、物理実験、工学基礎物理（実験）のほか専門5学科の製図、実験、実習、演習、卒業研究などの支援業務に、また、専攻科では環境システム工学実験の支援業務にあたった。

② 技術支援

専門学科より依頼のキャンパスウォーク（5月）、キャンパスツアー（8月）、キャンパスリサーチ（10月）や公開講座、出前授業、コンテストなどの支援業務を担った。加えて、福井県和紙工業協同組合より委託の水質検査を行った。

③ ワーキンググループ

ア 研修ワーキンググループ

第2回～第5回の「教育研究支援センター連絡会」において、『研修等出張報告会』を併せて開催した。研修等の名称と報告者は次のとおり。

- *北陸地区国立大学法人等初任者研修 中村職員
- *独立行政法人 国立高等専門学校機構 初任職員研修会 小木曾職員
- *東海・北陸地区国立大学法人等技術職員合同研修－生物・生命コース
舟洞職員
- *アナログ・デバイス株式会社 回路設計厳選セミナー2013 in 金沢
中村職員
- *独立行政法人 国立高等専門学校機構 東日本地域高等専門学校技術職員特別
研修会－機械系 藤沢職員
- *東海・北陸地区国立高等専門学校技術職員技術長連絡会議 坪川職員
- *東海・北陸地区国立高等専門学校技術職員研修 舟洞職員
- *松江工業高等専門学校実践教育支援センター視察報告 堀井職員

*機器・分析技術研究会

片岡職員

*三重大学技術発表会

片岡, 中村, 小木曾職員

これらのほか『新任者安全衛生講習（4月）』、『安全・衛生勉強会（6月）』を催すとともに、『科学研究費補助金一奨励研究の採択に向けた研修会（10月）』も開催した。申請者は8名であり、昨年を2名上回った。

平成26年3月10日には、大会議室で全教職員を対象に『平成25年度教育研究支援センター発表会』を開催する予定である。

イ 学外貢献ワーキンググループ

昨年度に引き続き、教育研究支援センターが企画・運営する公開講座を2回実施した。

第1回は、平成25年7月28日に「親子科学教室—科学は身近にあふれている。さあ、科学の扉を開けましょう！」を基礎科学実験室Ⅱ（テーマ：DNAはどこにある—バナナからDNAを取り出そう）、職員会館（あなたもエンジニア—簡単電子回路を組み立てよう）、心和館・陸上競技場（ペットボトルロケットを作ろう—遠くに飛ばすための仕組みと工夫）にて開催した。参加者は小学生19名、保護者18名の計37名であり、事後アンケートへは“理科に興味を抱くことができた”、“工作を円滑に進めることができた”との回答が多く寄せられた。

第2回は、平成25年11月10日に総合情報処理センターを会場に「親子で作る初めてのオリジナル写真年賀状」を開催した。児童・生徒9名、保護者7名の計16名が参加し、“出来栄えに満足した”や“内容がおもしろい”といった評価を得た。

ウ 広報・総務ワーキンググループ

教育研究支援センターのホームページの更新に関連して、CMSと称するツール（Concrete5）を導入した。CMSには階層ごとに編集権限を付加する機能が備わっていることから、例えば公開講座や講習会などの情報をセクション単位で分担編集できるように整備した。また、ガルーンの効果的な使い方（各種イベントのメール通知機能、Adobe Airによるサイボウズデスクトップ機能）について、情報提供を逐次行った。

活動広報誌である『教育研究支援センター 平成25年度年次報告—第9号』を企画、編集して平成26年3月に発行する。

④ 労働安全衛生マネジメントシステム（OSHMS）プロジェクトチーム

平成25年度校長裁量経費に“より安全な実験・実習を行うための「労働安全衛生マネジメントシステム（OSHMS）」の構築”が採択されたことを受けて、5名の技術職員から成るプロジェクトチームを組織した。当該経費で購入した物品は熱中症指数モニター4台、照度計2台、粉塵計1台であり、8月から1

2月にかけて構内各所で測定を行った。それらの結果を整理し、「熱中症指数・照度・粉塵測定中間報告」と題して教育研究支援センターのホームページに掲載した。

これに加えて、平成24年度から継続して収集してきたヒヤリ・ハット事例も機械系、電気電子系、情報系、化学系、環境系、全分野ごとに整理して今年度末までに掲載する。

OSHMSプロジェクトチームの活動及びヒヤリ・ハット事例の収集は平成26年度も実施し、その成果や情報はホームページで順次公開することになっている。

2. 点検・評価

常勤の技術職員自らが記入した当該年度の担当業務シート及び業務改善目標管理シートをもとにセンター長との期首面談（5月）、期中面談（10月）、期末面談（3月）に臨んで進捗状況を確認、改善意識の持続・向上に努めている。さらに、期末に提出する職務行動点検・評価シートと合わせて当該年度の達成度を自己分析することによって、教育研究支援センター全体の次なる目標設定に役立てている。

このことと先の（2）で報告した3つのワーキンググループ及びOSHMSプロジェクトチームの積極的な活動を根拠に、平成25年度の達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・対策

平成26年2月下旬、改修された図書館の2階に教育研究支援センターが移転し、活動の拠点としての役割を果たすべく再始動する。新たな教育研究支援センターには4名の技術職員が入居し、そこから教育支援業務や技術支援業務に赴く。また、公開講座の準備や予行に加えて、ワーキンググループやOSHMSプロジェクトチームの打合わせ、10名ほどの勉強会や研修会を高頻度で催すことも可能となる。

新年度を控えて、現在は活動拠点の実効ある使用方法、言い換えれば、技術職員のスキルアップに資する種々の具体策を協議、立案しているところである。

IV-4. 委員会等に関する事項

○ 教育システム推進委員会

1. 現状

(1) 教育システム推進委員会の業務

本校の教育システムを円滑に運用し、その充実を図るために、教育システム評価委員会から平成24年2月に改正された委員会である。委員会の主な業務内容は、教育システムに関する次の事項に関して、連絡、調整及びフォローアップ等を行うことである。

- ① 教育システムの実施に関すること。
- ② 教育システムの点検、評価及び改善に関すること。
- ③ その他教育システムの推進に関すること。

(2) 平成25年度の活動

当委員会は平成24年度より再編成され、現委員会はPDCAのいずれかに属するのではなくPDCAサイクルが決められた手順で進行しているかについて調整・橋渡し・フォローアップを行う役割を担うこととなっている。以上の認識のもと以下の様な取り組みを行った。

教育システム推進委員会では校内にファイルサーバを設置し、その中に共有フォルダを設けている。委員はユーザー名とパスワードにより資料を保存・閲覧することが可能となっている。同フォルダ内には、平成16年度から昨年度までの教育システム評価委員会の資料が格納されており、必要な時に過去のアンケート結果などを閲覧可能である。すなわち、同フォルダの状況を踏まえて、各委員会のPDCAサイクルの進捗状況を確認することが可能となっている。

本年度、当委員会が実施した内容を以下に示す。

- ① 委員会メンバーの拡充
 - ア 地域連携テクノセンターに係るPDCAの状況を把握するため、委員会規則第5条を適用し同センタースタッフ1名を委員に加えた。
- ② PDCAサイクル進捗状況の確認
 - イ 平成24年度PDCAサイクルの記載状況を確認した。
 - ウ 平成25年度PDCAサイクルの実施予定を確認した。
- ③ 教育システムの点検、評価及び改善に関する調整
 - エ 平成24年度外部有識者会議における意見・提言を整理した上で、これらに対応する委員会（対応委員会）を調整し、各対応委員会に対応を求めた。
- ④ その他
 - オ 平成25年度の外部有識者会議は平成26年3月上旬に開催されることから、

この際の意見等に対する対応委員会の決定等は平成26年度の教育システム推進委員会に申し送る。

2. 点検・評価

アは今年度新たに実施した。イに関しては完了していることを確認した。ウに関しては進行中の内容も含まれていることから、今後も共有フォルダを継続的に確認していく必要がある。エに関しては実施済である。オに関しては過年度（平成24年度）分の報告は終わっているが、本年度分は今後（3月）の実施を予定していることから未了である。

以上のことから、現段階で実施可能な内容についてはほぼ完了していると判断できるが、一部年度末あるいは年度を越えた対応が必要なものもあり、達成度をBと評価する。

3. 改善課題・方策

達成度評価をBとした実施未了部分については、現段階（1月末）は解決が困難である。教育システム推進委員会は平成24年度から本校のPDCAサイクルを円滑に推進するために体制を再構築したばかりである。今後は、年度をまたがざるを得ない事情への対応を含め、更なる教育システムの推進を図ることが肝要である。

○ 情報セキュリティ推進委員会

1. 現状

機制作成による情報システムユーザガイドラインに基づき平成25年10月24日に、全教職員を対象とした情報セキュリティに関する講習会を開催した。同ガイドラインは平成25年度中に、全学生への配布を予定している。

高専機構による情報セキュリティ監査を平成25年10月30日～11月1日にわたり受審した。受審時には、校内の情報セキュリティに関連する施設の視察などが行われた。受審の結果、大きな問題点の指摘には至っていない。

2. 点検・評価

情報セキュリティ監査では、以下の点が指摘された

- ① 情報セキュリティに関する規定では現状では問題はないものの、情報技術の発展とともに新たな問題が浮かんでくることから、規定について引き続き整備・見直し・再確認などが必要である。
- ② 情報セキュリティの危機管理体制についてはやや未整備の部分があるが、近々に機構から全高専に整備指針が示される予定であることから、その際に既存の危機管理体制との連携・整備が必要である。
- ③ 機密情報を扱う端末でのID/パスワードの管理については、ややポリシーの運用改善や、スクリーンセーバーなどパスワードロックのさらなる徹底が求められる。

上記の指摘を踏まえ、

機構主催の情報セキュリティ講習会や文科省主催の情報セキュリティ最高責任者会議などに、関連教職員を派遣し、新たな情報セキュリティ問題などへの情報収集に積極的に取り組んでいる。機構からの危機管理体制の整備指針が示された際には、講習会などで得られた知識などを踏まえ、危機管理体制の見直しを検討している。

機密情報を扱う端末でのID/パスワードの管理についても、セキュリティ監査の指摘を受けポリシー運用の徹底や、端末へのスクリーンセーバー設定などの徹底を行った。

以上のように、情報セキュリティ監査の受審及びそこでの指摘内容を速やかに対応していることから、達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・方策

特に改善すべき課題はない。

○ J A B E E委員会

1. 現状

昨年度に受審した中間審査の結果が2013年4月に届き、3年の認定延長が認められた。次回は2015年度に継続審査を受審する予定である。J A B E E審査は、本校が継続的な教育改善がなされているかの審査である。本校の「環境生産システム工学」プログラムでは、目指す技術者像、学習・教育目標及びそれらの評価方法等が整備されており、さらに社会に優秀な人材を輩出していることから、そのことを示す根拠資料を継続審査へ向けて整えている。かつ、さらなる教育改善を心がけていくことも重要である。今年度は懸念事項として指摘されている項目についての改善を検討し、エビデンスの残し方をシステム化するとともに、プログラムの内容をさらに教職員に周知し、教育改善を促すこととした。

2. 点検・評価

審査において懸念事項として指摘された項目である実験演習系科目のシラバスの記載方法についてはJ A B E E委員を通じて各学科に周知し、来年度から改善される。また、前回継続審査からの懸念事項である継続的な教育改善については、今年度より、自己点検・評価委員会及び教育システム推進委員会の役割を明確にして、継続的教育改善を行いやすいようにして既に活動をしている。来年度からは成績資料等の根拠資料については、担当する専攻科委員会や教務委員会等が継続的に収集するようにする。また、技術士を招いての講演会を継続して実施しており、教育プログラムに関する周知活動を行っている。年度末には専攻科長から教職員を対象としたプログラムに関する説明会を行い、周知の徹底を図る予定である。したがって、以上のことから達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・方策

2012年度版J A B E E基準による自己点検書は、自己点検が記述しやすく改良されており、すべての項目に対して自己点検が行いやすく、根拠資料の整備も行いやすい。したがって、来年度からは、J A B E E自己点検書のそれぞれの項目の担当委員会においてもJ A B E E自己点検項目の点検及び評価を実施するように改善したい。

○ 研究紀要委員会

1. 現状

第1回研究紀要委員会を6月6日に開催した。この委員会では各学科に投稿依頼をお願いするとともに、投稿締め切りを7月16日に、公聴会、査読の期間を9月中とすることなどを審議し、了承された。次に、印刷の簡素化を図るため提出原稿をカメラレディにすること、自然科学・工学と人文・社会科学の冊子を1冊にして発行することについて審議した。その結果、以前カメラレディにした際、様式の統一性がとれず結局修正することになったことと、投稿の手引きに正確に合わせるため、投稿者に負担をかけることなどから、現行通りとなった。一冊化に関しては人文；社会科学系から反対の意見があったが、投稿件数で考えることとなった。また、委員から査読と公聴会の両方行っているが、どちらか片方でよいのではないかとの意見があった。

第2回研究紀要委員会での件について審議した。学科・教室等での審議結果に基づき、学科・教室のスタイルに合わせ、査読か公聴会かどちらかの審査方法にすることが了承された。

第3回研究紀要委員会では各委員より、査読や公聴会に基づき、投稿されたすべての論文が研究紀要への掲載に適するものであると報告があった。この結果、投稿されたすべての論文を研究紀要47号に掲載し、12月に刊行した。

2. 点検・評価

今年度の投稿件数は自然・工学系 6編、人文・社会系 2編の計8編であった。過去4年間の投稿件数は次のとおりである。

平成24年度	自然・工学系	4編	人文・社会系	5編	計9編
平成23年度	自然・工学系	7編	人文・社会系	5編	計14編
平成22年度	自然・工学系	5編	人文・社会系	2編	計7編
平成21年度	自然・工学系	3編	人文・社会系	4編	計7編

この状況から、今年度の投稿件数も例年並みであると考えられるため、今年度の達成度評価はAと判断した。

3. 改善課題・方策

ここ数年、一定数の投稿件数はあるが、低迷はしており、今後もこのような状況が続くものと思われる。このことは特に自然・工学系において、研究紀要が研究業績の対象となっていないことに原因はあると考えられるが、投稿件数を増加させていくためには、新たな改善方策を検討することは必要であると思われる。

○ 遺伝子組換え実験安全委員会

1. 現状

- (1) 平成25年度遺伝子組換え実験の申請について、厳正かつ慎重なる審議の結果、その実験実施を承認した（下記8件）。

実験責任者：物質工学科教授・高山勝己

番号	第二種使用等の名称	拡散防止措置の区分	実験実施期間
25-1	有機リン加水分解酵素を表面発現した酵母を用いる有機リンセンサーの開発	P1 レベル	2013.4-2014.3
25-2	GFP 遺伝子の <i>E. coli</i> 発現実験 (微生物等使用実験)	P1 レベル	2013.4-2014.3
25-3	pUC19 を用いる遺伝子組換え学生実験 (微生物等使用実験)	P1 レベル	2013.4-2014.3
25-4	<i>E. coli</i> ニトロレダクターゼ遺伝子の酵母表層発現	P1 レベル	2013.4-2014.3
25-5	人工フィトキラチン表層発現させた酵母の創製	P2 レベル	2013.4-2014.3
25-6	<i>Acinetobacter</i> , <i>Pseudomonas</i> , <i>Gluconobacter</i> 属を用いるバイオ燃料電池の研究	P2 レベル	2013.4-2014.3
25-7	シロイヌナズナを対象とした遺伝子組換え実験	P1 レベル	2013.4-2014.3

実験責任者：物質工学科講師・川村敏之

番号	第二種使用等の名称	拡散防止措置の区分	実験実施期間
25-8	GFP 発現 <i>E. coli</i> (遺伝子組換え実験キット使用学生実験)	P1 レベル	2013.4-2014.3

- (2) 文部科学省研究振興局ライフサイエンス課生命倫理・安全対策室「病原性微生物等の保管・管理の徹底及び保有状況等の調査」の実施及び調査報告書を提出した。
- (3) 厚生労働省からの「臨床研究に関する倫理指針」の周知徹底依頼（通知）について、本校において臨床研究に携わる関係者に対して、再度、当該臨床研究指針の周知徹底及びその遵守のための指導を実施した。
- (4) 文部科学省研究振興局ライフサイエンス課生命倫理・安全対策室からの「ライフサイエンスに関する生命倫理・安全対策等」及び「特定病原体等適正管理」の周知依頼について、本校の関係研究者に対して、再度、「生命倫理・安全対策等に関する最近の

動向について」(配付資料)を基に、ライフサイエンス実験及び特定病原体・病原性微生物等の保管・管理についての留意・注意事項等の指導を実施した。

2. 点検・評価

現状において記載したとおり、本年度の実施・活動状況については例年同様の実績と成果が見込まれ、達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・方策

ライフサイエンスに関する生命倫理・安全対策、特に、遺伝子組換え実験等に関する安全対策について、本校においては、社会の動向や研究の進展を踏まえつつ、法令や指針の適切かつ効率的な運用及びその遵守のための必要な体制を更に整備するとともに、関係研究者へのなお一層の周知徹底を図る。

○ 知的財産教育委員会

1. 現状

知的財産教育委員会は、本校における知的財産の管理や活用並びに学生に対する知的財産教育に関する事項を扱う。

(1) 教職員の職務発明等

平成25年度（平成26年1月末現在）における発明届の申請はない。

(2) 講習会等の開催

知的財産に関する講習会等を3件開催した。1件目は、本科1年生を対象として7月10日に開催し、講師は有限会社サイトー企画代表取締役社長斉藤秀夫氏（本校機械工学科卒業生）、題目は「秀丸エディタの開発者から見た知的財産—知的財産はどのようにして生み出されたのか—」である。2件目は、インターンシップに参加する専攻科1年生を対象として7月24日に開催し、講師は弁理士の川崎好昭氏、題目は「知的財産制度の概要と会社等の知的財産管理」である。3件目は、本校教職員を対象として1月30日に開催し、講師は高専機構発明コーディネータの清水榮松氏、題目は「知的財産制度の概要」である。いずれも、今後の知的財産を扱う技術者、研究者に必要な知識を身に付ける有意義な機会となった。

(3) 知的財産の資産化に関する情報収集と他機関との連携

独立行政法人工業所有権情報・研修館主催「国際知的財産活用フォーラム2014（1月27日、東京都）」、福井大学主催「ふくい知財フォーラム（3月7日、福井大学）」に委員を派遣し、知的財産の活用に関する情報収集や他機関との連携を行う。

(4) 知的財産教育のカリキュラムへの導入

11月26日開催の知的財産教育委員会において、知的財産教育のカリキュラムへの導入について意見交換を行った。冒頭、独立行政法人工業所有権情報・研修館の知的財産に関する想像力・実践力・活用力開発事業の支援を受けて「アイデアコンテストを取り入れた体系的ものづくり知的財産教育の推進」を実施している電気電子工学科の川本昂教授が話題提供し、今後の全学的な知的財産教育に関する目的や課題について議論を行った。なお、上記事業の中間報告会（9月2日・3日）に委員を派遣し情報収集を行った。

2. 点検・評価

学生や教職員の知的財産に対する意識付けを強化する取り組みを実施したが、特許出願等の職務発明にはつながらなかった。よって、達成度評価はBと判断する。

3. 改善課題・方策

モデルコアカリキュラムの観点から、知的財産教育をカリキュラムに組み込むことが求められている。今後、教務委員会や専攻科委員会と連携した協議が必要である。また、本校教職員による発明届をさらに増加させるための支援体制の構築が必要である。

○ ネットワーク委員会

1. 現状

第1回委員会を平成25年5月10日に開催した。委員会では、校内の無線LANの運用について、教員が教育研究用に無線LAN機器を設置している状況を把握するために、申請書類などを整備することについて審議し承認された。また、福井高専の外部接続回線の更新について報告を行った。今回の契約更新では、SINET接続を30Mbpsから100Mbpsに高速化、商用線接続も30Mbpsから100Mbpsに高速化を行い、さらに福井高速ネットワークFISH（100Mbps）とあわせた3回線について、今までは単年度契約であったものを複数年契約に切り替えた。昨年導入された校内LANシステムについて、教職員のメール認証に利用することも報告した。

平成25年度の補正追加予算により校内無線LANの整備が認められたことから、第2回委員会を平成25年10月29日に開催した。委員会ではアクセスポイントの設置場所や運用方法について審議が行われ、学生の自己学習の活性化を目標とすることや、教室や講義室を中心に設置することなどが承認された。

2. 点検・評価

福井高専の外部接続回線の契約の更新では、ネットワーク接続の高速化が実現され、問題なく稼働している。一方で、外部接続契約が複数年契約とできたことから、通信費用については節約を図ることができた。

校内無線LANについては、委員会の方針に基づき仕様策定が行われ、電波帯域の管理が容易なシングルチャネル機能を持つ機器の導入が決まり、平成26年3月までに設置を終え4月より稼働を予定している。

昨年度導入された校内LANシステムについても、認証システムを教職員のメール認証に利用するなど、活用の幅を広げることができた。

以上のような実績を残していることから、達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・方策

特に改善すべき課題はない。

○ 安全衛生委員会

1. 現状

安全衛生委員会は、本校教職員の健全な就労環境と健康の維持を主目的にしたものであるが、その達成のため以下のことを行っている。

(1) 健全な就労環境維持:

- ① 月1回の巡視による危険箇所や不衛生なところの点検などを行い、規則に適した状態を維持するように指導・助言・監督を行っている。また、指導後に改善状況の報告義務を新たに課して、安全衛生管理体制を強化した。
- ② 就業上のリスク管理（安全教育やマニュアルの作成など）が適切に行われているかをチェックした。
- ③ 心身にハンディキャップを持つ教職員に対して、産業医との連携の下で適切な作業負荷を考慮しつつ就労環境の整備に努めている。

(2) 健康維持・管理:

- ① 法定の健康診断（定期・特定）を実施し、異常が認められた者には産業医との面談等を含め適切な措置を講じるよう指導を行っている。
- ② メンタルヘルスに関しては、カウンセラーによる相談（随時）や高専機構の相談室の利用を勧め、必要があれば産業医のアドバイスも受けられるよう体制を整えている。また、定期健康診断時に合わせてストレスチェック（アンケート形式）を行い、過重なストレスが健康に悪影響を及ぼすことのないよう、産業医・カウンセラーと連携を取りながら対処している。
- ③ 健康増進に関しては、軽作業が多い就労環境であることを考慮して、エアロバイクやルームランナーなどを設置し、休憩時間等の散歩などを勧め、運動量を増やす工夫を行っている。また、リスク管理の観点から、感染症対策に努めており、麻疹やインフルエンザ等のワクチン接種における経費の全額又は一部を補助することで接種率の向上を図っている。
- ④ 平成23年度より一般定期健康診断の有所見の改善取組計画を策定し、改善に向けた取組を実施した結果、平成25年度については前年度と比べ、有所見率が14%改善した。

2. 点検・評価

健全な就労環境の維持に関しては、適切に運営され、支障のない環境が維持されているといえる。また、健康の維持管理においては、絶対評価が難しい側面はあるが、サポート体制において十分な体制を整えていると考える。よって、達成度評価はAと判断する。

3. 改善課題・方策

健全な就労環境の維持に関しては現行を継続し、評価疲れにならないよう工夫をしながら巡視やアンケートを行い、結果を適切にフィードバックして行くことに努める。また、健康維持管理に関しては、個人意識の啓発を図り、重篤化する前に専門機関に相談するように勧奨していく。

V. 総括

前章で行った自己点検・評価を事項ごとに、自己点検・評価委員会として総括する。

1. 全学的に関する事項

教務関係については、本校の教育理念に基づき、養成すべき人材像を規定し、それに沿う形で本科と専攻科のカリキュラムが編成されている。原子力人材育成教育や長岡技術科学大学との戦略的技術者育成協働教育は継続されており、さらに、本年度より長岡、豊橋の両技術科学大学と高専機構の3機関が連携を取り、イノベーション力を持ったグローバルな人材育成を目指した連携・協働教育プロジェクトが始まった。

入学者確保については、入試関連行事の内容を、アンケート等の受験生の要望に合わせて改善され、カレッジガイドのデジタル化、キャンパスグッズの制作、推薦要件の改正などを行い、継続的に努力している。

また懸案であった授業時間については、26年度から90分授業へ戻すことを決定した。障害者支援（支援室などの人的支援及び施設等のバリアフリー化など）やキャリア教育への取り組みも適切に行われている。

学生指導関係については、その根幹となる担任制度の充実を図るべく、担任のスキルアップのための研修会に教員を派遣している。また、学生生活をサポートするために、各学年で、状況に応じた講演会が開催されている。今年度は、10種類の各種コンテストに参加し、ロボカップジュニアの大会では、日本大会に駒を進めることができた。ボランティア活動も継続的に実施され、参加した学生の満足度も高く、学生支援及び学生の活動は効果的に行われている。

学寮関係については、その運営が学寮関係教職員と、日々の寮監とが緊密に連携を取りながら行われている。寮生で組織している寮生会も、寮生活の充実、寮生間の交流と親睦の促進のため、積極的に活動している。外国人留学生のとの交流も図られている。また、中学生やその保護者に対しては、オープンキャンパスなどの機会を通じて、施設等の公開を行っている。防災訓練、AED講習会も実施され、学寮の運営は適切に行われている。

進路指導関係については、低学年から「社会において自立できる力の養成」を基本方針として活動している。従来のキャリア教育に加え、今年度は、

1～3年生対象

- ・本校教員、地域企業の経営者によるキャリアガイダンスや職業研究セミナー
- ・本科5年生と専攻科生による先輩フォーラム

4年生、専攻科1年生対象

- ・系統的な就職対策講座

3、4年生、専攻科生対象

・合同企業説明

などを実施している。組織の見直しも検討され、社会状況の変化に応じたキャリア教育の実施が行われ、成果が得られている。

研究活動関係については、「研究活動評価調査」において、今年度もAランクの教員が8割弱と昨年度と同じ数値であった。外部資金獲得に向けては、長岡技術科学大学の齋藤秀俊副学長を招いて講演会を実施するなどし、申請件数は増加している。科研費の採択件数及び採択金額についても改善傾向がみられるが、研究内容の新規性、独創性を吟味する必要がある、今後の検討課題である。

地域・社会貢献活動については、今年度も公開講座、出前授業、福井県大学連携リーグ連携企画講座及び福井県生涯学習大学開放講座への講師派遣。また、文化事業の一環として「福井高专クラシックコンサート」に一般開放などの活動が行われている。それぞれの講座やイベントにおいては、参加者の満足度は高く、教職員及び学生と地域住民との交流が図られており、地域・社会貢献が十分に果たされているといえる。

国際交流関係については、国際シンポジウムに、教員及び本科学生（5年生）、専攻科生が参加し、ポスターセッション、口頭発表をそれぞれ英語で行っている。タイのプリンスオブソンクラ大学工学部との提携もまとも、8月には専攻科生2名を派遣し、研修を行っている。JICA北陸支部の研修事業（ベトナム）にも教員2名が参加するなど、国際交流活動が着実に進められていることが伺える。

施設整備関係については、今年度も老朽化・狭隘化解消・耐震や教育の高度化対応等を目的とした改修及びバリアフリー化等の工事が、授業や研究等に配慮しながら年間を通して実施された。今後は、グローバル人材の育成に立脚した、施設整備の将来構想（キャンパスマスタープラン）の早期作成が望まれる。

管理運営関係については、全体的に効果的な活動を行っており、適正な業務が行われていることが伺える。ただし、会計検査院から不適正な会計処理及び不適切な物品管理の指摘を受けたことから、早急に再発防止に向けた改善策の策定を要望する。

財務関係については、校長のリーダーシップの下、効果的な予算配分と執行が行われ、計画どおりの成果を上げていることが伺える。特に教育研究の施設・設備等が充実されたことにより、今後の外部資金等の獲得に期待が持てる。ただし、管理運営関係でも触れたが、会計検査院からの指摘から、会計監査部門の体制が不十分であるため、早急なる見直しを要望する。

2. 各学科・教室等に関する事項

本科の専門学科では、基礎学力の定着とともに、創成科目や実験実習科目などの体験型科目を用いて、実践的で国際化・高度情報社会に対応できる技術者の養成を図っている。また、オープンキャンパス、公開講座、出前授業、パンフレット、ホームペ

ージ等を通じて各学科・専攻科の魅力を発信して志願者増を積極的に行っており、機械工学科、環境都市工学科、専攻科では各年度に比べ実績を上げているが、電気電子工学科は大幅に減少している所以对策が必要である。また、機械工学科と電気電子工学科の複数の学科間でサッカーロボット競技大会を開催しているのは新しい教育の試みであり今後の発展が期待できる。主に電気電子工学科のものづくり教育、知的財産教育、放射線教育が評価されて、日本電気協会主催の教育エネルギー賞の高校・高専の部で最優秀賞を受賞している。さらに、学生の創成意欲を引き出すため、多様なコンテストを意識して授業の工夫をしている電子情報工学科の取り組みは効果的である。女子学生が多い物質工学科では、小保方晴子氏に代表される理系女子の技術者・研究者の支援の一環として女子学生を対象にキャリア教育の充実を図っていることは、時代の流れに沿うものである。建築系カリキュラムを履修した最初の学生が今年度末に卒業する環境都市工学科では建築系に進む学生にキャリアパスを提示することで成果を上げている。一般科目教室は、スタッフミーティングの回数を増やし、クラス担任や教科担当者間で学生の情報を共有して学生指導に役立てている。また、各種語学検定試験の受験への奨励と支援を行い、実績を上げている。

専攻科（生産システム工学専攻、環境システム工学専攻）では、デザイン教育の充実、海外に学生を派遣する活動を積極的に行い、グローバル社会に適応した人材育成に努めている。創造デザイン演習では、地元企業と連携を図った課題に取り組むユニークな教育を実施し、大学院と協定を締結するなどして魅力ある専攻科の充実を図っており、その成果が認められる。

各学科・教室・専攻科とも、モデルカリキュラムと現行カリキュラムとの整合性を確認し、モデルカリキュラムを円滑に実施に向け課題を検討し、独創性に富み、社会貢献できる人材の育成に取り組む姿勢が見られる。

3. センター等に関する事項

学生相談室では、専門カウンセラーの来校回数を過年度より更に増やし、来談学生の対応に資する努力がなされている。加えて、教職員のスキルアップのための研修機会の充実を図っている。中でも、今年度は QU テスト等の心理アンケートの実施を踏まえ、精神科医と提携し、全般的なメンタルヘルス対応に努めている。

図書館では、過年度よりグループディスカッション等の多様な目的に対応するための空間整備を課題としていたが、図書館改修に伴い「グループ学習室」が新設されることで改善される運びとなった。この他、改修に伴って書庫が拡張されることから図書館機能の益々の充実が期待できる。

創造教育開発センターでは、昨年度と同様に授業アンケートや FD 研修会等の改善が進められている。研修や公開授業の参加率が良好ではない実体に対しては既に具体的な対応の検討がなされており、次年度以降における改善が期待される。

総合情報処理センターでは、バリアフリー対策として教室の割振りの工夫による車いす学生への対応が実施されている。センター業務の集中を避けるために平成26年度からスタッフを増員することになっており、更に充実したサービスが見込まれる。

地域連携テクノセンターでは、過年度に引き続き「見える化」を推進するとともに、新規事業を含めた各種イベントへの出展、主催・共催事業を積極的に開催している。また、共同研究は、受け入れ件数、金額ともに昨年度を上回る成果を残している。今後、産官学の連携をサポートするコーディネーター体制の整備も視野に入れており、更なる充実が期待できる。

教育研究支援センターでは、既存の3つのワーキンググループの活動に加えて、労働安全衛生マネジメントシステム（OSHMS）の構築を推進するなど活動的である。業務改善目標管理シートを基にセンター長との定期的な面談も継続的に実施されており、進捗状況の確認、改善意識の持続・向上が図られている。

4. 委員会等に関する事項

教育システム推進委員会は本校のPDCAサイクルが決められたとおりの手順で回っているか調整・橋渡し・フォローアップを行う委員会であり、アンケート等の各種委員会における教育システムの実施状況に関するデータについて確認しているため、本校の教育システム推進に効果的な役割を果たしている。

情報セキュリティ推進委員会は、本校の情報セキュリティの維持向上を担う委員会であり、今年度行われた高専機構による情報セキュリティ監査においても大きな問題の指摘には至っておらず、十分な活動を行っている。

JABEE委員会はJABEE受審に向けて学内への提言・自己点検書の作成を行っており、平成25年4月に平成24年度に受審した中間審査の結果として3年の認定延長が認められた。今年度は平成27年度の継続審査に向けて、指摘項目の改善を検討し、プログラムの内容をさらに教職員に周知するなど適切な役割を果たしている。

研究紀要委員会は本校研究紀要の発行について効果的な役割を果たしてはいるが、投稿件数の低迷が問題となっており、その改善が望まれる。

遺伝子組み換え実験安全委員会では、8件の実験申請について厳正かつ慎重なる審議から実験実施の承認など、適切な役割を果たしている。

知的財産教育委員会では、学生や教職員への知的財産教育の一環として講演会を実施したが、特許出願等の職務発明につながらなかったため、発明届増加のための支援体制の構築が必要である。

ネットワーク委員会では、ネットワーク接続の高速化、校内無線LANの導入、校内LANシステムの活用など、本校の施設整備に関して効果的な役割を果たしている。

安全衛生委員会では、本校教職員の健全な就労環境と健康の維持するためのサポート体制を十分に整えており、その役割を効果的に果たしている。

VI. 資 料 一 覽

科学研究費助成事業（科研費）申請・採択状況一覧

年度	研究種目名 <small>(※注2)</small>		採択状況																
	金額・件数等	(単位：千円)	(単位：件)																
			申請総額 <small>(※注1)</small>	採択総額 <small>(※注3)</small>	申請件数 <small>(※注1)</small>	採択件数 <small>(※注1)</small>	新学術領域研究（研究領域提案型）	基盤研究（B）一般	基盤研究（B）一般【助成基金】	基盤研究（B）海外学術調査	基盤研究（C）一般	基盤研究（C）一般【助成基金】	挑戦的萌芽研究（萌芽研究）	挑戦的萌芽研究【助成基金】	若手研究（B）	若手研究（B）【助成基金】	若手研究（A）	若手研究（A）【助成基金】	研究成果公開促進費
平成22年度	163,105	40(5)	0	1(1)	0	17(3)	7(0)	14(1)	1(0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成23年度	8,710 (2,010)	5(3)	0	1(1)	0	3(1)	0(0)	1(1)	0(0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成24年度	158,914	39(2)	1	2	0	2(2)	10	6	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成25年度	8,320 (1,920)	4(2)	1	0	0	2(2)	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成24年度	201,788	47(4)	1(1)	1	1	2(2)	17	6(1)	18	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成25年度	21,840 (5,040)	8(4)	1(1)	1	0	2(2)	0	1(1)	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成24年度	189,708	47(5)	1(0)	1	1	0	21(0)	9(1)	13(3)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成25年度	17,020 (3,720)	11(5)	0(0)	1(1)	0	4(1)	4(1)	1(1)	4(2)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

※平成23年度から、基盤研究（C）一般【助成基金】・挑戦的萌芽研究【助成基金】・若手研究（B）【助成基金】が新設された。
 ※平成24年度から、基盤研究（B）一般【助成基金】・若手研究（A）【助成基金】が新設された。

注1. ()書は、継続で内数。【申請件数と採択件数に相異があるのは、研究者の転入・転出による増減】

注2. ()書は、当該年度の科学研究費補助金制度にない研究種目

注3. 採択金額の () 書きは間接経費で内数。

平成25年度科学研究費助成事業（科研費）採択内訳

研究科目	所 属	職 名	氏 名	申請額		研 究 課 題
				直接経費	間接経費	
基盤研究（B）	機械工学科	教授	安丸尚樹	2,300	690	表面改質層のフエムト秒レーザー援用ナノ構造化による高性能金属表面の創製
	機械工学科	教授	加藤寛敬	1,900	570	超強加工により作製したサブミクロン微細結晶粒材料の摩擦摩耗特性の解明
	物質工学科	教授	高山勝己	2,400	720	有機リン加水分解酵素表層発現酵母を用いる高感度有機リンセンサーの構築
基盤研究（C）	一般科目教室	講師	青木宏樹	1,100	330	幼児のステップアップ式動的平衡性テストの作成
	一般科目教室	准教授	原口 治	1,200	360	地域貢献と国際性育成を重視した高専専攻科英語教育システムの構築と展開
挑戦的萌芽研究	電気電子工学科	教授	川本 昂	600	180	ナノカーボンを用いたペーストフリー脳波電極の開発
	機械工学科	講師	金田直人	900	270	ヒーリング効果を有した意匠加工糸の生産方法および評価システムに関する研究
若手研究（B）	電子情報工学科	准教授	西 仁司	200	60	高専における組み込みシステム開発者教育手法の研究
	環境都市工学科	准教授	辻野和彦	700	210	地域の防災力向上に資する防災マップの作製に関する研究
	一般科目教室	講師	池田昌弘	1,100	330	融体におけるガラス化及び結晶化に伴う輸送過程の微視的機構
研究成果公開促進費	一般科目教室	助教	手嶋泰伸	900	0	学術図書：「昭和戦時期の海軍と政治」
合 計				13,300	3,720	
			11件			17,020

平成24年度科学研究費助成事業（科研費）採択内訳

研究科目	所 属	職 名	氏 名	申請額		研 究 課 題
				直接経費	間接経費	
新学術領域研究	機械工学科	教授	加藤寛敬	2,800	840	バルクナノメタルの特異なトライボロジー特性の解明
基盤研究 (B)	機械工学科	教授	安丸尚樹	5,000	1,500	表面改質層のフェムト秒レーザー援用ナノ構造化による高機能金属表面の創製
基盤研究 (C)	機械工学科	教授	加藤寛敬	800	240	摩擦表層のトライボメタラジータとその応用
	環境都市工学科	教授	吉田雅穂	700	210	温暖化対策と林業活性化に貢献する間伐材を用いた地盤補強技術の開発
挑戦的萌芽研究	電気電子工学科	教授	川本 昂	700	210	ナノカーボンを用いたペーパーストフリー脳波電極の開発
	一般科目教室	講師	山田孝慎	2,200	660	運動中のセカンドウインド促進のための骨格筋代謝産物の除去に対するアミノ酸採取効果
若手研究 (B)	電子情報工学科	准教授	西 仁司	2,500	750	高専における組み込みシステム開発者教育手法の研究
	環境都市工学科	准教授	辻野和彦	2,100	630	地域の防災力向上に資する防災マップの作製に関する研究
合 計			8件	16,800	5,040	
						21,840

平成23年度科学研究費助成事業（科研費）採択内訳

研究科目	所 属	職 名	氏 名	申請額		研 究 課 題
				直接経費	間接経費	
新学術領域研究	機械工学科	教授	加藤寛敬	3,200	960	バルクナノメタルの特異なトライボロジー特性の解明
基盤研究（C）	機械工学科	教授	加藤寛敬	800	240	摩擦表面のトライボメタラジとその応用
	環境都市工学科	教授	吉田雅穂	1,200	360	温暖化対策と林業活性化に貢献する間伐材を用いた地盤補強技術の開発
挑戦的萌芽研究	電気電子工学科	教授	川本 昂	1,200	360	ナノカーボンを用いたペーストフリー脳波電極の開発
合 計				6,400	1,920	
						8,320

平成22年度科学研究費助成事業（科研費）採択内訳

研究科目	所 属	職 名	氏 名	申請額		研 究 課 題
				直接経費	間接経費	
基盤研究（B）	機械工学科	教授	安丸尚樹	1,600	480	フェルトレーザー-援用ナノ構造硬質薄膜による次世代表面設計技術の開発研究
	一般科目教室	教授	坪川武弘	900	270	気候変動の数理モデルを題材とした数学教材の調査と開発
基盤研究（C）	機械工学科	教授	加藤寛敬	1,700	510	摩擦表層のトライボメタラジーとその応用
	環境都市工学科	准教授	吉田雅穂	1,600	480	温暖化対策と林業活性化に貢献する間伐材を用いた地盤補強技術の開発
若手研究（B）	電子情報工学科	助教	奥田篤士	900	270	学生実験指導における効果的な動画教材作成と評価の研究
合 計			5件	6,700	2,010	
						8,710

外部資金受入一覧

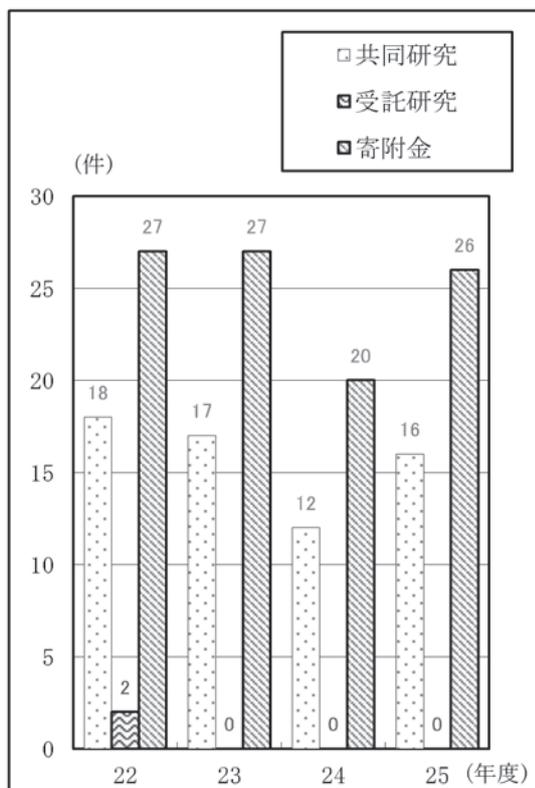
【単位：件, 千円】

区 分	22年度		23年度		24年度		25年度	
	件数	金 額						
共同研究	18 (6)	5,243	17 (7)	3,334	12 (5)	2,567	16 (6)	3,712
受託研究	2	600	0	0	0	0	0	0
寄附金	27	7,239	27	9,463	20	7,580	26	8,240
計	47	13,082	44	12,797	32	10,147	42	11,952

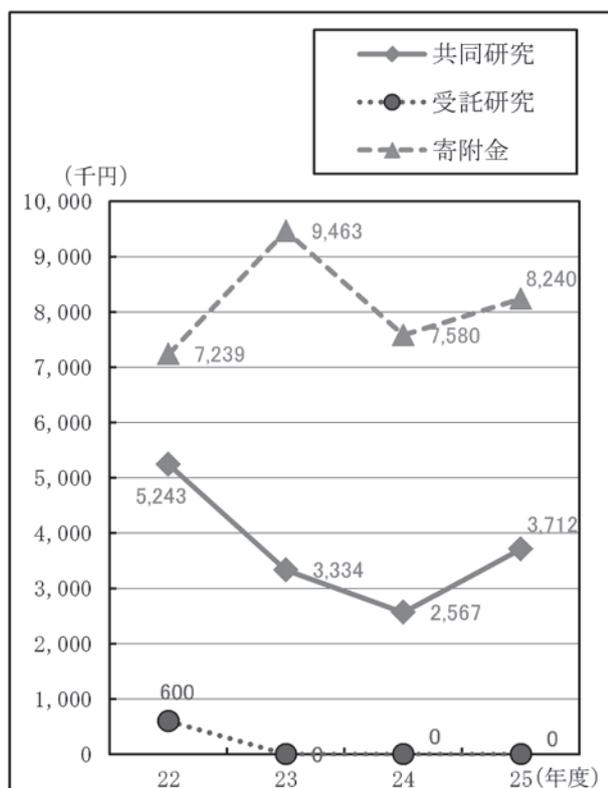
※平成26年1月31日現在

☆共同研究の件数欄（ ）内の数字は、研究費を伴わない共同研究契約件数で、内数となっています。

件数(H22-25)



金額(H22-25)



外部資金受入（民間等との共同研究受入内訳（平成25年度））

研究題目	申請企業	研究担当教員	研究期間	受入金額
キトサン練り込み糸を用いた紐状接触材のセンサ吸着効果	吉田産業(株)	物質工学科 教授 高山勝己 (支援センター 片岡裕一)	平成25.6.11～平成25.3.31	100,000
河川等の水位表示方法と表示装置及び構築用ブロックの開発	丸高コンクリート工業(株)	電気電子工学科 准教授 米田知晃 環境都市工学科 准教授 辻野和彦 環境都市工学科 助教 田安正茂	平成25.7.18～平成26.3.31	100,000
正極に白金ナノ粒子を担持した色素増感太陽電池の開発	長岡技術科学大学	電気電子工学科 教授 川本昂	平成25.7.25～平成26.3.31	300,000
論理思考とプレゼンを組み合わせた新しい技術者基礎力の教材開発	長岡技術科学大学	一般科目教室 准教授 中村吉秀	平成25.7.25～平成26.3.31	150,000
安価なセルラレーザを活用した同時糖化法の基礎研究	関西電力(株) 研究開発室 エネルギー利用技術研究所	物質工学科 教授 高山勝己 物質工学科 嘱託教授 吉村忠興志	平成25.7.31～平成25.9.30	231,000
十郷橋の耐久性性能評価と維持管理に関する研究	福井県建設技術公社	環境都市工学科 教授 吉田雅徳 環境都市工学科 教授 阿部孝弘 環境都市工学科 准教授 辻野和彦	平成25.7.31～平成26.3.20	1,000,000
「高出力ハイドロスタタテックトランスミッション」に関する研究	(株)神崎高級工機製作所	機械工学科 教授 田中 嘉津彦	平成25.8.1～平成26.3.31	1,000,000
新規無機材料の合成・評価・解析に関する研究	豊橋技術科学大学	物質工学科 嘱託教授 吉村忠興志	平成25.8.1～平成26.3.31	100,000
安価なセルラレーザを活用した同時糖化法の基礎研究	関西電力(株) 研究開発室 エネルギー利用技術研究所	物質工学科 教授 高山勝己 物質工学科 嘱託教授 吉村忠興志	平成25.12.11～平成26.3.31	231,000
新規炭素材料の脳波センサ電極への応用に関する研究	アルプス電気(株)	電気電子工学科 教授 川本昂	平成25.12.17～平成26.3.31	500,000
ウェアラブルデバイスによるシリコンインターポーザ形成技術開発に関する基礎研究	(独)産業総合研究所	物質工学科 教授 常光幸美	平成25.4.1～平成27.3.31	0
災害情報提供通信システムに関する研究	(株)エムディエス	電気電子工学科 教授 大久保茂	平成25.7.1～平成26.3.31	0
論理思考とプレゼンを組み合わせた新しい技術者基礎力の教材開発	長岡技術科学大学	一般科目教室 教授 吉田三郎	平成25.7.25～平成26.3.31	0
次世代シミュレーション技術者のためのe-Learning教材開発	豊橋技術科学大学	物質工学科 助教 佐々和洋	平成25.8.1～平成26.3.31	0
高専における次世代シミュレーション技術者教育カリキュラムの開発	豊橋技術科学大学	物質工学科 助教 佐々和洋	平成25.8.1～平成26.3.31	0
マルチラテラル遠隔制御システムの発展的応用研究 — 体験実習から卒業研究課題等への展開 —	豊橋技術科学大学	電子情報工学科 教授 斉藤徹	平成25.8.1～平成26.3.31	0
計	16件			3,712,000

外部資金受入（民間等との共同研究受入内訳（平成24年度））

研 究 題 目	申 請 企 業	研究担当教員	研究期間	受入金額
安価なセルラーゼを活用した同時精化法の基礎研究	関西電力(株) 研究開発室 エネルギー利用技術研究所	物質工学科 嘱託教授 吉村忠興志	平成24.7.11～平成25.3.29	462,000
太陽光パネル表面における特殊皮膜塗装効果の検証	(株)イソダ (財)若狭湾エネルギー 研究センター	電気電子工学科 助教 竹本泰敏	平成24.7.3～平成25.3.31	440,000
植物の発芽・成長関連タンパク質の発現に及ぼす電界効果	長岡技術科学大学	物質工学科 教授 高山勝己	平成24.7.24～平成25.2.28	1,050,000
Bacillus属細菌の渦状コロニーにおける左右認識機構の解明	長岡技術科学大学	物質工学科 講師 川村敏之	平成24.7.31～平成25.3.31	250,000
河川等の水位表示方法と表示装置及び構築用ブロックの開発	丸高コンクリート工業(株)	電気電子工学科 准教授 米田知晃 環境都市工学科 准教授 辻野和彦 環境都市工学科 助教 田安正茂	平成24.8.21～平成25.3.31	100,000
監視カメラの画像を利用した斜面崩壊・地すべりの検知	豊田工業(株)	環境都市工学科 准教授 辻野和彦	平成24.9.13～平成25.3.31	165,000
ウエットプロセスによるシリコンインターポーザ形成技術の開発	(財)若狭湾エネルギー 研究センター	物質工学科 教授 常光幸美	平成23.9.1～平成25.3.31	0
ウエットプロセスによるシリコンインターポーザ形成技術に関する基礎研究	(独)産業総合研究所	物質工学科 教授 常光幸美	平成23.11.1～平成24.10.31	0
次世代シミュレーション技術者教育プログラムの開発	豊橋技術科学大学	物質工学科 嘱託教授 吉村忠興志	平成24.7.1～平成25.3.15	0
「人間力」養成プロジェクト～課外活動など～	豊橋技術科学大学	環境都市工学科 助教 江本晃美	平成24.7.1～平成25.3.15	0
摩擦を利用したナノ結晶微細構造表面膜の創製と評価～超微細組織摩擦表層の特性評価と応用～	(財)若狭湾エネルギー 研究センター	機械工学科 教授 加藤寛敬	平成24.11.26～平成26.3.31	0
稲わらおよびよびもみ殻などの有効活用についての研究	(有)林工務店	物質工学科 教授 高山勝己	平成25.1.22～平成26.3.31	100,000
計	12件			2,567,000

外部資金受入（民間等との共同研究受入内訳（平成23年度））

研究題目	申請企業	研究担当教員	研究期間	受入金額
機能面及びデザイントレンドを考慮したメガネ等のデザイン開発	鯖江商工会議所	地域連携テクノセンター長 山田幹雄	平成23.5.24～平成24.2.29	650,000
有用なセルラーゼ生成トリコデルマ菌の探索と有効利用に関する調査研究	関西電力(株)研究開発室 エネルギー利用技術研究所	物質工学科 教授 吉村忠興志	平成23.6.21～平成24.3.30	404,250
ウッドピッチを有効活用する舗装材の研究開発	(財)福井県建設技術公社	環境都市工学科 教授 武井幸久 物質工学科 教授 小泉貞之	平成23.7.1～平成24.3.23	1,000,000
河川等の水位表示方法と表示装置及び構築用ブロックの開発	丸高コンクリート工業(株)	電気工学科 准教授 米田知晃 電子情報工学科 助教 奥田篤士 環境都市工学科 准教授 辻野和彦 環境都市工学科 助教 田安正茂	平成23.7.16～平成24.3.31	300,000
高密度格子欠陥を有するサブミクロン結晶粒バルク金属のトライボロジー特性	豊橋技術科学大学	機械工学科 教授 加藤寛敬	平成23.7.11～平成24.3.15	50,000
シミュレーション技術者育成を旨とした教育手法と教材の開発	豊橋技術科学大学	物質工学科 教授 吉村忠興志 物質工学科 助教 佐々和洋	平成23.7.11～平成24.3.15	150,000
マルチモーダルセンサによる極限センシングシステム開発	豊橋技術科学大学	物質工学科 准教授 高山勝己	平成23.7.11～平成24.3.15	130,000
大規模系バイオ・ナノ・メタマテリアルの高精度ハイブリッド・シミュレーション研究	豊橋技術科学大学	物質工学科 助教 佐々和洋	平成23.7.11～平成24.3.15	150,000
カーボンナノチューブ分散ゴムを用いた脳波電極の開発	長岡技術科学大学	電気工学科 教授 川本昂	平成23.7.22～平成24.3.15	300,000
鯖江市災害時サポーターガイドブック及び避難所運営管理マニュアル作成のための共同研究	(株)サンワコン	環境都市工学科 准教授 辻子裕二	平成24.2.2～平成24.3.25	200,000
摩擦を利用したナノ結晶微細構造表面膜の創製と評価	(財)若狭湾エネルギー 研究センター	機械工学科 教授 加藤寛敬	平成22.6.1～平成24.3.31	0
高専-技科大の連続性を考慮した複合領域標準テキストの作成-空間情報学を事例に-	豊橋技術科学大学	環境都市工学科 准教授 辻子裕二 環境都市工学科 准教授 辻野和彦	平成23.7.11～平成24.3.15	0
急増する広域災害に対する植生効果を考慮した対策技術の確立	豊橋技術科学大学	環境都市工学科 准教授 辻子裕二	平成23.7.11～平成24.3.15	0
「人間力」養成プロジェクト～課外活動など～	豊橋技術科学大学	環境都市工学科 助教 江本晃美	平成23.7.11～平成24.3.15	0
ウエットプロセスによるシリコンインターポーザ形成技術の開発	(財)若狭湾エネルギー 研究センター	物質工学科 教授 常光幸美	平成23.9.1～平成25.3.31	0
蛋白質表面発現酵母に供するプラスミドDNAの構築	(財)若狭湾エネルギー 研究センター	物質工学科 准教授 高山勝己	平成23.11.1～平成24.3.31	0
ウエットプロセスによるシリコンインターポーザ形成技術に関する基礎研究	(財)産業総合研究所	物質工学科 教授 常光幸美	平成23.11.1～平成24.10.31	0
	17件			3,334,250

外部資金受入（民間等との共同研究受入内訳（平成22年度））

研究題目	申請企業	研究担当教員	研究期間	受入額（円）
河川等の水位表示方法と表示装置及び構築用ブロックの開発	丸高コンクリート工業（株）	電気電子工学科 准教授 米田知晃 電子情報工学科 助教 奥田篤士 環境都市工学科 准教授 辻野和彦 環境都市工学科 助教 田安正茂	平成22.5.1～平成23.3.31	700,000
木タールを添加した再生アスファルト舗装材の研究開発	(財)福井県建設技術公社	環境都市工学科 教授 武井幸久 物質工学科 教授 小泉貞之	平成22.5.11～平成23.3.25	1,000,000
高効率燃料の開発	(株)ウイニングシステム	物質工学科 教授 小泉貞之 機械工学科 教授 藤田克志	平成22.5.17～平成23.3.31	500,000
有用なセルラーゼ生成トリコロデルマ菌の探索と有効利用に関する調査研究	関西電力（株）研究開発室 エネルギー利用技術研究所	物質工学科 教授 吉村忠興志	平成22.5.20～平成23.3.31	369,600
機能面及びデザイントレンドを考慮したメガネ等のデザイン開発	鯖江商工会議所	地域連携テクノセンター長 山田幹雄	平成22.5.21～平成23.2.28	700,000
シミュレーション技術者育成を目指した教育手法と教材の開発	豊橋技術科学大学	物質工学科 教授 吉村忠興志	平成22.7.1～平成23.3.15	100,000
強ひずみ加工により作製したサブミクロン結晶粒バルク純Feの摩耗特性	豊橋技術科学大学	機械工学科 教授 加藤寛敬	平成22.7.1～平成23.3.15	250,000
機能性バイオ・ナノ材料の分子シミュレーション解析	豊橋技術科学大学	物質工学科 助教 佐々和洋	平成22.7.1～平成23.3.15	200,000
有機塩素系農薬に対する分解菌の探索と同定	長岡技術科学大学	物質工学科 准教授 高山勝己	平成22.7.23～平成23.3.31	300,000
砂浜海岸に流出する小規模河川の河口閉塞に関する共同研究	長岡技術科学大学	環境都市工学科 助教 田安正茂	平成22.7.23～平成23.3.31	250,000
電界とハイブリッド光源による植物の発芽・成長制御システムの開発	壇エンジニアリング（株）	電気電子工学科 教授 川本昂	平成22.10.15～平成23.3.31	273,000
ナノカーボンを用いたベーストレス脳波電極の開発	長岡技術科学大学	電気電子工学科 教授 川本昂	平成23.1.19～平成23.3.31	600,000
摩擦を利用したナノ結晶微細構造表面膜の創製と評価	(財)若狭湾エネルギー 研究センター	機械工学科 教授 加藤寛敬	平成22.5.1～平成23.3.31	0
高専-技科大の連続性を考慮した複合領域標準プロセスの作成-空間情報学を事例に-	豊橋技術科学大学	環境年工学科 准教授 辻野和彦	平成22.7.1～平成23.3.15	0
技術者教育としての課外活動の可能性の提示と「人間力」養成メソッドの開発	豊橋技術科学大学	環境年工学科 助教 江本晃美	平成22.7.1～平成23.3.15	0
防災マップのピクトグラムの視認性向上に向けたデザイン規格考案に関する取り組み	豊橋技術科学大学	環境年工学科 助教 江本晃美	平成22.7.1～平成23.3.15	0
インテリジェント医療・生物・農業 検査センサデバイスと応用研究	豊橋技術科学大学	物質工学科 准教授 高山勝己	平成22.7.1～平成23.3.15	0
分解能・偏波・波長帯の異なる複数のSARデータを用いた斜面崩壊・進路被害の把握	豊橋技術科学大学	環境年工学科 准教授 辻野和彦	平成22.7.1～平成23.3.15	0
計	18件			5,242,600

外部資金受入（受託研究内訳（平成22年度））

研究題目	委託者	研究担当教員	研究期間	受入額（円）
竹粉の有効利活用に係る調査研究	(株) サバエコノムストラクト	物質工学科 教授 小泉貞之	平成22.7.20～平成23.3.31	200,000
軟弱粘性土地盤における周面摩擦支持力丸太の開発と有効性の実証	兼松日産農林（株）	環境都市工学科 准教授 吉田雅穂	平成22.11.1～平成23.2.28	400,000
合 計	2 件			600,000

外部資金受入（寄附金内訳（平成25年度））

寄附者名	寄附の目的	寄附金額（円）	担当教員等
TMTマシナリー株式会社	機械工学科 金田直人講師の教育研究奨励	500,000	機械工学科 金田直人講師
森産業株式会社	環境都市工学科 山田幹雄教授の教育研究奨励	300,000	環境都市工学科 山田幹雄教授
株式会社アタゴ	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
ジビル調査設計株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
坂川建設株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
株式会社ホクコン	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
株式会社福井銀行	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
丸一調査設計株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
東工シャッター株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
大和建设株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	100,000	地域連携テクノセンター
酒井化学工業株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	200,000	地域連携テクノセンター
株式会社ホクシン	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	40,000	地域連携テクノセンター
武生特殊鋼材株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
信越化学工業株式会社 武生工場	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	1,000,000	地域連携テクノセンター
福井工業高等専門学校 教育後援会	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	2,000,000	福井工業高等専門学校長
株式会社サンルックス	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
吉岡幸株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	40,000	地域連携テクノセンター
森産業株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	40,000	地域連携テクノセンター
ナカヤ化学産業株式会社	図書・雑誌の購入	200,000	福井工業高等専門学校長
株式会社ワカサコンサル	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	40,000	地域連携テクノセンター
株式会社デンソー	小水力発電アイデアコンテストのため	300,000	機械工学科藤田教授、電気電子工学科丸山准教授、電気電子工学科竹本助教、環境都市工学科吉田教授、環境都市工学科田安助教
坂川建設株式会社	環境都市工学科の教育研究奨励	500,000	環境都市工学科教員
福井工業高等専門学校 教育後援会	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	2,000,000	福井工業高等専門学校長
増永眼鏡株式会社	機械工学科 千徳英介講師の教育研究奨励	50,000	機械工学科 千徳英介講師
福井工業高等専門学校 電気電子工学科長	電気電子工学科の教育研究奨励	500,000	電気電子工学科教員
公益財団法人LIXIL住生活財団	環境都市工学科 香月壮亮講師の教育研究奨励	250,000	環境都市工学科 香月壮亮講師
合 計	26件	8,240,000	

外部資金受入（寄附金内訳（平成24年度））

寄附者名	寄附の目的	寄附金額（円）	担当教員等
轟産業株式会社	環境都市工学科 山田幹雄教授 の教育研究奨励	500,000	環境都市工学科 山田幹雄教授
東工シャッター株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
ジビル調査設計株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
株式会社ホクシン	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
坂川建設株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
株式会社ホクコン	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
轟産業株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	40,000	地域連携テクノセンター
株式会社福井銀行	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
武生特殊鋼材株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
株式会社アタゴ	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
吉岡幸株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	40,000	地域連携テクノセンター
信越化学工業株式会社 武生工場	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	1,000,000	地域連携テクノセンター
大和建設株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	100,000	地域連携テクノセンター
株式会社デンソー	小水力発電アイデアコンテストのため	300,000	丸山、田安、竹本先生
ナカヤ化学産業株式会社	図書・雑誌の購入	200,000	福井工業高等専門学校長
福井工業高等専門学校 教育後援会	福井工業高等専門学校学生の学習・研究 及び課外活動の援助・助成	500,000	福井工業高等専門学校長
酒井化学工業株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	200,000	地域連携テクノセンター
福井工業高等専門学校 教育後援会	福井工業高等専門学校学生の学習・研究 及び課外活動の援助・助成	3,000,000	福井工業高等専門学校長
福井工業高等専門学校 教育後援会	福井工業高等専門学校学生の学習・研究 及び課外活動の援助・助成	1,040,000	福井工業高等専門学校長
飛鳥建設株式会社	環境都市工学科 吉田雅徳教授の液状化に関する研究 に対する助成	500,000	環境都市工学科 吉田雅徳教授
合 計	20件	7,580,000	

外部資金受入（寄附金内訳（平成23年度））

寄附者名	寄附の目的	寄附金額（円）	担当教員等
轟産業株式会社	環境都市工学科 山田幹雄教授の教育研究奨励	500,000	環境都市工学科 山田幹雄教授
株式会社ホクコン	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
株式会社若吉製作所	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
酒井化学工業株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	200,000	地域連携テクノセンター
東工シャッター株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
株式会社関組	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
ジビル調査設計株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
吉岡幸株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	40,000	地域連携テクノセンター
株式会社アタゴ	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
大和建设株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	100,000	地域連携テクノセンター
武生特殊鋼材株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
株式会社ホクシン	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
福井工業高等専門学校 環境都市工学科 辻子裕二	環境都市工学科 辻子裕二准教授の教育研究奨励	151,250	環境都市工学科 辻子裕二准教授
轟産業株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	40,000	地域連携テクノセンター
信越化学工業株式会社 武生工場	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	1,000,000	地域連携テクノセンター
福井工業高等専門学校 地域連携テクノセンター	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	271,958	地域連携テクノセンター
丸文通商株式会社福井支店	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
福井工業高等専門学校 教育後援会	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	1,500,000	福井工業高等専門学校長
サカイオーベックス株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
坂川建設株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
スガイ化学工業株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
ナカヤ化学産業株式会社	図書・雑誌の購入	200,000	福井工業高等専門学校長
財団法人長岡技術科学大学 技術開発教育研究振興会	物質工学科 高山勝己准教授の教育研究奨励	200,000	物質工学科 高山勝己准教授
公益財団法人天田財団	機械工学科 安丸尚樹教授の教育研究奨励	1,400,000	機械工学科 安丸尚樹教授
福井工業高等専門学校 教育後援会	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	1,500,000	福井工業高等専門学校長
株式会社不二越	機械工学科 田中嘉津彦教授の教育研究奨励	1,000,000	機械工学科 田中嘉津彦教授
福井工業高等専門学校 教育後援会	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動の援助・助成	1,120,000	福井工業高等専門学校長
合 計	27件	9,463,208	

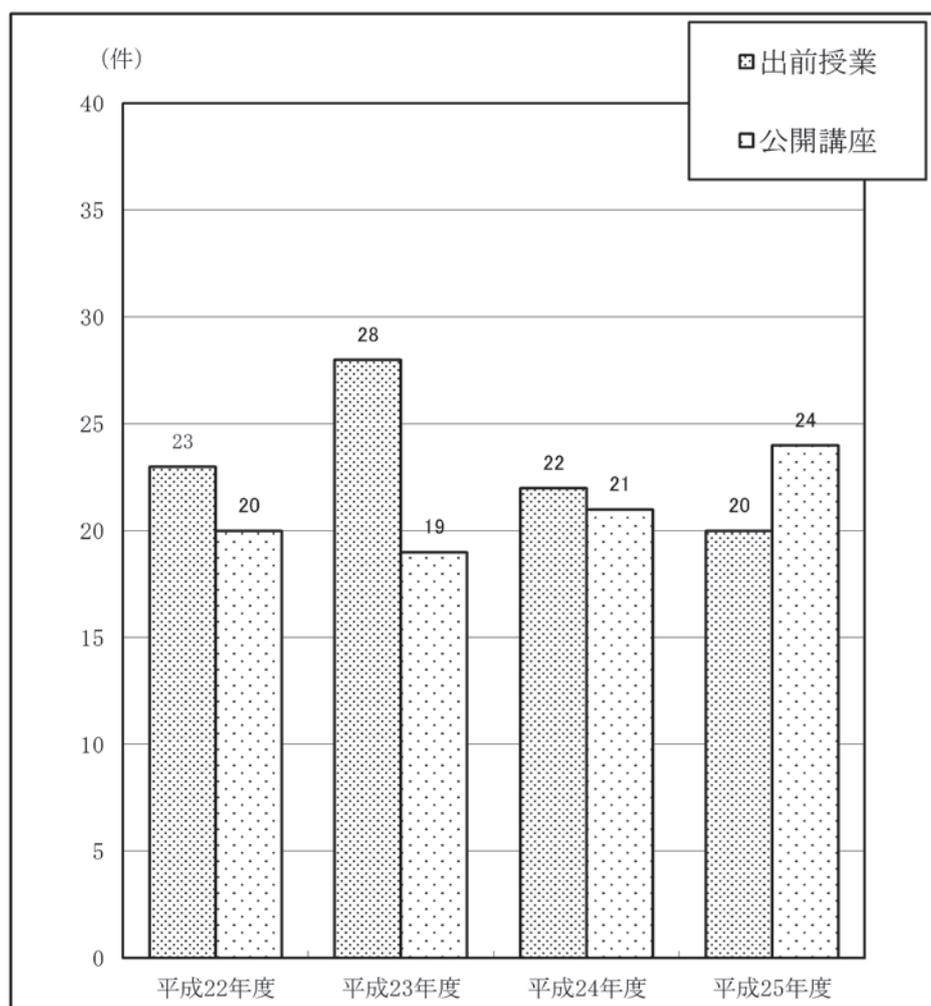
外部資金受入（寄附金内訳（平成22年度））

寄附者名	寄附の目的	寄附金額（円）	担当教員等
福井工業高等専門学校 教育後援会	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動 の援助・助成	1,000,000	福井工業高等専門学校長
森産業株式会社	環境都市工学科 山田幹雄教授の教育研究奨励	500,000	環境都市工学科 山田幹雄教授
株式会社アタゴ	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
酒井化学工業株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	200,000	地域連携テクノセンター
武生特殊鋼材株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
株式会社ホクコン	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
大和建設株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	100,000	地域連携テクノセンター
吉岡幸株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	40,000	地域連携テクノセンター
スガイ化学工業株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
東工シャッター株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
信越化学工業株式会社 武生工場	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	800,000	地域連携テクノセンター
株式会社サカイエルコム	電気電子工学科 山本幸男准教授の教育研究奨励	100,000	電気電子工学科 山本幸男准教授
森産業株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	40,000	地域連携テクノセンター
ナカヤ化学産業株式会社	図書・雑誌の購入	200,000	福井工業高等専門学校長
福井工業高等専門学校 環境都市工学科 間瀬実郎	環境都市工学科 間瀬実郎准教授の教育研究奨励	38,815	環境都市工学科 間瀬実郎准教授
福井工業高等専門学校 教育後援会	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動 の援助・助成	500,000	福井工業高等専門学校長
ジビル調査設計株式会社	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
株式会社関組	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
福井工業高等専門学校 教育後援会	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動 の援助・助成	1,500,000	福井工業高等専門学校長
生越 久靖	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動 の援助・助成	50,000	福井工業高等専門学校長
公益財団法人 中部電気利用基礎研究振興財団	一般科目教室 池田昌弘講師の教育研究奨励	140,000	一般科目教室応用物理 池田昌弘 講師
株式会社若吉製作所	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
株式会社不二越	機械工学科 田中嘉津彦教授の教育研究奨励	600,000	機械工学科 田中嘉津彦教授
福井工業高等専門学校 教育後援会	福井工業高等専門学校学生の学習・研究及び課外活動 の援助・助成	400,000	福井工業高等専門学校長
株式会社カズマ	地域連携テクノセンターの教育研究奨励	20,000	地域連携テクノセンター
大日コンサルタント株式会社	環境都市工学科 辻野和彦准教授の教育研究奨励	600,000	環境都市工学科 辻野和彦准教授
福井県和紙工業協同組合	物質工学科 上島晃智教授の教育研究奨励	250,000	物質工学科 上島晃智教授
合 計	27件	7,238,815	

出前授業・公開講座実施一覽

(件)

年 度	出前授業	公開講座	合 計
平成22年度	23	20	43
平成23年度	28	19	47
平成24年度	22	21	43
平成25年度	20	24	44
合 計	93	84	177



出前授業実施内訳（平成25年度）

実施日	出前授業先	概 要	担当教職員	対象者（参加者数）
■ 全 体				
10月27日	越前市いまだて芸術館	福井高専科学実験	田中嘉津彦、村中貴幸、阿部孝弘、江本晃美、加藤清考、池田昌弘 他 補助学生26名	幼稚園児・小中学生とその保護者 200名
■ 機 械 工 学 科				
6月15日	大虫小学校（越前市）	おもちゃづくりから学ぶサイエンス	田中嘉津彦、藤田克志、芳賀正和、藤田祐介 他 補助学生8名	小学5年生とその保護者 120名
6月15日	和田小学校（福井市）	親子でおもちゃづくり	加藤寛敬、金田直人、五味伸之 他 補助学生6名	小学4年生とその保護者 100名
9月29日	鶴小学校（福井市）	親子で作る工作（わりばし飛行機を親子で作って遊ぶ）	加藤寛敬、千徳英介、五味伸之 他 補助学生7名	小学生とその保護者 160名
10月19日	王子保小学校（越前市）	親子でおもちゃづくり体験	加藤寛敬、五味伸之 他 補助学生6名	小学生とその保護者 70名
11月17日	東郷小学校（福井市）	親子でおもちゃづくり体験	加藤寛敬 他 補助学生3名	小学6年生とその保護者 50名
■ 電 気 電 子 工 学 科				
8月28日	越前市かさとし ふるさと絵本館	はしれ！ソーラーカー～ソーラーカーで自然エネルギー体験～	川本昂 他 補助学生3名	小学生 30名
9月7日	武生西小学校（越前市）	おもしろ科学実験とものづくり	川本昂 他 補助学生3名	小学4年生とその保護者 123名
9月29日	鶴小学校（福井市）	光と色のファンタジー	川本昂	幼稚園～小学6年生とその保護者 168名
10月19日	吉野小学校（越前市）	おもしろ科学実験	川本昂	小学生 144名
■ 電 子 情 報 工 学 科				
7月28日	武生第二中学校（越前市）	第4回越前市中学生ロボット製作教室	西仁司、亀山建太郎（機械工学科）	越前市内中学生 35名
■ 物 質 工 学 科				
6月29日	酒生公民館（福井市）	超低温の世界・科学の面白さを体験	小泉貞之、津田良弘、後反克典、片岡裕一、野村栄市	福井市酒生地区区子供会とその保護者 48名
7月6日	和田小学校（福井市）	超低温の世界・科学の面白さを体験	小泉貞之、上島晃智、津田良弘、松井栄樹、後反克典、片岡裕一、野村栄市 他 補助学生2名	小学2年生とその保護者 260名
7月24日	越前町立図書館織田分館ホール	化学の面白さを体験しよう	小泉貞之、上島晃智、津田良弘、西野純一	小学1～4年生とその保護者 54名
9月14日	有終西小学校（大野市）	超低温の世界・科学の面白さを体験	小泉貞之、上島晃智、後反克典、片岡裕一、野村栄市	小学4年生とその保護者 80名

出前授業実施内訳（平成25年度）

実施日	出前授業先	概 要	担当教職員	対象者（参加者数）
■ 物 質 工 学 科				
9月27日	清水中学校（福井市）	磁石の磁界とイオンの存在を体感しよう	津田良弘、片岡裕一、野村栄市	中学生 63名
10月20日	宮崎コミュニケーションセンター	化学の面白さの体験	小泉貞之、津田良弘、松井栄樹	越前町内の子供とその保護者 45名
10月20日	宮崎コミュニケーションセンター	極低温実験に興味を持とう	小泉貞之、川村敏之、片岡裕一、野村栄市	越前町内の子供とその保護者 50名
11月17日	木田小学校（福井市）	化学の面白さの体験	小泉貞之、津田良弘、西野純一、後反克典、片岡裕一、野村栄市	小学4年生とその保護者 36名
■ 環 境 都 市 工 学 科				
2月6日	殿下小中学校（福井市）	防災講座（土砂災害について）	辻子 裕二	殿下小中学校教諭 10名
計				20 件

出前授業実施内訳（平成24年度）

実施日	出前授業先	概 要	担当教職員	対象者（参加者数）
■ 一般科目教室				
10月27日	清明小学校（福井市）	正多面体を作ろう	井之上和代、朝倉租一、坪川武弘、中谷実伸、柳原祐治、山田哲也 他 補助学生3名	小学生6年生 84名
■ 機械工学科				
6月16日	大虫小学校（越前市）	親子でおもちゃ作り体験	田中嘉津彦、芳賀正和、村中貴幸、藤田祐介 他 補助学生9名	大虫小5年生と保護者 120名
6月17日	明新小学校（福井市）	親子で作る工作	加藤寛敬、亀山建太郎、五味伸之 他 補助学生4名	明新小4年生と保護者 74名
8月21日	越前市生涯学習センター	親子でおもちゃを作って遊ぼう！	加藤寛敬、千徳英介、金田直人 他 補助学生5名	小学生とその保護者 47名
10月27日	王子保小学校（越前市）	親子でおもちゃづくり体験	加藤寛敬、藤田克志、金田直人、五味伸之 他 補助学生6名	小学生とその保護者 81名
12月8日	河和田公民館	おもちゃの水車を作ろう	藤田克志 他 補助学生3名	小学4～6年生とその保護者 22名
■ 電気電子工学科				
7月7日	東十郷小学校体育館ラウンジルーム	おもしろ科学実験とものづくり	川本昂 他 補助学生1名	小学高学年とその保護者 107名
7月14日	東小学校多目的ホール（鯖江市）	おもしろ科学実験とものづくり	川本昂 他 補助学生1名	小学6年生とその保護者 61名
8月22日	神山保育園児童そらぐみ（越前市）	おもしろ科学実験とものづくり	川本昂 他 補助学生1名	小学1～3年生 30名
8月27日	越前市生涯学習センター	光と色のファンタジー	川本昂、石栗慎一	幼稚園(年中)～小学6年生とその保護者 33名
10月20,21日	福井県児童科学館	青少年のための科学の祭典2012「光を利用したものづくり」	川本昂 他	小学低学年～高学年 284名
■ 電子情報工学科				
7月28日	武生第二中学校（越前市）	越前市中学ロボットコンテスト製作教室	西仁司、亀山建太郎（機械工学科）	越前市内中学生 40名
8月19日	福井市エルバ	歯みがきロボット工作教室	斉藤徹	小学生とその保護者 18名
8月25日	武生第二中学校（越前市）	越前市中学ロボットコンテスト製作教室	西仁司、亀山建太郎（機械工学科）	越前市内中学生 40名
12月9日	鯖江市・らてんぼ	子供向けプログラミング教室	蘆田昇 他 補助学生2名	小学生とその保護者 10名
1月19日	鯖江市・らてんぼ	子供向けプログラミング教室及びIT教室	蘆田昇 他 補助学生5名	小学生とその保護者 25名

出前授業実施内訳（平成24年度）

実施日	出前授業先	概 要	担当教職員	対象者（参加者数）
■ 物 質 工 学 科				
5月13日	国高ふれあいセンター	液体窒素とスライム時計	西野純一、津田良弘、片岡裕一、野村栄市	小学5～6年生とその保護者 30名
6月30日	和田小学校（福井市）	超低温の世界	西野純一、上嶋晃智、片岡裕一、野村栄市	小学4年生とその保護者 100名
7月29日	定友公民館（越前市）	超低温の世界	西野純一、上嶋晃智、津田良弘、片岡裕一、野村栄市	小学生とその保護者 40名
9月15日	進徳小学校（鯖江市）	超低温の世界	西野純一、津田良弘、加藤敏、片岡裕一、野村栄市	小学5、6年生とその保護者 60名
9月21日	清水中学校（福井市）	超低温の世界	西野純一、津田良弘、片岡裕一、野村栄市	中学生 80名
■ 環 境 都 市 工 学 科				
9月22日	鯖江市民活動交流センター	防災ゲーム	辻子裕二 他 補助学生3名	小学生21名、ボランティアスタッフ10名
計				22 件

出前授業実施内訳（平成23年度）

実施日	出前授業先	概 要	担当教職員	対象者（参加者数）
■ 一般科目教室				
9月5日	岡本公民館	夏の夜空、星を見よう（星の物理と観望）	岡本拓夫、吉田三郎、補助学生1名	小学生47名、保護者、公民館関係（約100名）
■ 機械工学科				
6月18日	大虫小学校（越前市） 体育館	親子でおもちゃづくり体験	田中嘉津彦 他 教職員3名、補助学生9名	大虫小5年生と保護者 130名
6月18日	和田小学校（福井市） 体育館	親子でおもちゃ工作づくり体験	加藤寛隆 他 教職員4名、補助学生5名	和田小4年生と保護者 41組 82名
10月15日	岡本小学校（越前市）	親子でおもちゃづくり体験	田中嘉津彦 他 教職員1名、補助学生6名	小学校1～6年生とその保護者 90名
11月26日	王志保公民館 体育館	親子でおもちゃづくり体験	加藤寛隆、藤田克志、亀山建太郎、 補助学生6名	小学1～6年生（50名）保護者（37名） 計87名
■ 電気電子工学科				
6月20日	鯖江市豊小学校	環境学習「太陽熱利用」	川本昂	豊小5年生42名
8月11日	越前市生涯学習センター	環境・エネルギーに関する科学実験と理科工作	川本昂	小学1～6年生30人くらい
10月22、23日	エンゼルランドふくい	太陽電池や燃料電池および超伝導体を用いたおもしろ実験	川本昂、石栗慎一、 ソーラーカー同好会学生（12名）	小中学生と保護者約100名 （動員数は約8000名）
11月5日	神明小学校 にごにこ触れ合い学級	科学不思議実験	川本昂	小学4年生とその保護者160名
11月23日	脚福井原子力センター 原子力の科学館「あつとほらむ」	スペシャル実験ショー	川本昂 ほか	幼児、小学生とその保護者約136名
■ 電子情報工学科				
8月9日	越前市生涯学習センター	LEGOでロボットを作ろう	西仁司、奥田篤士	越前市内の小中学生（16名）
10月23日	中河小学校（鯖江市）	LEGOでロボットを作ろう	西仁司、奥田篤士	小学1～6年生30人くらいと保護者30名
11月5日	神明小学校 にごにこ触れ合い学級	A I B Oと遊ぼう	西仁司 他補助学生5名	小学生と保護者80名×2回
12月18日	三国東区民館	A I B Oと遊ぼう	西仁司、下條雅史、補助学生2名（5E1）	三国東地区の幼稚園児・小学校児童とその保護者53名

出前授業実施内訳（平成23年度）

実施日	出前授業先	概 要	担当教職員	対象者（参加者数）
■ 物 質 工 学 科				
6月21日	岡本幼稚園（越前市） ホール	楽しい化学実験	上島晃智、佐々和洋	岡本幼稚園幼児20名と保護者20名 合計40名
8月9日	浜四郷公民館	超低温の世界	津田良弘、西野純一、加藤敏、野村栄一、片岡裕一	小学1～6年生30人くらいと保護者5名
8月20日	くすのき児童館	超低温の世界	津田良弘、上島晃智、加藤敏、野村栄一、片岡裕一	幼児と保護者及び小学1～6年生30名くらい
9月3日	和田小学校（福井市） 体育館	超低温の世界	津田良弘、上島晃智、平井恵子、西野純一、加藤敏、野村栄一、片岡裕一	和田小2年生と保護者 80組（160名）
9月9日	清水中学校	超低温の世界	津田良弘、上島晃智、野村栄一、片岡裕一	中学生40名
9月14日	王志保小学校（越前市）理科室	超低温の世界	小泉貞之、松井栄樹、高山勝巳	小学生25名
10月15日	岡本小学校（越前市）	超低温の世界	加藤敏、野村栄一	小学生と保護者80名
10月23日	中河小学校（鯖江市）	身の回りのおもしろ化学	吉村忠与志、加藤敏、佐々和洋、野村栄一、片岡裕一	小学1～6年生と保護者80名
11月5日	神明小学校 にここに触れ合い学級	超低温の世界	加藤敏、野村栄一、片岡裕一	小学生と保護者40名
11月26日	脚福井原子力センター 原子力の科学 館「あつとほうむ」	カラフルな人工イクラを作ろう カラースライムを作ろう	津田良弘、加藤敏、佐々和洋、野村栄一、片岡裕一	小学生とその保護者 160名
■ 環 境 都 市 工 学 科				
7月15日	安居中学校 2年教室	地球を測る！	辻子裕二、 研究生 1名	安居中学校2年生28名
9月10日	どようじゅく（さばえNPOセン ター）	知ってるかな？防災のこと	辻子裕二、 研究生 1名	どようじゅく塾生21名（小学生4・5・6年生）
10月15日	岡本小学校（越前市）	パスタでタワーを作ろう	阿部孝弘、 補助学生 3名	児童とその親120名
11月3日	アオッサ6階工作実習室	サイコロコロコロ エコロジーをかんがえよう！	奥村充司	小学1～6年生20～30名
計				28 件

出前授業実施内訳（平成22年度）

実施日	出前授業先	概 要	担当教職員	対象者（参加者数）
■ 一般科目教室				
9月15日	八ツ杉千年の森	天体の観望と星のお話	岡本拓夫, 吉田三郎, 学生2名	今立地区小学生 約20名
10月7日	武生第一中学校	宇宙のはなし	加藤清考	中学3年生 48人 (24人×2回)
■ 機械工学科				
7月31日	福井高専メディアホール	越前市ロボットコンテスト講習会	亀山建太郎, 西仁司(Ei)	越前市内の中学生19人
10月31日	清明小学校	おもちゃづくり体験	加藤寛敬, 田中嘉津彦, 村中貴幸, 岡田将人, 吉田敦實, 藤田祐介, 本科生6名	小学4年生、保護者180人
10月31日	中河小学校	親子でおもちゃづくり体験	藤田克志, 専攻科生2名, 本科生4名	小学1～6年生とその保護者 59人
■ 電気電子工学科				
10月23, 24日	福井県児童科学館	青少年のための科学の祭典福井大会2010出展	川本昂	県内小中学生 ブースでのものづくり体験者 (70名)
■ 電子情報工学科				
8月6日	越前市生涯学習センター	LEGOでロボットを作ろう	西仁司, 奥田篤士	小学生16名
10月30日	武生東小学校	ロボット操作体験教室	西仁司	小学生20～25名
10月30日	越前市武生東児童館	AIBOと遊ぼう	西仁司, 学生5名	小学生およびその保護者25名
■ 物質工学科				
7月21日	王子保児童センター	越前市男女共同参画センター出前講座「わくわくサイエンス」	高山勝己ほか	小学1～3年生35人
7月30日	武生東児童センター	超低温の科学	吉村忠興志, 上島晃智, 津田良弘, 高山勝己, 佐々和洋, 野村栄市	小学1～6年生50人
8月4日	南中山児童館	超低温の科学	吉村忠興志, 上島晃智, 野村栄市, 片岡裕一	小学1～3年生25人
8月11日	北田野児童館	超低温の科学	吉村忠興志, 上島晃智, 津田良弘, 西野純一, 佐々和洋, 野村栄市, 片岡裕一	小学1～3年生30人
8月17日	越前市生涯学習センター	超低温の科学	上島晃智, 津田良弘, 加藤敏, 野村栄一, 片岡裕一	小学1～6年生約30人
8月24日	神山保育園	超低温の科学	吉村忠興志, 小泉貞之, 津田良弘, 常光幸美, 川村敏之, 野村栄市	小学1～3年生約42人

出前授業実施内訳（平成22年度）

実施日	出前授業先	概 要	担当教職員	対象者（参加者数）
■ 物質工学科				
8月26日	味間野児童センター	超低温の科学	吉村忠興志, 小泉貞之, 西野純一, 野村栄市	小学1～6年生30人
8月31日	国高児童センター	超低温の科学	吉村忠興志, 上島晃智, 津田良弘, 西野純一, 松井栄樹, 野村栄一, 片岡裕一	小学1～3年生40人
9月3日	福井市清水中学校	超低温の科学	津田良弘, 西野純一, 野村栄市, 片岡裕一	中学1～3年生60人
9月11日	鳴鹿公民館	超低温の科学	吉村忠興志, 上島晃智, 津田良弘, 松井栄樹, 川村敏之, 佐々和洋, 野村栄市, 片岡裕一	小学1～6年生50人
10月2日	順化小学校	身の回りのおもしろ科学（化学）と超低温の世界	吉村忠興志, 小泉貞之, 高山勝己, 野村栄市, 片岡裕一	小学1～3年生と保護者 36人
10月30日	東郷小学校	身の回りのおもしろ科学（化学）と超低温の世界	吉村忠興志, 上島晃智, 高山勝己, 野村栄市, 片岡裕一	小学5年生と保護者 35人
12月6, 7日	社中学校	バイオエタノールの生成と活用実験	高山勝己, 吉村忠興志	中学3年生30名
■ 環境都市工学科				
10月7日	武生第一中学校	環境のはなし	奥村充司	中学3年生 48人 (24人×2回)
計				23 件

公開講座実施内訳（平成25年度）

実施日	講座名	受講対象者／募集定員	受講者数
6月15日	自律ロボット製作入門	中学生／10人	10人
7月21日	やってみよう ノーラーカー手作り教室	小学生(保護者要同伴)／20組	19組
7月27日	多面体を作ろう	小学生、中学生 / 20人	4人
7月27日	小さな大工さん講座「建築デザイナーになろう！」	小学5～6年生、中学生(保護者同伴可)／16人	14人
7月28日	親子科学教室（科学は身近にあふれてる。さあ科学のとびらを開けましょう！）	小学3～6年生（保護者要同伴）／20組	19組
7月28日	夏休みの自由研究講座「ちからとかたち」	小学4～6年生(保護者同伴可)／10人	10人
8月4日	中学生のための作文講座	中学3年生／15人	13人
8月10日	洋画と音楽で楽しく英語を学ぼう	中学生、高校生／20人	6人
8月10日	光ったり動いたりする「スライム」やカラフルな「人工いぐら」・「スライム時計」を作りましたよ	小学生（低学年は保護者要同伴）／20人	18人
8月10日、11日	中学生のための社会科講座-高専の入試問題で学ぼう	中学3年生／30人	28人
8月10日、11日	はじめてのコンピュータ制御～プログラムで物を動かそう～	小学5～6年生、中学生(小学生は保護者要同伴)／10人	10人
8月11日	磁石の磁力線観察キット(3種類)を作製しよう！	中学生／15人	11人
8月11日	紙コプターを作ってみよう	中学生 / 20人	10人
8月11日、17日	全日本小中学生ロボット選手権 講習会・ふくい予選	小学生（保護者同伴可）／18人	13人
8月24日	オリジナル菜をつくらう2013	中学生／10人	2人
8月31日	覗いてみよう微生物の世界！	中学生／10人	10人
8月31日	オリジナル携帯ストラップ(キーホルダー)を作ろう	中学生／5人	5人
8月31日、9月1日	中学生のための理科受験講座-高専の入試問題で学ぼう	中学3年生／20人	19人
8月31日、9月1日	はじめてのかんたんプログラミング	小学4～6年生(保護者同伴可)／12人	12人
9月28日、10月5日、11月2日	英検3級合格をめざして-受験対策講座-	中学生以上／15人	9人
9月28日、29日	英検準2級合格をめざして	中学生以上（英検3級取得者が望ましい）／20人	4人
11月10日	親子で作るはじめてのオリジナル写真年賀状	小学生、中学生（保護者要同伴）／15組	9組
12月14日、15日	英文法基礎講座	中学3年生／20人	20人
12月15日	中学生のための国語講座-古典の心を読む	中学3年生／15人	13人
合計	24件		

公開講座実施内訳（平成24年度）

実施日	講座名	受講対象者/募集定員	受講者数
6月16日	自律ロボット製作入門	中学生/8名	8名
7月22日	親子科学教室「科学は身近にあふれてる。さあ科学のとびらを開きましょう！」	小学3～6年生（保護者要同伴）/21組 ※	16組
7月28日	小さな大工さん講座「建築模型をつくろう！！」	小学5～6年生、中学生/16名 ※	15名
7月28日	電子顕微鏡でミクロな世界を見てみよう	中学生/10名	7名
7月29日	やってみよう ソーラーカー手作り教室	小学生（保護者要同伴）/20組	20組
7月29日	夏休みの自由研究講座「ちからとかたち」	小学4～6年生/13名 ※	12名
8月5日	中学生のための作文講座	中学3年生/15名	15名
8月10日	光を追いかけるロボットカーを作ろう	中学生/10名	10名
8月11日	多面体を作ろう	小学生、中学生/20名	4名
8月11日	電子工作教室「FMラジオを組み立てよう」	小学4～6年生（保護者要同伴）、中学生/10組	10組
8月11日	光ったり動いたりする「スライム」や「人工いくら」を作りました	小学生（低学年は保護者要同伴）/15組 ※	15組
8月18日	関数を体験しよう	中学生/20名	11名
8月25日、26日	中学生のための社会科講座－高専の入試問題で学ぼう	中学3年生/30名 ※	13名
8月28日、29日	中学から始めるバスケットボール・オフフェンス編－1on1を得意にする！－	中学生/10名	2名
9月1日、2日	初めての簡単プログラミング	小学4～6年生/10名	8名
9月1日	オリジナル乗をつくろう2012	中学生/5名	4名
9月22日、29日、11月4日	英検3級合格をめざして－受験対策講座－	中学生以上/20名	11名
9月29日、30日	英検準2級合格をめざして	中学生以上（英検3級取得者が望ましい）/20名	7名
11月3日	親子で作るはじめてのオリジナル写真年賀状	小学生～中学生/15組	7組
12月9日	中学生のための国語講座－古典の心を読む	中学3年生/20名 ※	18名
12月15日、16日	英文法基礎講座	中学3年生/20名	15名
合計	21件		

※は追加募集有りの募集定員

公開講座実施内訳（平成23年度）

実施日	講座名	受講対象者/募集定員	受講者数
5月14日	防災マップ作成講座①	一般/10名	/
6月18日	自律ロボット製作入門	小学校5～6年生, 中学生/8名	8名
6月19日	防災マップ作成講座②	一般/10名	/
7月3日	防災マップ作成講座③	一般/10名	4名
7月24日	親子理科教室（作ってみよう！やってみよう！）	小学校3～6年生/15名	15名
7月28日	電子顕微鏡でミクロな世界を見てみよう	中学生/10名	11名
7月30日	小さな大工さん講座「建築模型をつくろう！！」	小学校5～6年生, 中学生/8名	6名
7月30日	手作りビー玉スターリングエンジン	中学生/20名	20名
7月31日	やってみよう ソーラーカー手作り教室	小学生/20名	19名
7月31日	夏休みの自由研究講座 「ちかちかたち」	小学校4～6年生/12名	12名
7月31日	紙コプターを作ってみよう	中学生/20名	16名
8月13日	電子工作教室「FMラジオを組み立てよう」	小学校4～6年生, 中学生/10名	9名
9月10日	オリジナルの葉をつくろう2011	中学生/5名	1名
9月10日	光るタンパク質の不思議（遺伝子組換え実験にチャレンジしよう）	中学生/5名	3名
9月10日, 11日	初めての簡単プログラミング	小学校4～6年生/10名	7名
9月24日, 25日, 11月5日	英検合格をめざして（準2級）	中学生以上/20名	2名
10月1日, 2日, 11月5日	英検3級合格をめざしてー受験対策講座ー	中学生以上/20名	11名
11月3日	柴式部を読む	高校生以上/15名	/
12月17日, 18日	英文法基礎講座	中学校3年生/20名	10名
合計	19件		

公開講座実施内訳（平成22年度）

実施日	講座名	受講対象者/募集定員	受講者数
5月16日(日)	防災マップ作成講座①	一般/30名	1名
5月29日(土)	危険物取扱者資格試験乙種第4類受験講座①	中学生以上/12名	1名
5月30日(日)	危険物取扱者資格試験乙種第4類受験講座②	中学生以上/12名	
6月20日(日)	防災マップ作成講座②	一般/30名	4名
7月18日(日)	防災マップ作成講座③	一般/30名	
7月24日(土)	小さな大工さん講座 「木造住宅模型をつくろう!!」	小学校4～6年生, 中学生/12名	12名
7月25日(日)	夏休みの自由研究講座 「ちからとかたち」	小学校4～6年生, 中学生/12名	10名
7月30日(金)	電子顕微鏡でミクロな世界を見てみよう	中学生/10名	8名
7月31日(土)	手作り風車を作ってみよう	中学生/10名	3名
7月31日(土), 8月1日(日)	『楽しい電子回路入門』 マイコンでロボットを動かしてみよう!ー	中学生/6名	6名
8月1日(日)	モーター制御を通して学ぶロボットのしくみ	中学生/10名	7名
8月1日(日)	やってみよう ソーラーカー手作り教室	小学校4～6年生, 中学生/20名	20名
8月15日(日)	電子工作教室「FMラジオを組み立てよう」	小学校4～6年生, 中学生/10名	10名
8月21日(土), 22日(日)	初めての簡単プログラミング	小学校4～6年生, 中学生/10名	10名
9月11日(土)	オリジナル菜(しおり)をつくろう 「銅箔の合成とチタンの着色」	小学校5～6年生, 中学生/10名	10名
9月11日(土), 12日(日)	やさしい微生物実験講座	中学生/5名	2名
9月25日(土), 26日(日) 11月6日(土)	英検準2級合格をめざして	中学生以上/20名	5名
10月2日(土)	危険物取扱者資格試験乙種第4類受験講座③	中学生以上/12名	
10月3日(日)	危険物取扱者資格試験乙種第4類受験講座④	中学生以上/12名	3名
12月11日(土), 12日(日) 12月18日(土), 19日(日)	英文法基礎講座	中学校3年生/20名	21名
合計	20件		

平成25年度公開授業実施一覧

実施教員	授業科目	実施日	立会教員
阿部孝弘・田安正茂・坪川茂・小木曾晴信	ものづくり科学	平成25年6月21日	吉田雅穂
辻野和彦	応用測量学	平成25年6月24日	田安正茂
江本晃美	環境都市工学設計製図Ⅴ	平成25年6月24日	香月壮亮
荒川正和	電気電子工学実験Ⅲ	平成25年6月24日	大久保茂
佐々和洋	情報処理演習	平成25年6月24日	金田直人
William Wilki	コミュニケーションⅡ	平成25年6月24日	朝倉相一
荻野繁春	地理	平成25年6月24日	手嶋泰伸
荻野繁春	歴史	平成25年6月24日	手嶋泰伸
辻野和彦	測量学	平成25年6月25日	江本晃美
西野純一	無機化学	平成25年6月25日	小泉貞之
西野純一・佐々和弘・野村栄一	物質工学実験Ⅲ	平成25年6月25日	平井恵子
小泉貞之・後反克典	物質工学実験Ⅰ	平成25年6月25日	松井栄樹
西野純一	物質工学実験Ⅲ	平成25年6月25日	加藤敏
西野純一	無機化学Ⅰ	平成25年6月25日	後反克典
村香織	英語Ⅱ	平成25年6月25日	吉田三郎・米田知晃
前多信博	計測工学Ⅰ	平成25年6月25日	米田知晃
柳原祐治	解析Ⅲ	平成25年6月25日	荒川正和
西仁司	数値計算	平成25年6月25日	下條雅史
長水壽寛	解析Ⅱ	平成25年6月25日	西仁司
川上由紀	コンピュータ科学入門	平成25年6月25日	蘆田昇
青山義弘	情報工学基礎	平成25年6月25日	小松貴大
村田知也	電子情報工学実験Ⅲ	平成25年6月25日	高久有一
平井恵子	コンピュータ科学入門	平成25年6月25日	村田知也
亀山建太郎	C言語基礎	平成25年6月25日	芳賀正和
村中貴幸	材料力学Ⅰ	平成25年6月25日	千徳英介
柳原祐治	解析Ⅲ	平成25年6月25日	池田昌弘
西野純一	無機化学Ⅰ	平成25年6月25日	坪川武弘
阿部孝弘	コンクリート構造学Ⅰ	平成25年6月26日	辻野和彦
香月壮亮	建築設備Ⅰ	平成25年6月26日	江本晃美
吉村忠与志・佐々和洋	情報化学	平成25年6月26日	高山勝己
金田直人	機械製図	平成25年6月26日	佐々和洋
平井恵子	プログラミング基礎	平成25年6月26日	西野純一
米田知晃	情報処理Ⅱ	平成25年6月26日	丸山晃生
山本幸男	電子工学	平成25年6月26日	石栗慎一・村中貴幸

平成25年度公開授業実施一覧

実施教員	授業科目	実施日	立会教員
前川公男	通信システム	平成25年6月26日	川上由紀
斉藤徹	情報構造論	平成25年6月26日	青山義弘
松尾光恭	機械工作実習	平成25年6月26日	加藤寛敬
米田知晃	情報処理Ⅱ	平成25年6月26日	亀山建太郎
山田哲也	解析Ⅰ	平成25年6月26日	柳原祐治
小泉貞之	機器分析	平成25年6月26日	坪川武弘
山田哲也	解析Ⅱ	平成25年6月26日	長水壽寛
柳原祐治	解析Ⅰ	平成25年6月26日	山田哲也
William Wilki	工業英語	平成25年6月26日	宮本友紀
原口治	英語Ⅲ	平成25年6月26日	森貞
吉田雅徳	環境都市工学実験実習Ⅱ	平成25年6月27日	辻子裕二
竹本泰敏	電気機器	平成25年6月27日	香月壮亮
川村敏之	分子生物学	平成25年6月27日	津田良弘
五味伸之	センサ工学	平成25年6月27日	佐々和洋
高山勝己	物理化学Ⅱ	平成25年6月27日	西野純一
竹本泰敏	電気機器	平成25年6月27日	佐藤匡
五味伸之	センサ工学	平成25年6月27日	安丸尚樹・田中嘉津彦・藤田克志・ 金田直人・村中貴幸・千徳英介
青木宏樹	体育	平成25年6月27日	五味伸之
長水壽寛	線形代数	平成25年6月27日	中谷実伸・廣重準四郎
柳原祐治	解析Ⅰ	平成25年6月27日	加藤清考
前田安信	国語	平成25年6月27日	山本裕之
荻野繁春	歴史	平成25年6月27日	山本裕之
青木宏樹	保健体育	平成25年6月27日	島田茂
吉田雅徳	地震工学	平成25年6月28日	阿部孝弘
江本晃美・辻野和彦	環境都市工学設計製図Ⅱ	平成25年6月28日	阿部孝弘
小泉貞之・後反克典	化学	平成25年6月28日	常光幸美
亀山建太郎	プログラミング応用	平成25年6月28日	米田知晃
村中貴幸	材料力学Ⅱ	平成25年6月28日	山本幸男
佐藤匡	電気磁気学Ⅱ	平成25年6月28日	川本昂
川崎章司	電気回路Ⅱ	平成25年6月28日	竹本泰敏
坪川武弘	基礎解析B	平成25年6月28日	井之上和代
森貞	英語Ⅲ	平成25年6月28日	原口治
田安正茂・辻野和彦・香月壮亮	環境基礎工学実験実習Ⅲ	平成25年12月16日	辻子裕二
川村敏之	物質工学実験Ⅱ	平成25年12月16日	津田良弘

平成25年度公開授業実施一覧

実施教員	授業科目	実施日	立会教員
荒川正和	電気電子工学実験Ⅲ	平成25年12月16日	丸山晃生
長水壽寛	解析Ⅱ	平成25年12月16日	西仁司
坪川武弘	基礎解析B	平成25年12月16日	山田哲也
手嶋泰伸	歴史	平成25年12月16日	廣重準四郎
川村敏之	生物化学実験	平成25年12月16日	常光幸美
小泉貞之・西野純一・佐々和洋	物質工学実験Ⅰ	平成25年12月17日	松井栄樹
高久有一	情報ネットワーク	平成25年12月17日	斉藤徹
青山義弘・小松貴大	情報基礎演習	平成25年12月17日	斉藤徹
小松貴大	人工知能Ⅱ	平成25年12月17日	蘆田昇
荻野繁春	歴史	平成25年12月17日	川上由紀
藤田克志	流れ学Ⅰ	平成25年12月17日	川上由紀
田中嘉津彦	工業力学	平成25年12月17日	村中貴幸
武井幸久	計画数理学	平成25年12月17日	長水壽寛
平井恵子	コンピュータ科学入門	平成25年12月17日	井之上和代
中谷実伸	解析Ⅱ	平成25年12月17日	柳原祐治
川村敏之	生物化学実験	平成25年12月17日	常光幸美
亀山建太郎・五味伸之	創造工学演習	平成25年12月18日	芳賀正和
山田哲也	解析Ⅱ	平成25年12月18日	千徳英介
牧野芳之	化学	平成25年12月18日	山本裕之
小寺光雄	英語Ⅳ	平成25年12月18日	吉田三郎
青木宏樹	保健体育	平成25年12月18日	島田茂
辻野和彦	測量学	平成25年12月19日	田安正茂
後反克典	化学	平成25年12月19日	西野純一
佐々和弘・吉村忠与志	情報化学	平成25年12月19日	高山勝己
松井栄樹	有機化学Ⅰ	平成25年12月19日	後反克典
荒川正和	生産工学システム演習Ⅱ	平成25年12月19日	佐藤匡
竹本泰敏	電気機器	平成25年12月19日	川本昂
吉田三郎	英語Ⅰ	平成25年12月19日	荒川正和
川上由紀	電気磁気学Ⅰ	平成25年12月19日	蘆田昇・西仁司・荒川正和
加藤清考	物理	平成25年12月19日	川上由紀・藤田克志
坪川武弘	数理統計学	平成25年12月19日	中谷実伸
前島正彦	構造力学Ⅲ	平成25年12月20日	辻野和彦
川上由紀	コンピュータ科学入門	平成25年12月20日	平井恵子・村田知也
田安正茂	環境都市工学実験実習Ⅰ	平成25年12月20日	佐々和洋・金田直人

平成25年度公開授業実施一覧

実施教員	授業科目	実施日	立会教員
石栗慎一	電気磁気学Ⅰ	平成25年12月20日	大久保茂
前多信博	計測工学Ⅰ	平成25年12月20日	米田知晃
下條雅史	プログラミング応用	平成25年12月20日	斉藤徹
前川公男	電子回路Ⅰ	平成25年12月20日	小松貴大
蘆田昇	電子情報工学実験Ⅲ	平成25年12月20日	高久有一
吉田三郎	英語Ⅰ	平成25年12月20日	朝倉相一
山田哲也	解析Ⅱ	平成25年12月20日	池田昌弘
手嶋泰伸	歴史	平成25年12月20日	森貞・加藤清考
廣重準四郎	政治経済	平成25年12月20日	手嶋泰伸
William Wilki	コミュニケーションⅠ	平成25年12月20日	原口治
亀山建太郎	C言語基礎	平成25年12月20日	五味伸之
中村吉秀	国語	平成26年1月9日	香月壮亮

平成24年度公開授業実施一覧

実施教員	授業科目	実施日	立会教員
蘆田昇	オペレーティング・システム	平成24年6月25日	斉藤徹
五味伸之	センサ工学	平成24年6月25日	千徳英介
西仁司	ものづくり科学	平成24年6月25日	蘆田昇
吉田三郎	英語 I	平成24年6月25日	廣重準四郎
江本晃美	環境都市工学設計製図Ⅳ	平成24年6月25日	辻子裕二
村中貴幸	材料力学Ⅱ	平成24年6月25日	山本幸男
吉村忠与志	情報処理演習	平成24年6月25日	平井恵子
斉藤徹	電子情報工学実験Ⅳ	平成24年6月25日	高久有一
川上由紀	コンピュータ科学入門	平成24年6月26日	村田知也
廣重準四郎	ドイツ語	平成24年6月26日	吉田三郎
田安正茂・香月壮亮	環境都市工学実験実習Ⅰ	平成24年6月26日	辻野和彦
西仁司	計算機構成論Ⅰ	平成24年6月26日	下條雅史
香月壮亮	建築環境	平成24年6月26日	江本晃美
佐藤匡	現代制御工学	平成24年6月26日	荒川正和
加藤清考	工学基礎物理Ⅰ	平成24年6月26日	芳賀正和
常光幸美・加藤敏	材料工学実験	平成24年6月26日	松井栄樹
米田知晃	情報処理Ⅰ	平成24年6月26日	丸山晃生
阿部孝弘	数値解析	平成24年6月26日	田安正茂
井之上和代	線形代数	平成24年6月26日	池田昌弘
王玉	中国語	平成24年6月26日	金田直人
石栗慎一	電気機器	平成24年6月26日	加藤清考
石栗慎一	電気機器	平成24年6月26日	竹本泰敏
石栗慎一	電気機器	平成24年6月26日	川本昂
石栗慎一	電気機器	平成24年6月26日	大久保茂
荒川正和	電気電子工学実験Ⅲ	平成24年6月26日	米田知晃
小泉貞之	物質工学実験Ⅰ	平成24年6月26日	津田良弘
斉藤徹	プログラミング応用	平成24年6月27日	村田知也
牧野芳之	化学	平成24年6月27日	山本裕之
松原邦昭	基礎解析 A	平成24年6月27日	坪川武弘
松原邦昭	基礎解析 A	平成24年6月27日	長水壽寛
松原邦昭	基礎解析 A	平成24年6月27日	朝倉相一
金田直人	機械製図	平成24年6月27日	藤田克志
高久有一	電気磁気学Ⅱ	平成24年6月27日	川上由紀
米田知晃	電子工学Ⅱ	平成24年6月27日	村中貴幸

平成24年度公開授業実施一覧

実施教員	授業科目	実施日	立会教員
池田昌弘	物理	平成24年6月27日	長水壽寛
西野純一	物理化学	平成24年6月27日	小泉貞之
蘆田昇	プログラミング基礎	平成24年6月28日	小松貴大
蘆田昇	プログラミング基礎	平成24年6月28日	西仁司
阿部孝弘	環境都市工学実験実習Ⅱ	平成24年6月28日	吉田雅徳
辻野和彦・香月壮亮	環境都市工学実験実習Ⅲ	平成24年6月28日	阿部孝弘
金田直人	機械設計法	平成24年6月28日	村中貴幸
金田直人	機械設計法	平成24年6月28日	安丸尚樹
江本晃美	建築計画Ⅱ	平成24年6月28日	香月壮亮
亀山健太郎	自動制御	平成24年6月28日	五味伸之
斉藤徹	情報構造論	平成24年6月28日	小松貴大
辻野和彦	測量学	平成24年6月28日	香月壮亮
丹尾哲	地理	平成24年6月28日	荻野繁春
石栗慎一	電気回路Ⅰ	平成24年6月28日	森芳周
William Wilki	コミュニケーションⅠ	平成24年6月29日	宮本友紀
森貞	英語Ⅲ	平成24年6月29日	原口治
原口治	英語Ⅲ	平成24年6月29日	森貞
吉田三郎	英語Ⅳ	平成24年6月29日	小寺光雄
松原邦昭	基礎解析B	平成24年6月29日	井之上和代
五味伸之	機械計算力学	平成24年6月29日	村中貴幸
五味伸之	機械計算力学	平成24年6月29日	藤田克志
五味伸之	機械計算力学	平成24年6月29日	田中嘉津彦
五味信之	機械力学	平成24年6月29日	米田知晃
吉田雅徳	構造デザイン	平成24年6月29日	阿部孝弘
丸山晃生	情報処理システム論Ⅰ	平成24年6月29日	青山義弘
丸山晃生	情報処理システム論Ⅰ	平成24年6月29日	佐藤匡
坪川武弘	線形代数	平成24年6月29日	石栗慎一
西野純一	物質工学実験Ⅲ	平成24年6月29日	加藤敏
常光幸美	物理化学Ⅱ	平成24年6月29日	高山勝己
常光幸美	物理化学Ⅱ	平成24年6月29日	西野純一
松原邦昭	基礎解析B	平成24年6月30日	柳原祐治
香月壮亮	建築環境Ⅰ	平成24年7月10日	江本晃美, 丸山晃生
丸山晃生	情報処理システム論Ⅰ	平成24年7月13日	香月壮亮
村中貴幸・亀山健太郎・千徳英介	知能機械演習	平成24年7月17日	加藤寛敬

平成23年度公開授業実施一覧

実施教員	授業科目	実施日	立会教員
松尾光恭	機械工作実習	平成23年6月15日	加藤寛敬
米田知晃	電気実験	平成23年6月24日	金田直人
平井恵子	コンピュータ科学入門	平成23年6月27日	村田知也
河原林友美	電子回路Ⅰ	平成23年6月27日	丸山晃生, 前多信博, 亀山建太郎
山田孝禎	保健体育	平成23年6月27日	島田茂
森下篤郎	建設法規	平成23年6月28日	江本晃美
田安正茂	水理学Ⅱ	平成23年6月28日	江本晃美, 藤田克志, 加藤清考, 廣部英一, 辻子祐二
桶谷治寛	環境工学	平成23年6月28日	奥村充司
常光幸美	基礎材料化学	平成23年6月28日	小泉貞之
加藤清考	物理	平成23年6月28日	石栗慎一
米田知晃	電気電子工学実験Ⅳ	平成23年6月28日	大久保茂
柳原祐治	基礎解析B	平成23年6月28日	池田昌弘
前川公男	電子回路	平成23年6月28日	朝倉相一
吉田三郎	英語Ⅰ	平成23年6月28日	廣重準四郎
小泉貞之, 片岡裕一, 野村栄一	ものづくり科学	平成23年6月29日	西野純一
加藤清考	工学基礎物理Ⅰ	平成23年6月29日	長水壽寛
金田直人	機械設計法	平成23年6月30日	辻野和彦, 山本幸男, 安丸尚樹, 千徳英介, 村中貴幸, 田中嘉津彦
吉村忠与志, 西野純一	物質工学実験Ⅲ	平成23年6月30日	津田良弘
野村保之	電子工学基礎	平成23年6月30日	西仁司
藤田克志	流れ学Ⅱ	平成23年6月30日	河原林友美
河原林友美	電子回路Ⅱ	平成23年6月30日	川本昂, 五味伸之
近藤基和	基礎解析A	平成23年6月30日	柳原祐治
小寺光雄	英語Ⅳ	平成23年6月30日	吉田三郎
吉田三郎	英語Ⅰ	平成23年6月30日	森芳周
辻野和彦・江本晃美	環境都市工学設計製図Ⅱ	平成23年7月1日	阿部孝弘
川本昂	電力システムⅠ	平成23年7月1日	佐藤匡
常光幸美	電気化学	平成23年7月1日	高山勝己
津田良弘	卒業研究	平成23年7月1日	松井栄樹
蘆田昇	オペレーティングシステム	平成23年7月1日	下條雅史
野村保之	電気回路	平成23年7月1日	蘆田昇
川本昂	電力システムⅠ	平成23年7月1日	佐藤匡
島田茂	保健体育	平成23年7月1日	東章弘
辻子祐二	地盤工学Ⅱ	平成23年7月4日	江本晃美
斉藤徹	情報構造論	平成24年1月19日	蘆田昇, 池田昌弘, 高久有一

平成22年度公開授業実施一覧

実施教員	授業科目	実施日	立会教員
坪川武弘	解析Ⅲ	平成22年6月28日	江本晃美
辻野和彦	測量学	平成22年6月28日	江本晃美
西野純一	物理化学Ⅰ	平成22年6月28日	加藤敏
吉田雅穂	構造力学Ⅱ	平成22年6月29日	田安正茂, 江本晃美
中谷実伸	基礎解析A	平成22年6月29日	森芳周
吉村忠興志	情報化学	平成22年6月29日	佐々和洋
横井三朗	基礎解析A	平成22年6月29日	柳原祐治, 坪川武弘
岡田将人	機械工作実習	平成22年6月29日	村中貴幸, 丸山晃生
小寺光雄	英語Ⅴ	平成22年6月29日	中村吉秀
間瀬実郎	建築計画Ⅰ	平成22年6月29日	江本晃美
小泉貞之・佐々和洋	物質工学実験Ⅰ	平成22年6月29日	西野純一
近藤基和	基礎解析B	平成22年6月29日	廣重準四郎
間瀬実郎・江本晃美・坪川茂	環境都市工学設計製図Ⅰ	平成22年6月30日	辻野和彦
西野純一	無機化学	平成22年6月30日	小泉貞之
大久保茂	電気回路演習	平成22年6月30日	荒川正和
加藤清考	工学基礎物理Ⅰ(3M)	平成22年6月30日	藤田克志
加藤清考	工学基礎物理Ⅰ(3B)	平成22年6月30日	池田昌弘
辻野和彦	測量学	平成22年7月1日	阿部孝弘, 奥村充司, 坪川武弘, 岡田将人, 江本晃美, 吉田雅穂
小泉貞之	放射線概論	平成22年7月1日	高山勝己
近藤基和	基礎解析B	平成22年7月1日	朝倉相一
吉田三郎	英語Ⅱ	平成22年7月1日	柳原祐治
村中貴幸	材料力学Ⅱ	平成22年7月1日	山本幸男
荒川正和	電気電子工学実験Ⅱ	平成22年7月1日	佐藤匡
西仁司	数値計算	平成22年7月1日	下條雅史, 蘆田昇
吉田三郎	英語Ⅱ	平成22年7月2日	荻野繁春
平井恵子・佐々和洋	卒業研究	平成22年7月2日	松井栄樹
高久有一	電気磁気学Ⅱ	平成22年7月2日	西仁司
丸山晃生	情報処理システム論Ⅰ	平成22年7月2日	村中貴幸, 大久保茂
石栗慎一	電気機器	平成22年7月2日	荒川正和
前田安信	国語表現	平成22年7月2日	山本裕之
川本昂・村中貴幸・青山義弘・小泉貞之・間瀬実郎	創造デザイン演習	平成22年7月2日	米田知晃
藤田克志	流れ学Ⅱ	平成22年7月2日	加藤清考
池田昌弘	工学基礎物理Ⅰ	平成22年7月2日	加藤清考
辻野和彦	測量学	平成22年7月5日	阿部孝弘

平成22年度公開授業実施一覧

実施教員	授業科目	実施日	立会教員
河原林友美	電子回路Ⅰ	平成22年7月5日	米田知晃
前多信博	計測工学Ⅰ	平成22年7月6日	河原林友美
奥田篤士	コンピュータ科学入門	平成22年7月6日	加藤省三
村中貴幸	知能機械演習	平成22年7月12日	加藤寛敬
大久保茂	電気回路Ⅳ	平成22年7月12日	川本昂
田安正茂・江本晃美	環境都市工学実験実習Ⅰ	平成22年7月16日	間瀬実郎

教員の派遣等一覧 — 平成16年度以降 —

■海外先進教育実践支援プログラム

年度	氏名	学科等	渡航期間	渡航先国名	研究題目
平成16年度	常光 幸美	物質工学科	H17.3.30 ～ H18.3.29	連合王国	めっきプロセスによる金属ナノ構造材料創製
	吉田 雅徳	環境都市工学科	H17.3.25 ～ H18.3.24	アメリカ合衆国	安全なものづくりのための力学教育法の構築

■国際研究集会派遣研究員

年度	氏名	学科等	渡航期間	渡航先国名	研究集会名
平成17年度	吉村 忠興志	物質工学科	H17.12.15 ～ H17.12.20	アメリカ合衆国	2005環太平洋国際化学会議

■独立行政法人国立高等専門学校機構内地研究員

年度	氏名	学科等	渡航期間	派遣先大学名	研究題目
平成18年度	岡田 将人	機械工学科	H18.5.1 ～ H19.2.28	金沢大学大学院	CBN（立方晶窒化ホウ素） 工具を用いたハードミリング に関する研究
	田安 正茂	環境都市工学科	H18.5.1 ～ H19.2.28	長岡技術科学大学 大学院	人工構造物に作用する流体力 の数値計算法の開発およびそ の現地検証
平成22年度	金田 直人	機械工学科	H22.5.1 ～ H23.2.28	金沢大学大学院	合繊仮燃加工における撓トルク 発生メカニズムに関する 研究

■独立行政法人国立高等専門学校機構在外研究員

年度	氏名	学科等	渡航期間	渡航先大学名	取組名称
平成19年度	丸山 晃生	電気電子工学科	H20.3.30 ～ H21.3.1	オーストラリア国立 大学（ANU）	非古典論理に対する自動推論 システムの構築とその高専教 育への展開
平成25年度	河原林 友美	電気電子工学科	H25.4.10 ～ H26.4.9	コブレンツ（ドイ ツ）コブレンツ・ラ ンダウ大学	意図推定可能な他者モデル構 築とロボット開発の高専教育 への展開

■独立行政法人国際協力機構教師海外研修

年度	氏名	学科等	渡航期間	研修先国名	研修コース名
平成24年度	山本 幸男	電気電子工学科	H24.8.19 ～ H24.8.26	フィリピン共和国 （マニラ、イロイ ロ）	技術系グローバル人材育成 コース
	江本 晃美	環境都市工学科	H24.8.19 ～ H24.8.26	フィリピン共和国 （マニラ、イロイ ロ）	技術系グローバル人材育成 コース
平成25年度	西 仁司	電子情報工学科	H25.8.25 ～ H25.8.31	ベトナム	技術系グローバル人材育成 コース
	川上 由紀	電子情報工学科	H25.8.25 ～ H25.8.31	ベトナム	技術系グローバル人材育成 コース

※平成25年12月31日現在

平成26年3月発行

編集 福井工業高等専門学校自己点検・評価委員会

発行者 独立行政法人 国立高等専門学校機構
福井工業高等専門学校
〒916-8507 福井県鯖江市下司町
TEL 0778-62-1111 (代)
FAX 0778-62-2597 (総務課)
URL <http://www.fukui-nct.ac.jp>



FUKUI NATIONAL COLLEGE OF TECHNOLOGY